

# 水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進

海の文化遺産総合調査報告書

— 総論・九州編 —



2012

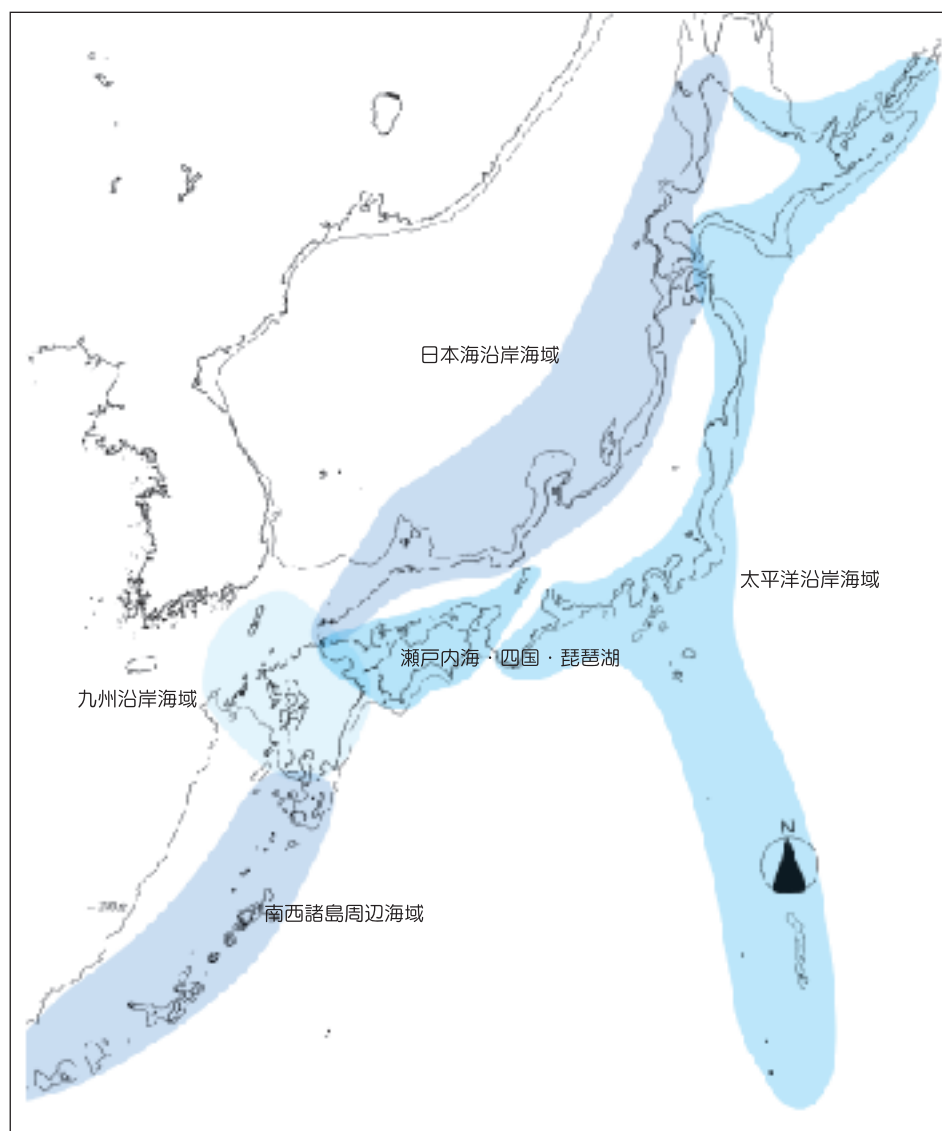
アジア水中考古学研究所

Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION



# 海の文化遺産総合調査報告書

## — 総論・九州編 —



2012

アジア水中考古学研究所



小値賀前方湾海底遺跡（クスクリ崎沖調査地点）



2010年度前方湾海底遺跡発掘調査（白磁碗）





福岡県相島鼻栗瀬の潜水調査



福岡県相島鼻栗瀬の海底で確認した平瓦

## 序 文

九州は朝鮮半島や中国大陆に近いので古代より人や物の交流が盛んであった。この交流は陸地を隔てた海を船を使って克服して現代に至っている。現代においても海の回路を通してアジア諸国との国際交流が積極的に行われています。この海域では国際交流の担い手となった人間の生きた証が海や沿岸部に存在しています。これまでそれらの存在が人知れず、あるいは調査もされず今日まで至っています。

これまで国内では海の文化遺産に関する詳細な分布調査は2000年に文化庁が「遺跡保存方法の検討―水中遺跡」で216箇所の中遺跡の存在を報告していますが、その後それらの水中遺跡の詳細な調査は実施されることはありませんでした。国外ではユネスコの「水中文化遺産保護条約」が2001年に国連で採択され、2009年には20ヶ国以上の批准をもって発効しました。現在では40ヶ国以上の国々が承認しています。この条約が国連で採択されて以来多くの国々が自国領海内の水中文化遺産のデータベース作成に関心を示し、その調査成果を公表しています。

水中文化遺産における国際状況は国内の水中文化遺産の詳細な把握が急務となっています。そこで特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所は日本財団の助成をうけ、海の文化遺産総合調査プロジェクト「水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進」を2009 - 2011年までの3ヶ年計画で実施しました。この事業は、海洋国家の日本列島で海の文化遺産の調査とその成果に関する情報発信と公開を推進し、海への関心を醸成することを基本理念として、北海道から南西諸島にいたる各海域の水中文化遺産の情報を整備して実態を解明し、日本の水中考古学の確立をめざす画期的な試みです。

海の文化遺産総合調査プロジェクトは全国を太平洋沿岸海域、日本海沿岸海域、四国及び琵琶湖を含む瀬戸内海、九州近海、南西諸島周辺海域と調査地域を大きく5つのブロックに分けて実施しました。それぞれの地域で水中文化遺産のデータベース作成のため基礎的な調査として、アンケート調査を全てのブロックで実施し、この調査の成果は前回の「遺跡保存方法の検討―水中遺跡」でまとめられた全国の水中遺跡の分布内容を新しいものにすることができました。アンケートの成果はさらに現地調査や潜水調査を行うことで水中遺跡の詳細な内容や実態を解明することができました。

本書は海の文化遺産総合調査プロジェクト及び九州沿海域で実施した調査の成果を「総論・九州編」とし報告するものであります。本書によって海の文化遺産を理解し身近に感じることができるとともに、文化遺産を保護し活用になればまことに幸いです。

最後に本報告作成に当たり調査にご協力いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。

平成25年3月15日

特定非営利活動法人  
アジア水中考古学研究所  
理事長 林田 憲三



# 第1章 海の文化遺産総合調査プロジェクトの目的と経緯

野上 建紀

## 1 プロジェクトの目的

私たちの国は海に囲まれている。この国の歴史は海とともに育まれたと言っても過言ではない。海によって我々は往来して結ばれ、そして、海を介して多くの文化や文物が舶来し、我が国の文化の重要な部分を形づくってきた。そのため、地理的はもちろん歴史的に見ても海洋国家であることは疑いないところである。しかし、その一方、海洋国家としてふさわしい関心が海の文化やその遺産に向けられているかと言えばそうではない。多くの人々は海底にどのような文化遺産が存在するのか知らないし、まして破壊の危機に瀕していることも知らない。

人間の営みの痕跡は陸上のみに残されているわけではない。人間の営みは海にも及び、その痕跡は海の底にも残されている。私たちはそれに気づいていないだけである。そこで私たちは水中に残された人間の営みの痕跡を拾い集めることを考えた。そして、それらを広く公開することで、海との関わりについて認識を新たにし、さらに海を舞台にしたこの国の歴史や文化を真に理解することにつなげたいと考えた。

## 2 プロジェクト開始の経緯

プロジェクトの発端は、2007年に当研究所が立ち上げた「海底遺跡ミュージアム構想」であった。

これは海底遺跡を史跡公園化して公開しようという構想であった。その最初の取り組みとして、日本財団の助成を受け、2007年8月に長崎県小値賀島周辺の海底遺跡の調査に合わせた遺跡見学会を実施した。おそらく国内では最初の試みであろうと思う。いくつかの課題も浮かび上がったが、構想の可能性を十分感じることができた試みであった。

そして、次なるステップとして、海底遺跡をはじめとした海に関わる文化遺産の網羅的な調査を行い、情報を収集して、公開して広く水中文化遺産の存在と意義を知ってもらう計画を立てた。まず2008年度に九州近海を中心とした水中文化遺産の調査を日本財団の助成を受けて行い、当研究所のウェブサイト上に水中文化遺産データベースとして公開した。

次に調査対象を全国の海域に拡大し、日本全体の水中文化遺産を網羅するデータベースの作成の可能性を模索していた。2008年度の事業を並行しながら、日本財団の担当者とのメールや電話での打ち合わせや検討を行いながら、プロジェクト案を作成することができた。プロジェクトの実現にこぎつけられたのは、財団担当者たちの事業に対する深い理解によるところが大きい。

これまでアジア水中考古学研究所は、主に東アジア地域をフィールドとしてきた。その活動領域を高い水準で維持することは組織的にも経済的にも困難が予測された。そのため他の組織とも協力しながら調査を進めていくことが必要であると考え、具体的な調査成果はもちろんのこと、他の組織との情報交換は有益となるであろうと思えた。また大学や研究機関とのプロジェクトを通じての交流は、水中考古学研究の環境を整えることが期待できるし、もちろん水中考古学に関心を寄せる学徒や研究者が現れることも期待することができた。

そして、日本財団の助成と全面的な協力を得て、「海の文化遺産総合調査プロジェクト」は2009年4月から3年計画で実施することとなった。

### 3 プロジェクトの構成

プロジェクトは以下の三つの具体的事業によって構成されている。モデルとなったのは2008年度に実施した九州近海における水中文化遺産データベース作成事業である。

- ① 水中文化遺産委員会
- ② 全国水中文化遺産調査
- ③ 水中文化遺産の情報の発信と公開

### 4 プロジェクトの事業内容

#### ① 水中文化遺産委員会

水中文化遺産に関して専門的見地から議論を行う。そして、具体的な取り組みの方向性を示していく。

#### ② 水中文化遺産調査

大学等の調査機関や研究機関と協力しながら、水中文化遺産の位置、年代、性格、歴史的意義など基本的な情報を収集し、情報の集約を図る。調査の内容は日本全体の海域を網羅する水中文化遺産分布調査及び資料収集、海底から引揚げられている水中遺物調査等である。遺跡の重要度や性格に応じて、潜水確認調査や試掘調査を実施する。そして、調査成果に基づき、日本の水中文化遺産のデータベースを作成する。

#### ③ 情報の発信と公開

水中文化遺産を広く公開し、周知することが必要かつ重要である。水中文化遺産委員会の助言を得ながら、日本の水中文化遺産に関する情報の発信と公開を積極的に行う。

##### (a) 記者発表、ニュースレターの発行

広く調査成果を知ってもらうために記者発表やニュースレターの発行を行う。

##### (b) 水中文化遺産調査に関する報告会の開催

一般の方たちを対象とした調査成果の報告やシンポジウムを開催する。

##### (c) インターネット上での情報公開

誰でも水中文化遺産の情報を入手できるようにネット上で情報公開する。

##### (d) ヴァーチャルミュージアム製作

海底遺跡の調査や見学を疑似体感できるヴァーチャルミュージアムを製作する。

##### (e) 企画展の開催

実際に水中から引揚げられた遺物などを展示して、調査成果を紹介する。

##### (f) 研究誌と調査報告書の刊行

水中考古学の学問的確立のために専門学会向けに調査報告書や研究誌を刊行する。

### 5 事業体制

前記の事業を実施するための事業体制は以下のとおりである。



① 事業主体

団体名：特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所

代表者氏名：林田憲三

事業担当者：野上建紀

② 事務局及び理事会

理 事 長：林田憲三

副理事長：石原 渉・野上建紀

理 事：塩屋勝利（2010年度まで）・折尾 學・木場 浩・高野晋司・塚原 博・常松幹雄・  
西健一郎・林原利明・宮武正登・横山邦継・田中克子（2010年度から）

③ 水中文化遺産委員会

委 員 西谷 正（前日本考古学協会会長）

委 員 前田耕作（アフガニスタン文化研究所）

委 員 佐々木達夫（金沢大学名誉教授）

委 員 青柳洋治（上智大学名誉教授）

委 員 岩淵聡文（東京海洋大学教授）

委 員 安里嗣淳（元沖縄県埋蔵文化財センター所長）2009年度まで

委 員 金武正紀（元那覇市教育委員会）2010年度から

オブザーバー 文化庁

④ 調査担当

（北海道・東北）林原利明

（関東・太平洋）林原利明・柏木数馬

（日本海域）小川光彦・酒井 中

（瀬戸内海・四国海域）吉崎 伸（NPO法人水中考古学研究所理事長）、林原利明

（南西諸島）渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）、宮城弘樹・片桐千亜紀（南西諸島水中文化遺産研究会）

（九州近海）

・玄界島周辺・烏帽子岩周辺 林田憲三・野上建紀

・芦屋・岡垣沖 野上建紀

・長崎県小値賀島海底遺跡 塚原 博・林田憲三

・鹿児島県坊津海域 林原利明・宮武正登

・岡垣浜漂着陶磁器 添田征止・西健一郎・野上建紀・中野雄二・田中克子

・天草地方 横田 浩・西健一郎

⑤ 情報発信担当

（インターネット）宮下雅章

（報告会・シンポジウム）林原利明

（『NEWSLETTER』）石原 渉

（研究誌『水中考古学研究』）野上建紀

(ブログCANPAN) 林原利明

(企画展) 野上建紀 (2009・2010年度) ・ 中野雄二 (2009・2010年度) ・ 林原利明 (2011年度)

・ 常松幹雄 (2011年度)

⑥ 協力団体等

(協力団体) 金沢大学、東京海洋大学、鹿児島大学、NPO法人水中考古学研究所、南西諸島水文化遺産研究会、有田町歴史民俗資料館、小値賀町歴史民俗資料館

(助成団体) 日本財団

## 第2章 海の文化遺産総合調査プロジェクトの実施内容

野上 建紀

事業計画に基づき、2009年度から2011年度にかけて3年計画でプロジェクトを実施した。プロジェクト2年目の終わり頃、東日本に未曾有の被害をもたらした東日本大震災が発生し、特に海岸部は大津波によって壊滅的な被害を受けた地域が多かった。そのため、海を調査対象とする本プロジェクトも計画変更を余儀なくされたが、プロジェクト全体としては概ね計画通りに実施できたと考えている。

以下、年度毎に実施内容を報告する。

### 2009年度の実施内容

プロジェクトの初年度である2009年度は、九州周辺海域、南西諸島海域、瀬戸内海、琵琶湖、日本海の各海域で水中文化遺産の基礎資料収集を目的とした分布調査や資料調査を関係団体と共同で行った。実地調査2008年度にすでにアンケート調査を行っている九州周辺海域を除いて、水中文化遺産の情報に関するアンケート調査を実施した。

そして、調査以外の事業としては、水中文化遺産委員会を福岡で開催し、日本の水中文化遺産の現状把握と課題の抽出を行った。また、『水中文化遺産を理解する』と題して、本プロジェクトの報告会とシンポジウムを日本財団ビル（東京）で開催した。さらに『海揚りの有田焼』展を有田町歴史民俗資料館と共催した。

これらの調査や事業については、ブログ「海底遺跡ミュージアム構想」で随時、情報提供を行った。

#### （1）水中文化遺産調査

##### （九州周辺海域）

###### 玄界灘海底探査

日程：2009年8月23～25日

参加者：林田憲三、塩屋勝利、小川光彦、福寿健太郎

###### 小値賀島前方湾海底遺跡発掘調査

日程：2009年8月19～27日

参加者：林田憲三、塚原 博、横田 浩、加藤隆也、野上建紀、高野晋平、折尾 学、  
林原利明、藤掛泰尚、柏木数馬、田中克子、松本晶子、竹内奈央、木全晶子、岡 沙織、  
石川侑子、魚屋弘太郎、福寿健太郎、町村剛、V.LiVigni、F.Agneto、C.Annamaria、  
S.Tusa、S.Agizza、G.Trojisi、L.Gaetano、P.Sevaggio、D.Petrella

###### 伊万里湾・松浦市福島町海岸踏査

日程：2009年11月21・22日

参加者：常松幹雄、加藤隆也、森本幹彦、屋山 洋、田中克子、宮野弘樹

###### 天草海岸踏査

日程：2009年1月14～16日、28日

参加者：西健一郎、横田 浩

##### （南西諸島海域）

###### 奄美大島調査



日程：2009年8月3～9日

参加者：渡辺芳郎、新里貴之、河野裕次、石川裕也、長野陽介

徳之島調査

日程：2009年11月13～15日

参加者：渡辺芳郎、新里貴之、河野裕次、恵島瑛子、福重侑子、米崎隼平、新里亮人、具志堅亮

伊是名島・具志川島

日程：2009年6月8・9日

参加者：黒川健明

恩納村仲泊沖

日程：2009年7月10～12日

参加者：片桐千亜紀

国頭村宜名真沖（英国船ベナレス座礁地点）

日程：2009年7月19日

参加者：宮城弘樹、片桐千亜紀、渡辺美季、崎原恒寿、黒沢健明、山田浩久、輝 広志、喜納大作、

新垣夢野、島袋綾野、塩屋勝利、常松幹雄、渡辺芳郎、新里貴之、新里亮人、松尾直子

真謝沖・オーハ島沖

日程：2009年8月18・19日

参加者：宮城弘樹、片桐千亜紀、本田京子

伊江島

日程：2009年8月25日

参加者：宮城弘樹、黒沢健明

宮古島吉野海岸沖・八重干瀬沖

日程：2009年9月11～13日

参加者：片桐千亜紀、崎原恒寿、山田浩久

竹富島沖・黒島沖・小浜島沖

日程：2009年9月24～27日

参加者：片桐千亜紀、崎原恒寿、山田浩久

徳之島山港金間崎沖・山港沖

日程：2009年11月13～15日

参加者：片桐千亜紀、山田浩久、本田京子

うるま市南浮原島沖

日程：2009年12月19・20日

参加者：片桐千亜紀、今野 誠

恩納村大和干瀬

日程：2010年3月13・14日

参加者：片桐千亜紀、崎原恒寿、山田浩久

[文献調査]

東京大学

日程：2009年9月5・6日

参加者：片桐千亜紀、崎原恒寿  
那覇市てんぶす館

日程：2009年10月24・25日

参加者：宮城弘樹、片桐千亜紀、黒沢健明、輝 広志、喜納大作、新垣夢野、千住直広、前田一舟、  
上里隆史

東京大学

日程：2010年2月27～3月1日

参加者：本田京子

宜名真沖沈没英国籍船に関する調査

日程：2009年7月20日～8月7日

参加者：渡辺美季、片桐千亜紀

南浮原沖沈没船に関する調査

日程：2009年7月20日～8月7日

参加者：渡辺美季、新垣夢野

(瀬戸内海・四国)

愛媛県資料調査

日程：2009年8月3～6日

参加者：林原利明、玉井敬信、二宮俊洋、柏木数馬、藤掛泰尚

比岐島相ノ石沖出土遺物調査

日程：2009年9月14日

参加者：玉井敬信

香川県資料調査および踏査

日程：2009年9月3～5日

参加者：赤松佳奈、水野恵利子

岡山県資料調査

日程：2009年9月16、29日、10月29日

参加者：赤松佳奈、水野恵利子

兵庫県韓荷島諸島踏査

日程：2010年1月9・10日

参加者：赤松佳奈、織田光一、水野恵利子、吉崎 伸

高知県現地調査

日程：2009年9月22～24日

参加者：林原利明、二宮俊洋、岡 沙織、柏木数馬

広島県福山市資料調査・踏査

日程：2011年11月7・8日、15日

参加者：7日・8日：赤松佳奈、水野恵利子、吉崎 伸

15日：赤松佳奈、織田光一、吉崎 伸

(琵琶湖)

滋賀県琵琶湖 滋賀県立安土城考古博物館資料調査（琵琶湖総合開発についての聞き取り調査）

日程：2009年7月5日

参加者：赤松佳奈、水野恵利子、町田典三、吉崎 伸

滋賀県琵琶湖湖西～湖北 資料調査・踏査

日程：2009年11月11～13日

参加者：赤松佳奈、町田典三、水野恵利子、保井浩二

琵琶湖沖の白石潜水調査

日程：2009年8月3日、8日

参加者：3日：赤松佳奈、織田光一、町田典三、水野恵利子、保井浩二

8日：赤松佳奈、織田光一、後藤雅次、林原利明、町田典三、水野恵利子、保井浩二、  
吉崎 伸

(日本海)

越前海岸踏査

日程：2009年8月18・19日

参加者：酒井 中

福井県陶芸資料館所蔵資料調査

日程：2009年8月18日

参加者：酒井 中

能登半島海岸踏査

日程：2009年6月7～9日

参加者：小川光彦、酒井 中、野上建紀、中野雄二、大安尚寿、平田天秋、西山郷史、米田初男、  
榊谷秀一、竹野博正、太佐寿一郎、坂下博晃、九千房百合、南チーチー海、坂本圭佑、  
田崎稔也、渡辺 玲、青柳洋治、佐々木達夫ほか

能登半島海岸踏査

日程：2009年8月7～9日

参加者：平田天秋、大安尚寿、河崎倫代、榊谷秀一、垣内光次郎、戸根比呂子、小川光彦、  
九千房百合、南チーチー海、坂下博晃、坂本圭佑、渡辺 玲、田崎稔也、塩澤隆慈、  
松井広信、佐々木達夫ほか

能登半島海岸踏査

日程：2009年9月11～15日

参加者：平田天秋、西山郷史、大安尚寿、榊谷秀一、澤田正昭、谷内尾晋司、橋本澄夫、  
九千房信雄、山本祐司、小川光彦、野上建紀、中野雄二、戸根比呂子、九千房百合、  
酒井 中、南チーチー海、手塚希望、坂本圭佑、松井広信、佐々木達夫ほか

能登半島海岸踏査

日程：2009年11月20・21日

参加者：石村 智、三ツ石 元、佐々木達夫、佐々木花江、野上建紀、酒井 中、九千房百合ほか

能登半島海岸踏査

日程：2009年12月6日

参加者：酒井 中、田崎稔也、松井広信、渡辺 玲

島根県大田市石見銀山遺跡踏査

日程：2009年9月2～4日



参加者：野上建紀、小川光彦、中野雄二、今田善寿、椿 真治、守岡正司  
島根県大田市石見銀山遺跡温泉津沖泊潜水調査

日程：2009年10月9～12日

参加者：小川光彦、野上建紀、山本祐司、手塚希望  
能登半島珠洲市海岸採集品調査

日程：2009年6月7～9日

参加者：大安尚寿、米田初男、平田天秋、榎谷秀一、青柳洋治、竹野博正、坂下博晃、佐々木達夫、  
野上建紀、中野雄二、小川光彦、酒井中、南チーチー海、九千房百合、坂本圭祐  
能登半島珠洲市引砂・高波海岸シュノーケリング調査

日程：2009年8月8・9日

参加者：小川光彦、手塚希望、坂本圭祐、松井広信  
能登半島珠洲市海岸採集品調査

日程：2009年9月5・6日

参加者：佐々木達夫、小川光彦、九千房百合、九千房信雄  
能登半島珠洲市三崎町寺家沖・高波沖潜水調査

日程：2009年9月11～15日

参加者：佐々木達夫、米田初男、大安尚寿、野上建紀、山本祐司、手塚希望、小川光彦、  
九千房百合、竹澤 茂、九千房信雄、櫻屋敷忠

新潟県資料調査

調査日程：2010年2月12～14日

参加者：垣内光次郎、酒井 中、松井広信、田崎稔也、塩澤隆慈、佐々木達夫

(東日本・太平洋)

千葉県現地調査（千葉県大多喜町・御宿町）

日程：2010年3月26・27日

参加者：林原利明、尾本 衛、オスカル・アレナス

(2) 水中文化遺産委員会の開催

下記のとおり、第1回水中文化遺産委員会を開催した。

期日：2009年11月8日

場所：福岡市

出席者

(委員) 西谷正、青柳洋治、佐々木達夫、岩淵聡文

(オブザーバー) 瀬田佳男（文化庁記念物課）

(事業・調査報告者) 小川光彦、吉崎 伸、片桐千亜紀

(事務局) 林田憲三、野上建紀、高野晋司、塚原 博、林原利明

(内容) ・プロジェクトと委員会設置の経緯（野上）

・事業・調査報告（日本海域：小川、瀬戸内海：吉崎、九州近海：林田・塚原、遺跡見学会：野上）

・検討議題：水中文化遺産調査の方針と内容

### (3) シンポジウム

下記のとおり、第3回『水中文化遺産と考古学』シンポジウムを開催した。これまで当研究所は福岡を中心とした北部九州でシンポジウム開催することが多かったが、今回、初めて東京で開催した。

名称：水中文化遺産を理解する-2009年度「海の文化遺産総合調査プロジェクト」調査報告会-

期日：2010年2月28日

場所：日本財団ビル

内容：「アジア水中考古学研究所とプロジェクトの紹介」野上建紀

- ・調査報告

「南西諸島」片桐千亜紀

「九州」野上建紀

「瀬戸内海・琵琶湖」吉崎 伸

「日本海域」小川光彦

- ・特別講演「水中考古学と私」中山千夏

- ・基調報告

「水中文化遺産と水中考古学」岩淵聡文

「海洋考古学の調査・研究の実例」Randall J.Sasaki

「水中文化遺産と国際法-日本国内法制への示唆」中田達也

「身近にある水中文化遺産を巡る-水中文化遺産の理解のために-」林原利明

- ・討論

### (4) 共同企画展

下記のとおり、企画展を有田町歴史民俗資料館と共同で開催した。

名称：「海揚げの有田焼-筑前岡垣浜を中心に-」

期間：2009年11月1日～30日

会場：有田町歴史民俗資料館

内容：福岡県岡垣町在住の添田征止さんが岡垣浜に漂着した肥前陶磁を30年間にわたって採集したコレクションを展示したものである。

### (5) 会議等

福岡市で連絡調整のための全体会議（2009年4月11日、9月26日、2010年3月20日）を開催するとともに、各海域においても連絡会議や研究会議を開催した。

### (6) 各種印刷物・製作物

- ・『海の文化遺産総合調査プロジェクト』2009
- ・『NEWSLETTER』第2号 2009
- ・リーフレット「南西諸島の水中文化遺産-海に沈んだ歴史のかげら-」
- ・DVD「平成21年度南西諸島水中文化遺産調査」
- ・『海揚げの有田焼-筑前岡垣浜を中心に-』2009
- ・『水中考古学研究』第3号 2010

## 2010年度の実施内容

前年度に引き続き、九州周辺海域、南西諸島海域、瀬戸内海、琵琶湖、日本海の各海域で水中文化遺産の基礎資料収集を目的とした分布調査や資料調査を関係団体と共同で行った。そして、当年度から東日本・太平洋の調査を開始した。

そして、調査以外の事業としては、第4回『水中文化遺産と考古学』シンポジウムとして、第2回日韓共同水中考古学研究会を福岡市博物館で開催した。さらに『海揚げりの肥前陶磁』展を有田町歴史民俗資料館と共催した。

これらの調査や事業については、ブログ「海底遺跡ミュージアム構想」で随時、情報提供を行った。

### (1) 水中文化遺産調査

#### (九州周辺海域)

芦屋・岡垣沖海底探査

日程：2010年5月28～6月2日

参加者：林田憲三、野上建紀、横田 浩、小川光彦、中野雄二

小値賀島前方湾海底遺跡発掘調査

日程：2010年8月20～30日

参加者：林田憲三、田中克子、加藤隆也、小川光彦、高野晋平、塚原 博、林原利明、野上建紀、横田 浩、山本祐司、平田賢明、長井宣子、竹内奈央、藤掛泰尚、永田雄気、小野田祥子、町村 剛、福寿健太郎、魚屋弘太郎、金成元、金義中、池榮培、藝炳順、S.Tusa、G.Lino、V.LiVigni、S.Emma、N.Musumeci、F.Agneto、P.Salvaggio、A.Agizza、U.Lorio、V.Curaci、D.Petrella、F.Saggiomo、G.Donnabella、A.Biar

長崎県南松浦郡新上五島町潮合崎沖潜水目視調査

日程：2010年10月15～18日

参加者：宮武正登、林田憲三、横田 浩、山本祐司、真部広紀、竹内奈央、野上建紀、小林清美

長崎県対馬踏査

日程：2010年11月27～29日

参加者：常松幹雄、田中克子、加藤隆也、屋山 洋、林田憲三

天草潜水調査

日程：2011年3月11・12日

参加者：西健一郎、横田 浩、山本祐司、小川光彦、高橋正浩、宮武直人、真部広紀、竹内奈央、林田憲三、中山 圭、福田匡朗ほか

#### (南西諸島海域)

喜界島（鹿児島県大島郡喜界町）踏査

日程：2010年8月2～5日

参加者：渡辺芳郎、新里貴之、河野裕次、鎌田悠幹、酒井希望

沖永良部島（鹿児島県大島郡知名町・和泊町）沖永良部島

日程：2010年8月9～12日

参加者：渡辺芳郎、新里貴之、河野裕次、嘉戸しおり、上水流美帆、柚木崎友香

上甕島・中甕島・下甕島（鹿児島県薩摩川内町）踏査

日程：2010年8月21～24日

参加者：渡辺芳郎、新里貴之、河野裕次、坂口 僚、有村 晃、鎌田悠幹

トカラ列島平島（鹿児島県鹿児島郡十島村）踏査及び潜水調査

日程：2010年11月27・28日

参加者：渡辺芳郎、新里貴之、宮城弘樹、宮武正登、山本祐司、竹内奈央、小西美香

久米島真謝港沖

日程：2010年6月11～13日

参加者：渡辺芳郎、新里貴之、河野裕次、鎌田悠幹、酒井希望

黒島仲本海岸・伊原間海岸・屋良部沖

日程：2010年9月23～26日

参加者：片桐千亜紀、崎原恒寿、山田浩久、小西美香

黒島沖石西礁湖第3地点写真測量調査

日程：2010年11月12～14日

参加者：山田浩久、小西美香、木口裕史、山下政巳

石垣市八重山博物館

日程：2010年11月16～28日

参加者：山田浩久

恩納村仲泊沖

日程：2010年11月20・21日

参加者：黒沢建明、輝 広志、喜納大作

徳之島（鹿児島県大島郡）潜水調査

日程：2011年1月15～17日

参加者：片桐千亜紀・崎原恒寿・山田浩久・新里亮人・本田京子・具志堅亮

インディアン・オーク号座礁地点採集陶磁器調査（北谷町）

日程：2011年2月7～9日

参加者：宮城弘樹、新垣 力、青山奈緒、瀬戸一美、比嘉洋子

久米島（沖縄県久米島町久米島）

日程：2011年2月11・12日

参加者：安斎英介、外間裕一、嵩原康平

奄美大島、喜界島

日程：2011年2月18～20日

参加者：横尾昌樹

（瀬戸内海・四国）

竜串・爪白キャンプ場沖（高知県土佐清水市）潜水目視調査

日程：2010年6月10～13日

参加者：林原利明、宮武正登、山本祐司、柏木数馬、浜口和也

兵庫県淡路島

日程：2010年7月3日

参加者：赤松佳奈、吉崎 伸



広島県とびしま海道・しまなみ海道、岡山県笠岡市高島

日程：2010年7月17～19日

参加者：赤松佳奈、水野恵利子、吉崎 伸

岡山県岡山市久々井沖潜水調査

日程：2010年8月21日

参加者：赤松佳奈、織田光一、後藤雅次、町田典三、水野恵利子、吉崎 伸

兵庫県淡路島北淡町沖潜水調査

日程：2010年8月28・29日

参加者：赤松佳奈、織田光一、後藤雅次、関野泰一、塚本 徹、林原利明、町田典三、水野恵利子、  
吉崎 伸

香川県小豆島

日程：2010年9月4日

参加者：赤松佳奈、吉崎 伸

広島県福山市田島・横島・走島

日程：2010年9月19日・20日

参加者：赤松佳奈、織田光一、吉崎 伸

兵庫県淡路市北淡町

日程：2010年10月5～9日

参加者：赤松佳奈、水野恵利子

兵庫県姫路市家島

日程：2010年10月31日

参加者：赤松佳奈、吉崎 伸

岡山県岡山市・笠岡市・笠岡諸島

日程：2010年11月12日・13日

参加者：赤松佳奈、吉崎 伸

広島県廿日市市厳島・江田島市・呉市倉橋島

日程：2010年12月11日～13日

参加者：赤松佳奈、水野恵利子、吉崎 伸

徳島県調査

日程：2011年1月22日・23日

参加者：赤松佳奈、織田光一、水野恵利子、吉崎 伸

香川県丸亀市本島・広島、高松市女木島・男木島

日程：2011年2月11～13日

参加者：赤松佳奈、織田光一、水野恵利子、吉崎 伸

(日本海)

新潟市上越市資料調査

日程：2010年6月19日

参加者：竹部祐介、塩澤隆慈、田崎稔也・松井広信・渡邊 玲・中野峰久・中野雄介、佐々木達夫、  
宮本眞晴、佐々木花江

新潟市佐渡市調査

日程：2010年7月2～4日

参加者：垣内光次郎、坂下博晃

北海道道南（函館市、松前町、上ノ国町、江差町）、青森県調査

日程：2010年7月5～10日

参加者：佐々木達夫、野上建紀、佐々木花江

石川県七尾市能登島調査

日程：2010年7月11日

参加者：塩澤隆慈、松井広信、渡邊 玲、中野峰久

福井県丹生郡越前町調査

日程：2010年8月4日

参加者：田中照久、塩澤隆慈、松井広信、田崎稔也、佐々木達夫、宮本眞晴

新潟県資料調査

日程：2010年8月10日

参加者：田崎稔也、松井広信、渡邊 玲、佐々木達夫

福井県若狭湾地域踏査

日程：2010年8月21・22日

参加者：田崎稔也、渡邊 玲

浜田海岸踏査

日程：2010年8月25～29日

参加者：佐々木達夫、佐々木花江

福井県若狭湾地域調査

日程：2010年9月2・3日

参加者：田崎稔也、渡邊 玲

丹後半島東部地域調査

日程：2010年9月4・5日

参加者：宮本眞晴、塩澤隆慈、渡邊 玲

新潟県柏崎市高浜調査

日程：2010年9月12日

参加者：田崎稔也、渡邊 玲

松江市調査

日程：2010年9月7～12日

参加者：佐々木達夫、佐々木花江

京都府丹後半島・兵庫県調査

日程：2010年9月18～20日

参加者：佐々木達夫、宮本眞晴、田崎稔也、塩澤隆慈

隠岐の島調査

日程：2010年10月2～6日

参加者：佐々木達夫、佐々木花江

石川県珠洲市姫島礁周辺および高波調査

日程：2010年10月22～24日

参加者：野上建紀、小川光彦、山本祐司、九千房 信雄、九千房百合、竹澤茂、桜屋敷忠、今宮久志、  
戸根比呂子、松井広信、手塚希望、大安尚寿、平田天秋、佐々木達夫、佐々木花江、  
酒井 中、横山 航

石川県珠洲市姫島礁周辺および高波調査

日程：2010年10月25～31日

参加者：九千房 信雄、九千房 百合、酒井 中、小川光彦、佐々木達夫、佐々木花江ほか

石川県珠洲市シュノーケリング調査

日程：2010年 8 月12・13日

参加者：小川光彦・松井広信

石川県珠洲市潜水調査

日程：2010年 8 月12～13日

参加者：小川光彦、山本祐司、手塚希望、松井広信、刀根比呂子、佐々木達夫、佐々木花江、  
平田天秋、大安尚寿、竹澤 茂、桜屋敷忠、九千房信雄、九千房百合

石川県志賀町福浦港シュノーケリング調査

日程：2010年 9 月19・20日

参加者：小川光彦、松井広信、手塚希望、刀根比呂子、谷内尾晋司、角谷勝男

石川県志賀町福浦港潜水調査

日程：2010年11月6～8日

参加者：小川光彦、山本祐司、手塚希望、松井広信、谷内尾晋司、角海甚栄、石本 昇

石見銀山遺跡潜水調査

日程：2010年11月21～24日

参加者：小川光彦、山本祐司、松井広信、手塚希望、林田憲三、林 健亮、守岡正司、佐々木達夫、  
佐々木花江

(関東・太平洋・東北・北海道)

神津島沖海底遺跡引き揚げ遺物調査

日程：2010年 7 月 1 日

参加者：林原利明、野上建紀、藤掛泰尚、永田雄気

静岡県東部（沼津市戸田、加茂郡西伊豆町、南伊豆町、河津町、東伊豆町、伊東市、熱海市）

日程：2010年 8 月 3～5 日

参加者：小野林太郎、澤田恭亮、三嶋浩希、榊井謙太郎、森田和男、柏木数馬

静岡県西部（御前崎市・浜松市）、愛知県西三河地方（幡豆郡幡豆町）

日程：2010年11月6・7日

参加者：小野林太郎、澤田恭亮、三嶋浩希、遅沢 泰、榊井謙太郎、柏木数馬

神奈川県小田原市真鶴町

日程：2010年11月7日

参加者：林原利明、長谷川典子、水野恵利子、三瓶裕司

静岡県西伊豆町黄金崎公園ビーチ沖潜水調査

日程：2010年11月13・14日

参加者：林原利明、辰巳ちあき、柏木数馬

神奈川県鎌倉市

日程：2010年11月23日

参加者：林原利明、長谷川典子

(西牟婁郡白浜町、東牟婁郡串本町)

日程：2010年11月24・25日

参加者：小野林太郎、三嶋浩希、榊井謙太郎、永田雄気、柏木数馬

静岡県西部（御前崎市、牧之原市）

日程：2010年11月27日

参加者：小野林太郎、澤田恭亮、三嶋浩希、柏木数馬

神奈川県葉山町

日程：2010年12月23日

参加者：林原利明、高橋正浩、長井宣子、長谷川典子、水野恵利子

神奈川県小田原市石橋沖潜水調査

日程：2010年12月25日

参加者：林原利明、柏木数馬、辰巳ちあき、高橋正浩、長井宣子、三瓶裕司

神奈川県三浦・横須賀市

日程：2011年1月16日

参加者：林原利明、長谷川典子

神奈川県横須賀市

日程：2011年1月29日

参加者：林原利明、高橋正浩、長井宣子、長谷川典子、米澤佳代子、水野恵利子

静岡県・愛知県・三重県現地調査

日程：2011年2月14～18日

参加者：小野林太郎、柏木数馬、三嶋浩希、澤田恭亮、遅沢 泰

静岡県伊豆現地調査

日程：2011年2月28日～3月2日

参加者：小野林太郎、柏木数馬、西 玄太、三嶋浩希

伊豆諸島（八丈島）調査

日程：2011年3月9～12日

参加者：林原利明、小野林太郎、遅沢 泰、古屋滋光、岩村大輝

## （2）水中文化遺産委員会

下記のとおり、第2回水中文化遺産委員会を開催した。

期日：2011年3月19～21日

場所：福岡市

出席者

（委員）青柳洋治、佐々木達夫、金武正紀

（海域担当者）小川光彦、松井広信、渡辺芳郎、片桐千亜紀、新垣 力

（事務局）林田憲三、野上建紀、高野晋司、西健一郎、折尾 学、林原利明、田中克子、山本祐司、  
竹内奈央

- (内容) ・ 2010年度調査成果報告
- ・ 来年度事業 (3 年間の事業成果) について

### (3) シンポジウム

下記のとおり、第4回『水中文化遺産と考古学』シンポジウムを開催した。なお、このシンポジウムは第2回日韓共同水中考古学研究会を兼ね、韓国の韓国文物研究院およびウリ文化財研究院より多数の参加があった。

期日：2010年9月12日

会場：福岡市博物館・講堂

発表内容：「蒙古襲来を掘る」高野晋司

「韓国における水中考古学の現況」兪炳喆

「南西諸島の水中文化遺産の概要」宮城弘樹

「水中発掘の高麗船舶の構造と時代区分」金炳堃

「長崎県五島列島小値賀における日宋交易に関する一考察-前方湾海底遺跡調査の成果より-」

田中克子

「忠南泰安群馬島の沖における水中発掘調査の概要」魯京正

「海底遺跡出土高麗青磁の現況と特徴」金尹姫

### (4) 共同企画展

下記のとおり、企画展を共同で開催した。

名称：海揚げりの肥前陶磁-海に残された有田焼-

期間：2010年10月1日～11月30日

内容：海運によって支えられていた肥前陶磁の流通の実態を紹介するために、水中考古学の成果を生かしながら、北は北海道、南は鹿児島まで全国の海底や海岸で発見された肥前陶磁の資料を一堂に集めて展示したものである。

### (5) 会議等

福岡市で連絡調整のための全体会議 (2010年4月18日、10月9・10日、9月26日、2011年2月5日、3月20日) を開催するとともに、各海域においても連絡会議や研究会議を開催した。

### (5) 各種印刷物・製作物

- ・ 『NEWSLETTER』第3号 2011
- ・ 『海揚げりの肥前陶磁-海に残された肥前陶磁-』2010
- ・ 『水辺の陶磁器』2010
- ・ 『水中考古学研究』第4号 2011
- ・ 『水中考古学研究』第5号 2011

### 2011年度の実施内容

補足調査を中心に昨年度に引き続き、調査を継続したが、2011年3月11日に発生した東日本大震災により、東日本の太平洋側の調査は大きな計画変更を余儀なくされた。そして、最終年度となる当年度は事業成果を広く公開する事業を行った。沖縄と東京の2カ所で水中文化遺産に関するシンポジウムを開催し、沖縄の久米島では「海底遺跡ミュージアム構想」の第2弾の実践となる水中文化遺産



の見学会を実施した。また、東京では3年間の成果を公表するため、水中文化遺産に関する企画展も開催した。そして、これらの調査や事業については、ブログ「海底遺跡ミュージアム構想」で随時、情報提供を行った。

そして、3年間の調査成果として、水中文化遺産データベース、水中遺跡地図、海の文化遺産総合調査報告書（本書）を作成した。

#### （1）水中文化遺産調査

##### （九州近海）

###### 相島潜水目視調査

日程：2011年7月16・17日

参加者：林田憲三、常松幹雄、横田 浩、山本祐司、加藤隆也、福寿健太郎、篠崎和則、中村俊介

###### 小値賀島海底遺跡発掘調査

日程：2011年8月20～30日

参加者：林田憲三、高野晋平、塚原 博、野上建紀、平田賢明、横田 浩、加藤隆也、田中克子、小川光彦、高橋正浩、山本祐司、山田浩久、宮武直人、屋山 洋、上月克己、福寿健太郎、町村 剛、魚屋弘太郎、金武正紀、金東炫、池榮培、金成元、Daniele Petrella、Francesco Saggiomo、Daniele Orefice、Paolo Pecci、Samuele Carannante

###### 芦屋・岡垣沖ROV確認調査

日程：2011年10月11～15日

参加者：野上建紀、林田憲三、小川光彦、横田 浩

##### （南西諸島）

###### 種子島（鹿児島県西之表市・中種子町・南種子町）調査

日程：2011年6月17～19日

参加者：渡辺芳郎、新里貴之、河野裕次、恵島瑛子

###### 与論島調査

日程：2011年8月13～15日

参加者：渡辺芳郎、新里貴之、河野裕次、恵島瑛子

###### 宜名真沖海底遺跡

日程：2011年6月10～12日

参加者：片桐千亜紀、山田浩久、小西美香、木口裕史、新里亮人、宮城弘樹、喜納大作、新垣 力  
資料整理

日程：2011年9～10月

参加者：青山奈緒、比嘉洋子

##### （瀬戸内海）

###### 香川県庵治沖

日程：2011年7月16・17日

参加者：赤松佳奈、吉崎 伸

###### 香川県引田・お亀磯

日程：2011年9月10・11日

参加者：赤松佳奈、町田典三、河野 誠、吉崎 伸

(日本海)

能登半島珠洲沖における海底探査（株式会社パスコと金沢大学の共同研究による）へのアドバイザー参加

日程：7月24～30日

参加者：小川光彦、酒井 中（金沢大学）、牧本孝夫（パスコ）、林 大貴（パスコ）

能登半島珠洲市潜水調査

日程：9月17～20日

参加者：小川光彦、山本祐司、松井広信、手塚希望、佐々木達夫、竹澤 茂、桜屋敷忠、九千房信雄

能登半島福浦潜水調査

日程：9月23～25日

参加者：小川光彦、山本祐司、松井広信、手塚希望、谷内尾晋司、佐々木達夫、能崎英文、  
角海甚栄、佐々照夫、濱中外治

石見銀山関連遺跡潜水調査

日程：11月4～8日

参加者：小川光彦、林田憲三、横田 浩、山本祐司、松井広信、野上建紀、林 健亮、岩橋孝典  
津和野町亀井家墓所礎石状墓碑確認調査

日程：11月7日

参加者：小川光彦、松井広信

(東日本・太平洋)

神奈川県横須賀市資料調査

日程：2011年6月15日

参加者：林原利明、高橋正浩、長谷川典子

北海道函館市・北杜市・木古内町調査

日程：2011年6月18～20日

参加者：林原利明、大槻 巖、片桐千亜紀、二宮俊洋

千葉県館山市調査

日程：2011年7月3日

参加者：林原利明、清家千春、長井宣子、中田達也

千葉県館山市・南暴走市調査

日程：2011年7月9日

参加者：林原利明、高橋正浩、長井宣子、米澤佳代子

東京都大島町、静岡県熱海市調査

日程：2011年7月17・18日

参加者：林原利明、小野林太郎、三嶋浩希、西 玄太、古瀬岳洋、稲葉谷直

千葉県館山市調査

日程：2011年8月11日

参加者：林原利明、中田達也

神奈川県横須賀市調査

日程：2011年8月13日

参加者：林原利明、高橋正浩、長井宣子、長谷川典子

北海道札幌市、室蘭市、苫小牧市、新ひだか町、浦河町、えりも町、釧路市調査

日程：2011年8月19～22日

参加者：林原利明、岡 沙織、大槻 巖、二宮俊洋

北海道北斗市、木古内町、函館市、森町

日程：2011年9月3～6日

参加者：林原利明、岡 沙織、片桐千亜紀、佐藤祥洋、高橋正浩

千葉県鴨川市・勝浦市調査

日程：2011年9月25日

参加者：林原利明、高橋正浩、長井宣子、長谷川典子

神奈川県逗子市大崎沖潜水調査

日程：2011年10月3・4日

参加者：林原利明、宮武正登、佐藤祥洋、高橋正浩、長谷川典子、米澤佳代子、米山 要

東京都神津島村、新島村調査

日程：2011年11月14～17日

参加者：小野林太郎、岡野洋介、中島 舞、梅田卓也、古瀬岳洋

熱海市初島沖潜水調査

日程：2011年11月20・21日

参加者：林原利明、片桐千亜紀、佐藤祥洋、高橋正浩、米澤佳代子、米山 要

熱海市初島沖潜水調査

日程：2012年2月

参加者：林原利明ほか

## （2）水中文化遺産委員会

当年度は定期的に開催した全体会議等に水中文化遺産委員の方々に出席して頂き、意見やアドバイスを得るようにした。

## （3）シンポジウム

下記のとおり、シンポジウムを沖縄と東京で開催した。

名称：『海に沈んだ歴史のカケラ-南西諸島の水中文化遺産の世界-』

期日：2011年10月8日

会場：沖縄県立博物館・美術館講堂

内容：

### ・基調講演

「水中文化遺産の魅力」林田憲三

「南西諸島の水中文化遺産」片桐千亜紀

### ・事例報告

「海岸採集遺物から見た島の陶磁器流通」渡辺芳郎

「文献からみた船舶座礁の記録と対応」渡辺美季

「身近な水中文化遺産と関連文化財-水底に眠る先人の営み-」宮城弘樹

・シンポジウム

「南西諸島における水中文化遺産について考える」

名称：『海のタイムカプセル-水中考古学からのおくりもの-』

期日：2012年2月26日

会場：東京海洋大学越中島キャンパス越中島会館講堂

内容：

・講演

「宋代南海沈船1号：宋代の進んだ海洋貿易交流の新たな証拠」 アンジェラ・ショットンハイマー

「日本における水中考古学の発展を」 西谷 正

・研究・調査報告

「水底に消えた陸地と島の謎を追って」 石原 渉

「東日本・太平洋沿岸の水中文化遺産」 林原利明

「日本海の水中文化遺産 - 沿岸の海揚げり品を中心に - 」 佐々木達夫

「南西諸島の水中文化遺産 - 中国陶磁生産地と琉球の貿易港 - 」 金武正紀

「沖縄久米島で実施した水中文化遺産見学会の様子 - 海底遺跡ミュージアム構想の実践 - 」

片桐千亜紀

「石見銀山遺跡と水中文化遺産の調査」 林 健亮

参加者：約80名

(4) 企画展

下記のとおり、企画展を開催した。

名称：『海のタイムカプセル-水中考古学からのおくりもの-』

期間：2012年2月15日～3月25日

会場：東京海洋大学越中島キャンパス越中島会館特別展示室

内容：全国の海から引き揚げられた遺物を中心とした文化遺産を展示。主な展示品は、オーハ沖海底遺跡（沖縄県）、鷹島海底遺跡・前方湾海底遺跡（長崎県）、相島沖瓦・玄界島沖唐津焼・岡垣浜採集陶磁器・福岡市内碇石、初島沖海底遺跡（静岡県）、神津島沖海底遺跡（東京都）、沖ノ島海底遺跡（千葉県）、能登半島珠洲焼（石川県ほか）など。

見学者数：約670人

(5) 遺跡見学会

2011年9月10日、海底遺跡ミュージアム構想の一環として、久米島のオーハ島（東奥武島）沖の海底遺跡の見学会を実施した。久米島博物館で事前に歴史講座等のレクチャーを行い、シュノーケルによる見学とグラスボートによる見学を行った。なお、見学会に先立ち、2011年5月11・12日に事前打合せを行った。

(6) 水中文化遺産データベース作成

インターネット上で誰でもアクセスできる水中文化遺産データベースを作成した。遺産の位置、年代、種類、性格などによって検索可能なものとしている。

(7) 水中遺跡地図

全国の水中遺跡を網羅した遺跡地図を作成した。主に文化財行政に携わっている関係自治体に配布予定である。

#### (8) 調査報告書作成

総論および九州近海、南西諸島、瀬戸内海、日本海、太平洋等の海域毎に3年間の調査成果を公表する調査報告書である本書を作成した。関係自治体、大学、団体に配布予定である。

#### (9) 会議等

福岡市で連絡調整のための全体会議（2011年4月23・24日、5月21・22日、6月25・26日、7月30・31日）を開催するとともに、各海域においても連絡会議や研究会議を開催した。また、今年度は編集委員会（2011年7月9日、9月3日）を設けて福岡市で開催した。

そして、2011年9月29日～10月2日クロアチアのザダルで開催された第4回水中考古学国際会議に林田憲三、高野晋司、岩淵聡文、野上建紀の4名が参加し、本プロジェクトについて「The Database of Underwater Cultural Heritages around Japan」と題して林田が代表して発表を行った。

#### (10) 各種印刷物・製作物

- ・リーフレット『沖縄県久米島の水中文化遺産見学会』
- ・第6回水中文化遺産と考古学シンポジウム発表要旨
- ・企画展『海のタイムカプセル』図録
- ・『海の文化遺産総合調査報告書』－総論・九州編－
- ・『海の文化遺産総合調査報告書』－南西諸島編－
- ・『海の文化遺産総合調査報告書』－瀬戸内海－
- ・『海の文化遺産総合調査報告書』－日本海編－
- ・『海の文化遺産総合調査報告書』－太平洋編－
- ・『全国水中遺跡地図』

#### 参考文献

- アジア水中考古学研究所2010『水中考古学研究』第3号  
アジア水中考古学研究所2011『水中考古学研究』第4号  
アジア水中考古学研究所2011『水中考古学研究』第5号



### 第3章 海底遺跡の取り扱いと史跡指定のプロセス

高野 晋司

文化庁の資料によると、2012年1月現在の国指定史跡数は1659箇所である。時期的には旧石器時代から近世まで含まれる。しかし、それらは全て陸上の遺跡でありこの中に水中遺跡は含まれていない。

また、法律によって開発が規制される周知の埋蔵文化財包蔵地としての水中遺跡の登録も全国的にはかなり少ないものと思われる。従って文化財保護行政担当者が知らぬまま、沿岸部分にあるはずの未周知の多くの水中遺跡が開発によって消滅してきた事実を忘れてはならない。

本書で報告した全国の実海底遺跡が、今後周知の埋蔵文化財包蔵地として認知され、少なくともやみくも的に開発によって消滅する事態から防ぐ手立てとなるよう望みたい。

水中遺跡にとって少し明るい情報としては、文化庁は2012年1月に文化審議会を開催し、「長崎鷹島海底遺跡」の内、出土遺物が集中する神埼地区について「鷹島神埼遺跡」として日本初の水中遺跡の指定史跡としての答申を受けた。

これを契機に、文化庁においても陸上と同じような保護・活用の指針を示し、全国の文化財保護担当部局に対してきめ細かな情報提供や研修等を実施してもらいたい。

なお、史跡指定後の鷹島神埼遺跡については、地元松浦市において史跡の保護と活用について様々な議論がなされることと思われるが、ここでは、水中遺跡の史跡指定に関する取り扱いと史跡指定に関するプロセスについて鷹島海底遺跡の例を参考としながら述べておきたい。

江上波夫東京大学名誉教授と茂在寅男東海大学教授を中心とする、旧文部省科学研究費特定研究「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」の一環としての「水中考古学に関する基礎的研究」の研究チームが、その実験調査地として鷹島を選んだのが1980年であったから、それから既に32年が経過したことになる。

鷹島が所謂元寇関係遺跡であるとの推定からこの実験は始められたのであるが、この時の3年間の調査で、鷹島南岸海底には多くの中国製陶磁器が多く埋没している事が判明し、彼我の古文献に記載された1281年の弘安の役の折の暴風雨による蒙古軍壊滅の可能性は高くなった。

この成果を受けて長崎県と鷹島町（現在は合併後松浦市となっている）は1981年、鷹島南岸延長7.5 km、海岸線から沖合200mを海底における周知の埋蔵文化財包蔵地として登録し、当該区域について法的規制をかけることとした。

その後、当該海底遺跡については、離岸堤建設工事、護岸建設工事等に伴う緊急発掘調査が5回、目視による海底遺跡範囲確認調査などの学術調査が15回行われている。これらの実際の潜水調査については、ARIUA（旧九州沖縄水中考古学会）のメンバーが中心となって実施してきた。

これらの一連の調査によって、海底-21mでのシルトにしっかり食い込んでいた木製碇の存在や多種多様な武器の出土等から、1281年の元寇の際での暴風雨の事実が証明されることとなった。

加えて、松浦市教育委員会は2004年から2011まで、鷹島を含む伊万里湾全域の海底音波探査を東海大学に委託して海底地形の復元を行った。この音波探査の過程で、異常反応した地点が数十箇所あることが判った。

2011年秋に全国的に報道された池田教授を代表とする琉球大学考古学研究室による元船発見はいわば1980年以来の海底調査の集大成ともいえる。

ただし、今回の文化庁による史跡指定理由は、これまでの調査の蓄積による元寇関連遺跡としての

証明の評価であることは特筆しておかねばならない。

鷹島海底遺跡の史跡指定の計画は行政内部では2003年頃から考えていたが、正式に史跡指定要望の動きがあったのは2008年の「鷹島海底遺跡調査指導委員会」の中であった。

その中では、史跡指定と出土遺物の重要文化財指定の両方の要望であったが、出土遺物は保存処理に相当の時間がかかる事もあって、まず史跡指定を先行させることとし、スケジュール的には2010年申請を目標とした。しかし、課題の整理が進まないまま計画はなかなか進まなかった。

数回にわたる調査指導委員会の強い指導を受けて本格的に市・県が動き出したのは2010（平成22）年1月のことである。以下時系列に指定までの経過を述べておきたい。

2010年1月15日 県・市による指定に向けての協議

1月18日 文化庁との第1回目の協議（指定の要望）

2月28日 松浦市による初めての指定に向けての地元説明会開催

3月30日 調査指導委員会における指定範囲等の方針確認

4月12日 文化庁との2回目の協議 指定範囲の確認と課題の整理

5月18日 調査指導委員会（文化庁調査官出席）で改めて指定範囲や課題、及び進捗状況についての協議・報告

6月8日 県関係部局（港湾課）との協議。指定範囲や抵触する法律などについて

6月21日 報告書執筆に関する協議

2011年1月5日 文化審議員第3専門部会委員鷹島視察

6月7日 文化庁との3回目の協議 課題の最終的な整理

7月29日 松浦市より国指定意見具申

9月16日 鷹島海底遺跡総集編刊行

2012年1月25日 文化審議会

2月 答申

3月 官報告示

今回の指定に当たっては、文化庁は非常に慎重であった。日本最初的水中遺跡指定の嚆矢になる訳であるから当然のこととであるが、考えられるさまざまな課題を提起された。

例えば、指定する海面（海底）範囲はどう特定するのか。水中（海底を含む）は誰のものになるのか。その管理者は誰か。関係する法律はどれ位あるのか。水中、海面、海底における漁業権は設定されているのか。指定にあたっては漁業関係者の了解はどこまで必要か。指定予定区域内に海底ケーブルが設置されていないか。指定する範囲の内、汀線（海岸線）とはどの部分をさすのか。他の省庁（国土交通省等）との調整の必要はないのか。出土遺物について外国から所有権の要求は出ないのか。等々、一つ一つ解決すべき課題が山積していった。

土地は国のもので管理者は県知事、それと地元の漁協の同意があればいいのでは、と安易に考えていた県・市としては思いがけない問題要求であった。

参考として上記の課題についてのその対応結果を記しておく。

#### ① 指定範囲についての線引きについて

基本的に国土座標指定になるものと思われる。鷹島の場合も陸上に設置した数箇所の座標杭から沖合へ〇〇mという地点を定め、図面上での座標を設定し、面積を積算した。

#### ② 海底の所有者と管理者について。

海底の土地は国土交通省所管の国有財産となる。ただし、法定受託事務として都道府県知事が管

理者となっているから、貸付、譲与等処分を行う場合は都道府県知事の了解が必要となる。

今回は、港湾管理者、海岸管理者、海域管理者、法定外公共用財産管理者（港湾、海岸でもない海域）としての知事の同意書を取得した。それと独自に海域管理条例が定められている場合はその長たる知事の同意書が必要である。

③ 指定にあたっての関係法律はどの位あるのか

港湾法、海岸法、海洋法、漁港漁場整備法、漁業法等が抵触する恐れがあるが、通常全て都道府県知事が法廷受託事務者である。

④ 漁業関係の調整

指定予定範囲内に漁業権などが設定されている可能性があり、県・市町村の関係課での確認が必要となる。現在行われている漁業行為について指定そのものが、支障を与える例は殆ど無いものと思われるが、地元漁業組合や漁業者などに対する十分な説明と了解書を得ることは当然となる。

⑤ 海底に設置されたケーブルなどについて

確認した結果、鷹島の場合指定予定地内にNTT敷設の2本の海底ケーブルが設置されていたが、関係部局との調整の結果、指定に対する支障とはならなかった。

⑥ 指定範囲の内、汀線（海岸線）とはどの部分をさすのか

公有水面と陸地との境界については、春分秋分における満潮位とされている。ただ護岸がある場合、詳細に言えば、岸壁が常時砂や岩盤に接している場合と、満潮時に護岸岸壁が海に接している場合がある。しかし何れも春分秋分における満潮時の潮のラインが基本となっている。

⑦ 他省庁との調整について

水面や海底の管理については②に述べたように国土交通省の所管であるが、管理は都道府県の知事の管轄とされており、直接的に国土交通省と折衝する必要は無い。

指定の対象が外国との関係が深い場合は外務省との調整が生じる恐れがあるので注意が必要かも知れない。

⑧ 出土遺物について外国から所有権の要求はでないのか

鷹島の場合、出土遺物の99%以上は蒙古軍（江南軍、高麗軍）関係遺物である。このことからその関係国からの返還要求等の可能性が危惧されるようであるが、水難救護法ではなく、文化財保護法によって適切に処理された上で、県に帰属しているのであるから諸外国からの返還要求等に法的根拠は無いと考える。

以上、指定計画から指定までのプロセスを時系列的に述べてきたが、冒頭でも述べたように日本初めての海底遺跡の指定ということもあって、文化庁はあらゆる極めて慎重であった。

しかし、これを契機として、水中遺跡や水中出土遺物などは貴重な水中文化遺産として、国はより積極的に保護対策の方針を都道府県に対して示して欲しい。

## 第4章 海底遺跡ミュージアム構想の総括

野上 建紀

### はじめに

2001年11月、パリで開催された第31回ユネスコ総会で水中文化遺産<sup>1)</sup>に関する条約が採択された。「水中文化遺産保護条約」(Convention on the Protection of the Underwater Cultural Heritage)である。20ヶ国の批准(あるいは受諾、承認)が発効の条件であったが、すでに40ヶ国に達し、2009年1月に発効を迎えた。水中文化遺産の保護は世界で共有しなければならない課題の一つとなっている。長年にわたって、水中考古学に携わってきた当研究所もまたその課題を共有すべきであると考えており、海底の文化遺産の保護と活用に積極的に取り組んでいくつもりである。海底遺跡ミュージアム構想もその取り組みの一環である。

### I 構想の目的と方針

本構想は水中文化遺産保護条約の趣旨に基づき、海底遺跡の野外ミュージアム化を行うことで公開活用を図り、水中文化遺産の保護と活用に寄与することを目的とするものである。(野上編2007)

この構想でキーワードとなる言葉は「in situイン・シチュ」、「museumミュージアム」と「tourismツーリズム」である。「in situイン・シチュ」は、遺跡や遺物に関して言えば現地保存、原位置保存といった意味である。現地保存が最重要視されていることは条約の附属書「水中文化遺産を対象とする活動に関する規則」にも記されている。「museumミュージアム」は沈没船などの水中文化遺産に関する博物館や展覧会の他、ここでは見学可能な海底遺跡などを含む。すなわち、水中文化遺産を学んでその価値を享受する場である。「tourismツーリズム」の訳語は「観光」であるが、遺跡の観光化といった場合、文化財サイドの立場では否定的なニュアンスでとられることも少なくない。ここでは商業ベースの観点が文化遺産の保護の観点よりも優先されないことを前提とした体験型ツアーとしておこう。つまり、ミュージアムが水中文化遺産を学び楽しむ場であれば、ツーリズムはそれらに対して適正かつ効果的にアクセスするシステムである。

### II 構想の経緯

2007年にこの構想はスタートしたが、そもそものきっかけは1冊の機内誌であった。イタリアのバイア海底遺跡の特集記事が掲載されており、日本でもこうした誰もがアクセスできる海底遺跡がでないかと考えていた。一方、その考えとは別に2006年度の日本財団助成事業として、水中考古学の調査研究の内容で応募したが、学術的なものではなく、より一般性の高い事業でないと採択は難しい旨、伝えられた。そこで思い出したものが、機内誌で読んだバイア海底遺跡であった。調査に従事している人々だけに実際に見て触れることが限られていた水中の遺跡の世界を多くの人に開放する考えは、海への関心を高めることを目的の一つとする日本財団の助成事業の趣旨にも沿うと考えた。

当時、当研究所で継続的に調査を行っていた小値賀島の海底遺跡とバイア海底遺跡を比較して検討した結果、恒久的な史跡公園を建設するのは時期尚早としても、遺跡の一般公開自体はいくつか課題は解決すれば可能であるように考えた。そこで2007年度の日本財団助成事業として、2006年に申請を行い、2007年春に採択された。春から当研究所内で準備を始め、協議と検討を重ねて、夏に小値賀島の海底遺跡の遺跡見学会を開催した。(林原2008)

さらに2007年度の遺跡見学会終了後、同年12月には海底遺跡ミュージアムをテーマとしたシンポジウムを開催し、成果を報告するとともに課題を検討した。(野上編2007b)



翌2008年度は、2009年度以降の「海の文化遺産総合調査プロジェクト」につながる九州地区における水中文化遺産データベース事業を助成事業として行ったが、小値賀島以外で遺跡見学会が可能な海底遺跡を抽出することも目的としていた。そして、2009年度からは、いよいよ「海の文化遺産総合調査プロジェクト」が始まったが、助成事業の申請に関する打合せ過程では、海底遺跡ミュージアム構想を独立した事業として、別に申請するか、日本財団側と協議を行っていた。その結果、「海の文化遺産総合調査プロジェクト」は水中文化遺産のデータベース作成を主目的とするものであるが、海底遺跡ミュージアムの候補地選定も兼ねたものとする事で事業を一本化することにした。

そして、3年間の全国的水中文化遺産の調査によって、決して多くはないが、将来の海底遺跡公園として有望な遺跡をいくつか選定することができた。その一つが2011年度に遺跡見学会を実施した久米島の海底遺跡である。小値賀島海底遺跡の見学会以来、4年振りに開催した遺跡見学会である。

### Ⅲ 水中文化遺産の保護と活用－海底遺跡ミュージアム構想の今後－

海底遺跡ミュージアム構想の総括として、まず水中文化遺産の公開事例とその方法をまとめ、具体的事例として海底遺跡ミュージアム構想がモデルケースとしていたバイア海底遺跡と小値賀島海底遺跡見学会を紹介した上で、今後の課題や将来について考えてみたいと思う。

#### (1) 水中文化遺産の公開事例とその方法

水中文化遺産の公開にあたって、どのような方法が可能であるのか、主に海底遺跡について国内外の公開事例とその方法をいくつか紹介する。

##### ① 博物館等によるレクチャー

沈没船などの水中文化遺産に関する展示を行っている博物館は少なくない。日本国内でも松浦市立鷹島歴史民俗資料館（鷹島海底遺跡）、開陽丸青少年センター（開陽丸遺跡）、滋賀県立琵琶湖博物館（琵琶湖湖底遺跡）などがある。韓国では木浦に国立海洋遺物展示館（Figs.1,2）があり、中国では広東海上絲綢之路(海のシルクロード)博物館などがある。沈没船の発見例が多い東南アジア周辺でも沈没船を扱った多くの博物館がある。（野上2005）こうした博物館が最も身近な水中文化遺産の学習の場である。博物館は遺跡から完全に切り離された場所ではなく、近くに設けられることが理想であり、実際にそのように設置されている場合が多いが、大都市部に設置された博物館にも利便性や集客性が高いという利点がある。マニラ湾で沈没したサンディエゴ号の資料を展示のメインに据えているフィリピン国立博物館などは水中文化遺産に対する大きな教育的効果を上げていると思う。

これらの多くの博物館では海底の遺跡の模型やジオラマを設置し、引き揚げられた遺物などを展示



Fig. 1. 国立海洋遺物展示館（韓国）



Fig. 2. 国立海洋遺物展示館（韓国）の展示模型

している。あるいは海底の映像を提供し、臨場感を高める工夫を行っている。特に広東海上絲綢之路博物館では、南海Ⅰ号沈船を海底ごと引き揚げて博物館内のプール「水晶宮」に移設し、その発掘調査過程を含めて公開する試みを行おうとしている。一般の見学者が水中の発掘調査を見学する機会はほとんどないため、非常に興味深い試みとして注目される。

博物館の見学だけにとどまらずに現地見学を組み合わせるとより効果的である。例えば2006年に韓国の国立海洋遺物展示館を会場として新安沖沈没船発掘30周年記念国際シンポジウムが開催された。博物館で研究発表や討論会が行われた後、新安沖沈没船の現場海域を見学した。海底を見学できるわけでもないが、それでも博物館で沈没船について学習していたため、遺跡を体感することができたと思う。この場合、海底遺跡そのものをどう見せるかということよりも事前のレクチャーをどれだけ充実させることができるかが重要となる。

## ②海底遺跡等の調査の現地説明会

2007年8月にアジア水中考古学研究所は小値賀島前方湾海底遺跡の潜水調査の日程に合わせて見学会を開催した。陸上の遺跡では発掘調査が行われた際には現地説明会が開催される。それと同様に海底遺跡の調査を実施した際にその成果を現地で公開することにしたのである。後述するように当見学会では見学者が実際に潜水して見学する方法と船上で海底遺跡のモニター映像を見学する方法を併用した。こうした方法が資金的あるいは技術的な理由によって無理であっても海底遺跡を望むことのできる付近の海岸などで遺物や写真を使って、遺跡を説明する方法は可能であろう。最新の考古学の情報を調査に関わった人々だけでなく、一般の見学者と共有できるため、その教育的効果は大きい。水中文化遺産だけでなく、その調査に対しても理解を深めてもらえるよい機会となる。一方、見学会は調査を行っている時だからこそできる部分が大きく、それを海底遺跡そのものの継続的な公開につなげることは難しい。

## ③スキューバ・ダイビングによる見学

エジプトのアレクサンドリアは紀元前332年アレクサンドロス3世（後にいうアレクサンダー大王）によって建設された都市である。現在、カーイト・ベイの要塞が築かれている箇所にファロスの大灯台があったとされている。アレクサンドリアの港沖合では、度重なる地震によって地盤沈下し、水没してできた遺跡の断片が海底で発見されていた。そして、1992年にフランス人のフランク・ゴッディオがアレクサンドリア沖の発掘プロジェクトを発足させ、調査が始まった。スフィンクス像や女神像、プトレマイオス王朝時代の王の像やオクタウィアヌスをはじめとするローマ皇帝の像、数多くのアンフォラの壺、紀元前4世紀頃の沈没船など貴重な発見が相次いだ。そして、2001年からはこの海域での潜水が許可されるようになり、見学者が潜水して見学することが可能となった。ガイドダイバーやガイドラインに従って、見学者は自分自身の目で直接、海底遺跡を見学できる。

どの遺跡でもこうした見学方法が可能なのではなく、明確な遺構や散逸しないような遺物など見学対象物が常に存在することが条件である。また、潜水して見学できる水深であることと、観察できる透明度が要求される。そして、恒常的な見学を可能にするために遺跡の維持管理、潜水見学者の安全管理等を行わなければならない。また、当然のことながら見学は潜水技術を持った者のみに限られる。

## ④グラスボトムボートによる見学

トルコのケコワ島は、約2000年前にトロス山脈の活動によりケコワ半島の村が地中海の底に沈んだ遺跡である。ケコワ島では遊覧船やグラスボトムボートによって海底遺跡を見学することができる。グラスボトムボートとは船底にガラス窓が設けられた船であり、窓越しに海中を見学することができ





Fig. 3. バイア城から望むバイア海底遺跡



Fig. 4. 港から見る夕暮れのバイア城

るものである。潜水技術など特別な技術を必要とせず、より多くの人々を対象に公開することができる方法である。一方、スキューバ・ダイビングによる見学方法よりもさらに高い透明度が要求される。

また、スキューバ・ダイビングの場合、見学者の経験技術にもよるが、水深0～30mぐらいの遺跡の見学は可能である。一方、船上あるいは船中から見学する場合はそれほど水深に対して許容範囲が広くない。浅すぎると見学船が入れず、深すぎるとガラス面から遺跡が離れ、見えなくなってしまう。そのため、この見学方法が可能な遺跡はかなり限定されることになる。

また、韓国の済州島では潜水艦で海中を見学するツアーがある。まだ海底遺跡の見学に使用された例は知らないが、応用できると思う。潜水艦の場合は比較的幅広い水深に対応できるであろう。

#### ⑤スキューバ・ダイビングとグラスボトムボートによる見学の併用

バイア海底遺跡はナポリの中心市街から西へ海岸線沿いに15kmほど離れた位置にある。バイアの城跡（Fig. 4）からは紀元79年にポンペイやエルコラーノの時間を止めたベスビオ山を遠くに望むことができる。紀元前2世紀から温泉が開発されたことが知られている。温暖な気候で風光明媚な海岸の町として有名であり、紀元3世紀の終わりまでローマの貴族階級や皇帝一族の最も人気のあるリゾート地であった。しかし、4世紀の終わり頃から緩やかな地盤沈下の兆候が現れ、海岸が沈下するのに伴い、海岸部の邸宅などは放棄されていき、海に没して遺跡が形成された。海底遺跡は現在のバイア港からポッツォーリのPontile della Pirelliまでの海岸付近一帯に広がっている。バイアの古代都市

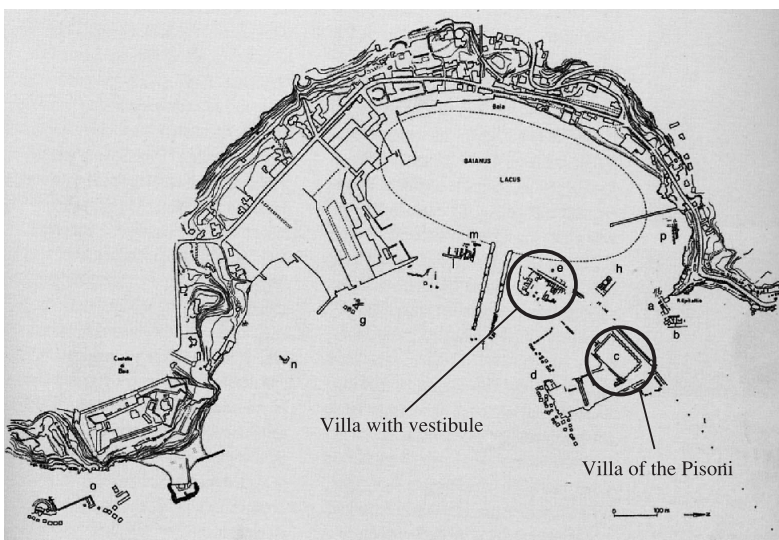


Fig. 5. バイア海底遺跡・遺構配置図 (Miniero 2003)

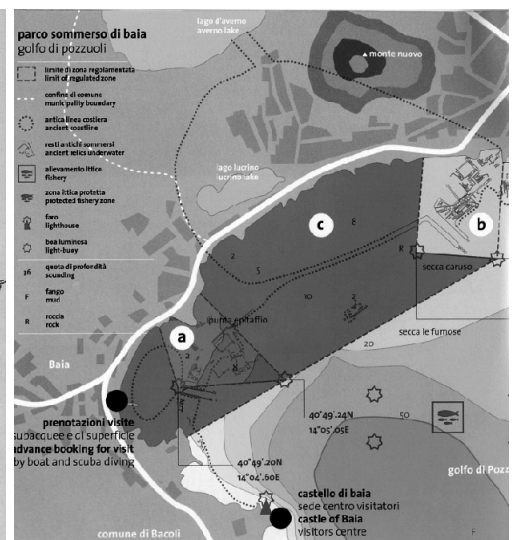


Fig. 6. バイア水中遺跡の保護ゾーン (Courtesy: Baia Underwater Park)





Fig. 7. Villa with vestibule 見学順路  
(Courtesy : Baia Underwater Park)

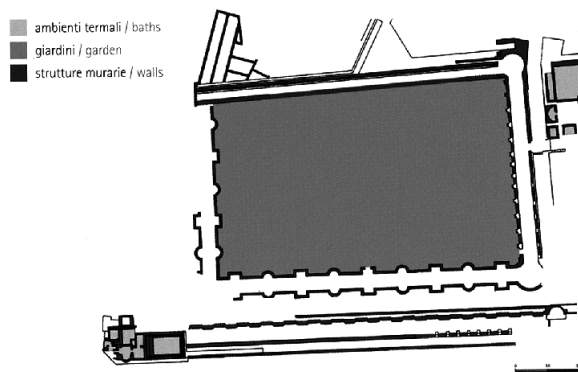


Fig. 8. Villa of the Pisoni 見学順路  
(Courtesy : Baia Underwater Park)



Fig. 9. Villa with vestibule コースにあるモザイク床



Fig. 12. Villa of the Pisoni 説明板



Fig. 10. Villa with vestibule コースにあるモザイク床



Fig. 11. Villa of the Pisoni の柱



Fig. 13. ローマ時代の石畳の道路

と、ローマ時代の波止場と倉庫として使用された無数の建造物からなるPortus Iuliusの遺跡である。

1969年に2体の大理石像が海底で発見され、1980年代には発掘調査によってニンファエウムが出土した。以後、発掘調査は現在も行われている。

このバイア海底遺跡ではスキューバ・ダイビングによる見学とグラスボトムボートによる見学が両方可能である。両者の特長を合わせ持ち、広く海底遺跡を公開することができる。ただし、同じ海域に見学ダイバーと見学船が共存することになるので、より厳密な見学者の管理が必要となる。バイア海底遺跡については次に詳しく述べようと思う。

## （2）バイア海底遺跡と小値賀島前方湾海底遺跡

「海底遺跡ミュージアム構想」のモデルケースとして考えていた海底遺跡がバイア海底遺跡である。そして、構想の最初の試みとして小値賀島前方湾海底遺跡の見学会を行った。ここではバイア海底遺跡の保存公開方法と2007年夏に行った小値賀島前方湾海底遺跡の見学会の方法について述べる。

### 1 バイア海底遺跡（バイア水中公園）

遺跡の整備と活用はその保存が前提となる。まずバイア海底遺跡の保護措置について触れ、そして、公開方法等を紹介しようと思う。

#### ①水中公園の創設と保護措置

バイア海底遺跡はナポリ湾のポシッリポPosillipoにあるガイオラGaiola海底遺跡とともにイタリア環境省によって、水中公園として2002年8月7日に創設された。バイア海底遺跡はA（total reserve）、B（general reserve）、C（partial reserve）の3つのゾーンに分けて、保護措置がとられている。

ゾーンの境界にはブイ等が設置しており、海面あるいは陸上から容易に認識できる。最も規制が厳しいAゾーンでは許可なく行える行為はほとんどない。水泳も禁止である。船の投錨や航行はもちろんのこと漕ぎボートによる横断も禁止されている。条件付きで許可されている行為はダイビングと海岸の釣りなどである。Bゾーンは水泳、ダイビング、漕ぎボートによる移動が許可されている。Cゾーンの場合、無条件に許可されている行為はBゾーンと変わらないが、船の投錨や航行、停泊が条件付きで許可されている。

遺物や遺構の取り扱いについて簡単に述べる。バイア海底遺跡から出土する遺物は大理石像、ガラス製品、アンフォラなどの土器など多数に上るが、出土した遺物の多くは回収されて後述するバイア城内の考古学博物館に収蔵・展示されている。遺構の主な材質は石、レンガや漆喰などである。何も手を加えないことを原則としている。石やレンガなどは海中でも比較的变化がないが、漆喰は脆くなっている部分がある。モザイク装飾が残る床の一部については、3枚の合わせガラスを被せ、その上を土嚢で押さえて保護していた。その部分だけはガラスを持ち上げればモザイク床を観察することができる。その他の部分は白砂によって覆われている。ガラスではなく、厚いフェルト状の布を被せ、土嚢で押さえている箇所もある。バイア海底遺跡では遺物はもちろんのこと動植物の採取も許されていない。そのため遺構に付着した海藻であっても原則として除去しない。将来、仮に遺構に動植物とくに植物が影響を与えるようなことになれば、選択的に何らかの措置をとる必要が生じるであろう。

#### ②遺跡の公開方法

バイア水中公園の管理はバイア城内にある公園事務所が行っているが、別にダイビングセンターが港の波止場に設けられている。ダイビング器材の管理、空気の充填などはここで行われ、シャワールームや更衣室等も完備されている。

遺跡の見学方法は大きく分けて、グラスボトムボートで見学する方法、専門ダイバーが撮影する映



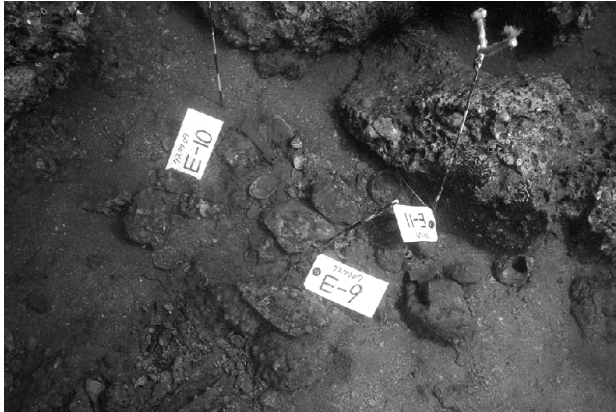


Fig. 14. 海底に散らばる遺物の状況  
(小値賀島前方湾海底遺跡 撮影：山本祐司)



Fig. 15. 海底遺跡見学会会場設営風景  
(小値賀島前方湾海底遺跡 撮影：山本祐司)

| 日      | 時間    | 場 所                   | 船上見学コース (参加者10名)                                                                                                      | 潜水見学コース (参加者6名)                                      |
|--------|-------|-----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 25日(土) | 11:00 | 小値賀町歴史民俗資料館           | 受付、資料館見学                                                                                                              |                                                      |
|        | 12:00 | 若者交流センター              | 昼食                                                                                                                    |                                                      |
|        | 13:00 | 若者交流センター              | 説明会 ・趣旨説明 ・理事長挨拶 ・スケジュール説明 ・安全に関する諸注意                                                                                 |                                                      |
|        | 14:00 |                       | 町内遺跡巡り ※マイクロバス使用                                                                                                      | チェックダイブ ※空港北沖<br>・ 14:40～15:00<br>(平均水深4m, 最大水深4.8m) |
|        | 17:00 | 各宿                    | 夕食                                                                                                                    |                                                      |
|        | 19:30 | 若者交流センター              | 水中考古学講座およびビデオ上映会<br>[講 座] ・「海底遺跡ミュージアム構想」<br>・「水中考古学とは」<br>・「小値賀と海底遺跡」<br>・「小値賀海底遺跡の歴史的価値」<br>[ビデオ上映会] 前方湾での昨年までの調査映像 |                                                      |
| 26日(日) | 21:30 |                       |                                                                                                                       |                                                      |
|        | 8:30  | 若者交流センター              | ミーティング                                                                                                                |                                                      |
|        | 9:15  | 近浦港                   | 記念撮影, 潜水・調査器材説明                                                                                                       |                                                      |
|        | 10:20 | クスクリ崎沖海底遺跡            | 遺跡見学 ・モニター見学                                                                                                          | 遺跡見学 ・潜水見学 10:30～11:25<br>(平均水深9m, 最大水深11m)          |
|        | 12:00 | 若者交流センター              | 昼食                                                                                                                    |                                                      |
|        | 14:00 | 近浦港                   |                                                                                                                       |                                                      |
|        | 14:15 | 赤丸瀬海底遺跡               | 遺跡見学 ・モニター見学                                                                                                          | 遺跡見学 ・潜水見学 14:20～15:10<br>(平均水深5m, 最大水深9m)           |
|        | 15:30 | クスクリ崎沖海底遺跡<br>山見沖海底遺跡 | 水中ロボット・デモ (佐世保高専)                                                                                                     | 遺跡見学 ・シュノーケリングによる見学<br>・終了後、クスクリ崎沖へ移動                |
|        | 16:00 | 近浦港                   |                                                                                                                       |                                                      |
|        | 16:30 | 若者交流センター              | 閉会式                                                                                                                   |                                                      |

表 2007 年小値賀島前方湾海底遺跡見学会日程表 (作成：林原利明)

像を見学船上のモニターで見学する方法、スキューバ・ダイビングで見学する方法の3通りである。

スキューバ・ダイビングによる見学コースは「Villa with vestibule」コースと「Villa of the Pisoni」コースがある。「Villa with vestibule」コースは運河の北側の邸宅や公衆浴場を主に見学するコースである (Fig. 7)。メインストリートに沿って進むと公衆浴場がある。さらに進めばtabernaeとよんでいる小さな建物群がある。当時、店主が商品を並べ、通行人に売っていた店である。少し先に進むと石のベンチの両脇に2本の柱をもつ入口がある。内部に入ると中央のアトリウムatriumの周りに

小部屋があり、美しいモザイク床を見ることができる。一方、「Villa of the Pisoni」コースはピソニPisoniの邸宅を中心に見学するコースである。約100m×60mの大きな庭園の周囲ではレンガ積み  
の円柱や壁を見ることができる。

海底遺跡には各所に半恒久的な説明板が設置されている。カラーの図面と説明をアクリル板が覆っている。貝などの付着物によってアクリル板が覆われているが、コテ状の金具でアクリル板上の付着物を削り取ると、説明が見える。定期的な除去が必要なようである。説明板には番号が記されており、遺跡全体の中での現在地がわかるようになっている。

その他、レプリカの設置や新たな説明板の設置などの整備は現在も行われている。海底のニンファエウムには出土した大理石像のレプリカを設置している。

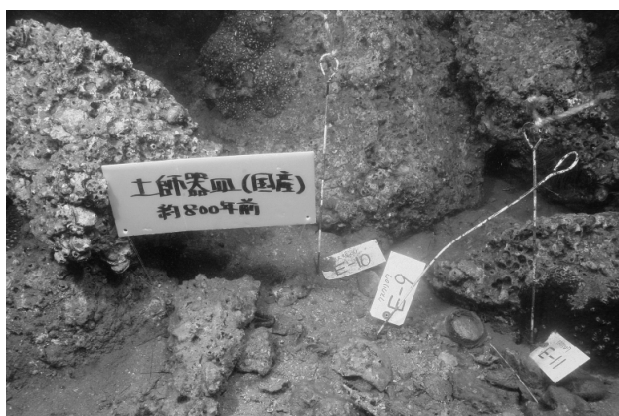


Fig. 16. キャプション（説明板）が取り付けられた海底の遺物（小値賀島前方湾海底遺跡 撮影：山本祐司）

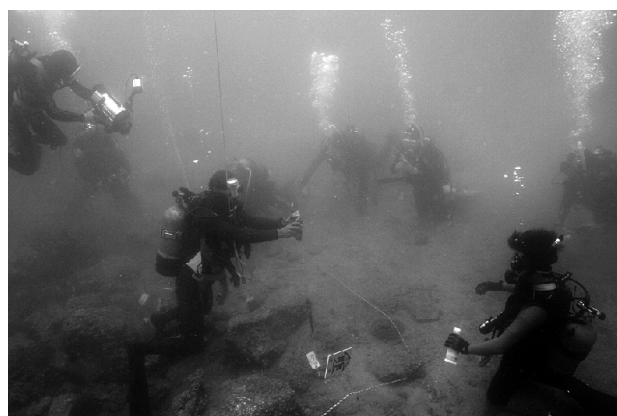


Fig. 17. 水中ボードで遺物の説明を行うガイドダイバー（小値賀島前方湾海底遺跡 撮影：山本祐司）

### ③ バイア海底遺跡の周辺

海底遺跡を学習するにあたっては、周辺の施設や遺跡を有機的に結びつけて、相互を生かしながら公開する方がより効果的である。バイア海底遺跡についても周辺に多くの施設や遺跡がある。ここではバイア城とバイア考古公園の二つの周辺施設をあげておく。

#### (A) バイア城 Castello di Baia

バイア海底遺跡の南側の岬状の突端に聳えている古城がバイア城である。ローマ時代の遺跡の上に築かれており、城の修復の際にはローマ時代の水道やモザイク床なども見ることができる。バイア海底遺跡の出土遺物はバイア城の内部を利用した考古学博物館（museo archeologico dei campi flegrei castello di baia）に展示されている。

博物館の展示のメインのニンファエウムはバイア海底遺跡の海底の状況をイメージしたものである。長方形の平面プランにアーチ形の屋根がかかる。後陣には神話の主人公の大理石像が並び、床は宴席に利用されたとされるプールとそれを取り囲む寝台を模している。ニンファエウムの展示の周囲の展示ケースには海底遺跡から出土した土器などが展示されている。

屋外に出るとバイア海底遺跡はもちろんベスビオ山まで一望でき、全体の環境を把握することがで

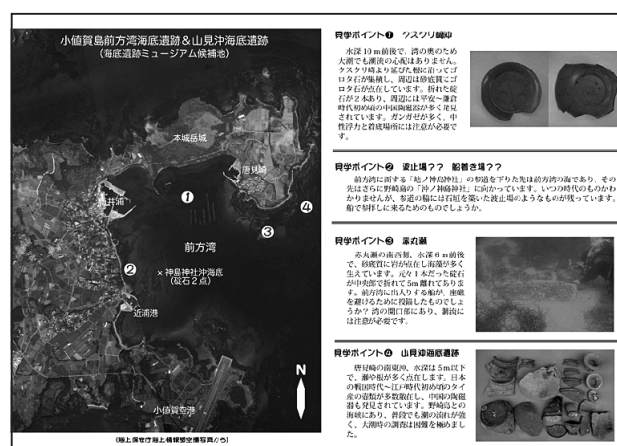


Fig. 18. 小値賀島前方湾海底遺跡見学会で使用した水中用の説明パンフレット



きる。バイア海底遺跡に関する各種パンフレットや書籍等をバイア城入口のミュージアムショップで販売している。バイア水中公園の公園事務所もバイア城内にあり、バイア海底遺跡を見学するにあたって予備知識を学習できる施設である。

#### (B)バイア考古公園 Parco Archeologico di Baia

バイアの遺跡の全てが海に没したわけではなく、陸地にも数多くの遺構が残り、バイア考古公園として整備されている。広大な敷地の考古公園では紀元前2世紀から紀元4世紀頃までの浴場跡や劇場などの建造物や道路の遺構が数多く残っている。バイア海底遺跡と共通の構造物があるので、事前にバイア考古公園の遺跡を見学し、学習することによって、海底遺跡の遺構の意味をより正確に深く理解することができる。



Fig. 19. 船上のモニターで海底の様子を観察する参加者  
(小値賀島前方湾海底遺跡 撮影：中村俊介)



Fig. 20. 海底の碇石を見学するダイバー  
(小値賀島前方湾海底遺跡 撮影：山本祐司)

## 2 小値賀島前方湾海底遺跡

前方湾海底遺跡は長崎県北松浦郡小値賀町前方湾に所在する。中世の貿易船の碇石や約800年前の中国陶磁器や国産土器などが海底に残っている。中世の交易港として機能していたことを示す資料である。

2007年8月に当遺跡の見学会を開催した。日程は2日間であったが、実際に海底遺跡の見学を行ったのは2日目の1日のみである。前日に海底遺跡に潜降用のロープとガイドロープを設置し、主だった遺物にはキャプションを設置した。また、発掘調査(測量)のデモンストレーション用に2m×2mの金属製の測量枠(実測枠)を設置した。前々日まで行われていた前方湾海底遺跡の調査のメンバーがそのまま見学会のスタッフに移行した。

見学会初日、参加者が小値賀島にある町立歴史民俗資料館に集合した後、学芸員が展示を通して小値賀島の歴史や海底遺跡の概要について説明を行った。そして、見学者は潜水して見学するグループと船上から見学するグループに分かれた。前者のグループは潜水技術と器材の確認を行い、後者は小値賀島に点在する陸上の遺跡の見学ツアーに参加した。夜は水中考古学や海底遺跡に関する講座と水中調査ビデオの上映会を開いた。会場では調査で回収された遺物を展示し、実際に参加者が手にとって観察できるようにした。

2日目の午前は前方湾海底遺跡(クスクリ崎沖)の真上に見学船を碇泊させ、見学会を開始した。見学方法は2通りである。一つはスキューバ・ダイビングによって見学する方法であり、もう一つは船上からモニター等で見学する方法である。

まずスキューバ・ダイビングによって見学する方法の説明を行う。見学者はガイドダイバーの指示



Fig. 21. 海底に横たわる船材  
(鷹島海底遺跡 撮影：山本祐司)

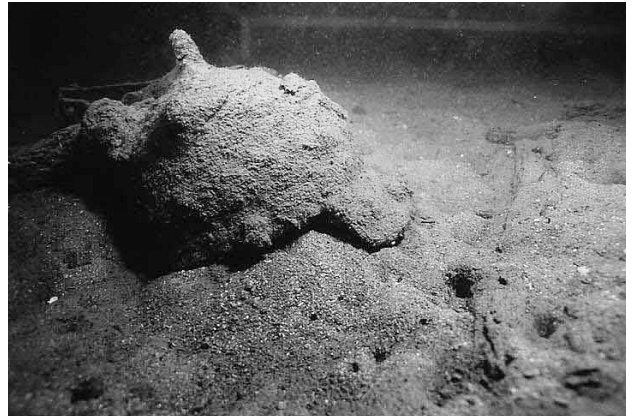


Fig. 22. 海底で出土した元軍の兵士の鉄兜  
(鷹島海底遺跡 撮影：山本祐司)

と説明に従いながらガイドロープに沿って海底に点在する遺物を見学していった。明確な遺構はなく、遺物も大型の碇石を除けば、碗や壺などの陶磁器類に限られたものであった。水中における遺跡や遺物の説明手段は、遺物に取り付けられたキャプション以外に3通りあり、一つはガイドダイバーが水中ボードを用いて文字情報を水中で伝達する方法である。遺物の説明などに効果があった。二つ目は事前に作成していた水中用の説明パンフレットの使用である。これは耐水性のあるユポ紙に耐光インクでカラー印刷したものである。事前に塩水に浸けてさらして耐久性を確認していた。そして、もう一つは水中スピーカーを用いて船上から音声によって説明する方法である。水中にいるガイドダイバーが水中電話で船上の説明ガイドに合図を送ることで、説明開始のタイミングを計った。

次に船上のモニターで見学する方法について説明する。水中CCDカメラをもったダイバーが潜水して撮影するリアルタイム映像を船上のモニターに映し出し、それを見ながら説明ガイドが遺物の説明などを行うものであった。カメラの位置や撮影のスピードなどは船上の説明者から水中電話でダイバーに指示を送って調節した。モニターが小型なこともあり、迫力不足は否めないが、船上に同じ種類の遺物を準備したり、目盛りの入ったピンボールをダイバーに持たせて、遺物の質感や大きさなどを実感できるようにした。調査デモンストレーションの映像も船上のモニターに送った。デモンストレーションの最後に実演者が実際に遺物の回収を行い、実物を船上の見学者に観察してもらった。

午後はクスクリ崎沖から碇石が沈んでいる赤丸瀬に移動し、見学を行った。スキューバ・ダイビングによって見学する方法は午前中と同じである。船上で見学する方法も午前中と同じく、水中CCDカメラの映像によるものであったが、赤丸瀬は水深が5m前後と浅く、アクアスコープ（箱眼鏡）による観察も可能であった。同様に前方湾の東側に位置する山見沖海底遺跡も水深が浅いため、シュノーケリングによる観察が可能であり、実際に見学を行った。また、今回は佐世保工業高等専門学校の協力を得て、水中ロボットのデモンストレーションを行った。開発途上であるが、改良を重ねれば有効な見学手段になるものと思われる。

#### IV 日本の海底遺跡の史跡公園化に関する問題点

バイア海底遺跡（バイア水中遺跡）と日本の海底遺跡を比較して、日本の海底遺跡を史跡公園化するにあたっての問題点を挙げようと思う。

バイア海底遺跡で行われている見学方法は、①スキューバ・ダイビングによる見学、②グラスボトムボートなどガラス越しの見学、③水中カメラのモニター映像の見学の3種類である。小値賀島前方湾海底遺跡の見学会で行った方法をそれらに対比させると、まず①スキューバ・ダイビングによる見学については、ほぼ同様の方法が可能である。バイア海底遺跡の方は恒久的な説明板などが整備され

ているのに対し、前方湾海底遺跡の方は仮設的な説明板の設置にとどまったが、システムは同じである。②ガラス越しの見学については、バイア海底遺跡のようなグラスボトムボートは準備できなかったが、アクアスコープ（箱眼鏡）を用いて、見学することができた。船の舷の高さや遺跡の水深など制約が多かったが、費用対効果など経済的な問題を解決すれば技術的にはグラスボトムボートの導入は可能であろう。③水中カメラのモニター映像については、小値賀では水中CCDカメラを準備し、モニターは小型テレビを利用した。小型テレビで観察する分には十分な画質の映像を得られた。一方、見学専用船でなく、通常の遊漁船であったため、映像の質そのものよりもむしろモニターの見学スペースを確保することが難しかった。また、船室内でモニターを観察できない場合、日差しに対する工夫が必要である。日差しによってモニター画面が見えづらかったり、見る方向によってはモニターの画面に周囲の景色が映り込んで見づらいことも生じる。

いくつか改良すべき点が見出せた一方、見学に使用した道具や装置は異なるものの、バイア海底遺跡と同様の方法が小値賀島前方湾海底遺跡でも可能であることを確認することができた。また、バイア考古公園やバイア城博物館ほどの規模はないが、小値賀島にも島の歴史を学習できる歴史民俗資料館があり、中世の山城やその他の遺跡も島内には点在する。海底遺跡をからめた歴史探訪ツアーが可能である。迫力という点ではバイア海底遺跡に比べて劣るが、海と陸を一体化させた史跡公園化が可能であると思う。恵まれた自然環境もまたその構想を支えてくれるであろう。

一方、日本の一般的な海底遺跡の環境は小値賀島前方湾海底遺跡ほど恵まれていない。小値賀島前方湾海底遺跡は水中の透明度が高く、内湾に位置しているため潮流の影響も小さな穏やかな海域である。水深も最深で10数メートルと深くない。これほど見学条件に恵まれた海底遺跡は他にはあまりない。そのため、他の海底遺跡で小値賀島前方湾海底遺跡と同様の見学方法が行えるとは限らない。むしろ行える遺跡の方が少ないであろう。まず一般の海底遺跡は概して透明度がよくない。特に有機質の遺物までが遺存しているような海底遺跡の場合、透明度がよくないことが多い。海底に露出した状態では有機質の遺物が残らないため、そうした遺物が残るためには海底下に埋もれてしまうことが条件となる。岩礁や珊瑚礁では海底下に遺物は埋もれない。やはり粒子が細かい砂やシルトが堆積するような海底の方が遺物も埋もれやすい。そういった底質をもつ海域は概して透明度の低いものになってしまう。例えば小値賀島前方湾海底遺跡と同じ長崎県内に位置する鷹島海底遺跡は、歴史的には非常に重要な遺跡である。元寇の際に元軍が暴風雨により壊滅した海域であり、海底では多数の遺物が発見されている。世界史上においても重要な史実の証拠が海底に眠る遺跡であり、その物語性や遺物の種類、量を考えると、この海底遺跡の公開と活用は極めて教育的効果の高いものになると思われる。

しかしながら、鷹島海底遺跡の場合、やはり透明度による制約がある。透明度の悪さによるストレスに耐えられる見学者に限定して見学を行ったとしても見学ダイバーがフィン（足ひれ）で海底の砂やシルトを一度巻き上げただけでしばらく視界は回復しない。海を濁らせずに活動できる熟練した専門のダイバーが単独で潜水し、水中カメラで撮影した映像をモニターで映し出して、説明する方法は可能であるかもしれないが、小値賀島前方湾海底遺跡で行ったようなスキューバ・ダイニングによる団体見学はまず無理である。ダイビングの安全管理はもちろんより綿密な遺跡の説明ガイドシステムを構築する必要がある。また、遺物は通常、海底下に埋もれており、潜水だけでは見学することはできない。そのため、発掘調査等によって土砂を除去しなければならないが、土砂を除去して有機質の遺物を露出させた時点から急速に劣化、風化していき、また散逸する可能性が高くなる。つまり、長期間露出させたままにすることはできないので、見学期間も限られることになる。その点が地中海のバイア海底遺跡やアレクサンドリア海底遺跡、ケコワ島などと大きく異なるところである。建築物などの遺構の規模はもちろんその材質の違いが大きい。大理石像やレンガ積み建築は海底であっても比較的遺存しやすいが、そうした遺物や遺構が少ない日本の海底遺跡では恒常的な公開を行うことは



難しい。このように一般的な日本の海底遺跡を史跡公園化し、恒常的な「海底遺跡ミュージアム」とするにはまだ多くの課題がある。

## V 今後の課題

今後の課題について、いくつかまとめたいと思う。

### 1 データベース作成と公開

文化庁が平成元年度（1989）から平成3年度の3ヶ年にわたり実施した調査研究「水中遺跡保存方法の検討」で全国3,245市町村に対し、「日本における水中遺跡」の所在地のアンケート調査を実施した。その結果、2,356の市町村から回答があり、そのうち379の市町村から「水中遺跡あり」と報告された。そして、その379の市町村のうち、海または湖沼に遺跡が存在すると回答があった229の市町村に対して、改めて具体的な質問項目を添えたアンケートを実施している。その結果、216の水中遺跡の資料が得られている。これらの結果報告は文化庁より2000年に刊行されている（文化庁2000）。現状では日本国内における水中文化遺産のデータベースはこの報告のみである。内容的にはまだ不十分である。多くの水中遺跡は、発掘調査はもちろんのこと潜水目視調査も行われておらず、正確な情報が得られていない。

水中文化遺産の公開と活用は、その現地保存が前提となる。そのためには基礎資料の収集は不可欠である。正確な位置や範囲、性格を把握するためにも潜水調査を含めた調査を行い、詳細なデータベースを作成しなければならない。そして、それらは広く公開されるべきものである。「海の文化遺産総合調査プロジェクト」が目的とするところである。もちろんデータベースの公開にあたっては盗掘等による被害の恐れを考慮しなければならないが、積極的に水中文化遺産の存在をアピールする必要がある。

また、水中という特殊な環境であるがゆえに海底遺跡の見学の疑似体験を行ういわゆるヴァーチャルミュージアムが有効である。ヴァーチャルミュージアム自体は多くの博物館ですで行われているものであり、沈没船に関するソフトもあるし、インターネット上で公開されているものもある。これらヴァーチャルミュージアムをデータベースとうまく組み合わせると、水中文化遺産に対する理解の促進により役立つものとなろう。

### 2 発掘調査の遺跡見学会の実施

一般的な日本の海底遺跡の遺物や遺構の性格を考えると、海底遺跡を公開するために野外ミュージアム化や史跡公園化するにはまだ多くの課題がある。透明度の問題もあるが、通常は海底下に埋もれて遺物や遺構が見えない遺跡が多く、そのままでは見学することができない。かといって遺物を露出させておくと消失してしまう。このジレンマの中で当面は発掘調査に日程に合わせて、というより最初から発掘調査と遺跡見学会を組み合わせた計画を立て、遺跡見学会を実施していくことが必要である。そして、その遺跡見学会の中で公開方法の検討を行い、その技術や手法を蓄積させていき、海底遺跡の史跡公園化の実現を模索していくのがよいと考える。

### 3 海底遺跡の史跡化と整備

水中文化遺産のデータベースが整い、そして、潜水調査や発掘調査によってそれぞれの遺跡等の位置づけが明らかになった後、具体的に海底遺跡の野外ミュージアム化や史跡公園化するにあたって、どのような問題が生じるか。最も大きな問題は、費用の問題であろうと思う。遺物の保存処理や遺構の保護措置、維持管理など多くの費用がかかる。遺跡の環境を考えるとおそらく陸上の遺跡よりも費



用がかかることは確かであろう。現実問題として、国レベルの支援なくして実現できないと思う。国庫補助も含めて国の支援を得るためにはまず海底遺跡の国指定の史跡化は不可欠な条件である。次に全体の管理計画を策定するとともに整備の基本構想を立ち上げていかなければならない。

ここで公園化についての整備案を一つ提示しておく。繰り返し述べることになるが、日本の海底遺跡の場合、バイア海底遺跡のような石やレンガの材質の遺構ではないので、そのまま遺構を見せることは難しい。それは主に遺物の材質や性格によるものである。それでは腐食しない材質でレプリカを作成してはどうか。陸上の遺跡でも有機質の遺物や遺構の実物をそのまま露出させている展示はないであろう。樹脂による保存処理を行って露出展示しているか、あるいはレプリカを展示している。陸上の遺跡の主な整備手法の一つは埋め戻しによる保存と遺構の復元である。それと同様に海底でも出土状況などを海底に「復元」することも可能ではないかと思う。腐食しない材質のレプリカを用いて遺跡を復元すれば、遺物を傷めることなく、恒常的に見学することが可能になる。また、リアリティーを損なわない工夫をしながら、潜水環境に適した位置に「移設」することもできるのではないかと思う。「in situ」の観点からは少しはずれるが実物の移設であってもよいし、それが無理であれば実物を現地保存したまま別の場所に新たに「復元」してもよい。陸上の遺跡や建造物の中には移設した例も多いし、中国では南海Ⅰ号沈船を外洋からそのまま陸上の博物館に移設しようとしている。移設できれば潜水環境のよい場所で海底遺跡を見学することができるようになるので、多くの問題が解決される。

これまで多くの陸上の遺跡の保存整備が行われている。その蓄積と経験を生かして、海底遺跡に適した整備方法を考案していかなければならない。

#### 4 周辺環境の活用と調和—景観を含めた—

海底遺跡を整備するだけでなく、より効果的な活用が図れるように、遺跡の周辺の施設や遺跡と結びつける方法を探り、アクセスを含めて史跡公園として一体化した環境を整えていく必要がある。特に地中海の海底遺跡に比べると視覚的に印象が弱く、かつ理解しにくい面がある。理解しづらい部分を補うための工夫として関連する陸上の施設や遺跡を利用することは重要である。

そして、水中文化遺産そのものを保全することはもちろんのこと、景観を含めた海域の保全も行わなければならないし、それを取り巻く陸上を含めた環境も保全しなければならない。陸側から海を眺めた景観だけでなく、日頃目にすることの少ない海から見た景観も大切にしなければならない。

おわりに

今後の課題として、いくつか挙げたが、いずれも陸上の遺跡であれば目新しい課題でもなければ特別な内容でもない。陸上の周知の埋蔵文化財包蔵地についてはすでに遺跡地図や遺跡台帳があり、発掘調査の現地説明会も日常的に行われている。そして、多くの遺跡が史跡化され、大規模な整備が行われている遺跡も少なくない。それらの整備は景観に配慮されていることはもちろんのこと関連する施設や遺跡を取り込みながら構想が練られている。すでに陸上の遺跡では当たり前であることが水中の遺跡ではまだ課題として残されているのである。ありきたりの言葉ではあるが、人間の営みの痕跡は水中にも存在し、文化遺産もある。冒頭で述べたように水中文化遺産の保護は世界が共有しなければならないテーマである。日本でも陸上の文化遺産に対する関心の数分の一でも水中の文化遺産に寄せられればと思う。水中文化遺産の公開と活用はその目的のために大きな意味をもつものである。

鷹島海底遺跡が海底遺跡としては初めて国史跡に指定された。陸上においてはこれまで多くの国史跡が史跡公園化されているが、海底遺跡については例がない。そのためには、まず管理計画を策定しなければならないが、どのように保護して、活用していくか、おそらく手探り状態で始めなけれ

ばならないと思う。この海底遺跡ミュージアム構想もその一助になればと思っている。

本稿は、野上建紀2008「水中文化遺産の公開と活用」『金沢大学考古学紀要29』42-53頁を加筆修正した。

#### 謝意

本稿を執筆するにあたり、多くの方々や機関の御協力を得た。芳名を記して謝意としたい。

小値賀町教育委員会、小値賀町、佐世保工業高等専門学校、松浦市教育委員会、國富株式会社長崎営業所、日本財団、Daniele Petrella, Nicola Severino, Giovanni Borriello, Tsao Cevoli, Stefania D'Amato, Lidia Vignola, Simona Salmieri, David Nutley, Ross Anderson、木村 淳、David Nutley, Ross Anderson、吉崎 伸（敬称略、順不同）

#### 註

1) 「水中文化遺産保護条約」にある「水中文化遺産」の定義は、「文化的、歴史的又は考古学的性質を有する人間の存在のすべての痕跡であって、その一部又は全部が定期的又は継続的に少なくとも百年間水中にあった次のものをいう。（i）遺跡、構築物、建造物、人工物及び人間の遺骸で考古学的及び自然的背景を有するもの、（ii）船舶、航空機その他の乗物若しくはその一部又はその貨物その他の積載物で考古学的及び自然的背景を有するもの、（iii）先史学的性質を有する物」である。

2) 正確には20番目の国又は地域の批准書（受諾書、承認書、加入書）が寄託された日の後3ヶ月で、寄託した20の国又は地域についてのみ効力を発するものである。

3) アルバニア、アルゼンチン、バルバドス、ベニン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ブルガリア、カンボジア、クロアチア、キューバ、コンゴ民主共和国、エクアドル、ガボン、グレナダ、ハイチ、ホンジュラス、イラン、イタリア、ジャマイカ、ヨルダン、レバノン、リビア、リトアニア、メキシコ、モンテネグロ、モロッコ、ナミビア、ナイジェリア、パナマ、パラグアイ、ポルトガル、ルーマニア、セントキッツ・ネーヴィス、セント・ルシア、セントビンセント・グレナディーン、スロバキア、スロベニア、スペイン、トリニダード・トバゴ、チュニジア、ウクライナの40ヶ国。

4) 「附属書 水中文化遺産を対象とする活動に関する規則」

#### I 一般規則

第一規則 現地保存による水中文化遺産の保護を第一の選択肢として考慮する。したがって、水中文化遺産を対象とする活動については、水中文化遺産の保護に適合する方法で許可するものとし、この要件を満たすことを条件として、水中文化遺産の保護、知識又は向上に重要な貢献をするために許可することができる。

第七規則 現地にある水中文化遺産の公開は、このようなアクセスが保護及び管理と両立しない場合を除くほか、促進される。

#### 参考文献

野上建紀2005

「海洋考古学関係の博物館－東南アジア－」『NEWSLETTER』No.19.九州・沖縄水中考古学協会17-21頁野上建紀編2007a

「海底遺跡ミュージアム構想」『NEWSLETTER』号外 アジア水中考古学研究所

野上建紀編2007b

「水中文化遺産と考古学－海底遺跡ミュージアム構想の実現に向けて－」第1回『水中文化遺産と考古学』シンポジウム アジア水中考古学研究所

野上建紀, ダニエレ・ペトレッラ2007

「バイア海底遺跡見学記」『水中文化遺産と考古学－海底遺跡ミュージアム構想の実現に向けて－』  
アジア水中考古学研究所 28-33頁

林原利明2007

「前方湾海底遺跡見学会－見学会の記録－」『水中文化遺産と考古学－海底遺跡ミュージアム構想の  
実現に向けて－』アジア水中考古学研究所 12-16頁

文化庁文化財保護部記念物課2000

『遺跡保存方法の検討－水中遺跡－』

石原 渉編2009『海の道 その遺産と考古学』第2回水中文化遺産と考古学シンポジウム アジア  
水中考古学研究所

林原利明編2010『水中文化遺産を理解する』第3回水中文化遺産と考古学シンポジウム アジア  
水中考古学研究所

## 第5章 海の文化遺産総合調査プロジェクトの総括

林田 憲三

### 事業の経緯

海の文化遺産総合調査プロジェクトは、特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所が日本財団の助成を受けて2009から2011年度まで実施した事業名「水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進」の副題として使用したものである。この副題の意味するものは、事業目的に添って3ヶ年間にわたり海の文化遺産を全国的規模で総合的に調査することであった。

わが国は海に囲まれた国家であり、その歴史は海と共に醸成されてきた。日本の文化基盤は、海を通して海外との人や物の交流が絶えることなく継続し、大陸及び朝鮮半島あるいはシベリア地方からの「大陸の文化」や黒潮や親潮海流により伝えられた「海洋文化」が日本列島で融合して形成されてきた。日本列島には人間の生きた証である文化の痕跡が、陸上ばかりでなく海と陸地の堺周辺地域や周辺海底にも存在することは当然想定できる。

日本の周辺海域は海上交易や交流・生業を明らかにする沈没船や港あるいは生産遺跡や住居跡など、人間の生きた証が、底引き漁や沿岸部周辺の開発などにより破壊の危機に瀕しているであろうし、既に失われている遺跡もあることは想像できるであろう。そのためにも海の文化遺産の把握は急務である。海の文化遺産が日本の周辺海域の何処に、またどのような状態であるのか現況が、詳細に把握されていないのであれば、遺跡の評価もまた保存や管理も困難である。この問題に対して解決の糸口となる事業が、以前一度だけ文化庁により2000年に「遺跡保存方法の検討—水中遺跡」として実施されている。これによって、全国の水中遺跡の分布状況が、初めて詳細に調査された。この報告書が、全国の水遺跡の有無をアンケート方式で実施した唯一ものとなっている。報告書によると、アンケート方式の調査は2回に分けて実施され、第1次調査では全国の地方自治体（3,245件）へ水遺跡の有無を求め、更に第2次調査では、「水底の遺跡、遺物の発見、伝承のある場所」と水遺跡の所在を年代基準は定めず、「常に水面下にある遺跡」と定義し、海と湖沼に限定して回答を求めた。その結果、海や湖沼に所在する水遺跡が、216箇所であることが判明した。216箇所の水遺跡のうち約半数の109箇所が、海の遺跡となっている。その後、それらの水遺跡の実態解明に繋がる詳細な調査は、数箇所を除いて殆ど実施されず、現在に至っている。

文化庁による水遺跡の分布調査の報告が、2000年に発表されて以来、十数年が経た今日、水遺跡への関心は、2001年に国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の総会において採択された「水中文化遺産保護条約」の枠組みのなかで水文化遺産、特に沈没船などの遺跡は領海内にも関わらず取り込まれていくと思われる。ユネスコの「水中文化遺産保護条約」は、現在では42ヶ国以上の国々が承認している。この条約が採択されて以来多くの国々が自国領海内の水文化遺産のデータベース作成に関心を示し、その調査成果をイギリス、フランス、カナダやオーストラリアなどの諸国は既に公表している。このように水文化遺産における海外の状況は自国領海内の水文化遺産の詳細な把握が急務となっていることを窺わせる。

### 事業の推進

日本財団の助成による3ヶ年の事業、海の文化遺産総合調査プロジェクトは、日本周辺海域での海の文化遺産の調査とその成果に関する情報発信と公開を推進し、海への関心を醸成することを基本理



念として、北海道から南西諸島にいたる各海域の水中文化遺産の情報を整備して実態を解明し、日本の水中考古学の確立をめざす画期的な試みとなっている。

海の文化遺産総合調査プロジェクトは、全国を太平洋沿岸海域、日本海沿岸海域、四国及び琵琶湖を含む瀬戸内海、九州沿岸海域、南西諸島周辺海域と調査地域を大きく5つのブロックに分けて実施した。それぞれのブロックは当研究所の他に南西諸島水中文化遺産研究会、鹿児島大学法文学部物質文化論研究室、NPO法人水中考古学研究所、金沢大学考古学研究室の協力の基で事業を実施した。また事業の成果は5地域と「全国水中遺跡地図」の6分冊の報告書として纏めた。

この事業において、それぞれの地域で水中文化遺産のデータベース作成のため基礎的な調査として、アンケート調査を実施し、この調査の成果は前回の「遺跡保存方法の検討―水中遺跡」でまとめられた全国の水中遺跡の分布内容を新しいものにした。アンケートの成果は、さらに現地調査や潜水調査を行うことで水中遺跡の詳細な内容や実態を解明できた。これらの成果は「全国水中遺跡地図」に反映させ、地図に記載された遺跡は「遺跡データシート」の記載事項に基づき、遺跡の種類と立地を「範囲」あるいは「点」として記すことにした。日本周辺海域、すなわち領海内の水中遺跡の情報は「遺跡データシート」として整理され、水中遺跡の基本台帳となり、この台帳に基づき「全国水中遺跡地図」は、2万5千分の地図を基本的に使用している。これらの成果は更に公開することで人々の海への関心と理解を醸成することとなる。調査報告の公開としてはシンポジウム、水中遺跡見学会、水中遺跡発掘調査などを各年度に実施した。2010年2月には「水中文化遺産を理解する」を東京で開催、9月には九州福岡市で「海の文化遺産総合調査プロジェクト」調査報告会のシンポジウムを開催して、水中遺跡についての韓国の研究所と共同の報告会の機会を作った。これは、水中文化遺産研究への関心や水中文化遺産そのものが、国際化に沿ったものでもある。南西諸島周辺海域では2011年9月に沖縄県久米島で開催した「久米島の水中文化遺産見学会」、10月に開催した水中文化遺産シンポジウム「海に沈んだ歴史のカケラ」―南西諸島の水中文化遺産の世界―、水中文化遺産の映像資料のWebへの配信などによりデータベースした遺跡を紹介し、水中への障害を克服し、より身近な遺跡とする努力をした。2012年2月から3月にかけて東京で開催したシンポジウムと全国の水中遺跡を紹介する企画展「海のタイムカプセル」―水中考古学からのおくりもの―は人間の生きた証の遺跡や遺物が水中にあることを伝え、水中文化遺産の情報の発信が、身近に水中文化遺産があることを理解させる有効な手段であること。そして、人間の歴史を海からの視点で捉えることの必要性を訴えた。

## 事業の内容と成果

3カ年の海の文化遺産総合調査プロジェクトの最初の事業は、全国の水中遺跡の詳細な分布調査である。この調査はアンケート調査を全てのブロックの沿岸部地域の自治体、漁業協同組合やダイビングショップに行った。このアンケート調査の結果、さらに詳細な分布調査が、必要な場合には、現地の出向き、聞き取り調査や出土遺物の調査を行った。そのなかで遺跡として有力な情報（例えば沈没船）を得た場合には海底状況を正確に把握するために潜水目視調査を実施した。南西諸島海域で潜水目視調査を実施したのは沖縄県や鹿児島県で多くの遺跡の発見があった。また九州沿岸海域では鹿児島県、熊本県、長崎県、福岡県でも新しい発見があった。日本海海域では島根県や石川県で、瀬戸内海域では岡山県、兵庫県で新しい水中遺跡の知見を得ている。太平洋沿岸海域では高知県や神奈川県で発見があった。更に試掘調査が必要となったのは長崎県五島列島小値賀島に所在する前方湾海底遺跡のみであった。この遺跡では11世紀後半から14世紀前半までの中国陶磁器や中国系の碇石がこれまでの調査で確認されている。このような潜水目視調査や試掘調査の結果は、ARIUA研究所の助成事

業会議で調査報告を行い、さらに水中文化遺産委員会で調査成果の報告も行った。調査の成果はさらに広く公開する必要がある、インターネットを利用して調査内容を説明する工夫も南西諸島海域班によって行われた。また水中考古学研究誌への各海域からの調査報告を載せた。ARIUA研究所ホームページには随時調査報告を載せることとした。

2009年度からスタートしたこの事業は先ず全国の水中遺跡の分布調査として、アンケート調査から実地され、更に潜水目視調査や試掘調査が行われ、調査のデータは研究誌や大学研究紀要にも掲載された。調査の活動や成果はマスコミからも取材を受けることとなった。調査資料はシンポジウムを開催して、日本の水中考古学の啓発活動を証明することとなる。このような調査活動から潜水調査、さらに試掘調査と助成事業の成果は確実に表れている。2011年度までの3ヶ年間の事業は、事業の啓発活動を通して広く水中考古学や水中文化遺産の理解と推進に貢献できたであろうと思う。日本財団の助成事業がARIUAの海の文化遺産総合調査プロジェクトに理解を示したことは、日本の水中考古学の発展に大いに貢献したと信ずる。

## 終りに

3カ年にわたる本事業「水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進」は、日本の領海に存在する水中遺跡を総合的に調査することであった。総合調査は、まず水中遺跡の分布調査を最初に実施し、その後これら収集された情報に基づき現地調査を行い、更に潜水目視調査や試掘調査を実施した。これらの成果は、全国5ブロックに分けた各海域の報告書に載せることができた。これら報告書の作成に当たっては、「南西諸島編」を南西諸島水中文化遺産研究会と鹿児島大学法文学部物質文化論研究室に編集して頂いた。また「瀬戸内海編」はNPO法人水中考古学研究所が編集を行った。「日本海編」の編集では金沢大学考古学研究室の協力を得た。「総論・九州編」と「太平洋編」はアジア水中考古学研究所所属の多くの会員の手によりに完成した。また「全国水中遺跡地図」はこの事業の核心的な成果を纏めたものであり、領海に所在する水中遺跡を2011年の東日本大震災で大きな被害を受けた東北三県の福島、宮城、岩手県を除いた全ての海域の遺跡を網羅したものである。日本の水中文化遺産の基本台帳として、今後の活用として、その役割は大きいと信ずる。

水中考古学の推進では、シンポジウム、展示会、見学会、水中発掘調査を実施した。また水中考古学に関する水中考古学研究誌やニュースレターを発行して、水中文化遺産への理解や関心を醸成した。この事実は若い学徒の水中考古学への関心となり、この関心は新たな水中遺跡の発見のきっかけともなっている。

最後に研究所の設立以来水中考古学へ献身的な活動をされていた高野晋司副理事がこの事業中に逝去されました。本事業においても本書の第3章「海底遺跡の取扱いと史跡指定のプロセス」について論文を執筆されています。高野晋司副理事は、長崎県文化課の職員として1980年以来鷹島海底遺跡調査に携われて来ました。昨年、水中遺跡として日本初の国史跡となった「鷹島神崎遺跡」が高野晋司副理事の最後の仕事となりました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

# 九州地域の水中文化遺産アンケート調査

野上 建紀

## 調査の概要

2008年7月から8月にかけて、日本財団の助成を得て、九州地域の水中文化遺産に関するアンケート調査を実施した。調査対象や調査方法、アンケート内容などは、選定部会を開催して検討を重ねた上で決定した。

調査はアンケート用紙と回答用の返信用封筒を郵送して行った。調査対象は、九州地域の363団体である。内訳は各漁業協同組合（271団体）、行政機関（53団体）、ダイビングショップ（39団体）である。漁業協同組合（以下、漁協）は九州地域のほとんどの組合を対象とし、JF全漁連（全国漁業協同組合連合会）の御協力により、アンケート用紙にJF全漁連の協力依頼文を添付して送付した。行政機関は特に中世以降に海上交通が盛んな海域、港湾都市として栄えた地域を宮武正登が選定して対象とした。さらにダイビングショップ等の潜水業者については、宮武正登と山本祐司が協議の上、エリア毎に調査対象を選び出した。

その結果、100通（回収率27.5%）の回答があり、その内、情報提供があったのは24通（全体の6.6%）である。調査対象別に見ると、行政機関の回答率58.5%、漁協の回答率24.0%、ダイビングショップ等の回答率は10.3%であった。

23通の情報提供によって得られた情報は、以下の45の項目である。ほとんどの情報は既知のものであったが、中にはこれまで知られていなかった情報もあった。年代的に最も古いものは縄文時代の遺跡であり、最も新しいものは昭和時代の回天である。縄文時代の遺跡はいずれも潮間帯の遺跡である。また、実際に海底から引き揚げられた遺物が残るものもあれば、伝承のみが残されている場所もある。

今後、より具体的な情報を得るための聞き取り調査や実地調査を行った上で、情報を評価しながら選定して、水中文化遺産のデータベースを作成していかなければならない。

## アンケート調査による水中文化遺産に関する情報

- ① 福岡市西区玄界島南西海岸沖（タケノシタ、ミズノシタ海岸）0～500mの海底、水深5～15m
  - 1) 国産陶器：唐津焼（皿、坏、擂鉢、壺、鉢等、福岡市埋蔵文化財センター蔵）17世紀初頭～前半
  - 2) 中国陶磁器：青磁碗（福岡市埋蔵文化財センター蔵）、13世紀
- ② 福岡市西区玄界島東南沖600mの海底、水深15～16m  
中国陶磁器：白磁碗（12世紀、個人蔵）
- ③ 福岡市西区唐泊小フケ後浜海岸沖100mの海底、水深3～5m  
広形銅矛（九州大学考古学研究室蔵）、弥生土器、須恵器甕など。
- ④ 福岡市西区唐泊小フケ後浜海岸沖200mの海底、水深6m  
中国スタイル礎石

- ⑤ 福岡市東区志賀島勝馬沖北西約600mの海底、水深7m  
中国スタイル碇石
- ⑥ 福岡市博多区中央埠頭（現在の国際船ターミナル）付近の海底、水深5～10m
- 1) 中国スタイルの碇石2点（福岡市埋蔵文化財センター蔵、広島市郷土資料館蔵）
  - 2) 中国陶磁器：天目碗（外底に「張綱」墨書）、青磁碗、皿、四耳壺、褐釉壺など（九州大学考古学研究室蔵）
  - 3) 銅銭（九州大学考古学研究室蔵）
  - 4) 近世国産陶器：把手付き瓶＝油さし、水差し、碗、花瓶（九州大学考古学研究室蔵）
- ⑦ 福岡市東区と新宮町境界 相島西側沖500mの海底、水深約20～25m  
中国スタイルの碇石（福岡市埋蔵文化財センター蔵）
- ⑧ 博多湾入り口の海底（志賀島と玄界島間の海底）水深約20m  
石製片口播鉢（西区姪浜在住の個人所有）
- ⑨ 博多湾海底（能古島付近）水深10～20m
- 1) 水注付き褐釉壺（完形品は志賀島漁民所有）
  - 2) 須恵器甕（渥美窯 12世紀？、玄界島旅館所有）
  - 3) 銀製水注（中国製、所有者？個人蔵）
- ⑩ 博多湾周辺海底
- 1) 西区西浦北側の海底水深20m、中国陶磁器（白磁碗、12世紀、個人蔵）
  - 2) 早良区百道浜海底水深5m、琉球荒焼き甕（福岡市博物館蔵）
  - 3) 東区西戸崎東沖合い1000mの海底水深4m、海獣葡萄鏡、個人蔵
- ⑪ 相島南西沖合い約500m付近の海底 水深20～25m  
「警固」銘の平瓦
- ⑫ 玄界島沖「中世交易船」玄界島北約3.5km周辺、水深30m  
この木造船を昭和30年代前半に目撃したという証言によると、「船首には碇石、陶磁器が船の中央部にマウンド状に散乱していた。」ということである。硯を1点引き揚げしており、当時骨董屋で2～3万円で売れたとのこと。NPOアジア水中考古学研究所ではサイドスキャン・ソナーによる調査を行っているが、存在は確認されていない。
- ⑬ 福岡県糸島郡志摩町大字姫島字烏帽子の烏帽子島西海域  
水深40～50mの海底から底引き網で陶磁器、銭貨等が引き揚げられている。
- ⑭ 福岡県糸島郡志摩町大字久家字船越  
護岸工事の際に須恵器等が発見されたという（伝）。



- ⑮長崎県対馬市浅海湾一帯の海岸  
土器、陶磁器片が採集される。
- ⑯長崎県壱岐市芦辺町瀬戸浦一帯  
碇石、詳細不明。
- ⑰長崎県新上五島町  
町内に海中遺跡が2ヶ所存在。
- ⑱長崎県新上五島町江ノ浜郷の海岸  
防波堤浚渫工事の折、水深5mの所から石類と共に見つかった鯨の背骨。（新上五島町鯨賓館ミュージアム所蔵）
- ⑲長崎県高麗曾根  
遺跡のようにっていると聞いたことがある。
- ⑳長崎県五島市杵島近海  
大正5年3月31日夜、福江港を出港した若津丸（472トン）が濃霧中に杵島近海の浅瀬に座礁し、その後船底が破損して怒濤にのみこまれた。
- ㉑長崎県平戸市川内町  
県指定オランダ船錨、市指定オランダ船錨
- ㉒長崎県平戸市南部志々伎湾  
陶磁器が見つまっている。
- ㉓長崎県平戸市大島村的山湾  
陶磁器が見つまっている。
- ㉔長崎県松浦市星鹿町付近  
鷹島海底遺跡から出土したものと同一褐釉四耳壺が引き揚げられている。
- ㉕長崎県松浦市福島町  
鍋串沖から釜沖にかけての間で伊万里焼を積んだ船が沈んでいるとの情報がある。
- ㉖長崎県諫早市飯盛町下釜名の下釜貝塚周辺  
遺物が採集されたという記事あり。
- ㉗長崎県南島原市有家町堂崎遺跡  
縄文時代晩期を主体とする双角状礫器、石錘などが多く発見されている。遺跡は潮間帯にあり、双

角状礫器はアワビオコシとも呼ばれ、石錘とともに海浜性の集落の生活と密接に関係する道具である。

⑳ 熊本県天草上島と下島の海峡部、瀬戸地区

昭和34年の開削工事中に海底砂中から鎧が1点引き揚げられている。鉄製、長さ30cm、漆を塗って梨子地に仕上げ、秋草模様・金粉・銀粉を散らした装飾。寛永14年、天草島原の乱時の武将の物ではないかと言われているが、定かではない。

㉑ 熊本県天草諸島

天草では海岸遺跡が多数確認されている。分布は大きく3つに分けられる。①上島有明海沿岸地域（旧有明町）、②下島東岸地域（旧本渡市・新和町、上島との海峡部）、下島南部不知火海沿岸地域（倉岳町）、③下島南岸地域（旧牛深市）が比較的集中して確認される。ただし、この3つの地域以外でも散発ながら海岸での遺物採集箇所は確認されており、上島南岸?下島東岸～御所浦島の不知火海に面する海岸線付近で発見されている。

天草市で現在確認されている海岸遺跡はそのほとんどが縄文時代の遺物が採集されている遺跡である。一部弥生・古墳・古代・中世の遺物が採集される遺跡があるが、傾向としては縄文時代の遺物が採集される遺跡が圧倒的多数を占めている。

㉒ 熊本県倉岳町の海岸遺跡遺物採集情報

天草市教育委員会教育部文化課

㉓ 熊本県天草西海岸

江戸時代の古文書（庄屋文書）には、天草西海岸で唐船（中国船）が難破した、船員が漂着した等の記述がある。

㉔ 熊本県天草西海岸妙見浦（国指定天然記念物）周辺

船が沈んだという伝承があり、実際に潜ったダイバーが碇石を1点引き揚げたことがある。

㉕ 熊本県上天草市大矢野町維和島

布目瓦が発見された。大矢野自然休暇村管理センターで保管（大矢野町上1539 TEL0964-56-4393）

㉖ 大分県日出町

太平洋戦争末期、人間魚雷回天の基地が設けられていた。戦後8～10基の回天が海洋投棄（別府湾）され、内、1基は昭和29年に漁船により引き揚げられた。

㉗ 大分県中津市大定定留

定留遺跡でイイダコの蛸壺が大量に出土した。現在も沿岸部の海底に蛸壺が存在しているようであるが、蛸壺は古代～近代にかけてほとんど形状が変わっていないので、時期は不明確である。沿岸部は遠浅であり、海岸で遺物が発見されるとしても漁具が主であると思われる。

③⑥ 大分県宇佐市

稀に底引き網で古墳時代の蛸壺が引き揚げられたとの話を耳にしたことはあるが、集中して見つかるような話は聞いたことがない。

③⑦ 大分市宇佐市

船から平家の公達（平清経）が入水したという伝承がある。

③⑧ 大分市別府湾

江戸時代の地震により沈んだ島として、瓜生島、久光島などの伝承がある。

③⑨ 鹿児島県いちき串木野市湊町吹上浜

陶磁器を見かけたことがある。

④⑩ 鹿児島県甑島海峡北緯31度35分、東経129度54分付近、350mの深海

二彩刷毛目唐津鉢（口径35.5cm、高さ21.0cm）が網にかかった。

④⑪ 鹿児島県知名町ウジジ浜沖

1890年9月22日、ウジジ浜沖でカナダ船リジー・C・トゥループ号が難破座礁した。

④⑫ 鹿児島県沖永良部島ウジジ浜沖

オランダ船が沈んでいる。

④⑬ 鹿児島県龍郷町龍郷海岸

碇石が引き揚げられている。連絡先は龍郷町立中央公民館0997-62-3110

④⑭ 鹿児島県瀬戸内町

海岸でローリングを受けた青磁や青花を採集することはある。

④⑮ 鹿児島県瀬戸内町請島請阿室集落の川

ジャンク船が沈んでいるとの伝承がある。詳細不明。

## おわりに

アンケート調査にあたっては、ご回答頂いた機関をはじめ、多くの人々のお世話になりました。とりわけ、JF全漁連（全国漁業協同組合連合会）には各漁業組合に対する協力依頼文を作成して頂き、多くのご回答を得ることができました。この場を借りて御礼申し上げます。

# 玄界灘海底探査報告

林田 憲三

今回の探査は日本財団の助成事業「海の文化遺産総合プロジェクト」のもとで行った。探査地点は北部九州福岡県糸島半島と長崎県壱岐島とのほぼ中間地点に位置する玄界灘烏帽子島周辺の海域である。この海域では沈没船が、想定できる中国陶磁器や銅銭が漁師の網に掛かり引き揚げられている。（図1）

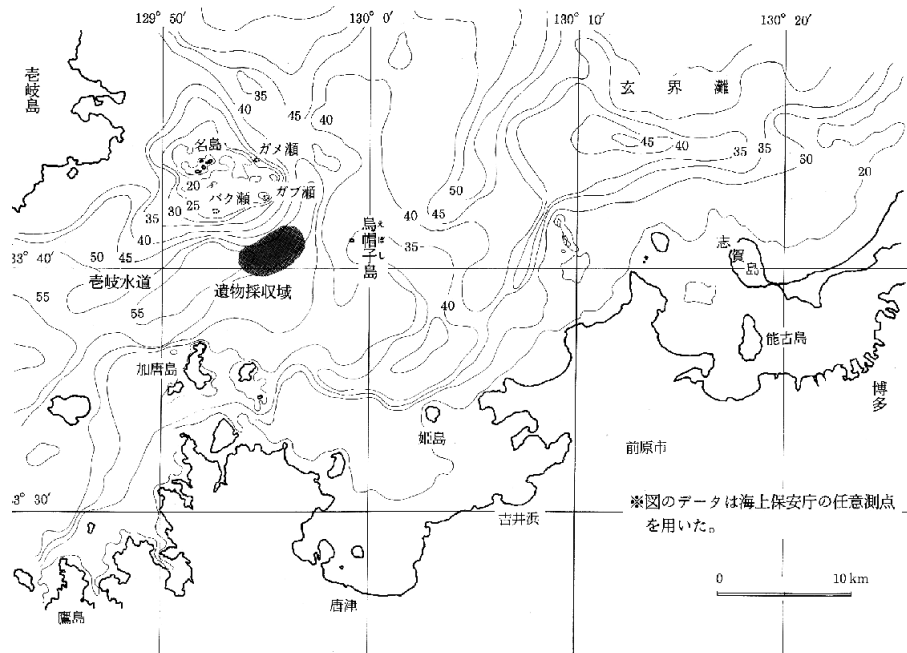


図1 玄界灘烏帽子島及び探査海域位置図

調査はサイドスキャン・ソナーを使用して7月23日から26日まで行う予定であったが、北部九州を襲った集中豪雨を供なった嵐は調査日程や探査海域の変更を余儀なくされた。

烏帽子島の西側海域では1987年〔平成62年〕福岡県前原市（旧二丈町）在住の梅本義明と長田政信の二人の漁師により中国陶



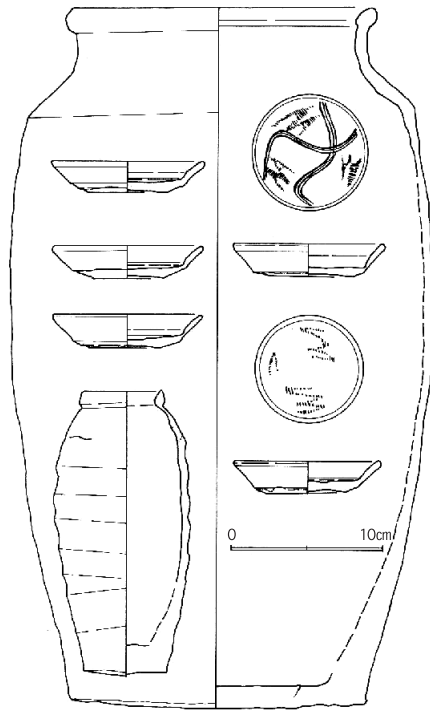
写真1 引揚げられた中国陶磁器と銅銭



写真2 同安窯系青磁皿

磁器碗、皿、褐釉壺や銅銭などが網にかかり引き揚げられており、これらの遺物は福岡県の伊都歴史資料館や大宰府天満宮文化財研究所に寄贈されている。（岡部1991・山村1994、写真1・2）





大宰府天満宮所蔵となっている中国同案窯系青磁皿5点、無釉長胴壺1点、大型の褐釉壺の計7点が、田中克子により実測されている。(山村1994、図2)



写真3 サイドスキャン・ソナーによる探査風景

図2 引揚げられた中国陶磁器実測図(1/5)

これら遺物から沈没船の積荷の能性があり、確認するために探査することを目的とした。これら引き揚げ遺物は、陶磁器などは12世紀中頃～13世紀前半のもので、竹籠に入った50枚以上の銅銭なかで4枚が1086年初鑄の元祐通寶で、元祐通寶がこれら銅銭のなかで最も新しいのもであった。

今回の探査ではKlein社製のサイドスキャン・ソナー（Klein社製システム5400）を使用した。調査期間中海の状況は好転せず、予定していた終了日の26日を待たずに25日で終了することとなった。

現在の探査で問題点になるのは探査を業者に委託して進める場合、定めた調査期間中に海況がどうであれ、事業を進めなければならないという海の委託事業の体質がある。この現状では探査を行おうとする場合、事業費用や成果で大きなリスクを負うことになる。このような現状は将来改革する必要がある重大な課題である。

烏帽子島海域の探査は海況が好転すれば行うことにしていたが、大しけが続いたため計画を変更することになった。そのため調査期間中に行った探査は博多湾口と玄界島周辺の二箇所であった。

博多湾口の探査は玄界島南側の湾入り口に位置する大机島・小机島と糸島半島および玄界島に挟まれた2箇所の海域で行った。(図3・4) この海域では中国白磁碗や中国系碇石、更に弥生時代の銅矛が引き揚げられている。(林田1994)

玄界島周辺海域の探査では玄界島西に灯台瀬があり、以前に肥前系の染付け皿の破片が引き揚げられていたこともあり、この瀬の東側に東西南北1分の調査区(1800×1800m)を設定して探査を行ったが波のうねりが大きくなり、海況が悪化したため2時間程度の探査で終了した。探査の記録では今回行った調査区には評価できる遺物や遺構は現在のところ1箇所以外には(図5)確認できていない。

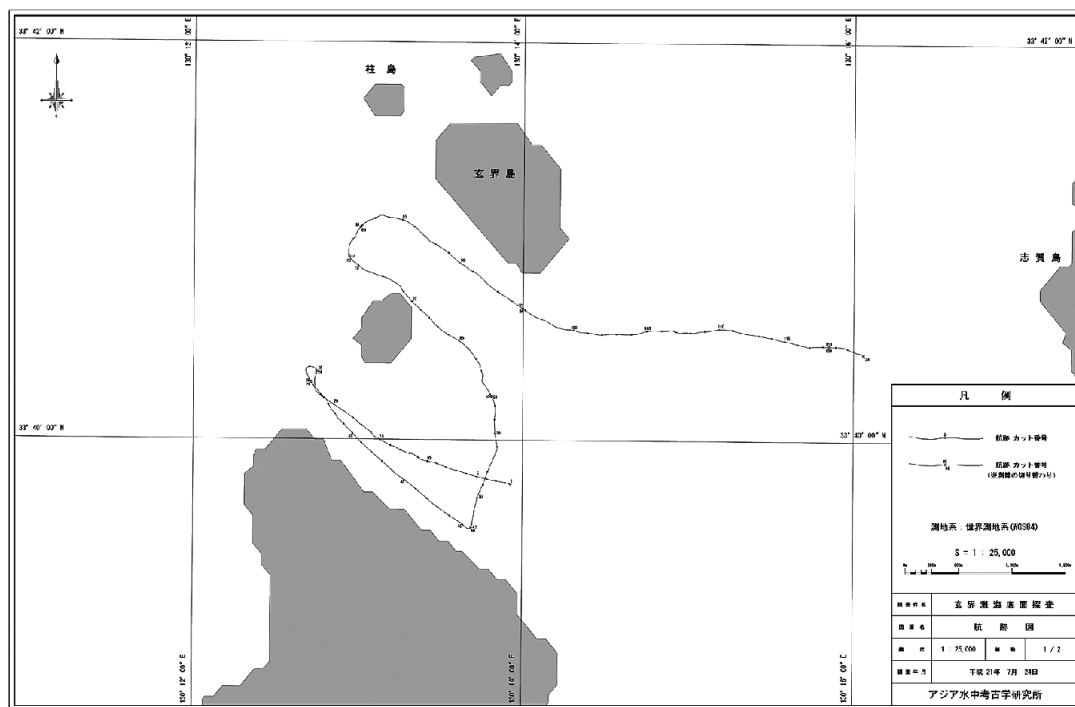


図3 博多湾口海域探査航跡図

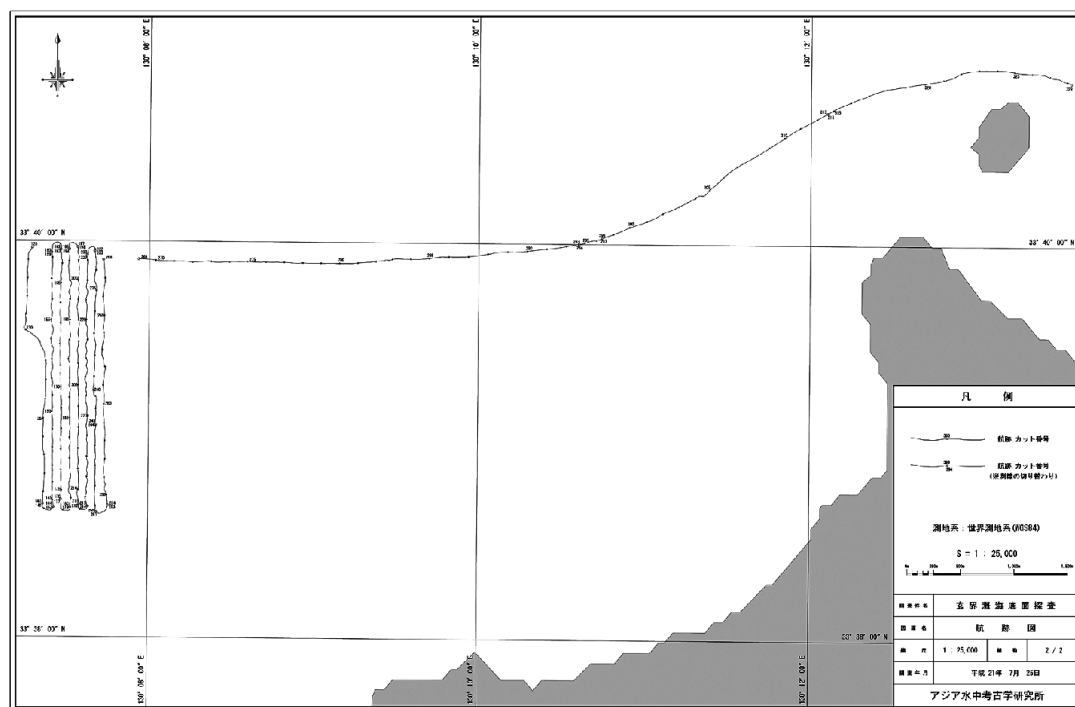


図4 糸島半島灯台瀬東側海域探査航跡図

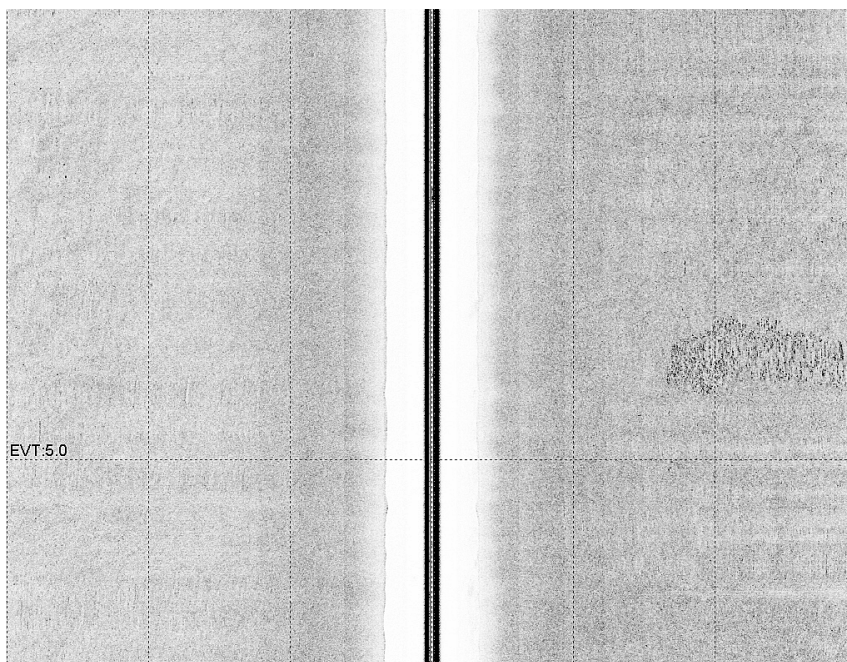


図5 博多湾口海域の探査で記録された映像

図5の映像が今回の探査で得られた映像の中で最も評価できる映像であろう。映像は底面から露出して、南北に細長く広がっているものである。輪郭も比喩的明瞭であり、内側には小さく強く反応する物体が混在する。映像は幅約5m、長さ約10mほどのものである。高さはそれほどでなく、全体になだらかなマウンド状を呈している。

博多湾はほぼ全域にわたり底質が砂泥であるために、船による底引き網の漁が盛んである。そのために海底には網を引いた痕跡が縞状に残ることが、これまでの探査で郭にオンされている。一部では底引きによると思われる砂泥の塊が海底に残されることもある。そのために、この記録から何かを判断はすることは困難である。今後、遺跡の確認を水中テレビロボットなどを使用して行う必要があるであろう。

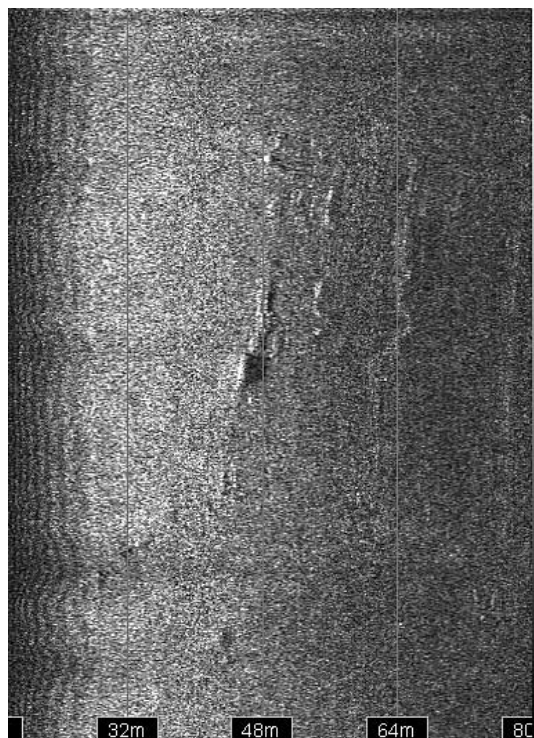


図6 沈没船と思われた映像(No.18)



写真4 映像(No.18)の目視潜水調



1994年から研究所が調査を継続している玄界灘「中世交易船」の昨年の探査で沈没船の可能性のある映像（図6）が玄界島沖にあり、時化の合間を縫って潜水し確認したが、海底からわずかに姿を現している岩礁であった。岩礁はサークル状に点在していることが判明した。（写真4）

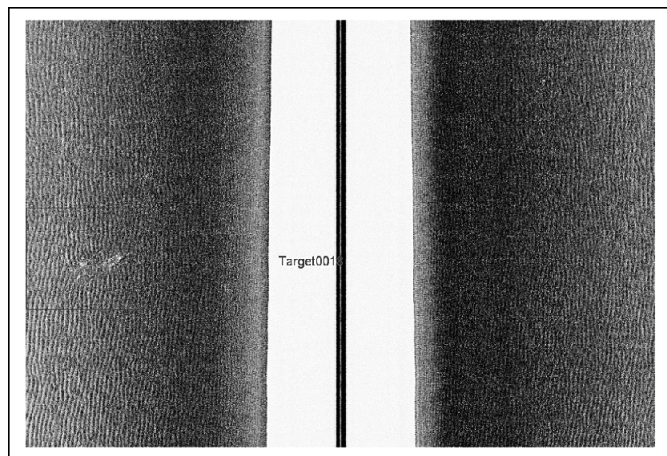


図7 「中世交易船」探査で捕えた映像（No.18）



図8 （No.18）の詳細映像と位置

今回の探査は福岡県と長崎県との海の堺にある烏帽子島西側海域における中世の中国製品の積荷を博多へ運ぶ途中に遭難して沈んだと考えられる船体を確認するためにサイドスキャン・ソナーによる映像をえることを当初の目的としたが、実施はあいにくの天候で海況は高波注意報が出るほど海は荒れ、約2時間掛かる探査海域へ向かうことは危険となった。そのため計画を大きく変更せざるを得なくなり、博多湾内の探査に変更した。博多湾口では玄界島南海域でこれまで2回にわたって潜水調査を行い、1620年代の唐津陶器を大量に確認している。また湾の入口付近の海域ではこれまで弥生時代の銅矛や中世の椀石が海砂を採っている最中に見つかっている。更に中世の中国白磁碗が、糸島半島と博多湾入口にある大机・小机島との間の狭い海域で引き揚げられている。また玄界島の西にある灯台瀬付近で以前、周辺海域で肥前磁器片がダイバーによって引き揚げられているため、海況が急変しても探査が安全と認められる僅かな時間に探査を行った。

## 参考文献

- 岡部裕俊1991「福岡県糸島半島沖引き揚げ遺物に寄せて」『Newsletter』第1巻、第3/4号、6-7頁 九州・沖縄水中考古学協会
- 山村信栄1994「筑前糸島郡烏帽子島沖海底引き揚げ遺物」『Newsletter』第3巻、第2号、5-6頁 九州・沖縄水中考古学協会
- 林田憲三1994「博多湾海底出土遺物とその意義」『能古島』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第354集 福岡市教育委員会

図1と図2は（山村信栄1994）から転載

写真1・2は伊都歴史資料館作成の図録から転載

図6は「中世交易船」（No.18）候補の映像は東京海洋大学岩淵聡文教授研究室提供、

写真4は小川光彦が撮影



# 福岡県芦屋・岡垣沖海底探査概要報告

野上 建紀

## はじめに

響灘に面した福岡県遠賀郡芦屋町・岡垣町の海岸や沖合では、これまでに陶磁器が大量に発見されている。海岸では岡垣町の新松原海岸を中心に完形品を含む大量の陶磁器が漂着し、その沖合の海底では100点以上の陶磁器が発見され、引き揚げられている。その大半は肥前地区（現在の佐賀県・長崎県）で焼かれた近世の陶磁器である。陶磁器の海上輸送中に何らかの海難に遭遇して、沈んだ船や積み荷に伴うものと推測される。それらの陶磁器の年代幅は広く、また種類も多い。そのため、遭難は一度だけでなく、複数回にわたるものと推測される。

これまで当海域で発見されている陶磁器の調査や潜水調査を含む海域の調査を行ってきた。まず1998年には岡垣浜で採集されている陶磁器や芦屋沖の海底で発見されている陶磁器の調査を行った。

次に2004年には海底で陶磁器が発見された地点の潜水調査を実施した。さらに2007年にはその箇所の音響調査を東京海洋大学と共同で行った。そして、今回は最新の探査機器を用いて、海域全体を網羅する範囲の音響調査を行うこととした。

## 1 調査日程および体制

### (1) 調査日程

2010年5月28日～6月2日

### (2) 調査体制

#### ① 調査担当者

野上 建紀（アジア水中考古学研究所副理事長）

#### ② 調査参加者

林田 憲三（アジア水中考古学研究所理事長）

横田 浩（アジア水中考古学研究所会員）

小川 光彦（アジア水中考古学研究所会員）

中野 雄二（アジア水中考古学研究所会員）

#### ③ 探査実施機関

オーシャンエンジニアリング株式会社（技師：岡村、大鐘）

#### ④ 調査船

蛭子丸（船長：中西 栄司）

#### ⑤ 協力

遠賀漁業協同組合、芦屋町歴史民俗資料館

#### ⑥ 取材

RKB毎日放送（今林 隆史）

## 2 調査内容

### (1) 調査方法

サイドスキャンソナーを用いた海底面音響調査およびデータ解析

(2) 調査使用機器

サイドスキャンソナーSYSTEM5400型

(3) 調査範囲

波津白瀬とナカテを含む海域（図参照）

(4) 調査日誌

2010年5月28日 晴れ

折尾駅で野上、横田は合流後、ダイビングショップ・バディロープで潜水用タンクを借用する。夕刻、宿舎の国民宿舎マリンテラス芦屋に入る。探査業者と合流。夜、林田が宿舎に入る。

2010年5月29日 晴れ

8:35芦屋港で探査機器のセッティング後、9:45出港。10:00に探査海域に到着し、探査開始するが、うねりがある。探査レンジは75m。6ラインを走行した後、11:52海域を離脱し、港に戻り、昼食をとる。小川合流。14:00探査海域到達。2ラインを走行したのみで中止。15:00に海域を離脱して、15:30に港着。15:50芦屋町歴史民俗資料館を訪問し、学芸員の山田克樹氏と面会。芦屋沖から引き揚げられた遺物を観察・撮影する。

2010年5月30日 晴れ

8:30港着。9:15発。9:45探査海域に着くも波高し。波高2m、うねりあり。10:00探査を中止して、10:15港着。芦屋港内で探査機器の調整を行う。

2010年5月31日 晴れ

比較的海況が穏やかな早朝に探査を行うことにする。6:00港発。風・波はないが、うねりあり。波津白瀬付近は風強く、白波が立っている。おおむね6～6.5ノットで探査を行う。探査レンジは75m。探査終了後、ソナーフィッシュを曳航したまま帰港。13:50港着。

2010年6月1日 くもり

前日と同様に6:00出港。6:10探査海域到着、ややうねりあり。9:30探査範囲をカバーした後、探査レンジを50mに変更し、各異常点を精査する。速度は3～3.5ノット。9:55 (contact 3を精査、以下同)、10:25 (contact 5)、10:37 (contact 2、転石か)、10:50 (contact 1)、10:55 (contact 4、魚群?)、11:00 (contact 6)、11:10 (contact 7,8)、11:30 (contact 9)。

11:40に芦屋沖（ナカテ）の海底で陶磁器が発見された地点のGPSデータを計測（33° 55′ 01.495″、130° 35′ 57.866″）、さらにナカテの-16メートルポイントのGPSデータを計測（33° 54′ 58.630″、130° 36′ 10.967″）。11:50フィッシュを回収して、11:55探査海域離脱。12:10芦屋港着。機器撤収。宿舎で探査結果の報告。RKB毎日放送による取材。

2010年6月2日 晴れ

解散。バディロープにタンク返却。

### 3 調査結果

詳細な海底面音響画像データを取得し、海底に存在する異常点を抽出した。以下、オーシャンエンジニアリング株式会社による分析内容を記す。

#### (1) 底質分布

調査海域の底質は、概ね貝殻片を含んだ砂または礫が主体であり、調査海域全体にわたって高差20～50cm程度の砂紋（カレントリップル）が東西方向に発達している。調査範囲内の西側の波津白瀬付近には岩礁域が広く分布し、岩礁には海藻類が群生しているものと推定される。音響画像中の岩礁の画像が不鮮明、不明瞭である理由は海藻類が原因であり、サイドスキャンソナーの音波が海藻類に吸収され、音波の散乱強度が弱くなるためであり、全体的に音響画像が靄のかかったイメージになっている。

#### (2) 異常点について

オーシャンエンジニアリング株式会社によって抽出された異常点は8地点である。その性格については明らかではない。今後、潜水調査等によって確認していくことになる。

### おわりに

例年、最も海況が穏やかで安定する梅雨前のシーズンを調査日程としたが、あまり良好な海況とは言えない状況であった。それでも調査予定範囲をすべて網羅し、それなりに調査データが得られたのは、探査技術の進歩によるものと言ってよいであろう。今回、使用したSYSTEM5400型のサイドスキャンソナーは最大8ノットの高速曳航に対応しているため、海況により実質調査期間が短くなっても十分に対応することができた。

# ROVによる福岡県芦屋・岡垣沖海底調査報告

野上 建紀

## はじめに

響灘に注ぐ遠賀川の河口に位置する芦屋町は、近代において筑豊炭田の石炭の積出し港として繁栄を見たが、それ以前の近世においても芦屋千軒と謳われるほど栄えた町であった。その繁栄の一端を担った商売が、筑前商人による伊万里焼（肥前磁器）の買積み商売であった。

芦屋町に隣接する岡垣町の海岸、特に新松原海岸では、1970年代末より大量の陶磁器が漂着するようになった。それ以前にも漂着していたかどうかは正確なところわからない。海岸は1970年代末まで自衛隊の射爆撃場として使用されており、立ち入りが禁じられていたからである。しかし、周辺の海域でも陶磁器が確認されるのもその頃であるため、大量に漂着するようになるのは、1970年代末のことであろう。採集される陶磁器は全く欠損が見られないものも少なくなく、同じ種類のものがいくつも見られる。消費過程で廃棄されたものではなく、流通過程において廃棄されたものである可能性が高い。流通過程とは、もちろん船による運搬途上である可能性が高い。

1989年頃からレジャーダイビングによって、岡垣町の沖合の海底のナカテとよばれる岩礁で陶磁器が発見され、引き揚げられている。およそ100点の磁器であり、いずれも肥前で焼成されたものであった。

筆者がこの海域の調査を始めたのは、1990年代のことである。岡垣町在住の添田征止さんの海岸採集陶磁器や北九州市のダイビングショップの今林忠義さん引き揚げの陶磁器などの調査を行った（野上1998）。次に2004年には海底で陶磁器が発見されているナカテとよばれる瀬の潜水調査を行い（野上2005）、陶磁器は漂着するメカニズムを考察した（野上・添田2006）。続いて2007年には東京海洋大学と共同でサイドスキャンソナーによる音響探査を行い、さらに2009年には、日本財団助成事業として、海域全体の音響探査を行った（野上2011）。

そして、今回は2009年に実施した探査によって得られた「異常点」について、水中ロボットカメラ（Remotely operated vehicle）で確認していく調査を行った。沈没船を搜索する場合の一般的な手法である。確認調査の対象として、音響探査を行ったオーシャンエンジニアが選り出した異常点（Contact）、そして、それと別に筆者が抽出した異常点（Target）を調査候補とした。概して前者は明瞭な画像の異常点であり、後者は不明瞭な画像の異常点である。鋼鉄船の場合は音響探査でその形を異常点として求めればよいが、木造船の場合、沈没後に海底に露出している場合は腐食し、消失するため、明瞭な形では残りにくく、異常点を求めつつも一見異常点には見えない不明瞭なものを探すというジレンマが常にある。

## 1 調査日程および体制

### （1）調査日程

2011年10月11日～10月15日

### （2）調査体制

#### ①調査担当者

野上 建紀（アジア水中考古学研究所副理事長）

#### ②調査参加者



林田 憲三（アジア水中考古学研究所理事長）

横田 浩（アジア水中考古学研究所会員）

小川 光彦（アジア水中考古学研究所会員）

③調査委託先

三井造船（技師：真田、長瀬）

④調査船

蛭子丸（船長：中西 栄司）、形象物と国際A旗を掲げる。

⑤協力

遠賀漁業協同組合、芦屋町歴史民俗資料館

⑥取材

RKB毎日放送（今林 隆史）

## 2 調査内容

### （1）調査使用機器

ROVはMITSUI RTV.N-100を使用した。ROVに音響ソナーはついていない。なお、GPSについては調査船のGPS（FURUNO GP-3500、設定は日本測地系）を使用した。

### （2）調査範囲

波津白瀬とナカテを含む海域

### （3）調査方法

探査データから異常点を抽出し、そのGPSデータをもとに調査船を誘導し、ブイを投入する。おおよそブイを中心に東西南北へROVを走行させ、少し角度を変えて往復する方法で、異常点を確認調査する方法をとった。

### （4）調査日誌

2011年10月11日 曇り

野上、横田、三井造船（真田、長瀬）芦屋着、打合せ。

2011年10月12日 薄曇り

8：20宿舎発、8：30芦屋港着、船名「第21蛭子丸」。ROVのセッティングを行う。RKB毎日放送合流。9：30出港。10：05 Contact1と思われる海域にブイを投入。魚群探知機（以下、魚探）では水深30m。10：25ROVを投入。潮の流れあり。水深35m。漁船のGPSが日本測地系であり、一方、異常点のデータが世界測地系であったため、位置のずれが生じてContact1は確認できず。11：25揚錨、11：55芦屋港着。改めて世界測地系データを日本測地系データに変換し直す。

13：15港発、13：42海域着。Contact2（日本測地系33° 55.1246′、130° 33.7529′）調査。岩が点在した状況が確認される。14:50 Contact1（日本測地系33° 55.5076′、130° 33.4809′）にブイを投入、位置がずれたため、15：07ブイ再投入。15：25ROV投入。水深29m。Contact1と確認できるものは発見されず。16：30地元で「井戸」とよばれている地点

を探す。漁師の間で、魚探に映し出される海底断面の映像が井戸の断面形のようにV字形を示す箇所があるらしく、嵐などの時にはその「井戸」から陶磁器が波によって押し出されると伝えられている。しかし、その日はそのような魚探映像は確認できなかった。17:00海域離脱。17:30芦屋港着。

2011年10月13日 晴れ

8:30芦屋港、8:50出港。前日に引き続き「井戸」を魚探で探すが、見つからず。井戸のGPS情報（日本測地系33° 54.953′、130° 34.041′）にブイを投入。明確な映像は得られず。

10:50Target16（日本測地系33° 55.3517′、130° 34.7482′）にROV投入。水深28m。金属片のようなものが砂中に埋まっている。平たい岩礁か。腐食していない板材(7cm×25cm×2?3cm)を発見。周囲を調査したが、他に遺物は発見できなかった。12:35ROV浮上、12:55海域離脱、13:10芦屋港着。

14:05芦屋港発。14:30Target20（日本測地系33° 55.1648′、130° 35.2217′）付近着、14:50ROV投入、水深28m、瓶と菓子袋と思われるものが見られるが、砂地が広がるばかりで遺物は確認できなかった。探査画像に魚群が映っているのでそれが影となっている映像かもしれない。15:45ブイ回収。16:15波津白瀬の南側に位置するTarget10を調査、水深18m。西、北、東の三方を岩礁で囲まれた砂地である。東側にケーブルを伸ばすと水深6mまでかけあがり、尾根状の地形に出た。遺物は確認されなかった。17:00ROV回収。17:35芦屋港着。

2011年10月14日 雨

8:30芦屋港着、8:55発、9:10現場海域着、9:25にTagret11にROVを投入、水深28m。20~30cmの石がブイの南で確認されただけで、他には発見されない。10:30ROV浮上、10:40揚錨、10:55ナカテの西側のContact4着、11:10ROV投入、水深27m、付近に岩があることを魚探でも確認する。ブイの北5mで岩を確認。12:40ROV回収、12:45揚錨、13:10芦屋港着。

14:10芦屋港、14:15発。14:30ナカテの魚探映像を観察。14:45Target15着、14:55ROV潜降、水深30m。岩か金属と思われるものが分布している。15:20ROVで一部を回収したが、砂岩の塊であった。15:40再潜降、岩の分布とともにビニール袋は木片を確認する。16:00ROV回収、16:30波津白瀬の「井戸」の候補地の一つにROVを投入、水深33m。ブイから西、北へ進むと水深が浅くなり、東に進むと深くなる。大雨となるが、一時的に雨が上がり、いわゆるベタ風となる。再び雨となり、17:14ROV回収、17:25海域離脱、17:45芦屋港着。

2011年10月15日 曇り

解散。9:30発、バディロープにタンクを返却。

### 3 調査結果

今回、確認調査を行った異常点は8地点である。すなわち、Contact1、2、4とTarget10、11、15、16、20である。Contactは音響探査を行ったオーシャンエンジニアが抽出したもので、Targetは筆者らが抽出した異常点である。その結果を以下に述べる。

(Contact 1)

サイドスキャンソナーでは、長さ1.7?3.8m、高さ0.5m、幅0.4~1.3mの異常点が確認され、その周囲の砂紋が乱されている画像が得られている。ROVで確認したところ、明確には認識できなかったが、魚探では岩礁と思われる映像が見られた。

(Contact 2)

サイドスキャンソナーでは、10数個の異常点が散在している画像が得られている。ROVで確認したところ、砂地の中に岩が点在している様子が確認できた。

(Contact 4)

サイドスキャンソナーでは、明瞭な砂地の中に異常点が確認されている。画像自体は沈没船を思わせるものではないが、陶磁器が大量に発見されているナカテの西側に位置していることから、ROVで確認を行った。その結果、異常点が岩であることが確認できた。

(Target10)

サイドスキャンソナーでは、砂地にやや細長い不定形の異常点の画像が得られている。船のような形に遺物が密集したようにも見える画像であるが、ROVの調査では岩のこぼれ瀬であることが確認できた。

(Target11)

サイドスキャンソナーでは、砂地に異常点が連なり、砂紋を乱している画像が得られているが、ROVで確認したところ、20~30cmの岩があるだけで他には確認できなかった。

(Target16)

サイドスキャンソナーでは、砂紋を乱す不明瞭な「もや」のような画像が得られているが、ROVで確認したところ、高さのない平面的な岩が点在していることが確認できた。

(Target20)

サイドスキャンソナーでは、砂紋を乱す不明瞭な「もや」のような楕円形の画像が得られているが、ROVで確認したところ、何も確認できなかった。音響探査の映像を改めて観察すると、水中に魚群が写っており、それが影となっている可能性が考えられる。

以上が音響探査の画像とROVで確認できた映像の対比状況である。これまで玄界灘で数回のROV調査を実施してきたが、サイドスキャンソナーによる音響探査では異常点が確認できるのに、ROVでは確認できないことがしばしばであった。その原因としてはいくつか考えられてきた。一つはGPSのシステムの精度の限界あるいは性格によるデータの誤差である。陸上からデータを補正するD-GPSを使用することで精度は向上するが、それでも十分ではない場合もある。また、GPSデータと実際の調査地点との誤差も考えられた。GPSデータが正しくても必ずしもその場所に正確にたどり着けるかどうかかわからない。位置が固定されていない調査船から調査予定地にブイを投入した場合、わずかの時間差で位置のずれが生じることもある。あるいはROVのケーブルが潮流によって流され、調査船上の

意図とは異なる場所にROVが誘導されていることも考えられる。陸上であれば、多少の位置のずれがあっても遺物を見落とすことがないが、水中の場合、ROVがカバーできる範囲はとても限られている。

水深が深いとROVに取り付けられたライトの光が届く範囲しか確認することができないし、濁りがある場合はわずかな視野しか得られない。間近に遺物があっても確認できないことは実際に潜水した場合でもしばしばあることである。

今回の調査に関して言えば、8地点の内、少なくとも5地点は音響探査による画像をROVで確認することができた。魚群の反応と思われるTarget20を除けば、7地点中5地点確認できているので、調査システム自体は良好に機能したと言える。ただ、残念ながら近世以前の遺物は確認できず、異常点の多くは岩礁であった。

#### 4 今後の課題

10数年にわたって、継続的にこの海域に関わってきたが、今後もさらに探査データを精査し、その確認をしていくことになるだろう。それとともに波津白瀬付近、新松原海岸の海岸線と付近の海底、そして、コウヤマとよばれる海底の岩礁の潜水調査を今後の課題としてあげておきたい。

波津白瀬は現在も潜水漁が行われていることもあって、容易に潜水調査が可能な場所ではないが、この海域で最も危険な遭難ポイントであるため、この付近の潜水調査は不可欠であろう。最初に述べたように新松原海岸は陶磁器が大量に漂着した場所である。現在も数を減少させながら漂着は続いている。漂着の原因の一つが砂浜の減少である可能性がある。例えばアメリカのノースカロライナの海岸では砂浜が削られ、沈没船が洗い出されて発見されているし、新松原海岸で陶磁器が大量に漂着した頃、鹿児島県吹上浜でも陶磁器が大量に漂着している。1970年代は開発が盛んに行われている頃であり、開発と砂浜の減少と何らかの関わりがあるのかもしれない。もうすでにほとんどが洗い出されてしまっているかもしれないが、まだ残されている可能性もある。コウヤマは陶磁器が海底で発見されているナカテの東側に位置する海底の岩礁である。波津白瀬を西端として、遠賀川の河口に向かって、ナカテ、コウヤマと並んでいる。ナカテはレジャーダイビングによって定期的に潜られているが、コウヤマについてはまだ状況がわからない。波津白瀬で遭難した船の積荷がナカテを越えて、コウヤマ付近にとどまる可能性が考えられる。遠賀川の河口に近いので、砂の供給も多く、砂が遺跡を覆うように堆積していれば、良好な遺存状態が望める地点である。

野上建紀1998「海揚がりの肥前陶磁—玄界灘沿岸を中心に—」『有田町歴史民俗資料館研究紀要』第7号 1-26頁

野上建紀2005「響灘に沈んだ陶磁器—中近世の沈没船・積荷の存在の可能性について—」『水中考古学研究』創刊号 62-85頁

野上建紀・添田征止2006「陶磁器漂着のメカニズム—三里松原海岸—」『水中考古学研究』第2号 67-73頁

野上建紀2011「福岡県芦屋・岡垣沖海底探査概要報告」『水中考古学研究』第4号 18-24頁





写真1 Contact 2 画像

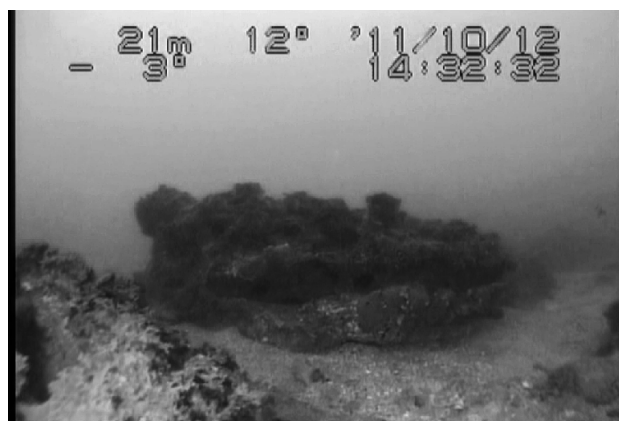


写真2 Contact 2 画像



写真3 Target16 画像

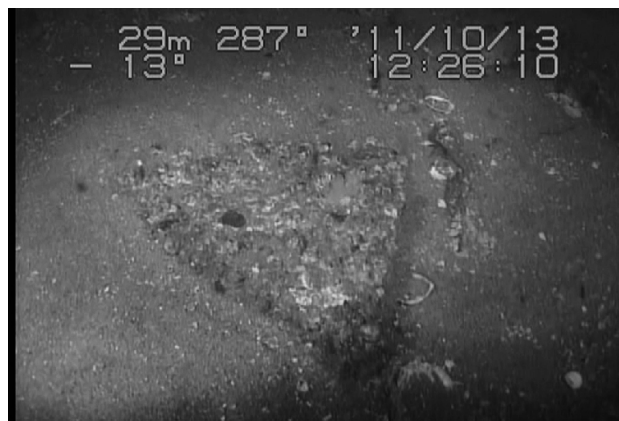


写真4 Target16 画像



写真5 Target16 画像



写真6 Contact4 画像



写真7 Contact4 画像



写真8 Target15 画像

## 伊万里湾・松浦市福島町の調査

常松 幹雄

### はじめに

伊万里湾にうかぶ福島は、長崎県と佐賀県の県境に位置している。かつては佐賀県伊万里市との間に福島大橋が架かり半島化した一島一町の町だったが、平成18（2006）年1月1日に松浦市・鷹島町と合併し、新しい「松浦市」の一部となった。元寇の島として知られる鷹島の南東に位置している。鷹島の南ヶ崎と福島の初崎との距離はおよそ1 kmで、福島北部の鯛之鼻から肥前町田野の阿漕までは約300m、橋が架かる福島東部の下から伊万里市馬蛤潟までは約300mのように、九州本島に近接した立地である。

両島を広さで比べると福島は、17.72平方キロ、鷹島は、17.1平方キロで、面積はほぼ拮抗している。人口では福島は約3,500人にたいして鷹島は2,900人である。

2009年度は、伊万里湾の海底遺跡調査の一環として、松浦市福島の海岸線に沿った箇所4地点を設定した。11月21日は、午後4時頃が干潮の時間帯であり、その時刻にあわせて表面採集による調査を実施した。調査にあたっては事前に松浦市教育委員会の神田課長、中田補佐（役職は当時）に日程と調査内容について連絡を入れた。また佐賀テレビ報道制作部の峰松輝文氏から取材の申し入れがあり、現地で合流することになった。

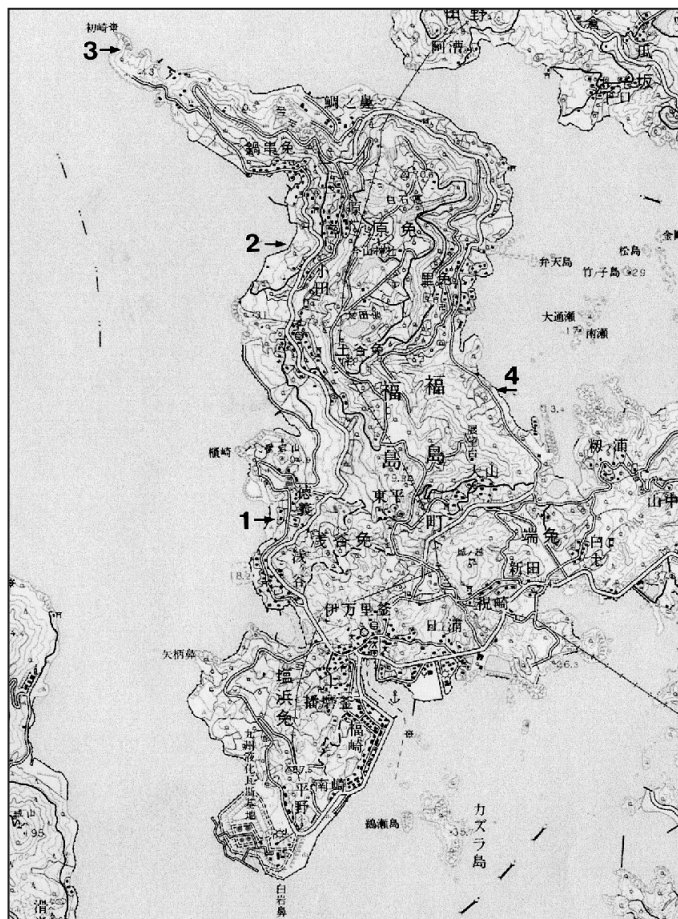


図1 福島の位置と表面採集地点（1～4）

### 日程と調査員の構成

平成21年11月21・22日（2日間） 21日天候曇り 22日曇り時々雨

調査員の構成 常松幹雄 加藤隆也 森本幹彦 屋山 洋 田中克子 宮野弘樹（計6名） 参加者は計6名で、宮野は近世史、田中は陶磁史（考古学）、他の4名は埋蔵文化財（考古学）を専門としている。

### 調査の概要

11月21日 福岡市西区の室見駅周辺に集合  
佐賀県有田町へ移動し、「有田町歴史民俗資料館」にて2009年度「海の文化遺産総合調査プロジェ





写真1 「有田町歴史民俗資料館企画展1」



写真2 「有田町歴史民俗資料館企画展2」

クト」・有田町歴史民俗資料館企画展 「海揚りの有田焼―筑前岡垣浜を中心に―」を見学。海岸線近くに打ちあげられた資料というものの、岡垣浜資料の遺存状況の良さに一同驚く。また有田における陶磁器の編年と海揚り資料を重ねた展示には、学術的な成果がさりげなく盛り込まれていた。館長の尾崎葉子氏に應對していただいた。

昼食後、福島へ移動「福島町歴史民俗資料館」へ向かう。福島町の町章にデザインされているツバキは、この地が別名ツバキ島とよばれるほどツバキが群生していることに由来する。

伊万里湾に浮かぶ福島は、明治初期から石炭採掘が進められ、農業・漁業とあわせ豊かな島であった。その後の社会構造の急激な変化で町の様相も大きく変わり、炭鉱の灯も1972年に消えた。現在は車エビの養殖と椿、農業を基幹の産業としている。

展示では福島町全体の地勢、椿油を絞る民家の再現、農業に関する諸道具の展示、漁業に用いた漁具の展示、石炭採掘の模様を再現した鉱業のコーナーにわかれて展示されている。

歴史民俗資料館で、佐賀テレビ 峰松氏・カメラクルーと合流し、表採ポイント1へ向かう。

### 表採ポイント1（6名）長崎県松浦市福島町浅谷免

島の南西部に位置する徳義炭坑の跡地の海岸線を散策した。現在、海に向かって石炭積み出し用栈橋が残っている。海岸は、石炭の破片がローリングをうけたものでうめられていた。採取された陶磁器は近代が主体をなす。炭坑創業時の積み出し用栈橋が設けられたように、表採ポイント1は良港の立地を呈しているが、海岸線は石炭でうめられており、近世以前の様相の把握は困難である。



写真3 ポイント1 「徳義炭坑跡における表面採集」



写真4 ポイント1 「徳義炭坑跡にのこる栈橋跡」

## 表採ポイント2（屋山・森本）

長崎県松浦市福島町鍋串免



写真5 ポイント2「串鍋免の風景」  
（後方は串鍋免の港）



写真6 ポイント2「串鍋免の採集作業」  
（後方は鷹島）

福島北西にあたる鍋串の港湾部の北西の海岸線へ降りる。近世・近代の陶磁器を採集。

## 表採ポイント3

福島北端の初崎海岸。ここから鷹島南東の南ヶ崎までは距離にして約1 km。ふたつの島は、近接した印象をうける。白砂の美しい海岸線だが、分布遺物はほとんど見られなかった。佐賀テレビ峰松氏とはここで分かれた。



写真7 ポイント3「初崎海岸全景」



写真8 ポイント3「初崎海岸」（後方は鷹島）

## 表採ポイント4

長崎県松浦市福島町里免837。福島東部のイロハ島をのぞむ海岸線で表採をおこなった。近世・現代の陶磁器をまとめて採集することができた。日没により1日目の作業を終了し、伊万里市内に宿泊。翌22日は、佐賀県立九州陶磁文化館を見学後、松島町の市民会館内にある伊万里歴史民俗資料館へ、縄文時代から近世にいたる資料展示を見学する。その後、名護屋城博物館で特別企画展「肥前名護屋城と「天下人」秀吉の城」を見学。学芸課長の西田 巖氏の説明を受けた後、名護屋城本丸の調査区を見学し、福岡への帰途につく。室見駅にて解散。





写真9 ポイント4 「里免での遺物採集風景」



写真10 ポイント4 「里免での採集遺物」

## まとめ

福島県の4箇所において表面採集を行った。鷹島の海岸線の分布状況と近接しているとはいえ、採集資料は、近世から近現代にかけての陶磁器で、中世の資料は全く含まれていない。鷹島では中世の輸入陶磁器や元寇関連の遺物が海岸線で表面採集できるのにたいし、福島では全く確認することができなかったことになる。

ただし海岸部から内陸部まで表面採集遺物や出土遺物について十分情報を把握しているとはいえない。今後は松浦市教育委員会とも諮り、海底調査を行うか、あるいは周辺の島嶼部の表面採集や交流史から検討をすすめるかについて方向性を決めたい。

# 鹿児島県南さつま市坊津海底潜水調査の成果と概要

宮武 正登

## 1 はじめに

薩摩半島の先端付近に位置する「坊津」は、明末の兵書『武備志』で博多津（花旭搭津）・安濃津（洞津）と並ぶ日本「三津」に数えられ、天平の鑑真上陸の地としても夙に著名な、わが国を代表する中世の対外交渉港湾である。にもかかわらず、その実相を語る文献史料は乏しく、これまでの考古学的検証も決して十分とはいえない。

昭和56年（1981）には、かつて島津氏の帰依を受けこの港湾の運営にも深く関与したと考えられる、仁和寺別院「一乗院」跡の部分的な発掘調査が実施され、14～16世紀代を中心とした貿易陶磁器が出土した（1）。これが、坊津における現時点までの唯一の本格的調査である。その翌々年には茂在寅男氏を代表責任者とする調査団が海中ソナー探査を実施しているが、貿易港としての姿を知り得るまでの具体的な成果には結実していない（2）。

つまり、その著名度に比して、意外なほど調査実例が少ない坊津においては、短期間ながらも今回の調査が、事実上初めての本格的な潜水調査に該当する。以下にその概要を紹介し今後の調査進展に繋がりたいと思う。

## 1. 調査の目的と体制

今回の潜水調査は、日本財団の2008年度助成金を受けて、アジア水中考古学研究所が主催する「水中文化遺産データベース作成」事業の一環として実施された。本事業は、九州各県の沿海部における文化財の基本情報を個別に整理し、国内で最も詳細な海底文化財のデータベースを作成し公開することを目的としている（3）。

この九州地方は、博多と長崎、坊津の三大歴史的港湾を抱えているわけだが、前述のように、坊津の実像を示す情報量となると、博多・長崎とは比べくも無いほど脆弱な有様である。まずもって海底遺跡としての特徴的痕跡が、はたして実在するかどうかの確認自体が必要な状態であった。そこで、基礎的データを得るための現地調査の計画に至った次第である。

計画立案に当たっては、地元漁業組合及び南さつま市教育委員会に対して趣旨を説明した上で理解を頂き、同時に南さつま市坊津歴史資料センター輝津館への協力を依頼し、共同調査の形をもって本事業への全面的支援の同意を得た。同館には、調査に必要な情報提供のみならず、調査基地としての施設使

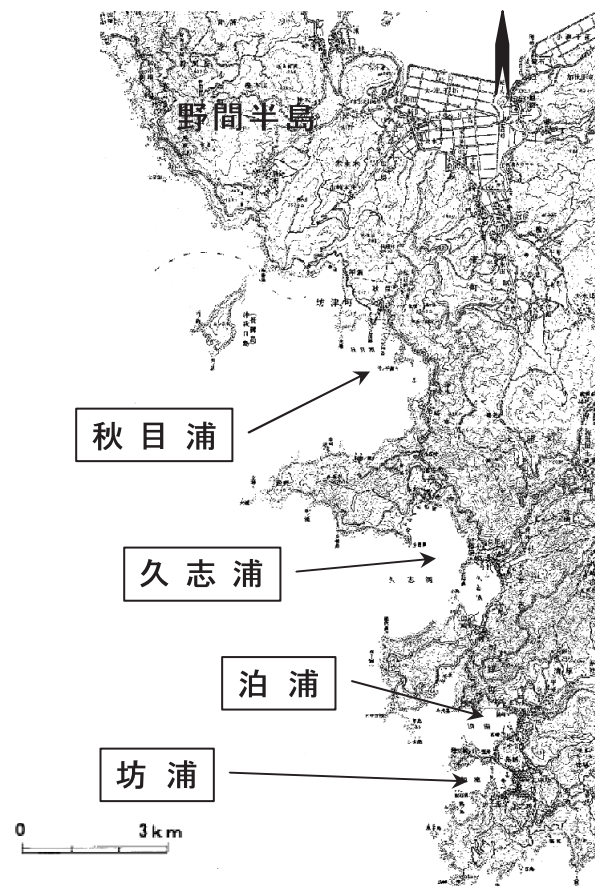


図1 「坊津」諸港周辺地形図

用にも格別の配慮を頂戴し、現地関係機関との調整などにも尽力を賜った。この場にて謝意を申し上げておきたい。

調査は平成20年（2008）11月14日から17日にかけて実施した。労働安全衛生法に規定する潜水士国家資格を有する研究所員5人で調査チームを組織し、期間内で計6回の潜水調査（スキューバダイビングによる）と、水面移動での目視調査（スキンドайビングによる）1回を行っている。全作業における安全管理方策は、労働安全衛生法に基づく高気圧作業安全衛生規則に従っており、特に水深10mを超える海底での探査の際には、同規則第27条を順守している。

調査体制と業務分担、協力機関の詳細は以下の通りである(敬称略)。

① 潜水調査班（アジア水中考古学研究所員・順不同）

理事 林原利明（報道対応、調査記録管理）

同 宮武正登（調査計画管理・安全管理・渉外）

所員 横田 浩（調査予算管理・調査記録管理）

同 山本祐司（水中写真撮影・編集管理）

同 竹内奈央（作業日誌管理・調査記録管理）

② 船上監視・調査立会

南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

館長 谷川茂洋

学芸員（主事） 橋口 亘

③ 協力機関

坊泊漁業協同組合（代表理事組合長 石井博美）

南さつま市教育委員会

上記の人員の他、調査初日には指宿市教育委員会社会教育課の渡部徹也氏が視察潜水し、一部作業にも協力頂いた。

また、調査船準備と潜水作業支援業務（空気タンクなど必要器材の貸与、安全管理補助、水中作業映像撮影）について、有限会社鹿児島海洋開発（「ラ・ボンバ」）に委託したが、契約上の仕様に止まらない積極的協力を頂いたことを付記しておきたい。同社からの作業担当ダイバーは以下の各氏である。

安藤徹（同社代表取締役）、安藤リエコ（同社員）、福元博子（同社員）

## 2. 坊津の地勢と歴史的環境

東シナ海に面する薩摩半島の西南端部は、全長52kmに及ぶリアス式海岸の発達地である。野間半島以南に連なる出入りの多い汀線は、古来、景勝地としても名高く、峻険な山並みが一気に海面に急落して複雑な起伏地形を生み出し、複数の港湾に半独立した小集落の連続帯を形成していた。「坊津」とは、その分立港湾の総称であり、北から「秋目浦」、「久志浦」、「泊浦」、「坊浦」と並ぶ主要小湾の集合体の歴史的呼称であって、2005年の「南さつま市」合併発足までの町村制時における自治体名でもあった。

天平勝宝12年（753）の鑑真の「秋目浦」上陸は冒頭にも述べた。宝亀10年（779）成立「唐大和上東征伝」（4）に、遣唐副使大伴古麻呂の第二船が鑑真を乗せて「着薩摩国阿多郡秋妻屋（・・・）浦（・）」と明記するとおり、この地は遣唐船の往来に象徴される古代対外交通の起着点として機能し、「入唐道」と称されていた。

その実績が下地になればこそ、6世紀に來日した百濟僧日羅を開山とするとの寺伝を誇る「坊浦」の一条院は、平安末期に紀伊根來寺別院として鳥羽上皇勅願寺に指定され繁榮を迎えた。藩政期の『三国名勝図会』巻二十六（5）は、この一条院が「三所に坊舎を営み」、「坊津の名是に由て出づ」と解釈している。

鎌倉期頃に一時衰退した同院は、室町期に入って京都仁和寺の末寺として再興され、島津氏の帰依を受けて寺勢を回復する。仁和寺は、筑前今津、肥後玉名荘、肥前藤津荘・彼杵荘など、九州各地の海上交通上の重要中継地に寺領を多く抱え（6）、肥前の竹崎觀世音寺や藤津蓮嚴院といった各荘領に所在する別院をネットワークにして、国外航路との連結にも積極的であったものと見られる。早くも12世紀中頃に、彼杵荘を経由して孔雀と鸚鵡を鳥羽法皇に献上している一件などは（『台記』など）、同寺が既に確立していた対外交の実績の端的な現れである（7）。その仁和寺の末寺となった一条院の門前の港は、まさしく「坊」の「津」という性格を副次的に持ちながら、繁榮を極めたと見なすべきだろう。

昭和56年の同院跡発掘調査で出土した貿易陶磁器類が、室町～戦国期をピークとするのは上記の経過内容と整合する。輝津館学芸員の橋口亘氏が整理した「泊浦」海岸での数千点に及ぶ表採貿易陶磁器片にしても、

15世紀後半～17世紀前葉段階での青花の多彩さが特徴的とされ（8）、一条院最盛期とも一致している。

そして確実な文献史料の中で、対外的「窓口」としての坊津の姿が認められるのもこの時期で、朝鮮成宗2年（1471）成立の申叙舟著『海東諸国紀』には、「薩摩州房泊両津」の名と「房泊代官」遣船の記述が見える（9）。

これと同じ頃に成立したと推測される長門本『平家物語』第五（10）にも、鹿ヶ谷事件で「硫黄がしま」配流となった平頼康・藤原成経が赦免された際、「さつまがた、房の泊りといふ所」にまず上陸し帰洛の途についたとある。

ちなみに、この有名な逸話の主人公で、喜界島で没したとされる俊寛は、仁和寺院家（支院）の一つ木寺法印寛雅の子と伝わる。単なる偶然なのかもしれないが、大変に興味深い符合である。

このように、遅くとも15世紀代には「坊（房）津」は、東アジア航路上の中継港として定着していたことが、考古・文献両学派の史料からも明確である。その牽引力としての一乗院の存在が推測できるわけだが、丁度この頃に戦国大名への成長を志向していた守護島津氏がこれを祈願所とするなど、公権力の積極的介入も顕著になっていった。島津氏にとって坊津は琉球交易の拠点外港であり、島津義久・義弘治世期に坊津船頭へ発給された琉球渡海朱印状（輝津館蔵）は、この地の直接掌握の達成を示す証拠と言ってよい（11）。

藩政期になると、鹿児島城下への政治経済機能の一極集中化が進み、山川が薩摩藩の外港として台頭してくる。さらに国策としての鎖国の開始も転機となり、坊津の機能は徐々に後退していった。ただし、対琉球交易の窓口としての位置は暫時保たれ、享保年間に「唐物崩れ」と称される大規模な密貿易摘発を経験するものの、幕末まで唐通詞が常置され異国船への対応システムを維持し続けた。こ



写真1 久志浦にある係船場跡  
「江籠潭（えごんたん）」



うした藩の措置にこそ、当地の対外港湾としての長い経歴と実績の結果が暗示されている（12）。

そして現在、坊津諸港のいたるところに、「交易場」跡や「異人間屋敷」、「水銀屋敷」、「唐人墓」、「唐人町」の遺称地、「江籠潭(えごんたん)」や深浦係船場などのドック跡ほか、往時の興隆の名残と伝わる故地が分布している。将来的にこれらの個別調査が進展しその性格が解明されれば、歴史的国際港「坊津」の具体的構成の理解に直結する可能性が高い。海陸ともに、この地が内包する課題は山積しており、その魅力もまた甚大なのである。

### 3. 調査の概要

前述のように、広義の「坊津」は4つの港湾から構成されており、それぞれに対外交易の実績を有している。今回の調査では、時間的・予算的制約もあり、同一漁業組合の管轄区でもあることから「坊」浦と「泊」浦の2港を対象とした。両港は、「坊津」全盛時の実質的な中核エリアと考えられる。その中で、地域伝承や諸環境上の条件から5つの地点を選定し調査箇所とした。

調査の基本方針だが、あくまでもデータベース作成に要する基礎的情報の収集と概要確認を主目的とする以上、将来の整備や保存のための本格的調査の実施に備えて、発見遺物の回収（引揚げ）を敢えて行わず、現状維持での計測と撮影による記録化に徹することを原則とした。当該地では近々の開発行為も計画されておらず、「底引き網漁」の操業水域でもないことから、遺物散逸の緊急性は少ないと判断できる。その点も、上記の方針選択の理由の一つとなった。ちなみに調査実施段階では、いずれの水域も文化財保護法上の「周知の埋蔵文化財包蔵地」に登録されていない。



図2 調査地区位置図

#### (1) 坊浦「網代浦」地区

坊浦の開口部の南西袖に位置する小湾で、東西300m南北400mの広がりを持つ平面半月形の明媚な入江をなす。中央付近の水深は-10m内外だが、湾口付近では-20~25mまで落ち込む砂地の斜面となり、そのまま北西方向に向かって坊浦自体の湾口部に当たる水深-60mの海底まで急落している。

湾の西側では国指定名勝「双剣石」が「鵜ノ島」周囲の岩礁と連なり、東側は「硯石鼻」の断崖が立ちはだかつて、南の浜部は飯盛山からの支峰が聳えるという、三方を高地に囲まれた地勢の、防風に優れた水面環境をなす。そのため地元を代表するレクリエーションダイビングのポイントとして活用されているが、『三国名勝図会』（前註5）によると江戸期には鰹の「追込み漁」の中心的漁場として頻繁に利用されていた様子がわかる。

近年、この入江内でのレジャーダイビングの過程で礎石や陶磁器の発見例が相次ぎ、その中には写真2の明代白磁端反碗（15世紀後葉~16世紀代・森田勉分類E群b2類-注13）が含まれており、坊津の全盛期に合致する年代観の遺物の海没が明らかとなった（現在は輝津館が保管）。そのため今回の調査地区は、それらの発見情報の集中水域に設定した。

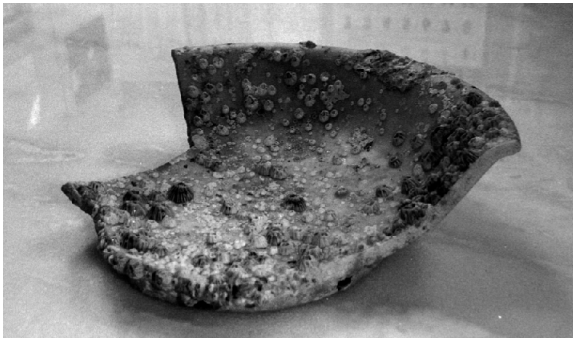


写真2 「網代浦」引き揚げ明代白磁碗  
(筆者撮影ー断らない限り以下同)



写真3 「網代浦」でのサーキュラーサーチ法による目視調査風景

最初に任意の海底基点（北緯31度15分47秒・東経130度13分10秒）と海面ブイを設営し、これを中心点として海中に長さ20mのサーチラインロープ（メジャー）を張って「時計回り」に移動させ、調査ダイバーがこれに随伴しながら海底の遺物の有無を視認しタグを付けていく、サーキュラーサーチ法での潜水探査を選択した。基点の標高だが、設置時（AM10：00）における水深（-8.7m）・潮位（323cm）と、気象庁枕崎海面観測基準面標高（-245.3cm）から割り出すと-7.93mとなる。調査地点の海底は、死滅珊瑚からなる石灰質の砂原に小さな岩礁が点在する概ねなだらかな地形で、基点周囲は岩礁上に円礫が散乱し僅かに盛り上がっている。礫群の中に、柱状摂理の発達により角柱状剥離した火成岩系質礫はほとんど見当たらない。周囲は砂地に礫が混在する所謂「ガレ場」になっている。

調査の結果、この微高地を中心とする「ガレ場」一帯の直径40m圏内で、碇石及びその欠損部位と見られる加工石材6点と、褐釉陶器甕、京焼風肥前陶器碗、薩摩産陶器（「茶香」か）などの陶磁器片11点が発見された（表1）。



写真4 京焼風肥前陶器碗  
(「網代浦」・山本祐司氏撮影)



写真5 褐釉陶器甕口縁部  
(「網代浦」・山本祐司氏撮影)

これらは近世期以降の所産の遺物と見られ、碇石も残存長1m以下の、かつて林 文理・柳田純孝の各氏が分類を進めた「小型碇石」の類型ばかりである（14）。

碇石の型式としては、松岡 史氏の言う「柱状不定形型（2類）」の類型に属し和船積載の主流とされるタイプが大半を占めるが（15）、7のように中



写真6 8碇石（左）と9碇石（右）  
(「網代浦」・山本祐司氏撮影)



中央幅よりも両端幅の方が狭くなる「角柱対称型」（松岡1A類－前註）も混在している。中国を含む外国船積載用と理解されているこのタイプだが、サーチエリアから北西に10～15mほど離れた水深約－11mの砂地で、ほぼ完形の個体 18を発見した（写真7）。全長89.0cm、中央部幅16.5cm・

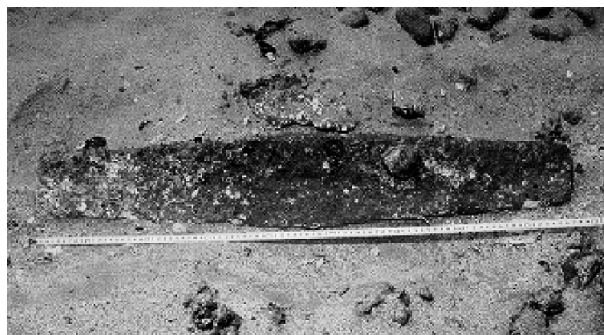


写真7 18「角柱対称型」碇石  
（「網代浦」・山本祐司氏撮影）



写真8 6碇石（「網代浦」・山本祐司氏撮影）

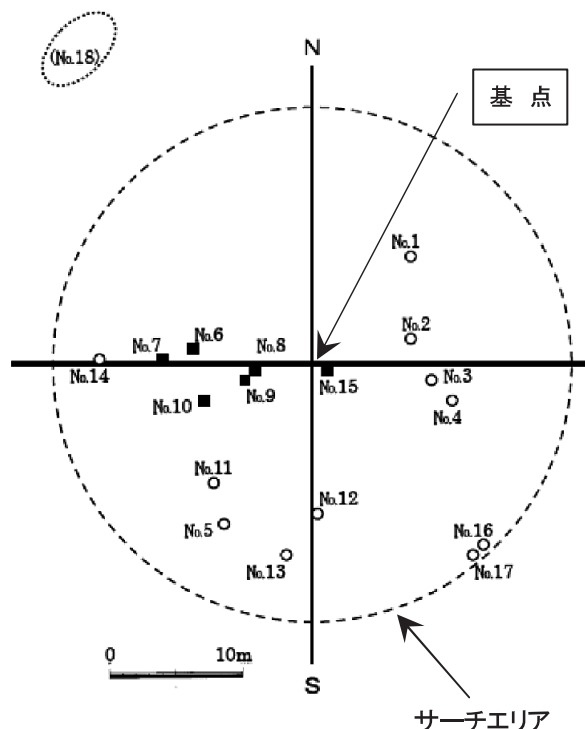


図3 「網代浦」海底遺物分布図  
基点…北緯31° 15′ 470″、東経130° 13′ 100″  
○＝陶磁器類、■＝碇石

| 遺物番号 | 発見番号 | 種類   | 器種 | 基点からの距離(m) | 法量(cm)                      | 水深(m) | 標高(m) | 備考                  |
|------|------|------|----|------------|-----------------------------|-------|-------|---------------------|
| 1    | 1    | 褐釉陶器 | 壺  | 8.5        | 長23・短14・厚1                  | -9.4  | -6.29 | 胴部片                 |
| 2    | 2    | 褐釉陶器 | 壺  | 6.2        | 長16・短13・厚1                  | -8.8  | -5.69 | 胴部片                 |
| 3    | 3    | 褐釉陶器 | 壺  | 7.2        | 長21・短13・厚1                  | -8.7  | -5.69 | 胴部片                 |
| 4    | 4    | 褐釉陶器 | 壺  | 8.7        | 長14・短11・厚1                  | -9.2  | -6.09 | 胴部片                 |
| 5    | 10   | 灰釉陶器 | 碗  | 11.6       |                             | -8.9  | -5.79 | 京焼風肥前産陶器            |
| 6    | 11   | 石製品  | 碇石 | 7.9        | 長67・幅12・厚6                  | -8.6  | -5.49 | 両端片隅を斜めにカット         |
| 7    | 12   | 石製品  | 碇石 | 9.2        | 長53・中央幅12(端幅10)・厚8(端厚7)     | -8.8  | -5.69 | 角柱対称型               |
| 8    | 13   | 石製品  | 碇石 | 3.5        | 長70・幅11・厚6                  | -8.6  | -5.49 |                     |
| 9    | 14   | 石製品  | 碇石 | 3.8        | 長58・幅17～18・厚4～8             | -8.6  | -5.49 | 半分欠損か或いは左右一対型式の片方か。 |
| 10   | 15   | 石製品  | 碇石 | 7.4        | 長40・幅14・厚7                  | -8.8  | -6.36 |                     |
| 11   | 16   | 褐釉陶器 | 壺  | 9.2        |                             | -8.8  | -6.36 | 口縁部片                |
| 12   | 17   | 褐釉陶器 | 壺  | 9.8        |                             | -8.8  | -6.36 | 口縁部片                |
| 13   | 18   | 褐釉陶器 | 壺  | 11.9       |                             | -8.8  | -6.36 | 底部片                 |
| 14   | 19   | 褐釉陶器 | 壺  | 16.4       |                             | -8.7  | -6.46 | 胴部片                 |
| 15   | 20   | 石製品  | 碇石 | 1.2        | 長42・幅16.5・厚6                | -8.9  | -7.65 |                     |
| 16   | 仮21  | 鉄釉陶器 | 茶香 | 19.4       |                             | -10.3 | -8.47 | 薩摩産か                |
| 17   | 仮21  | 褐釉陶器 | 壺  | 19.5       |                             | -10.3 | -8.47 | 胴部片                 |
| 18   | —    | 石製品  | 碇石 | —          | 長89・中央幅16.5(端幅10)・厚7.5(端厚7) | -11.1 | -9.1  | 角柱対称型               |

表1 「網代浦」海底分布遺物一覧表

厚さ7.5cmを測るが、そこから左右端に向かって対象的に幅が狭くなり、両端では幅10.0cmまで細くなる。前掲の引き揚げ明代白磁碗との時代的関わりを想起させ、周囲には他にも7基の碇石（写真9）や数点の陶磁器（青花碗）の分布が視認されている。ただし今回は、時間的制約から個別地点の記録化までは適わなかった。

その他、管見の限り他例を見ないタイプとして6碇石（写真8）がある。「柱状不定形型」ないし當間氏分類1C類「角柱直方型」（前注15）に属するものと思われるが、両端部の片隅だけを斜めに掻き割ったような加工を施している。サイズと形状は異なるが、長辺片側だけが直線をなす点では福岡市博多区奥の堂の民家地下から出土した「角柱非対称型」櫛田神社蔵碇石（松岡1B類）と共通している。木碇に装填して投錨後、着底状態に作用する重心やバランス上の利点でも内在するのだろうか。性格の解明には実験的な検証が必要と思われる。

## （2）坊浦「鵜ノ島」地区

坊浦の湾口南袖を形成する周囲500m高さ55mの岩島が「鵜ノ島」で、その北側絶壁から海底へ向かって急落する岩盤沿いを調査し、金属製錨2点を確認した。「鵜ノ島」北東側の海底は、「網代浦」の湾口海底と重複しており、峻立する島麓の岩盤面から「ガレ場」の急斜面に水深-20~25m付近で変化する。この急斜面上で錨冠を上に向けてもたれ掛かるように、二ツ爪の俗称「唐人アンカー」タイプの鉄製錨が海没していた（水深-26.7m）。長さは93cmで、木製ストックの残欠も見られ、近現代の所産と思しい。

それから僅か4mほど南東側の斜面上で、四ツ爪鉄製錨1点を発見した（写真11）。長さは93cmで、爪3本が中途より欠落している。前近代の金属製錨の型式学的研究はほとんど進んでいない現状ながら、各地に伝存する「千石船」など和船錨の形態を参考とするに、近世期以降の国内船用錨とし

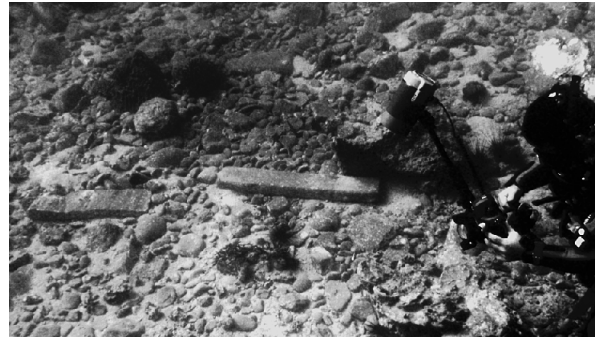


写真9 サーチ圏外の碇石の撮影作業（「網代浦」）



写真10 「鵜ノ島」（右）と「双剣石」（中央）に臨む「網代浦」（矢印の入江）

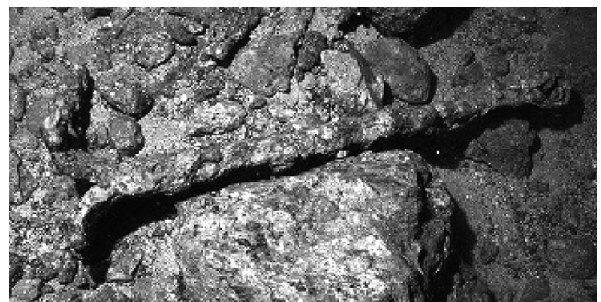


写真11 四ツ爪鉄製錨（「鵜ノ島」沖・山本祐司氏撮影）

ての可能性を考えるのが、とりあえずは穏当であろう。

この他にも、島の北側の絶壁下海底一帯を中心に金属製錨の目撃情報があり、藩政期以降における「坊浦」内での碇泊のあり方と、湾口部の利用形態（波浪に対する一次避難？、小型船分乗入港を目的とした母船係留？など）を考える上での参考資料となり得る。

## （3）坊浦「唐船錨」地区

坊浦の南岸中央部には、北方に突出した「寺ヶ崎」と称する岬状地があるが、その先端断崖をほん



の僅か西側絶壁側に回りこんだ位置に、「下り観音」との異称を持つ奇石を抱えた半水没洞穴がある。

この洞穴の脇に横たわる岩礁を、地元では「唐船錨（とうせんびょう）」と称してきた。次のような幕末の海難事故に由縁するという。

文化5年（1808）11月10日、「坊津湊口」で「唐船」（清国船）が大破して海没し、乗組員のうち29人が救出されたが61人が溺死するという大惨事が起きた。犠牲者は「中坊」の廣大寺に葬られたが、天保2年（1831）になって長崎往還の途上と推測される唐船が立ち寄り墓参し、後に返礼として「廣大慈悲」と書された扁額が長崎経由で同寺に寄進された。そして、事故から約30年後の天保10年（1839）に、遭難者供養のため「沈溺諸霊塔」が建立され、廣大寺境内跡地に現存している（市指定文化財）。

以上の経過は、森吉兵衛が明治初年に編纂した『坊津拾遺誌』（註12文献所収）に掲載されている。また、安政3年（1856）に幕府が作成した『通航一覧統輯』に収録される「戸川家蔵長崎志統編」に、藩から長崎奉行所に提出された報告と生存者証言などに基づく記録がある（16）。ここでの詳述は避けるが、この清船は対日交易の中核港であった「乍浦」（現在の浙江省嘉興市）の商船で、11月1日に出帆するも天候悪化と船の浸水などのトラブルが続き、五島への一時対比を試みるが失敗して北西風に押されて南下、「薩州防津湊外迄吹寄」せられ、入港・着岸しようとして事故に遭遇したのであった。



写真12 津口番所跡付近より「寺ヶ崎」（中央）と「唐船錨」を望む（竹内奈央氏撮影）



写真13 石臼（「唐船錨」）



写真14 青花鉢蓋（「唐船錨」）



写真15 磚（「唐船錨」）

この海難事故の現場比定地の一つが「寺ヶ崎」先端付近とされ、「唐船錨」とはその時の海没錨に砂礫や貝殻目類が付着して暗礁となったものと地元では伝承されている。この地点は、「坊」の荷揚地のメインとなる「浜」前の小湾の入口に当たり、『坊津拾遺誌』の「坊津湊口」との記述にも符合することから、今回の潜水調査の対象に選定したものである。

当該地区は「寺ヶ崎」の断崖絶壁がそのまま海底へ落ち込む急峻な海底地形をなし、水深-15～-

20m付近からは岩盤斜面上に滑落岩塊と土砂が堆積した急スロープとなり、-30m前後で砂原に礫が混在する緩傾斜地へと転じて、そのまま水深-35mの海底へ連なっている。調査は研究所ダイバー5人と作業ダイバー2人で当たったが、目標水域の深さを勘案して、全体監視と緊急時浮上補助のためのダイバー1名を中層位待機させて、安全対策を講じた。また、水深から想定するに、今回の調査体制と装備では位置計測作業は困難と判断し、遺物の有無とその内容・種別の視認、写真撮影に徹することとした。



写真16 褐釉陶器一鉢か  
（「唐船錨」最深部、山本祐司氏撮影）

その結果、砂礫の急スロープ地帯を中心に、半完形の石臼（水深-22.9m・写真13）、完形の磁器（青花）鉢蓋部（水深-23.2m・写真14）などの陶磁器類、そして、磚（水深-24.8m・写真15）などを発見した。磚は完形品で、長さ28.3cm・幅10.2cm・厚さ5.5cmを測る。

さらに、最深部（水深-27.9m～32.1m）の砂原一帯では多数の褐釉甕・壺・鉢、磁器碗などが分布していることが判明した。各遺物は岩塊の隙間に挟まるように、あるいは半分砂没した状態で沈底しており、さらに多量の遺物が海底土砂中に埋没しているものと予測できる上、散布範囲も拡大することが当然考えられる。無限圧潜水を前提とした滞底可能時間の短さから、観察精度にはおのずと限界があって全体的な年代特定は困難ながら、江戸期後半代の琉球産「荒焼」壺片なども混在しており、磚の存在からしても、所伝のとおり文化5年の清国船沈没地の有力候補地であることが、初めて実際に確認できた。

#### （4）坊浦「津口番所跡」前海地区

藩政期、坊・泊浦入港船舶の総監視や異国船対応をも担当した津口番所は、現在の輝津館敷地に隣接する公園「和楽園」付近に存在した。この前面の水域を、文化5年唐船遭難地の候補の一つと見なして調査を実施した。

前掲「戸川家蔵長崎志続編」の記述には、「薩州防津湊外まで吹き寄せ、碇をおろせども嵐強く繋留しがたきところ、にわかに湊内より大風起こり裏帆を打ち、津口番所先、瀬方に吹きつけ本船打ち砕き、積荷物はもちろん信牌沈失す（※筆者読み下し）」との、比較的詳細な経過報告が見える（橋口氏の御教示による）。この中の「津口番所先き瀬方」との文言に拘って、番所跡からそれほど離れていない水域での事故であったことをも仮定し、念のため調査対象地に含めた次第である。

そこで、鹿児島海洋開発代表の安藤徹氏の経験値を手掛りに、事故があった冬季に最も風波の影響を受けやすい難所を周辺水域の中で絞り込み、坊浦北岸の「峰ヶ崎（向山）」南東側海岸線を選択した。その中でも、番所跡前の汀線に沿って300m西方にある「クブリ鼻」沖は、泊浦側から坊浦内へ吹き抜ける北西風の「通り道」に当たるため、その南側海底を調査地区に定めた。

同所は、「クブリ鼻」の岬状地がそのまま海中に延びた地形で、平面舌状の岩棚が水深-5～15mにかけて連なっており、岩盤裾周囲には小さな岩礁が点在する砂原が広がっている（水深-20m～25m）。その東西両サイドには、陸上から延びる数条の「根」が海底で谷状地の連続帯を形成している。これらを俯瞰するように、8人の調査ダイバーによる比較的広範な目視調査を実施したのだが、近現代の陶磁器類を含めて遺物の発見には繋がらなかった。

#### （5）泊浦「泊浜」地区

今回、坊浦以外の調査地区としては、唯一「泊浜」を対象地に含めた。泊浦は坊浦の北隣にある港



湾で、坊浦とほぼ同じ規模の水面域を持ち、奥行き（東西）1500m幅（南北）800mを測る。「浜」中央には泊川河口があるため、坊浦と相違して遠浅の海底地形にある。

この浜地一帯では大量の陶磁器片が散乱することが知られていて、地元の早水廣雄氏によって数千点に及ぶ遺物が採集されている。さらに橋口亘氏が、追加採集した陶磁器と早水氏保管資料を総合整理した結果、14世紀前半から17世紀前葉の遺物が主流であることが分かった（前注8）。

その中にはベトナム産菊花文鉄絵や青花、明代青磁插鉢、瑠璃地大皿片など、当該期の消費地遺跡でも決して一般的ではない製品も含まれている。また、少量ながらも清代の青花が混在し、藩政期統制下での対琉球交易の継続が窺われる。

こうした豊富な表採資料の分布情報に基づき、その前面海底の目視調査を行った。対象水域は最深でも4m程度に過ぎないため、スキンドайビングの体勢で海面から海底を俯瞰する状態の調査方法を取り、遺物発見の場合はそのマーキングを行った後、スキューバ器材使用での潜水により計測・記録化を測るプロセスを想定していた。調査海域の底質だが、水深-2mまでは北側汀線付近を中心に岩盤露出が顕著で、以南は拳大以下の円礫が混在する砂層で、-3m代になると砂泥の堆積層に変わる。

調査の結果、砂礫層上では遺物は発見できず、泊川河口周囲の砂泥層上に限って、1cm大程度の細片（近世国産陶磁器片、清代青花片など）が、まばらに散在する状況が確認できただけであった。



写真17 泊浦「泊浜」地区調査水域  
（左端は泊川河口）



写真18 泊浦「泊浜」表採貿易陶磁器片  
（輝津館保管）

### まとめ—今後の展望—

今回の調査は、実質3日間という短期間に止まり、多大な成果を望み得る人員体制でもなかった。ところが予想を覆して、本格的調査の追加実施の必要性を促すような、意義深い結果になったものと思量する。

坊浦「網代浦」地区では、中世の遺物集中箇所こそ見つからなかったものの、所謂「外来船」系の小型碇石が数点発見されたことは、明代白磁碗の引き揚げ実例と合わせて、全盛時の「坊津」の内部構成を解明する上で重要な手掛かりとなる。この入江は、浜地の後背が峻険な山岳地形となっているため現在も道がなく、陸上への荷揚げには不適である。にもかかわらず、近世以降の遺物と小型碇石などの、頻繁な碇泊の実績を明示する資料が海底に実在する点を、どのように解釈するべきか。

一つの仮説だが、坊浦全体における船舶着岸機能の上限との関わりが、まず考えられる。陸上幹線と直結可能な「坊」浦の中心的荷揚げ地は、「浜」と「下浜」のそれぞれ両翼150～200m程度の汀線に限られるが、これは坊浦全体の水面域からすれば、頗る狭隘と言わざるを得ない。宝永7年（1710）「上使御答書」の「御領内湊数」（17）によれば、薩摩の主要港湾における大型船の繫留許容量につ

いて、山川が240～50艘、京泊（川内港）が約300艘と規定しているのに比して、坊津は僅か約30艘に過ぎなかった。

その歴然たる差から推測するに、中世の入船全盛期ならなおのこと、大型船舶の全てが湾奥の浜地に碇泊できたのでは恐らくない。湾内の複数の繋留地点に分散する碇泊形態が取られ、浜地と往復する舳などの小型船を介した物資や人の上陸を、実態としては想定すべきであろう。その視点を「網代浦」に向ければ、湾口に近く外海との出入りが簡便なうえ、風波の影響が少ない地勢環境にあるといった好条件が見えてくる。

また、もしこの仮説が正しければ、ここだけでなく「亀ヶ浦」や泊浦の「丸木浦」など、諸港の中の小入江の碇泊機能についても確認するべく、調査の範囲を広げていく必要性が生じてくるだろう。

ところで、「網代浦」の海水透明度は安定して高く、調査中も常時、海面から10m下の海底の詳細を俯瞰できる鮮明さを維持していた。この良好な水質環境は、2007年に五島列島の小値賀島の前方海底遺跡で試験的に実施した「海底遺跡ミュージアム構想」（日本財団助成事業）の実践条件からすると、極めて有利である。既存のマリンレジャースポットでもある上に観光用公営グラスボートも運航しているなど、水中遺跡の活用のためには国内で他例を見ないほどの好条件が揃っている。もとより水没遺物の保存方策の確立が前提だが、その後の見学を中心とした具体的活用の際して、多様な可能性に満ちた魅力的なフィールドであることは間違いない。

次に、文化5年の清国船沈没地点を探る調査についてだが、上記と同様に、坊浦の碇泊機能上の特徴から推理を重ねるべき点が多々ある。「戸川家蔵長崎志続編」の事故記録を解釈するに、この唐船は一旦投錨を試立された「沈溺諸霊塔」（竹内奈央氏撮影）みるも風波が強く繋留できず、突然湾内で起きた強風に煽られたため「裏帆」を打って対処したと読める。

地形図からも理解できるように、坊浦内に入った船舶が東進し坊集落への上陸地である「浜」ないし「下浜」に着岸するには、ちょうど津口番所前面の、「寺ヶ崎」との中間地点で南へほぼ直角に急旋回しなければならない（図2参照）。そこに経ヶ崎東下の鞍状地形をした陸繋部上から北風が吹き込めば、大船は間違いなく真横から押されるか艫から煽られる格好になる。

調査最終日に実体験したのだが、強い北風に押されて、「浜」の西端埠頭から調査船を離岸させるのにも難儀をした。ところが湾内中央まで出てみると、航行に支障を及ぼす波浪ではなかった。つまり、一見すると坊津は「懐(ふところ)」の深い良港だが、実は「寺ヶ崎」一帯

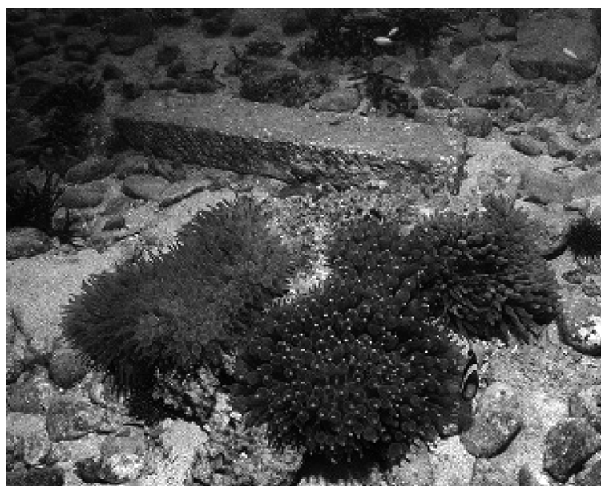


写真19 ソフトコーラルと碇石とが同居する景観  
(山本祐司氏撮影)



写真20 文化の清船遭難者供養のため  
天保10年に建



だけはピンポイント的に北風の影響を受け、現代の動力船でも注意を要する通過地点なのである。まして帆船ならば、強風下での操船が困難を極めたことは想像に難くない。

即ち、津口番所前に差し掛かった清国船は、接岸に備えて船首を右手に向けたところ、「経ヶ崎」東側からの突風を左舷に受け、慌てて逆帆を打ち体勢回復を図ったものの、あえなく「寺ヶ崎」先端に吹き付けられ座礁大破したと推測できる。つまり「津口番所先瀬方」との文言は、番所正面前方の「寺ヶ崎」直下の岩礁を指した表記と捉えてよく、やはり現時点では「唐船錨」地区を最有力比定地として見なしておきたい。

その海底に散布する大量の遺物の全てが、果たしてこの商船に係るものかどうか今後の最大課題だが、船籍と海没年月日が明確な前近代の外来交易船の積載資料が、一括して発見されるとなれば国内最初の例であり、わが国の水中考古学はもとより、外交史、陶磁史、船舶史などの発展に大きく貢献するはずである。この発見が今回の基礎調査の最大成果であり、今後の調査進展に大いに期待したいところである。

反面、泊浜での調査は予想外の結果となった。数千点に及ぶ表採遺物との関連を示すデータが、現状の海底で全く視認できなかったのは、むしろ驚くべき一つの成果とも言えるだろう。地元の情報によれば、近年海岸線でテトラポットの再設定など防波対策工事が進んだために、汀線での土砂堆積量に著しい変化が生じ、それに従って砂浜上の陶磁器片が見られなくなったという。もしそうなら、海底の砂礫層中に遺物の大半が埋没してしまった可能性もあり、今後、定期的観察を講じる必要もあるだろう。また、実際にそういう原因から遺物群が埋没した経緯が確実となれば、文化財としての水中遺跡（遺物散布地ないし荷揚げ場跡）の保全対策を検討する上での、貴重なサンプルケースとなるかもしれない。

ただし一方では、海からの搬入遺物としての解釈だけに固定化せず、陸上からの流出資料としての可能性をも合わせて吟味しておく必要がある。今回の目視調査で細片ながらも遺物分布が唯一確認できたのは、泊川の河口前面の海底に限定されるが、その1.2km上流には薩摩守護島津氏9代忠国の居館跡がある。忠国は文明2年（1470）にこの地で没しており、琉球渡航を企図していたとの説もあって（注12文献）、坊津の直接支配に島津氏が踏み出していた証左と見なせる。

また、忠国位牌所である海印寺（廃寺）は南北朝期以前の開山とされ、浜に面した「町」地区に位置する。さらには浜に接する法光寺（廃寺）も戦国期に興隆した時宗系寺院とされ、その背後にも「本珠院」「慈眼院」などの寺院名が残る。

つまり泊川沿岸には、坊津の隆盛期とほぼ同時期の権門基盤が集中的に存在していたわけで、泊浜に到着した物資は泊川を遡上して守護館にも入っていたはずであり、各寺院でも消費されたであろう。一旦上陸したこれらの物資の残滓が、浜に流出している形跡が本当にはないのかどうか、今後は陸上の調査と合わせた対比的考察が不可避と思われる。

以上のように、重ねて言うが、今回は坊津諸港の中のごく一部の水域に限った潜水調査である。泊浦にしても、他地点での情報は全く収集できていない。その中の「丸木浦」は、島津忠国が琉球渡航の出港地として兵船装備に着手していたとも伝わる場所であって、当然、一度は調査の対象とすべき入江である。

久志浦については、今村川の工事中に川床から長さ8mを超える江戸期の大型関船の舵身木が見つかっている（輝津館に展示）ほか、湾口近くの「網代鼻」沖水深-15m付近の海底に「柱状不定形型」の和船用タイプの碇石が沈んでいるのを、筆者は調査計画立案の過程（2008年5月）で直接視認している。国内流通の中継港としての、頻繁な船舶の出入りを暗示する情報が、確かに分布しているので

ある。

そして、遣唐船にまで遡及する寄港経歴を有する秋目浦に至っては、全くの「白紙」状態と言ってよい（18）。

各地に分布する日本史上有数の貿易港湾は、大半が近代社会下の再整備を経てコンクリートに囲まれた姿へと転じ、今や往時の海岸線さえ明確ではない。

博多、安濃津、堺、長崎、兵庫津など、いずれも中近世都市論の盛行の中での考古学的手続きを通じてのみ、ようやく旧態を垣間見ることが可能という状況に変貌を遂げてしまった。その意味において坊津は、中世以来の港湾景観を大きく損なうことなく現在にまで命脈を保っている点に圧倒的な価値を誇っており、水没した様々な情報が依然として海底で維持されている可能性が高い歴史的港湾なのである。



写真21 遺物の個別計測作業の様子  
(山本祐司氏撮影)

かつて海外でも周知されていた古代以来の国際港としては、恐らく最後の残存例と位置付けて大過ないであろう。その総合的調査の実施は、全アジアの学史に対して我が国が果たすべき責務であると主張しておきたい。

## 【注】

- (1) 『坊津町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）一乗院跡』坊津町教育委員会1982。
- (2) 昭和58年度文部省科学研究費（総合A）「水中考古学」。この調査では、文化財保護を専門とする研究者自身が潜水し、海底を直接観察し作業に従事している様子はない。
- (3) 本事業の成果は研究所のHP上にて公開されており、現在のところ九州地方だけで230件を超える事例がデータベース化されている。
- (4) 『群書類従』第五輯一系譜部・伝部・官職部。
- (5) 五代秀堯、橋口兼柄編 『同』（復刻版）青潮社1982。
- (6) 網野善彦、他編『講座日本荘園史10－四国・九州地方の荘園』吉川弘文館2005など。
- (7) 服部英雄『歴史を読み解く－さまざまな史料と視覚』青史出版2003。
- (8) 橋口「鹿児島県坊津町泊海岸採集の陶磁器」（『貿易陶磁研究』 18 1998）。近年の同氏の精力的研究により、坊津の全体像の理解は格段に進んだ。今回の調査における予備的知識についても、氏の一連の論稿に追うところが大きく、以下にその最新成果のみを紹介しておくたい。
  - ・「中世港湾坊津小考」（橋本久和・市村高男編『中世西日本の流通と交通』高志書院2004）
  - ・『海と船の企画展図録―海上の道と陶磁器』南さつま市坊津歴史資料センター輝津館 2008
- (9) 田中健夫訳注『海東諸国紀-朝鮮人の見た中世の日本と琉球-』岩波文庫1981。
- (10) 黒川真道、堀田璋左右、古内三千代校『平家物語 長門本』名著刊行会1964。
- (11) 天正10年（1582）正月19日付・「坊津権現丸」あて島津義久琉球渡海朱印状、など。
- (12) この地の藩政期の消長については、『坊津町郷土誌』上巻（坊津町1969）の「近世」代1章から第4章に詳しい。
- (13) 森田「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』 2 1982

- (14) 林「碇石展—いかりの歴史—」（『Facata』福岡市博物館だより 18 1995）、柳田「交易船と元軍船の碇石」（『鷹島海底遺跡』Ⅲ 長崎県鷹島町教育委員会1996）。
- (15) 松岡「碇石の研究」（『松浦党研究』第2号 芸文堂1981）。一方、のちに當間嗣一氏が追加提起した「角柱直方型」の類型に近い精加工製品も、小型ながら混在している（「南西諸島発見碇石の考察」『沖縄県立博物館紀要』第22号 同館1996）。
- (16) 『通航一覽統輯』卷之四十「唐國浙江省寧波府部八 漂着」（箭内健次編『通航一覽統輯』第二卷 清文堂出版1968）。なお、文末に同書の関係部分を抜粋し、今後の検討に供するべく参考資料として掲げている。
- (17) 藩法研究会編『藩法集 第8 鹿児島藩・上巻』創文

【参考資料】「戸川家蔵長崎志続編」抜粋

一去ル辰年十一月朔日、乍浦出之唐船陳積橋船、於洋中逆風に逢ひ、大船乗廻し相成兼難儀之折柄、本船頻り二漏出二付、手之掛り二致捨荷、危難を凌ぎ数日漂ふ内、五嶋之山を見掛しにより可乗付之處、風西北に変わり又々大洋に吹放れ、身力を尽し雖相凌、雪風弥吹募り、同十日薩州防津湊外迄吹寄、碇を卸せとも嵐強く難繋留處、俄に湊内より大風起り裏帆を打、津口番所先き瀬方に吹付ケ本船打碎き、積荷物ハ勿論信牌沈失す、乗組之内船主始六十一人ハ端船え乗移處、波打込不残溺死、残り二十九人之者共も身體を毀ひ、半死半生にて漸く助命す、追々同所役船乗附ケ救揚、濱辺之人家明ケ除き、助命之者共右小屋に止宿、警固有之、介抱を加えられ、吟味有之しに、通商之唐船に相違無之に因て、沈失荷物船等取揚、且ツ不用立品ハ唐人因願焼捨、死骸等漸く二十八人追々取揚る、右死骸同所廣大禪寺地内三ヶ所え合葬有之、石碑三本矢来柵門等造建す、右二付薩州より御奉行所え届来候二付、早速為見届御役所附一人船番一人通事三人、其外小役之者共召連被差越、同十二月十四日右取揚荷物船障、其外唐人等日

本船二艘に積乗せ、當地え向ひ護送之處、洋中風破不穩所々に汐繋り、壹艘ハ當己正月廿四日、今壹艘ハ同月晦日當港え挽送届らる、因之例之通踏絵被仰付、且ツ荷役等被命、唐人不残館内え入れ置て、右唐人在留中、諸事辰九番船より引請る、

一在留船主共因願、防津溺死唐人之内、船主財副之死骸、於當地葬り度旨二付、其段被命之處、船主財副死骸不相見、副財副金振聲死骸之み、三月七日薩州より被送越二付、同月九日當地崇福寺え葬之、

一防津にて助命唐人共提荷物類迄も及海失、艱苦可致趣にて、一人前花木綿二端綿并手當として、百目宛銀札を以被惠之、右唐人共當年出帆唐船より便乞帰唐す、

（『通航一覽統輯』卷之四十「唐國浙江省寧波府部八 漂着」より―前注16出典）

（前注16文献を出典としたが、合字・旧字・異体字は原則として新字に、変体仮名は現代仮名づかいに改めた）

# 長崎県南松浦郡新上五島町潮合崎沖調査報告

竹内 奈央

## はじめに

長崎県南松浦郡新上五島町中通島の潮合崎は、幕末の偉人・坂本龍馬が運航した洋型帆船「ワイル・ウエフ号」が座礁、沈没した場所であると伝えられる。町内には、坂本龍馬が建立したといわれる、沈没により亡くなった乗組員の慰霊墓や引き揚げ時の記録史料、引き揚げの様子を歌った歌など、原資料、記録史料、伝承等が残っている。調査時は坂本龍馬を題材とした大河ドラマの影響もあり、多くの観光客が訪れていた。

しかしながら、該当地域では多くの資料、伝承が残っているにも関わらず本格的な水中調査は行われていない。今回、地元の多大なる協力を得て確認調査を行うこととした。

## 調査の目的と調査体制

調査は、平成22年度日本財団助成事業「水中遺跡分布調査」の一環で実施した分布調査である。本事業は、日本各地の水中遺跡について情報を収集し、実際に潜水調査を行うなどして分布把握を行うことを目的としている。

この度、調査対象となった中通島の潮谷崎は、幕末の偉人・坂本龍馬が設立した亀山社中が、慶応2年（1866）に薩摩藩から借り受け運航した洋型帆船「ワイル・ウエフ号」が座礁、転覆した場所と伝えられている。しかし正式な沈没位置が特定されておらず、地元住民に対する聞き取り調査をもとに沈没地点を推定し、潜水調査を行った。

調査は、アジア水中考古学研究所の所員が従事した。また共同通信社の記者・小林清美氏も調査に同行した。

### <調査期間>

平成22年10月15日(金)～18日(月)

うち、潜水調査16日(土)～18日(月)

### <調査体制>

#### ① 潜水調査班

NPO法人アジア水中考古学研究所

理事 宮武正登 所員 横田浩

所員 山本祐司 所員 眞部広紀

所員 竹内奈央

#### ② 船上監視班・調査立会

NPO法人アジア水中考古学研究所

理事長 林田憲三 副理事長 野上建紀

#### ③ 取材班・調査同行

共同通信社 小林清美

#### ④ 協力

新上五島町長井上俊昭氏、新上五島町教育委員会、新上五島町観光物産課、民宿「潮騒」竹村克安氏、江ノ浜漁業協同組合、原一利氏、國富株式会社長崎営業所上五島出張所



## 調査海域の状況および歴史的環境



写真1 中通島潮相崎

中通島は五島列島の北側に位置し、五島列島では福江島に次ぎ2番目に大きな島である。南北に長い島であり、沿岸部は五島列島の島々に共通した特徴のリアス式海岸を形成しており、複雑な海岸線をなす。潮合崎は中通島の東部に位置している。

ワイル・ウエフ号は、慶応2年(1866)の4月28日、薩長連合成立による親善のため、鹿児島に向かう途中に寄港した長州の蒸気船ユニオン号とともに長崎を出港した。しかし甕島沖付近で暴風雨に遭遇し、ユニオン号と別れ漂流を始めた。天

草へ舵をとろうとしたが叶わず、同5月2日の未明に五島列島の中通島沖に辿り着き、突如江ノ浜・潮合崎の暗礁に乗り上げて転覆したと云われる。騒動を聴きつけた地元・江ノ浜郷集落の人々により、乗員4名が救助されたが、池内蔵太はじめ水主など12人が死亡。積荷であった鉄鋼700石、地金200石、大砲7門、小筒16門、ライフル銃6丁などが海中に沈んだ。死亡者は地元・専念寺の住職により葬られたという。江ノ浜郷の共同墓地の一角には、龍馬の依頼によって建てられたという慰霊墓がある。(写真2)



写真2 慰霊墓

地元の遠見番役であった安永惣兵衛が提出した『薩州御手船異国形帆船難船之始末』には、座礁、沈没した後の船の始末や積荷の引き揚げ等の様子が詳細に記録されている。それによると、約1ヶ月半に渡り遺体の収容や積荷の引き揚げがなされている。船材については、乗員の立会いのもとに引き上げられ、浜辺で焼却された。ちなみに今回の調査の際に宿泊場所とした「民宿潮騒」には、「ワイル・ウエフ号の舵取棒」と伝えられている約4mの材木が前庭に展示されている。昭和52年に友住集落の田中家の屋根裏から発見されたものと伝えられており、昭和58年に町指定文化財に指定されている。田中家の先祖は潜水夫としてワイル・ウエフ号の荷揚げ作業に参加したらしい。また、これほどの大きさの梶取棒を有した船は周囲の地域に存在しないというこ

とから、ワイル・ウエフ号の梶取棒であると推測されている。

### 聞き取り調査概要

調査2日目（10月16日）に、沈没地点等の聞き取り調査を行った。江ノ浜郷に居住している「原 一利（はら かずとし）」氏にお話を伺った。原さんは昭和3年10月15日生まれであり、聞き取り調査時は82歳であった。一利さんの祖父が救助活動に参加していたとのことで、救助の様子は代々言い伝えられていたという。幼い頃、潮合崎沖の海水が赤くなっていたことがあったといい、それは海底に沈んでいる

ワイル・ウエフ号の鉄製の錨が錆びたからだと父親に聞いたとおっしゃっていた。また昭和30年頃までは、ワイル・ウエフ号が沈没する直前に船体の一部が引っかかったという松の木が生えていたが、現在は松喰い虫の被害により枯れてしまったとのことであった。場所は潮合崎の東側山裾である。他にもワイル・ウエフ号の座礁やその後の救助活動を歌った「汐や騒動の唄」が現在でも伝えられていた。

なお、原さんの話によってワイル・ウエフ号の沈没場所が潮合崎の東側と伝わっていることが明確になり、翌日（調査3日目）の潜水調査は東側海域で行うこととした。



写真3 ワイル・ウエフ号のものと伝えられる梶取棒

### 水中調査概要



写真4 聞き取り調査の様子

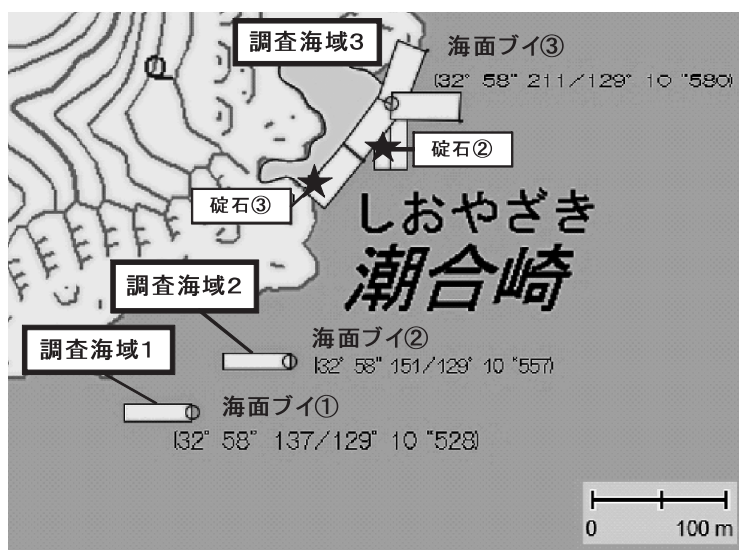
#### （1）実施日時

平成22年10月15日より18日の4日間（うち潜水調査3日間）

#### （2）潜水調査

江ノ浜港より調査海域までの移動手段は、宿泊先の「民宿潮騒」所有の漁船「潮騒丸」（江ノ浜漁業協同組合所属）をチャーターした。

調査はバディシステムによるスクーバ潜水捜索により行った。基本調査手順は、調査海域内に任意の海面ブイおよび海底基点を設定して、海底基点から50mの基準ロープを設置し、その周囲を目視で捜索するものである。基準ロープに直交させたサーチラインロープの両端を



調査員が持ち、基準ロープの端から端までを往復して海底基点(0m)から50m地点まで目視調査を行った。50m基準ロープの端まで捜索を行ったのちは、サーチラインロープの距離を拡大しながら基準ロープを往復し、調査範囲を拡大して目視調査を続けた。

推定船体部材の発見時は、海底基点からの位置を記録し水中写真撮影を行った。調査の最後に船上にて海面ブイのGPSを記録し、位置の把握を行った。

以上の手順を、潮谷崎沖の3箇所の調査海域（調査海域1～3）で行った。（別表：タイムスケジュール参照）

#### 別表 潜水調査タイムスケジュール

10月16日（土）

|    |     | 調査員            | 調査海域 | 調査内容                                                                                                                                         |
|----|-----|----------------|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 午前 | 1本目 | 真部<br>横田<br>竹内 | 海域1  | 海面ブイ①(GPS:北緯32° 58"151・東経129° 10"557)を設置。直下の基点より50mの基準ロープを西方向へ設置。ロープの北3m南10m計幅13m、長さ50mの範囲を目視調査。                                             |
|    | 2本目 | 山本<br>小林       | 海域2  | 海面ブイ②(GPS:北緯32° 58"137・東経129° 10"528)を設置。直下の基点より西へ50mの基準ロープを延ばす。基準ロープ左右5m計幅10m、長さ50mの範囲を目視調査。捜索中、小型碇石①を確認。                                   |
| 午後 | 3本目 | 宮武<br>横田<br>小林 | 海域3  | 海面ブイ③(GPS:北緯32° 58"211・東経129° 10"580)を設置。直下の基点より基準ロープを南側に設置。左右10m計幅20m長さ50mを目視調査。基点より南31m西1.6m付近、水深11.3m(平成22年10月17日10時25分時点)にて碇石②を確認。       |
|    | 4本目 | 真部<br>山本<br>竹内 |      | 海面ブイ③より潜降。ブイ直下の基点から50mの基準ロープを南西225° 方向に伸ばし調査。ロープの左右10m、計幅20m、長さ100mの範囲を目視調査。基点より基点より南西77m、その地点より西へ16m付近、水深7.8m(平成22年10月17日10時57分時点)にて碇石③を確認。 |

10月17日（日）

|    |     | 調査員            | 調査海域 | 内 容                          |
|----|-----|----------------|------|------------------------------|
| 午前 | 1本目 | 宮武<br>竹内       | 海域3  | 海面ブイ③より潜降。基点より西側の陸地側を全面調査。   |
|    | 2本目 | 真部<br>山本<br>小林 |      | 海面ブイ③より潜降。碇石②、碇石③の写真撮影、位置計測。 |
| 午後 | 3本目 | 真部<br>山本<br>竹内 | 海域3  | 基点より北東30° 方向へ50m捜索。          |
|    | 4本目 |                |      | 基点より東90° 方向に60m捜索。           |

10月18日（月）

|    |     | 調査員            | 調査海域 | 内 容                                  |
|----|-----|----------------|------|--------------------------------------|
| 午前 | 1本目 | 真部<br>山本<br>竹内 | 海域2  | 海面ブイ②より潜水。<br>16日発見の碇石①は未発見。         |
|    | 2本目 | 山本             | 海域3  | 調査海域3にて碇石③の引き上げを試みるが、波高が高く、危険と判断し中止。 |



## 調査結果

潮合崎沖、南側と東側の潜水調査の結果、調査海域1～3のうち、2、3にて合計3点の碇石と推測される遺物を確認した。



写真5 潜水調査風景



写真6 碇石①

○調査海域2

＜碇石①＞

位置：海面ブイ②（GPS:北緯32° 58"137/  
東経129° 10"528）直下の海底基点付近。

詳細位置不明。

法量：未計測。

特徴：小型の角柱石。



写真7 碇石②

○調査海域3

＜碇石②＞

位置：海面ブイ③（GPS:北緯32° 58"211/  
東経129° 10"580）直下の海底基点から、  
南31m、西1.6m付近。

法量：未計測。

特徴：小型の角柱石。



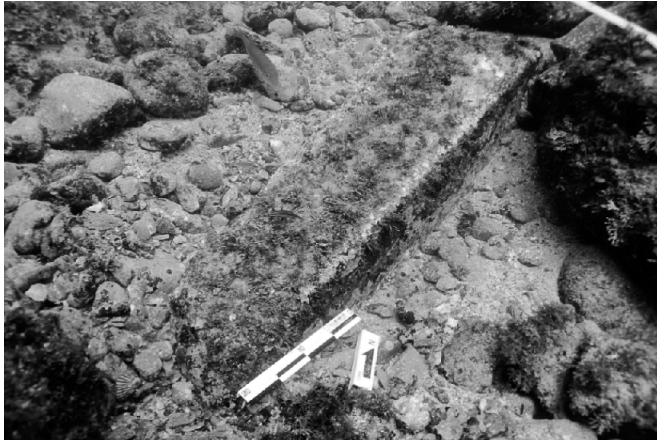


写真 8 碇石③

#### ＜碇石③＞

位置：海面ブイ③（GPS:北緯32° 58" 211・東経129° 10"580）直下の海底基点より南西77m、西16m付近。

法量：全長約85cm、中央部幅約24cm、中央部厚さ約15cm。

特徴：先細りタイプ。先端部が一部欠損。上方部は折損した可能性あり。

## まとめ

今回の調査では、調査目的としていたワイル・ウエフ号に関連する遺物を発見することはできなかった。沈没直後の荷揚げの際、1ヶ月半に渡り入念に作業が行われたと記録があり、その後も地元潜水夫や海女により遺物が拾われた可能性がある。聞き取り調査の際には引き揚げ遺物についての情報を耳にすることはほとんどなかったが、今後更なる周辺の調査により資史料が発見されるかもしれない。また今回調査対象とした海域は陸地から約15mの範囲であり、沖合に調査範囲を広げることで新たな遺物が発見される可能性もある。ただし沖合は潮の流れが速いため、調査を行うには慎重になる必要がある。

今回の成果は、碇石と考えられる角型石材3点を発見したことである。地元教育委員会の要望もあり、碇石(火)について陸上への引き揚げを試みたが、海況が悪化したため引き上げは行わなかった。同じ五島列島の小値賀島では数年に渡る調査により多数の碇石が発見されており、五島列島において使用された碇石として、比較対象の資料となるであろう。周辺の調査を進めていけば、さらに確認できる可能性がある。

以上、中通島も水中文化遺産を有する地域であることが判明した。今後も地元教育委員会や関係者と連携し、継続して調査を行うことが必要であろう。

## 参考文献

- ・昭和60年発行 有川町 「有川町歴史散歩」 中山友則
- ・「安永惣兵衛孟貞控『薩州御手船異国形帆船難船之始末』」 寫

---

「汐屋騒動の唄」 江崎久平 詞

「汐屋騒動汐屋騒動汐屋の騒動よ 五月二日のあけ六ツ 異国の船かは知らねども  
 どことも知れず島みせず 島もドッコイ ドッコイ だんだんみえるして  
 かねの錨をつけこんで つけども錨がきかずして 岩にあたりて水船に どなたも錦の対の衣装  
 顔見合せて南無阿弥陀佛 流れ ドッコイドッコイ 行くのが上口ぞ 江の浜前にと流れつく  
 コリヤ何事かと村中が 浜に下りて大騒ぎ 國はいつこと問うたれば 國は薩摩の鹿児島で  
 積荷は何かと問うたれば 金銀銅鉄綾錦 大銃小銃積みまぜて かなきんなどを差しにして  
 さぞや お世話じゃ 浦田さん」

# 相島（あいのしま）―福岡県相島海底引揚げの瓦について―

常松 幹雄

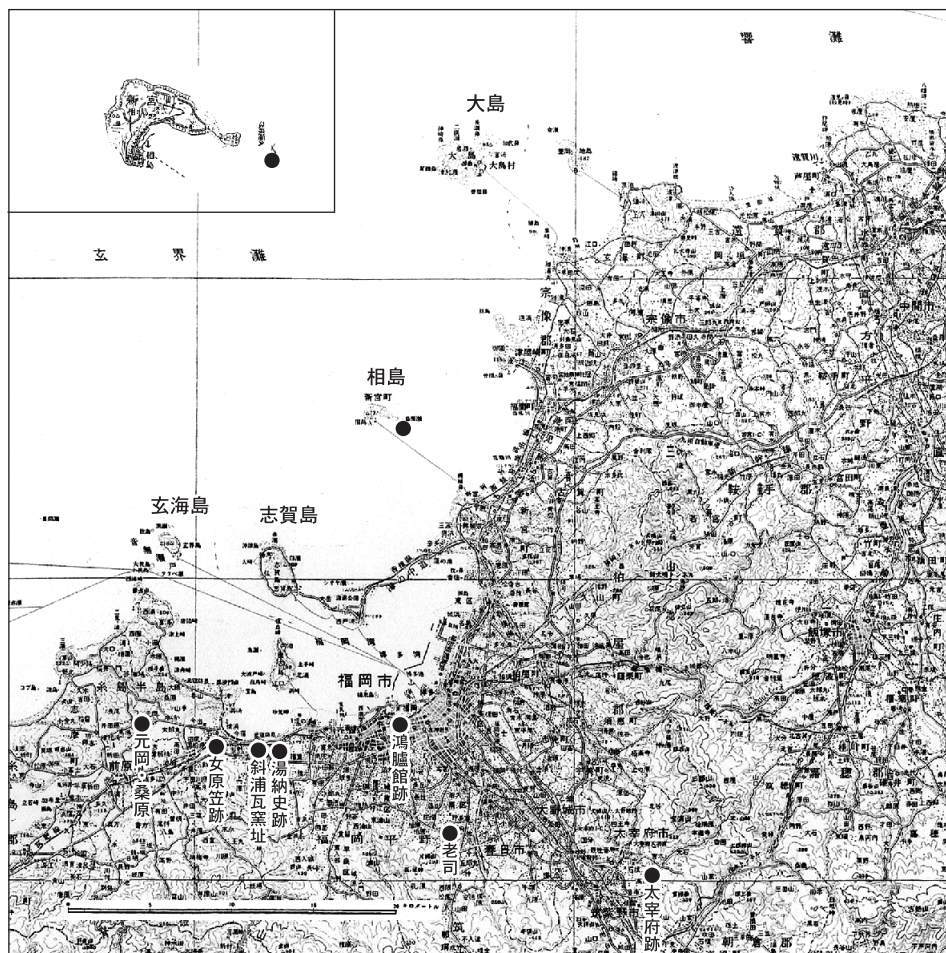
## はじめに

平安京出土の「警固」や「敬」銘の陽刻のある瓦は、斜ヶ浦（ななめがうら）瓦（が）窯（よう）址（し）（福岡市西区）で同範瓦が出土していることから、九州産と考えられている。平安京において「警固」や「敬」銘瓦の分布は、朝堂院跡付近に集中することから、これらの瓦は、貞観18（876）年に焼失した朝堂院を再建するために運ばれたと考えられてきた（寺島1979）。

1997年、相島沖の「警固」銘瓦の発見を契機として、斜ヶ浦瓦窯址のある博多湾から平安京への航路に一縷の光がさした（福岡市博物館2000）。その後、吉武 学氏の紹介で相島沖採集の「警固」銘瓦は、研究者の間でも知られるようになった（吉武2001）。近年、相島在住の篠崎和則氏によって引揚げられた丸瓦の存在が明らかになり、アジア水中考古学研究所（A R I U A）では2011年に海底探査を実施し、新たに平瓦を採集した。小文は、これらの所見を加えて相島海底引揚げ瓦について再考するものである。

## 相島の位置（図1）

相島は、玄界灘に浮かぶ面積約1.25平方キロ、周囲約4kmの「へ」字形の島である。博多湾口の志賀島と宗像宮の中津宮を祀る大島のほぼ中間にあたり、現在は福岡県糟屋郡新宮町に属している。



島の東には半円のアーチ状をなす玄武岩、通称めがね岩とよばれる鼻栗瀬がある。相島は古くから海上交通の要衝で、島の北東部では250基あまりにのぼる史跡「相島積石塚群」が整備されている（新宮町教委2012）。また島の西南端には朝鮮通信使の接待所である有待邸が設けられ、饗応がおこなわれた。貝原益軒の『筑前國続風土記』では「阿恵嶋又阿部島」と記されたほか、「安威島」や「藍島」などの表記がみられる。

図1 北部九州における相島の位置



## 調査の概要

丸瓦を引揚げた篠崎氏は、相島で長年漁業に従事する傍ら、島の歴史や古文書の研究をつづけてこられた。2011年6月、ARIUAの「文化遺産委員会」の席上に、1970年に相島海底引揚げの丸瓦を持参され、採集時の状況について話をされた。瓦の表面はフジツボや貝類で覆われていたが、法量などから古代の丸瓦の可能性がある旨を伝えたところ、調査を了承された。

丸瓦表面の付着物を取除くと、凸面に格子と図印の陽刻を4か所で確認することができた。格子と図印の叩き目ある瓦は、斜ヶ浦瓦窯址にあることを想起し、早速、福岡市博物館所蔵の「高野孤鹿資料」と比較をおこなった。その結果、新池窯採集の墨書がある瓦片（収蔵番号81）の特徴ときわめて似ていることがわかった（図2右下）。「高野孤鹿資料」の「新池窯」や「城原新池」、「大谷」などの注記のある瓦片の多くは、斜ヶ浦瓦窯址付近の採集と考えられる。

篠崎氏が丸瓦を採集した地点は、鼻栗瀬との位置関係によって特定できるため、ARIUAでは、この海域で類品の分布が確認できると判断し、2011年7月16・17日に調査を実施した。鼻栗瀬の南東約150m付近をダイバー3人1組で、目視による調査を実施した。その結果、1回目のダイビングで、平瓦状の遺物1点が発見された。16日当日の水深は約15mで、GISで遺物の位置を記録した。ところが、目印の鉛ウエイトに結わえたブイは、潮流によって押し流されかけたため、急遽引揚げることになった。回収した資料は、四隅の一端を欠くが平瓦であることが見て取れ、下船後、表面の付着物を除去すると、凸面で斜格子と図の陽刻が確認された。



写真1 ARIUAの調査地点から鼻栗瀬をのぞむ

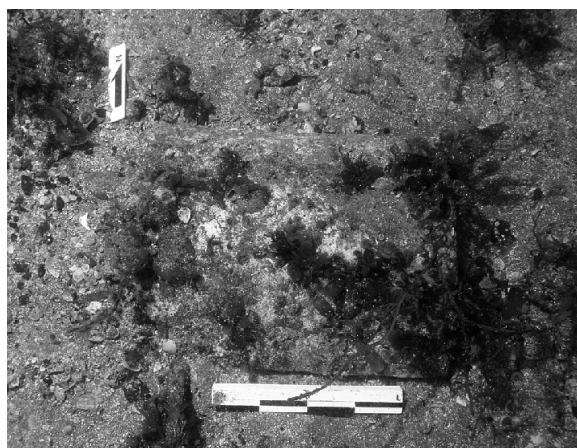


写真2 海底における平瓦の状況



写真3 回収の平瓦（裏）



写真4 回収した平瓦（表）

## 資料の解説（図2）

1は、既報告の「警固」銘のある平瓦である（吉武2001）。全長約38cm、狭端で24.5cm、広端で25.5cmをはかる。一緒に引揚げられた玉縁付丸瓦1点などとともに福岡市博物館に寄贈された。相島の南西500m付近で小形底引網にかかって引揚げられたといわれている（福岡市博物館2000）。

2は、篠崎和則氏資料である。玉縁を有する完形の丸瓦で、全長38.8cm、広端弦幅18.5cmをはかる。凸面上半の斜格子のなかに☒の陽刻が4カ所で観察された。凹面は、縦方向にそって紐の痕跡が観察される。

3は、ARIUAの調査で発見された平瓦である。凹面に模骨痕が認められないことから円筒桶製の平瓦と判断される（栗原2000）。全長36.7cmで、一方の上端を欠損するが、現存する最大幅は25.5cm、下端部幅は24cmをはかる。凸面上半の斜格子の叩き目のなかに、☒の陽刻が1カ所で確認された。

## 「警固」銘のある瓦

福岡市博物館の「高野孤鹿資料」には、斜ヶ浦瓦窯址で採集された瓦片約70点があり、その中32点に文字や記号状の叩き目が観察された（吉武2001）。「警固」銘は縦書きの正字で、「警」の上には正方形に近い斜格子でその上部に四巴状の渦巻文がみられる。そして「固」の下は斜格子は縦長である。一方「敬」は、二重斜格子の中に逆字で陽刻されたもので、「警」の略と考えられる。

記号状の叩き目には、斜格子と鉤手状の文様を組み合わせたものや斜格子のなかに＋文やレ文、斜格子のなかに☒を刻んだものがある（図2右下）。相島沖で発見された丸瓦や平瓦にある☒の陽刻は斜ヶ浦瓦窯址と共通することから、平安京出土の瓦でも確認が期待される。

「警固」銘のある瓦は、古くは藤 貞幹の『古瓦譜』や中山平次郎氏の論考にみられる（中山1915）。

中山氏が紹介した「警」字がある瓦片は早良郡壱岐村大字拾六町與納の里道採集とされるもので、現在「高野孤鹿資料」におさめられている。與納は、福岡市西区拾六町字湯納にあたり、斜ヶ浦瓦窯址の南東約1kmにあたる。これまで湯納遺跡の調査では「警固」銘瓦のほか四巴状の渦巻文などが出土している（福岡県教委1976）。このほか福岡市博物館の2007年度収集資料に海揚げと考えられる「警固」銘瓦1点に加わった。全長37cm、最大幅25cmで「昭和42年 1967六月廿二日 福岡市今川二丁目以楽堂ヨリ貰受」という墨書がある（福岡市博物館2010）。

## まとめ

「警固」銘瓦は、平安京と斜ヶ浦瓦窯址、そして相島沖の3ヶ所で確認されている。また意外なことに鴻臚館跡の発掘調査では出土していない。そもそも「警固」銘瓦は、外寇に備えて貞観11（869）年に大宰府から鴻臚館に移置された警固所に供される目的で作られたものではなかったのか。もし、その瓦が貞観18年に焼失した朝堂院の再建に充てられたとするなら、そこにはどのような事情があるのか。

1. 「警固」銘瓦は、鴻臚館とその付近に供給される瓦ではなかった。
2. 警固所はこれまでの調査範囲内ではない。
3. 「警固」銘瓦は警固所が移置された貞観11年以後も斜ヶ浦瓦窯で生産が続いた。いま想定されるのは、こうした事情である。

相島沖における瓦の発見は、海難事故によるものか、積荷が投げ出されたのか、現状だけで断定することは難しい。しかし仄聞するところ、ここに紹介した以外にも相島沖で漁網にかかっ



た瓦は複数存在するようである。相島海底引揚遺物は、平安時代に瓦を積んで都をめざした船で起こったアクシデントを通して、私たちにメッセージを発しているのかもしれない。

小文は、福岡市博物館、アジア水中考古学研究所（ARIUA）、篠崎和則氏のご協力によってまとめることができた。

## 【文献】

- 栗原和彦（編）1976「福岡市西区拾六町所在湯納遺跡の報告」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、福岡県教育委員会、pp.103－104
- 栗原和彦2000「大宰府史跡出土の軒平瓦」『九州歴史資料館研究論集』25、九州歴史資料館、pp.1－8
- 新宮町教育委員会2012「国指定史跡 相島積石塚群保存整備事業報告書Ⅰ」『新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書』第21集
- 高野孤鹿1974「警」および「警固」の銘のある古瓦について『草場古墳群 斜ヶ浦瓦窯址』早良鉱業株式会社、pp.10－18
- 寺島孝一1979「平安京出土の北九州系文字瓦について」『日本古代学論集』〔財〕古代学協会 pp.163－172
- 中山平次郎1915「警の一字を有せる古瓦片」『考古学雑誌』第5巻第12号、pp.98－107
- 福岡市博物館2000「23濱田弘之資料」『福岡市博物館15平成9（1997）年度収集収蔵品目録』pp.5 玉縁付丸瓦全長37、最大幅17.7、備品番号97 p 2349・2350
- 福岡市博物館2010「2波多野聖雄資料」『福岡市博物館25平成19（2007）年度収集収蔵品目録』pp.23 備品番号2007、p 209
- 吉武 学2001「福岡県新宮町相島沖採集の「警固」銘平瓦」『福岡市博物館研究紀要』第11集、福岡市博物館、pp.25－30

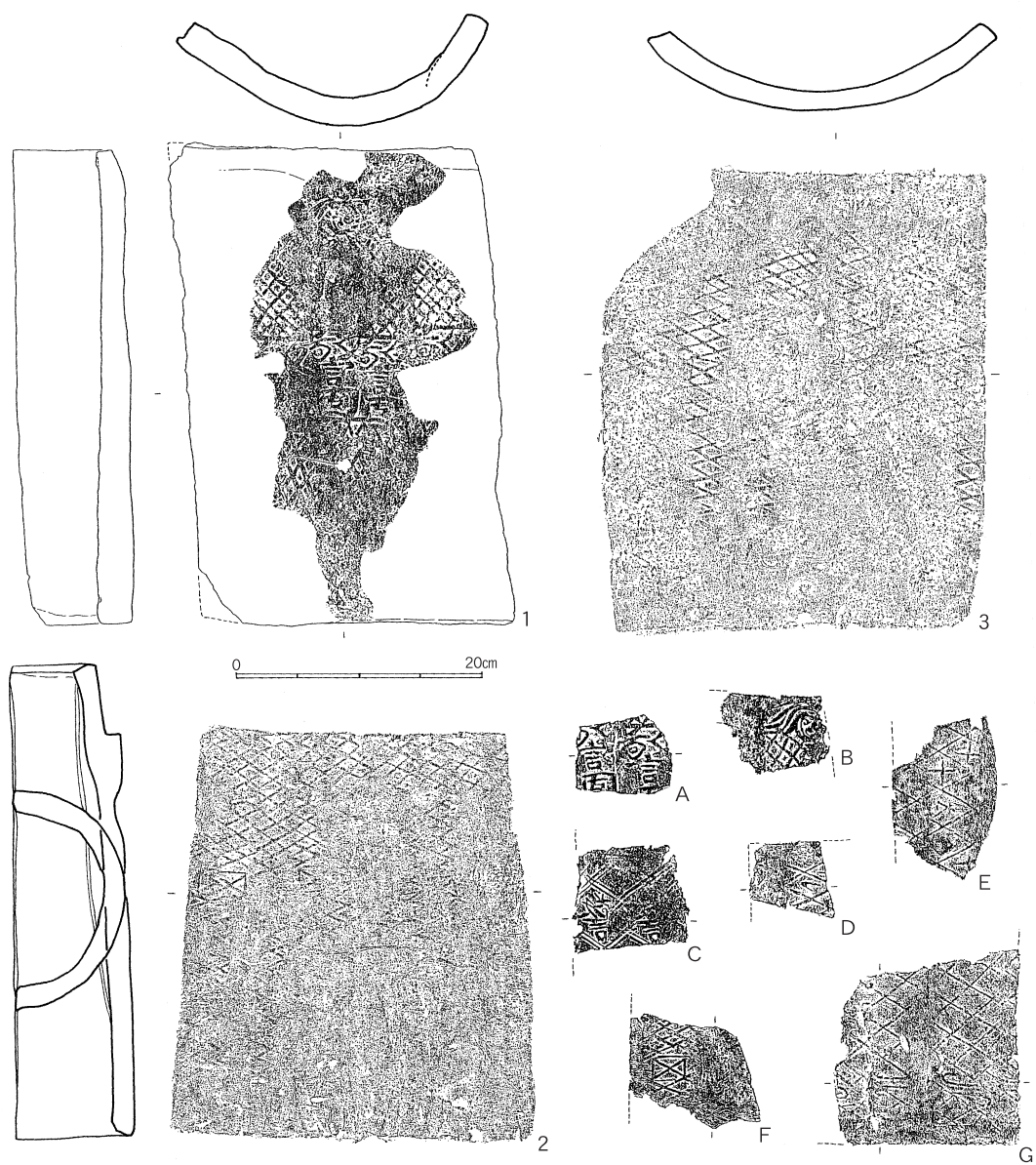


図2 相島海底引揚の瓦（1～3）と高野孤鹿資料の拓影（縮尺1/6）

# 2009年度小値賀島前方湾海底遺跡調査

田中 克子・林田 憲三

## I. 調査の概要

本報告は研究所が平成21年度（2009）日本財団の助成事業「海の文化遺産総合プロジェクト」として、長崎県五島列島小値賀島的前方湾海底遺跡で実施した発掘調査を記録した報告である。

前方湾海底遺跡調査は小値賀町と研究所の前身の九州・沖縄水中考古学協会（KOSUWA）と本研究所である特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所（ARIUA）が平成16年（2004）から毎年実施している。今回の調査は準備日と撤収日を含めて本調査の前後にそれぞれ1日とり、8月19日～27日まで行った。今回はこれまでの目視調査ではなく以前に一度実施したことがある試掘調査を行った。（図1、写真1・2）

発掘地点はこれまでの調査で前方湾奥のクスクリ崎沖の海底に遺物が集中していることが確認された。出土傾向からさらに南東方向に遺物の存在が予想されるため、南東方向の海底に設定した。発掘地点周辺海域には養殖用の生簀があり、これまで発掘調査は不可能であったが、養殖業者の生簀が

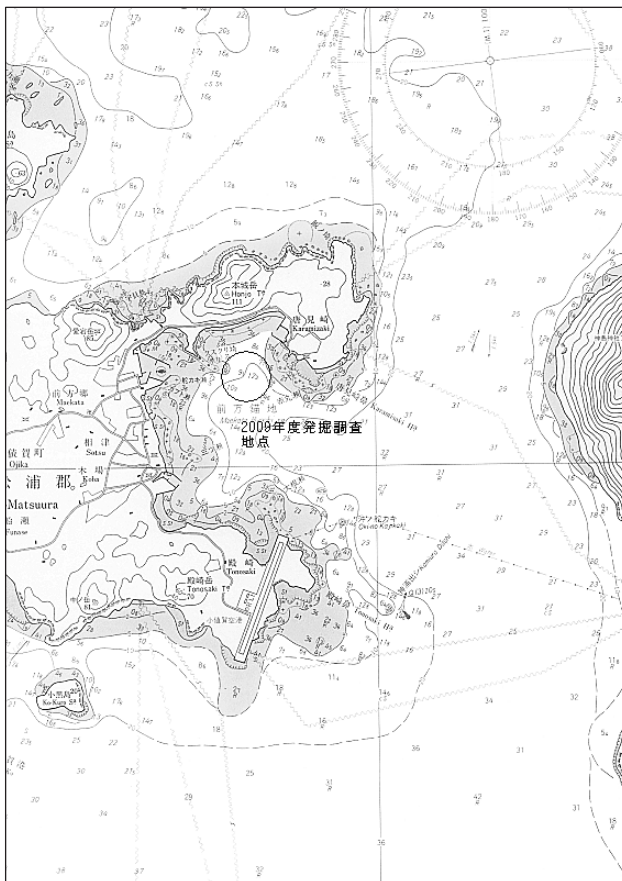


図1 調査地点位置図  
（海上保安庁刊行W223に加筆）



写真1 前方湾発掘調査地点全景（中央生簀下）  
（海上保安庁海洋情報部海洋情報課提供）



写真2 前方湾発掘調査地点と作業船

一部撤去され海底調査への理解も得ることができ、この地点での海底調査が実現した。発掘トレンチの基準地点はこれまでの調査で使用していた中国系碇石（小値賀碇石12号）から南東方向へ130m（2011年の再調査により90mを訂正）にあり、磁北より135° 偏った地点である。この地点には近世鉄錨があり、この錨を基準点0mとして磁方位180° を基準線とした。（図2、写真1）第1トレンチは0m基準点から基準線に沿って南へ幅2m×約5mで発掘を行った。第2トレンチは0m基準点から30m延ばした地点を基点にして、北へ幅2m×約6mを発掘した。（図2、図4）この調査にはイタリアシシリー州海洋考古局、ナポリ大学、ポローナ大学、ナポリベニンカサ大学及びイタリア考古学会（ANA）の水中考古学者、民俗学者、保存科学者等の研究者や職員からなる9名の参加があった。イタリア研究者はトレンチ調査以外に潜水目視調査を主に担当することとなった。潜水目視調査による確認された遺物の位置はトゥーサ博士より提出された図3に示されている。

潜水目視調査で確認された遺物とその位置は図3が示すように、調査地点は2008年度調査区域を設けた地点より南側の海底である。調査基点（Original Point）となるのは小値賀碇石12号である。この基点から南東へ僅に離れた1mほど段差のある海底には、半折した状態の中国系の碇石、小値賀碇石11号がある。2008年度の調査では、その東側に磁北に沿って南北60m、東西30mの調査区を設け、目視調査を行った。この調査の方法や成果は2008年度の小値賀町教育委員会「小値賀町前方湾海底遺跡調査報告書Ⅱ」小値賀町文化財調査報告書 第21集に報告している。

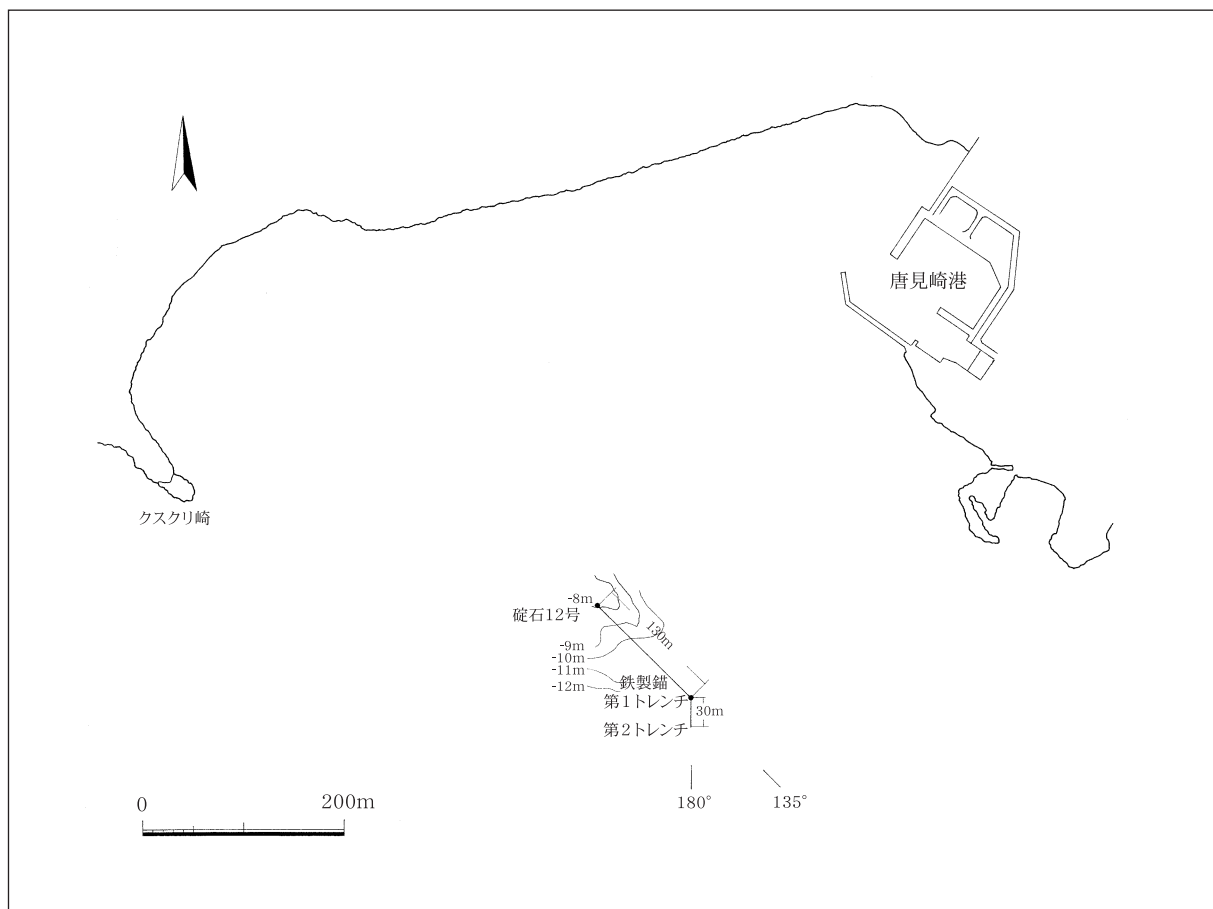


図2 調査地点位置図（1／7,500）



2009年度の潜水目視調査地点は図3に示されているように、昨年度の調査区の南西角からコンパスで180° をとり、その南西角の地点より20m延ばし、その地点を目視調査の基準点Aとして、海底に設定した。この基準点Aから磁北0° から東へ82° 偏した角度で東方向にベースラインとなる基準測線のテープを海底延ばして設置した。ベースラインの西側端から東へと順次基点を設置した。基準地点Aから15m地点に基点Bを設置し、順次30m地点にC、45m地点にD、さらに75m地点にEを設置し、それぞれ設置した基点を中心にして、半径5m間隔で5m、10m、15m、20mと円形サーチ方法（Circular Search）で遺物の確認を行い、確認した遺物については位置、レベルの計測と写真撮影を行った。確認した遺物には番号を付け、基点より方位と距離を測った。この調査地点で確認した遺物は計13点である。それぞれの遺物にはP1からP15までの番号をつけた。遺物は標高-12.90mから-13.20mまでに収まる。その内5点を遺跡の性格を知るために回収することにした。

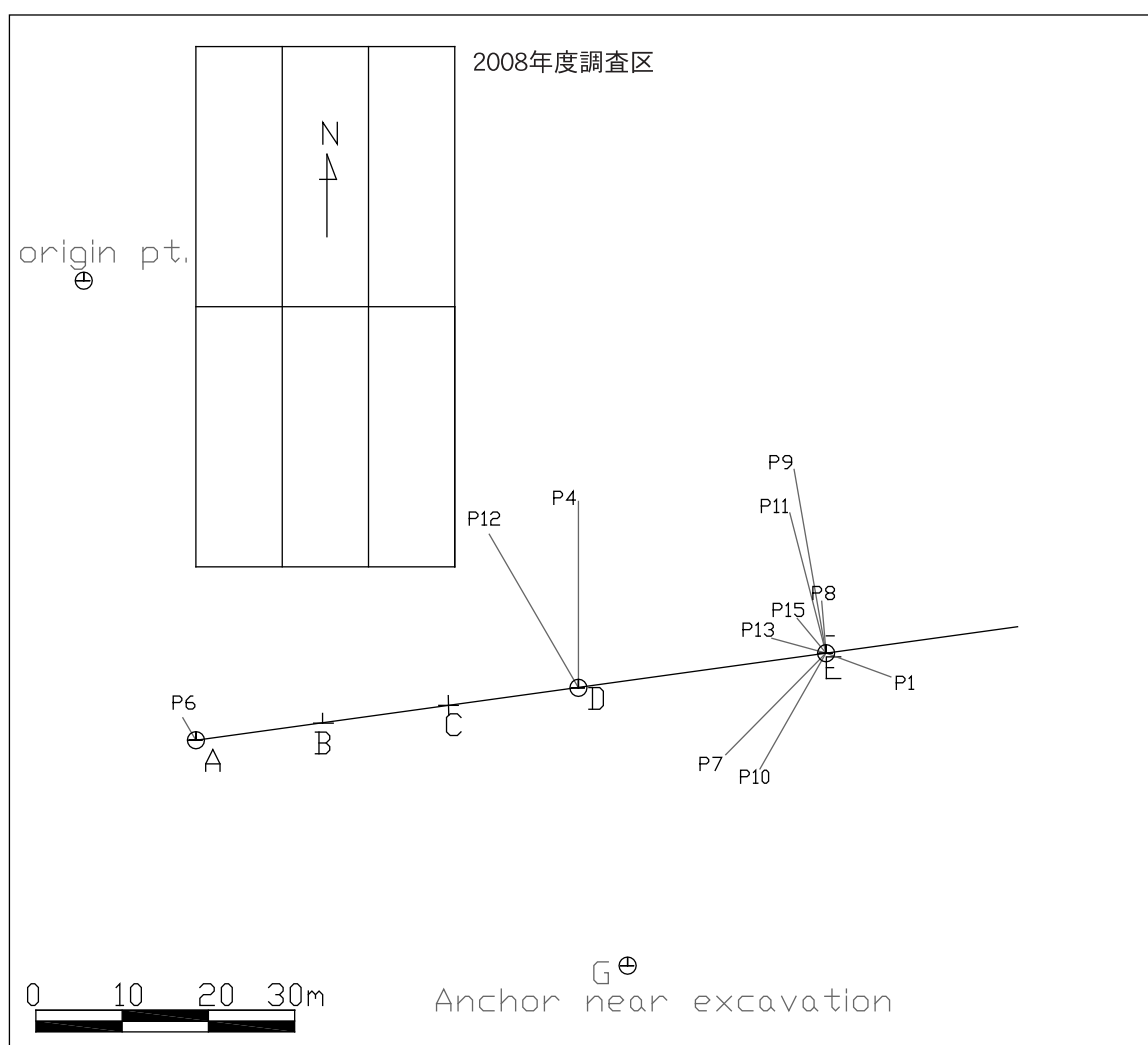


図3 潜水目視調査区位置と確認遺物分布図（P1～P15）

※ Original Point は小値賀碇石12号、G: Anchor near excavation は近世鉄錨で2009年度調査の基点である。P1からP15は表2の検出番号に対応、P2、P3、P5、P14は欠番

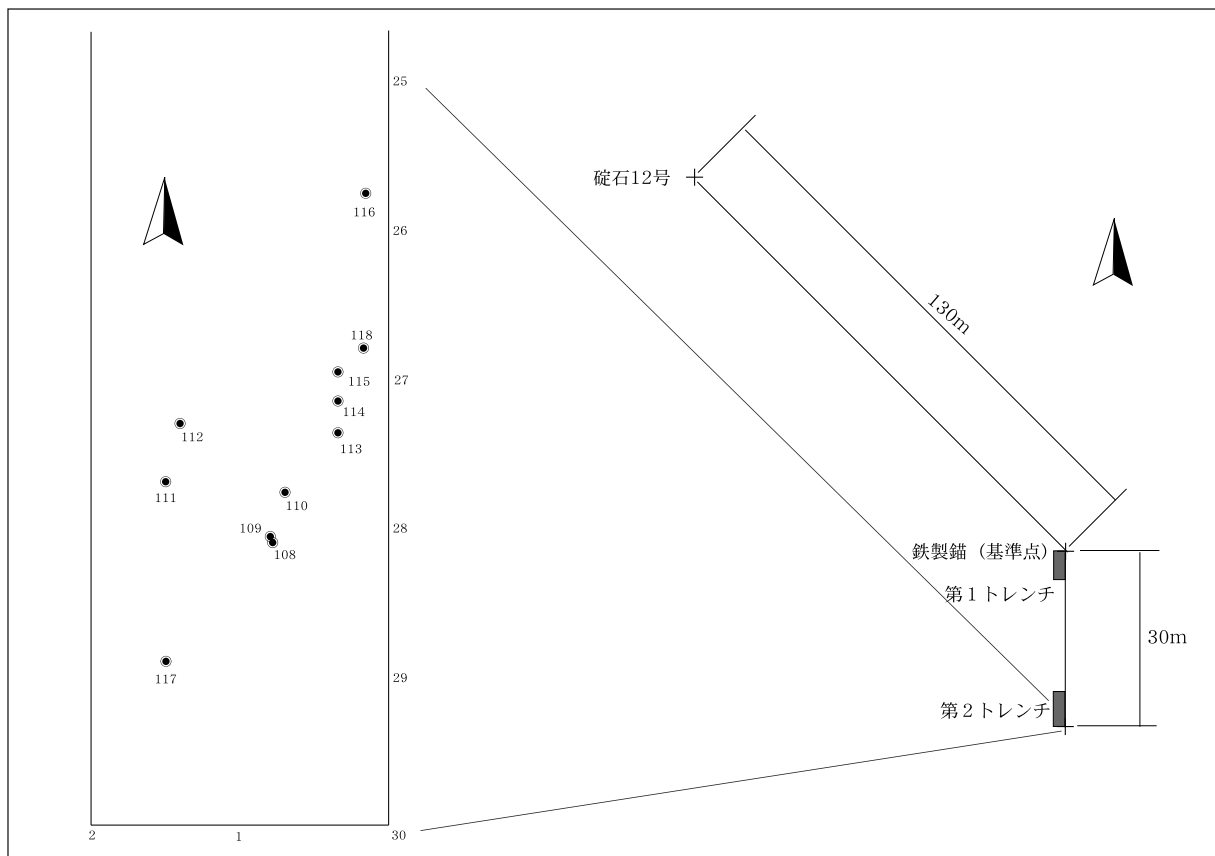


図4 第1トレンチ及び第2トレンチ配置図と第2トレンチ出土遺物分布図

トレンチ調査では現代鉄錨を基準点として磁北 $0^{\circ}$ （ $129^{\circ} 5.22' 848''$  E、 $33^{\circ} 12.23' 313''$  N、船上からのGPS測定）から $180^{\circ}$ を測り、基準点より $180^{\circ}$ に添って、ベースラインの白色ロープを海底に設置した。1週間の発掘調査のため、トレンチは2箇所とした。

第1トレンチは、基準点を鉄錨の先端部として、0 mとした。この地点からベースラインを東端として西側に東西に2 m、南北5 m規模のトレンチを設定した。このトレンチは小値賀の養殖業者の生簀が撤去された真下にあたり、海底には表土にあたるシルト層が約30 cmに腐泥と共に堆積している。

表面から堆積しているシルト層下には小さな貝殻や礫を含む砂土層が約30 cmの深さで堆積している。この砂土層の下には、締まった砂質層が続く。この砂質層には比喩的の大型の貝殻が混ざる。遺物は2層下から3層上で多くは出土している。

第2トレンチは、現代鉄錨の基準点（磁北 $0^{\circ}$ ）＝0 m地点から $180^{\circ}$ 南方向へベースラインに沿って30 m延長させ、ベースラインと30 mが交わる地点を第2トレンチの南東角として、東西2 m、南北5 mの範囲でトレンチを設定した。（図4）撤去された生簀のやや西側に位置し、海底には腐泥を含むシルト層が厚さ約30 cmに堆積している。この層の下には貝殻や礫を多く含んだ砂土層が堆積している。この砂土層下には締まった砂質層が、平均40 cm～60 cmに堆積していて、この層中から遺物が検出されている。

## II. クスクリ崎延長岩礁先端(生簀北側及び設置海域)出土・確認遺物

### 1. 発掘調査区域出土遺物

(図5 1～16、表1、写真7～9)

最初に設定した第1トレンチ(Tr.1)では、土師器小皿1点、土師器坏3点、中国製白磁碗1点、国産平瓦1点が出土した。中国製白磁碗(8)は、貝や礫を多量に含んだ厚い砂土層を除去した後に露出した硬く締まった暗黄色の砂質シルト層に大半が埋まっており、口縁を下に伏せた状態で検出された。また、土師器も白磁碗の近く、ほぼ同レベルの位置で出土した。

Tr.1の南約30mの位置に設定した第2トレンチ(Tr.2)からは、国産土鍋1個体分、土師器坏片4点、中国産白磁碗6個体分、青磁碗片2点(2個体分)、中国産陶器鉢1個体分、他骨類が出土した。いずれもTr.1と同様、貝等を多量に含んだ厚い層を除去した後に露出した締まった暗黄色の砂質シルト層を約40～80cm程掘り下げたレベルで検出された。土鍋と中国産陶磁器は散乱したような状況は伺えず、比較的狭い範囲にかたまって出土し、中国製白磁碗2点(11・12)は口縁を上にして重なった状態であった。

8の白磁碗は完形、9の白磁碗と16の陶器鉢もほぼ完存しており、他の白磁碗と土鍋も1/3以上を残す。また、器面全面に貝が付着する4の土師器坏と、伏せた状態で出土し、砂層上に露出していた高台先端部分にのみ貝の付着が見られる8の白磁碗以外はいずれも貝の付着もなく、表面もローリングを受けた形跡が認められず、極めて良好な状態を保っている。恐らく埋没時の原位置を保っているものと推測される。

図示した遺物の他、土師器の坏底部片(底部糸切り離し)1点、福建産白磁碗体部片1点が清掃中に回収された。以上の他、鳥類と獣の骨が5点出土し、中には解体痕や煮た痕跡の認められるものもある。出土遺物は記録保存のため全て回収した。

1～7は国産品で、1～5は土師器、6は土鍋、7は瓦である。土師器は全て底部糸切り離しで、法量や器形等から概ね12世紀から13世紀前半代位までにおさまるものと考えられる。5の土師器坏は鹿の下顎骨と共に回収された破片2点と、11・12の白磁碗近くで清掃中回収された破片1点が接合したものである。3の内底には油煙が付着し、灯明皿として使用していたものであろう。6の土鍋は口縁が逆L字状に屈折し、半球形状の体部を有する大形品である。内面の指押えの痕を板状の工具でナデ消しており、外面も丁寧なナデ調整を施す。外面上半部には煤がべったりと付着する。北部九州では12世紀後半代から13世紀前半頃に出現するものである。7は近世の平瓦である。

8～16は中国産陶磁器である。8～13は白磁、14・15は青磁、16は陶器である。8・9が口縁上端面を水平に仕上げる器高の高い碗、10はそれよりもやや器高の浅い同じタイプで、福建省の閩清窯を中心とする?江流域の南宋初頭～前半の製品である。いずれも博多遺跡群では12世紀前半～後半にかけて大量に出土する製品であるが、8は釉下に白化粧が施され、福建省産のこの種の白磁で、釉下に化粧掛けをする出土例はこれまでにない。また、9と10の高台内には墨書がある。9は漢字の「十」の可能性が高い。10の墨痕は比較的鮮明であるが、天地も不明瞭で解説不能であった。11～13はいずれも内底を輪状釉剥ぎして重ね焼きされた碗で、福建省閩江流域で広く生産された製品である。博多遺跡群では前述の8～10の白磁碗にやや遅れる12世紀中～後半にかけて大量に出土するものである。11と12は器形・法量がほぼ同じで、胎土中に鉄分を多く含み、釉上に褐色の鉄斑が浮き出すなど極めて近似した胎土・釉調を呈する。さらに内底の輪状釉剥ぎした内側にいずれも同様の白色の繊維状のものが付着する。

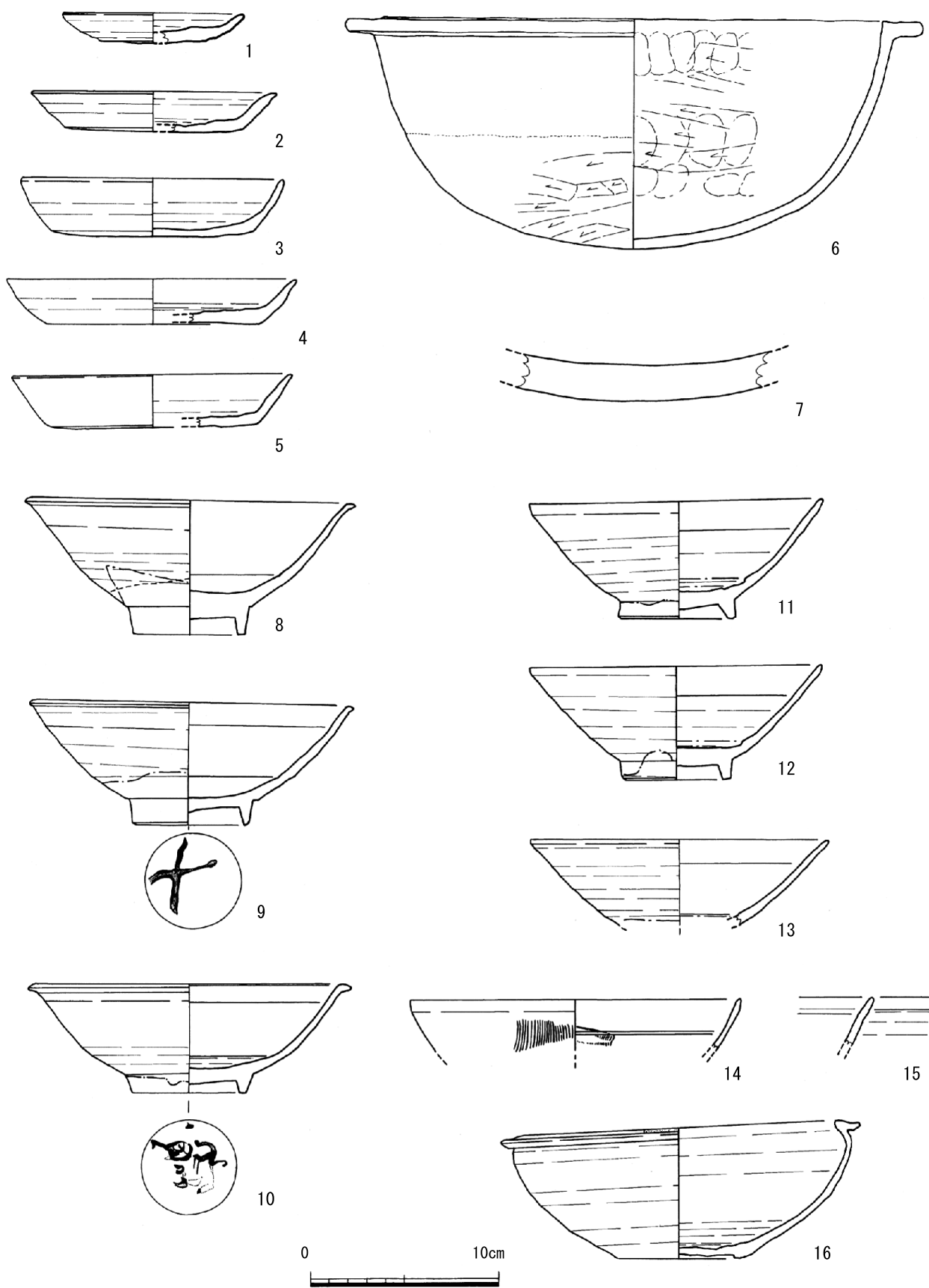


図5 発掘調査区出土遺物実測図 (1/3)



表1 第1トレンチ及び第2トレンチ出土遺物一覧表

| 番号  | Tr.   | 検出番号         | 遺物種類   | 器種                                   | 法量(cm)<br>(口 - 高 - 底) | 胎土             | 釉調/施釉、その他備考                        |
|-----|-------|--------------|--------|--------------------------------------|-----------------------|----------------|------------------------------------|
| 1   | Tr. 1 | P-103        | 土師器    | 小皿(糸切)                               | 9.6-1.6-5.5           | 淡褐色、細か         |                                    |
| 2   | Tr. 1 | P-106        | 土師器    | 坏(糸切、板状痕)                            | 13.0-2.1-9.4          | 褐色、細か          |                                    |
| 3   | Tr. 1 | P-105        | 土師器    | 坏(糸切、板状痕)                            | 14.0-3.1-10.6         | 淡褐色、細か         | 内底に油煙付着                            |
| 4   | Tr. 1 | P-102        | 土師器    | 坏(糸切)                                | 15.4-2.4-11.2         | 暗褐色、細か         | 全面に貝付着                             |
| 5   | Tr. 2 |              | 土師器    | 坏(糸切、板状痕)                            | 14.8-2.8-10.8<br>3点接合 | 淡灰褐色、細か        | 鹿下顎骨と共に清掃時回収                       |
|     | Tr. 2 |              |        |                                      |                       |                |                                    |
|     | Tr. 2 |              |        |                                      |                       |                | P-108付近清掃時回収                       |
| 6   | Tr. 2 | P-113        | 土師質土器  | 鍋                                    | 30.8-12.2<br>同一個体、接合  | 暗褐色～暗灰褐色、やや粗い  | 外面煤付着                              |
|     | Tr. 2 | P-114        |        |                                      |                       |                |                                    |
|     | Tr. 2 | P-115        |        |                                      |                       |                |                                    |
|     | Tr. 2 | P-118        |        |                                      |                       |                |                                    |
| 7   | Tr. 1 | P-101        | 瓦      | 平瓦                                   |                       | 暗灰褐色、細かな砂粒含む   | 内外面ナデ調整                            |
| 8   | Tr. 1 | P-104        | 白磁(福建) | 碗                                    | 17.5-7.1-5.9          | 淡黄白色、完全磁化せず    | 淡黄白色半透明釉(釉下に化粧掛け)、鈍い光沢/外面下半まで施釉    |
| 9   | Tr. 2 | P-112        | 白磁(福建) | 碗                                    | 17.2-6.5-6.2          | 淡灰白色、磁質        | 僅かに黄味帯びた淡灰白色不透明釉、鈍い光沢、氷裂/外面下半まで施釉  |
| 10  | Tr. 2 | P-116        | 白磁(福建) | 碗                                    | 17.2-5.8-6.0          | かなり白っぽい淡灰白色、磁質 | 僅かに黄色味帯びた透明釉、よく熔ける/高台まで施釉          |
| 11  | Tr. 2 | P-108        | 白磁(福建) | 碗                                    | 15.7-6.2-6.3          | 淡灰白色、磁質        | 僅かに黄味帯びた半透明釉、鈍い光沢/高台脇まで施釉、内底輪状釉剥ぎ  |
| 12  | Tr. 2 | P-109        | 白磁(福建) | 碗                                    | 15.6-6.1-5.9          | 淡灰白色、磁質        | 僅かに灰色味帯びた透明釉、よく熔ける/高台脇まで施釉、内底輪状釉剥ぎ |
| 13  | Tr. 2 | P-110        | 白磁(福建) | 碗                                    | 16.0-                 | かなり白っぽい淡灰白色、磁質 | 僅かに空色味帯びた透明釉、鈍い光沢/高台脇まで施釉、内底輪状釉剥ぎ  |
| 14  | Tr. 2 | P-107        | 青磁(同安) | 碗                                    | 17.6-                 | 灰白色、磁質         | 淡オリーブ色透明釉、ガラス質                     |
| 15  | Tr. 2 | 清掃時回収        | 青磁(同安) | 碗                                    |                       | 灰白色、磁質         | 深いオリーブ色透明釉                         |
| 16  | Tr. 2 | P-111        | 陶器     | 鉢                                    | 19.1-6.9-5.9          | 淡橙褐色、細か、赤色粒含む  | 外面上半深いオリーブ色不透明釉、他はやや黄味帯びた白濁釉/全釉    |
| その他 | Tr. 2 |              | 土師器    | 坏/底部(糸切)                             |                       | 淡灰褐色、細か        | P-111付近清掃時回収                       |
|     | Tr. 2 | 地点不明         | 白磁(福建) | 体部片                                  |                       | かなり白っぽい淡灰白色、磁質 | 透明釉                                |
|     | Tr. 2 | P-117        | 骨      | 鳥類/右上腕骨、完形、鶺鴒の仲間(カワウ、ウミウ、ヒメウ)か       |                       |                |                                    |
|     | Tr. 2 | P-111付近清掃時回収 | 骨      | 鹿/左上腕骨・遠位端、小型成獣、解体痕あり(遠端部欠損)         |                       |                |                                    |
|     | Tr. 2 |              | 骨      | 鹿/左脛骨・近位端、成獣(化骨化済)、割れロスバイラル、煮た可能性あり  |                       |                |                                    |
|     | Tr. 2 |              | 骨      | 鹿or猪/椎骨・椎体2/3と左側椎弓板のみ、小型成獣、前側関節面に刃物痕 |                       |                |                                    |
|     | Tr. 2 |              | 骨      | 鹿/右下顎骨、M2から後ろ側のみ残、若～成獣か(風化のため表面観察不可) |                       |                |                                    |

この種の内底を輪状釉剥ぎする福建産白磁碗には、高台に白泥を付けて重ね焼き時の熔着を防止した痕跡はよく見られるが、このような繊維状のものが付着した例は稀であり、この二つの碗は同じ窯の製品である可能性が高い。14・15は同安窯系青磁碗で、14は内外面に櫛描文を施し、15は小片のため文様の有無は不明であるが、恐らく無文のタイプと思われる。南宋前期（12世紀中～後半代）の所産である。16は黄釉陶器の平鉢で、碁笥底状の底部を有し、口縁は外に折り返し鏢状になる。口縁上面には白色の目痕が9ヵ所残る。浙江省越州窯一帯の製品で、博多遺跡群、及び周辺地域での出土状況から、12世紀後半～13世紀前半頃の所産と考えられる。

中国産陶磁器については、使用の痕跡が全く認められないことや、完形品、或いはそれに近いものが多く、また、同じ窯の製品と思われる11と12の白磁碗は重なった状態で出土したことなどから、これら中国産陶磁器は破損等によって海中に投棄されたとは考え難く、さらに出土状況等を考え合わせると、国産品も含めてそれぞれの出土遺物は共時性を伺わせる要素が強いと考えられる。使用時期の明確な土鍋の年代から、これら出土遺物はほぼ同時期の12世紀後半～13世紀前半頃に海底に埋没したものと捉えてよいだろう。

## 2. 潜水目視調査区確認遺物

(図6 17～20、表2、写真9)

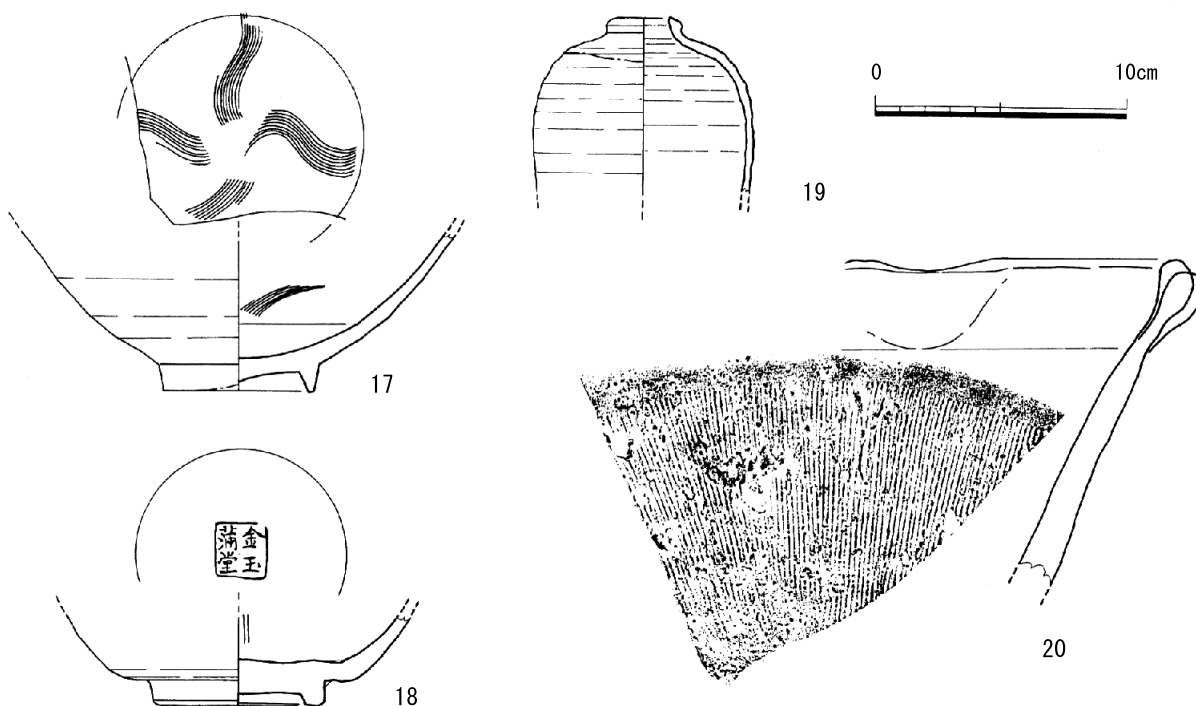


図6 潜水目視調査区回収遺物実測図 (1/3)

表2 潜水目視調査確認遺物一覧表

| 番号 | 検出<br>番号  | 処置 | 遺物<br>種類  | 器種       | 法量 (cm)        | 胎土                   | 釉調/施釉                    | 生産地                 | 年代              |
|----|-----------|----|-----------|----------|----------------|----------------------|--------------------------|---------------------|-----------------|
| 19 | P-01      | 回収 | 陶器        | 小口瓶      | 口径3.0          | 灰褐色、細かな黒色<br>粒含む、硬陶質 | 暗褐色不透明釉/外面肩～<br>口縁内面施釉   | 福建省<br>磁竈窯          | 12C後半～<br>13C中頃 |
|    | P-04      |    | 青磁        | 碗        |                |                      |                          | 浙江省<br>竜泉窯          | 12C中～<br>後半     |
|    | P-06      |    | 青磁        | 碗        |                |                      |                          | 浙江省<br>竜泉窯          | 12C中～<br>後半     |
|    | P-07      |    | 青磁        | 碗        |                |                      |                          | 浙江省<br>竜泉窯          | 12C中～<br>後半     |
|    | P-08      |    | 青磁        | 碗        |                |                      |                          | 浙江省<br>竜泉窯          | 12C中～<br>後半     |
|    | P-09      |    | 青磁        | 碗        |                |                      |                          | 浙江省<br>竜泉窯          | 12C中～<br>後半     |
| 18 | P-10      | 回収 | 青磁        | 碗        | 底径6.9          | 灰白色、磁質               | 淡青緑色透明釉、ガラス質<br>/豊付まで施釉  | 浙江省<br>竜泉窯          | 12C中～<br>後半     |
|    | P-11      |    | 白磁        | 碗        |                |                      | 内底輪状釉剥ぎ                  | 福建省<br>閩江流域         | 12C中～<br>後半     |
| 20 | P-12      | 回収 | 陶器        | 片口<br>搗鉢 |                | 赤褐色、細か<br>硬陶質        | 暗茶褐色不透明釉/外面下<br>半まで施釉    | 国産<br>(上野・高<br>取系?) | 近世              |
|    | P-13<br>① | 回収 | 円盤型<br>製品 |          | 直径18.0<br>厚3.0 | セメント                 |                          | 国産                  | 現代              |
|    | P-13<br>② |    | 青磁        | 碗        |                |                      |                          | 浙江省<br>竜泉窯          | 12C中～<br>後半     |
| 17 | P-15      | 回収 | 白磁        | 碗        | 底径6.0          | 淡灰白色、磁質              | 淡灰白色不透明釉、鈍い光<br>沢/高台まで施釉 | 福建省<br>閩清窯系         | 12C前半～<br>後半    |

この調査区においては、基本的に目視調査を行い、目視のみでは確認不可能な遺物のみ回収した。確認した遺物は国産陶磁器と中国産陶磁器である。中国産陶磁器はほとんどが、12世紀中～後半の製品、特に竜泉窯系青磁が主体となり、これまでのこの湾内において調査・確認されたものと同じ製品である。17は福建省閩清窯の南宋初頭～前半（12世紀前半～後半）の白磁碗である。内底と内側面に櫛描文が施される。18は南宋前半（12世紀中～後半）の竜泉窯青磁碗である。内底に「金玉満堂」のスタンプ文が入る。19は福建省磁竈曾竹山窯の小口瓶で、ロクロ成形によって極めて薄く作られた長胴小形品である。口縁から肩部にかけてのみ褐釉を施す。口縁上端面がやや外側に下がるが、顕著な内面の突出は伺われず、このような口縁形態の製品は博多遺跡群では12世紀後半～13世紀中頃の遺構から出土している。2006年度の調査では、今回の調査区に近い地点から、肩部から底部の残片が確認・回収されており（小値賀町教委2007 第13図34）、同一個体の可能性がある。20は国産陶器片口搗鉢である。口縁部は玉縁状を呈する。摺り目は密で上端部は横ナデによりきれいに揃えられる。外面体部最下部に回転ヘラ削りの痕跡が認められることから平底を呈すると思われる、上野・高取系の19世紀江戸後期位の製品であろうか。P-13①の円盤状製品はセメント製で現代のものであるが、用途は不明である。

### 3. 墨書陶磁器出土の一考察

今回の調査における特記事項は2点の墨書陶磁器が出土し、しかもこれらが、全出土量としては少ないながらその他の出土遺物と共に、比較的年代のはっきりとした一括品として捉えられる可能性が高いことである。これまで、中国大陆と博多を結ぶ交易ルート上に位置するこの海域における墨書陶磁器の出土例はなく（註1）、今回出土した2点の墨書陶磁器の持つ意味について、若干の考察を試みる。

墨書陶磁器、特に「綱首（貿易を担った商人の頭）」銘や積荷量を示すものなど、交易と関連付けられる内容を示す墨書陶磁器は、最近の調査研究により日本国内各地からの出土例を少しずつ増加させている。しかし、その量は圧倒的の量差のある中世貿易の窓口であった博多遺跡群に及ぶものではなく、依然として博多と日宋貿易を関連付ける重要な遺物であることに違いはない。その意味については諸説ありまだ見解の統一を見ていないが、近年では中国大陆や韓半島近海海底からの出土例も報告されるようになり、個々の「綱首」が取り扱う積荷の所属を示すものとして理解されるようになってきている。

五島列島を含む肥前地域では、伊万里湾に面した長崎県松浦市楼厓田遺跡と大村湾に面した長崎県東彼杵郡白井川遺跡から「綱」墨書銘の中国産白磁がそれぞれ1点出土している。いずれも今回出土した白磁碗と同類の11C後半～12C前半と12C中～後半の福建産白磁である（宮崎1996）。大庭は1218年に起きた博多綱首・張光安の殺害事件に絡めて、当時の住蕃貿易の様相について論じており（大庭1994）、その中で、大村湾や伊万里湾など肥前沿海部における遺跡の貿易陶磁器、及び畿内産土器などの出土状況から、博多周辺地域での交易の様相を以下のように想定している。

"白井川遺跡は中世九条家領に属し、この付近で九条家が絡んだ交易が行われていた"。ただし、博多遺跡群のようにコンテナとして利用された中国産容器類の出土が極めて少なく、"しばしば宋船の往路をねらった小規模な交易が行われたが、それは積荷の一部をおろす程度に留まっていた"。さらに、"12世紀末は、平家の滅亡と鎌倉幕府鎮西奉行の下向により、それまで大宰府府官として貿易に関わってきた九州の諸豪族がその地位を追われた時期であり、それぞれの所領に戻った彼らが、それまでに培ってきた宋商人とのコネクションを利用し、領内沿海部での私貿易に力を入れたに違いない"。とする。楼厓田遺跡についても同様の想定をしている。

今回出土した遺物の推定埋没年代はまさにこの時期である（註2）。9の白磁碗に記された「十」などのように数字を記した墨書は博多遺跡群でもかなりの量が出土しており、数字の後に「口」や「口内」などを付した墨書も多く、取り扱った陶磁器のまとめ（梱包単位など）を示すものとも考えられている。10の白磁碗の墨書内容は不明であるが、可能性の一つとして図示したような天地を想定すると、下半部左側（ヘン）は「糸」のくずし字とも捉えることもでき、そう見ると右側（ツクリ）は「綱」の「門」とも見て取れる。しかし、仮に下半部が「綱」という漢字であれば、それに対して上半部があまりにも記号的であり、上下二文字の整合性がない。或いは天地を逆に見ると、花押のように見えなくもない。

いずれにしても、本来ならば、この種の墨書陶磁器は商品価値が落ち、荷揚げされた博多でふり落とされるはずの製品である。また、同じ窯の製品と考えられる二つの白磁碗が重なった状態で出土したことは、これらが同時に船積みされたもので、博多へ到着して荷解きをする前の状況を示すものとも考えられる。さらに、同時に検出された灯明皿や煤の厚く付着した土鍋、などは船上での生活を物語るもので、船主が博多に拠点をおいて活動した「博多綱首」であれば、乗組員等も日本人と中国人の混成部隊であったことも十分考えられ、船上で使用する日用品は国内産であっても何ら不思議で



はない。以上から、今回の出土物は中國大陸から博多へ向かう途中、この一帯での取引のため湾内に停泊し、何らかの理由で沈没した宋船の積載品と捉えることもできる。ただし、これはあくまでも、9・10の墨書が貿易と関連した内容のものであるということと、大庭の想定を前提にした可能性の一つにすぎない。博多遺跡群以外、特に沿海部に限らず、九州内陸部や、さらには東北地方などにおける最近の墨書陶磁器の出土例の増加を考慮すれば、根拠が不確かであることは否めない。

しかし、2006年度調査では今回の調査区近く生簀下の海底で、中国船のものと思われる完形の碇石（碇石小値賀14号）が発見されており、さらに同調査区の目視及び試掘調査によって、今回の出土品と同時期の中国陶磁器、特にコンテナとして使用された可能性のある壺などの容器類も出土しており（小値賀町教委2007）、この付近に沈没船の存在を想定することは可能であろう。今後のこの一帯での調査継続と資料増加に期待したい。

墨書の解説にあたって、福岡市埋蔵文化財センターでは赤外線写真による分析をしていただき、福岡市博物館の林文理氏と宮野弘樹氏のご教示を賜った。また、獣骨等の分析は福岡市埋蔵文化財課・屋山洋氏にお願いした。記して謝意としたい。（田中克子）

#### 【註】

1. 1931年に博多湾において「張綱」墨書銘天目碗が引き揚げられている（山本1932）が、明確な出土状況等は判明していない。また、発掘調査による出土例としては、年代が明確な長崎県鷹島海底遺跡出土の「王百戸」墨書銘青磁碗が挙げられる（長崎県教委2003）が、この遺跡は元寇関連というある意味特殊な遺跡であり、その墨書については交易との関連性は伺われない。

2. 旧稿・2009年度調査概要において、筆者は8～10の白磁碗の生産年代を他の出土遺物を若干遡る11世紀後半～12世紀前半と捉え、生産地に残されたものが一緒に船積みされたものと推定した（2010田中・林田）。しかし、その後博多遺跡群における中国陶磁器の出土状況を再検討した結果、図6-8～10のような、高台が高く口縁端部を水平に仕上げる福建産白磁碗は、11世紀後半～末のヘラ切底の土師器のみを伴う遺構からは出土せず、糸切底土師器が混在し始める12世紀前半に出現し、中～後半に多く出土することが明確になった。従って、これらの白磁も他の中国産陶磁器と概ね同じ時期の製品と捉えることができ、ここに訂正する。

#### 【参考・引用文献】

大庭康時

1994「博多綱首殺人事件—中世前期博多をめぐる雑感—」『法嗟』第3号 博多研究会

2003「博多遺跡群出土墨書資料集成2」『博多研究会誌』第11号 博多研究会

2009『中世日本最大の貿易都市 博多遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ061」新泉社

小値賀町教育委員会

2007「小値賀島周辺海域及び前方湾海底遺跡調査報告書」『小値賀町文化財調査報告書』第18集

2008「小値賀島前方湾海底遺跡調査報告書」『小値賀町文化財調査報告書』第20集

2009「小値賀島前方湾海底遺跡調査報告書Ⅱ」『小値賀町文化財調査報告書』第21集

田中克子

2008「陶磁の海道—中国陶磁器」『中世都市 博多を掘る』海鳥社

田中克子・林田憲三2010「2009年度・小値賀島前方湾海底遺跡調査概要」『水中考古学研究』

第3号、アジア水中考古学研究所、43頁

長崎県教育委員会2003『鷹島海底遺跡Ⅶ』鷹島町文化財調査報告書第7集

宮崎貴夫1996「長崎県の中世墨書資料」『博多遺跡群出土墨書資料集成』博多研究会

山本 博1932「元寇役と博多湾出土遺物」(上・下)『歴史と地理』30-3・4

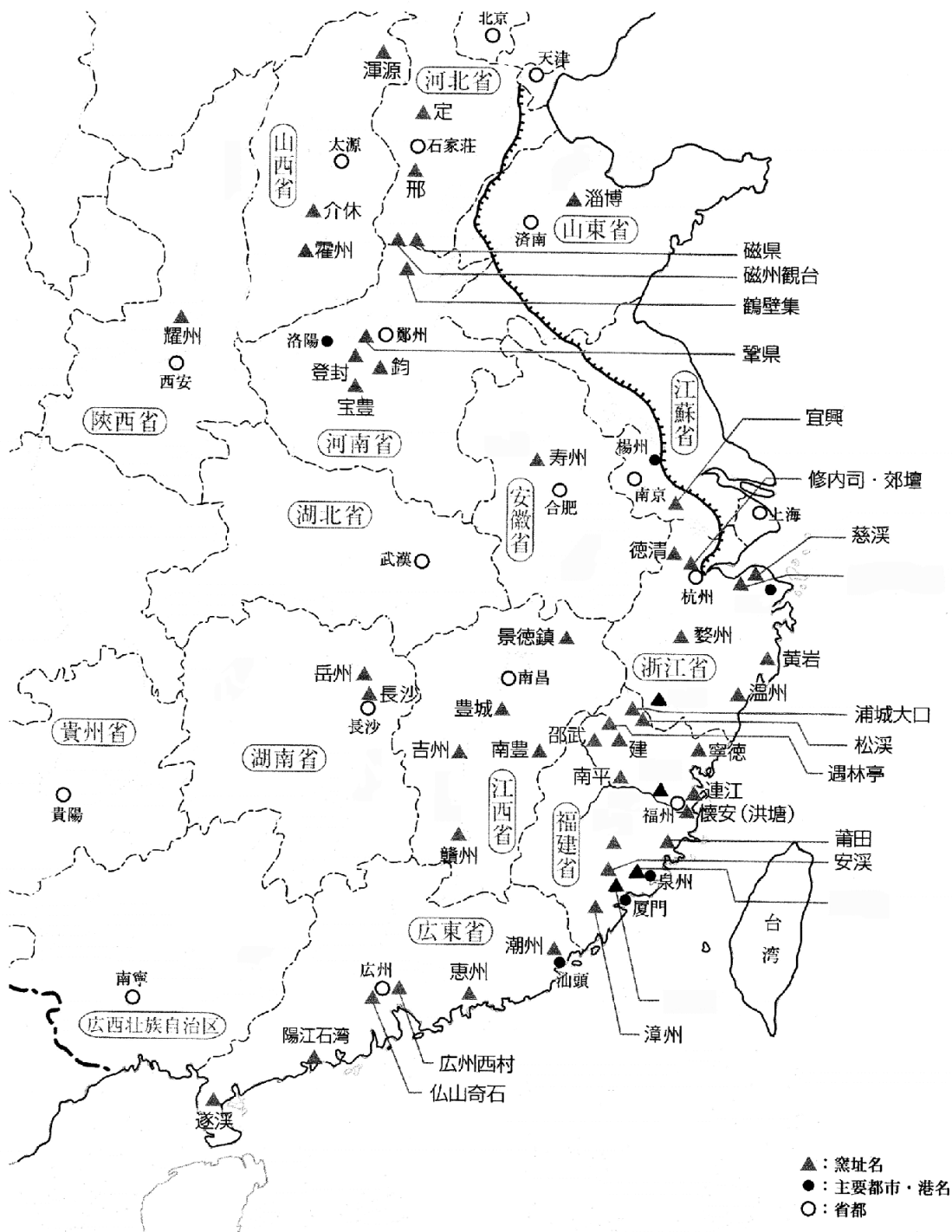
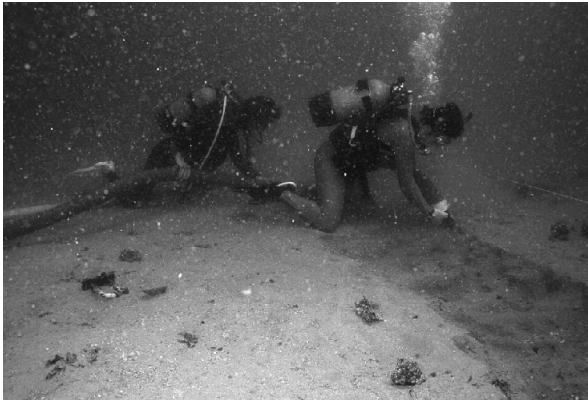
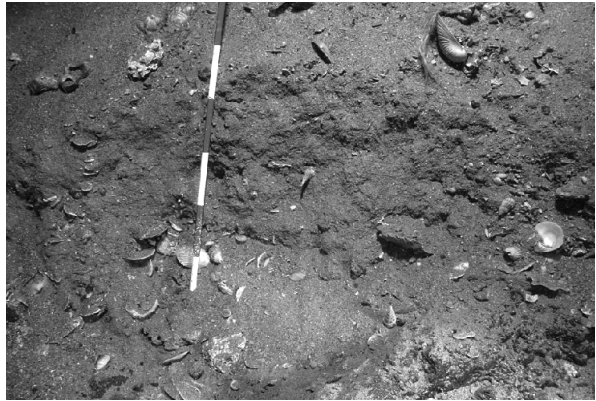


図7 中国主要窯址図(唐～明代末)(参考文献「田中2008」より転載)





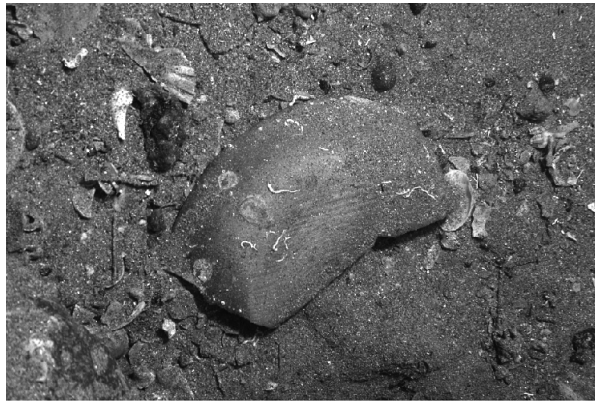
1. 第1トレンチ上層（シルト層）の発掘風景



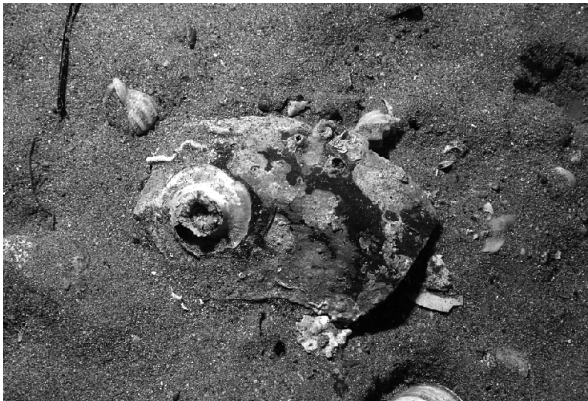
2. 第1トレンチ東側土層状況



3. 土師器小皿（1）



4. 土師器坏（2）



5. 土師器坏（4）



6. 白磁碗（8）



7. 小値賀島12号碇石  
（調査基点-右端角）

写真3 第1トレンチ発掘風景・土層及び遺物出土状況





1. 第2トレンチ遺物出土状況



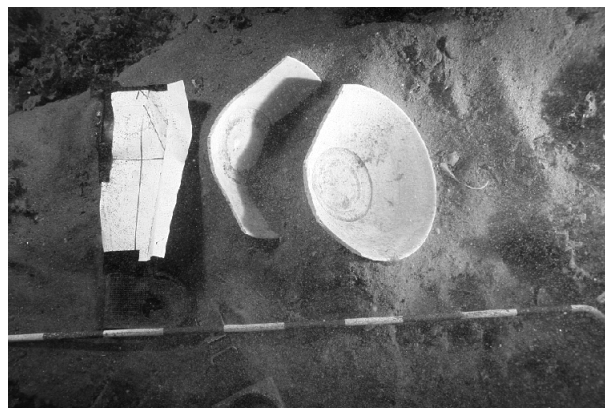
2. 土鍋（6）



3. 墨書白磁碗（9）



4. 墨書白磁碗（10）



5. 白磁碗（11（右）・12（左））

写真4 第2トレンチ遺物出土状況（1）





1. 白磁碗 (13)



2. 左：白磁碗 (13) 右：白磁碗 (11(右)・12(左))



3. 左：白磁碗 (9) 右：黄釉陶器平鉢 (16)



4. 黄釉陶器平鉢 (16)



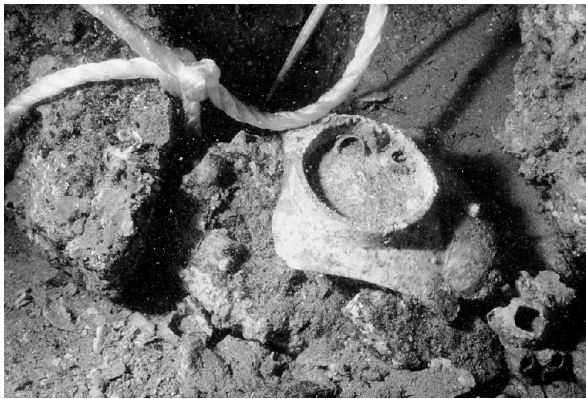
5. 鹿の左脛骨



6. 鹿の右下顎骨

写真5 第2トレンチ遺物出土状況 (2)

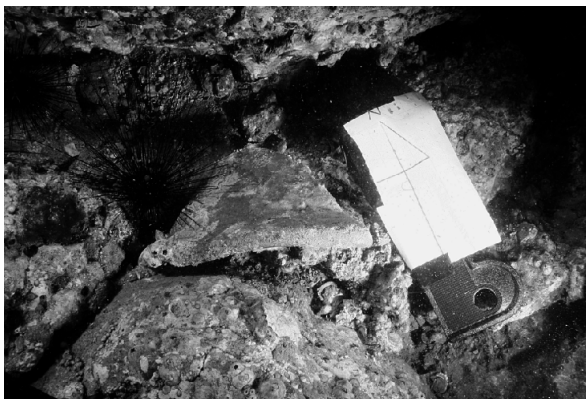




1. 閩清窯系白磁碗 (17)



2. 陶器小口瓶 (19)



3. 陶器片口播鉢 (20)



4. 竜泉窯青磁碗 (P-06)

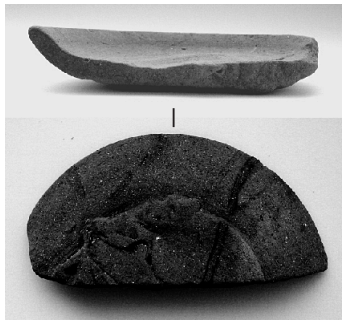


5. 円盤型製品 (P-13) 左  
竜泉窯青磁碗 (P-13) 右

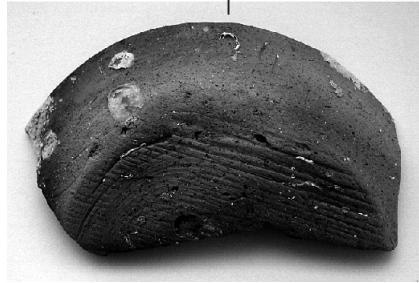
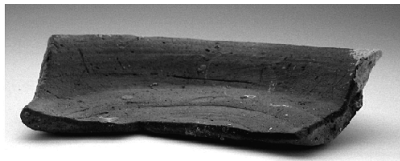


6. 左からトウーサ博士、ガエタノ技師、  
ペトレッラ博士

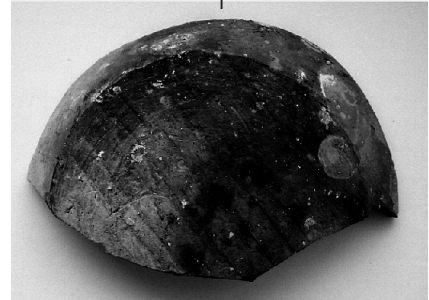
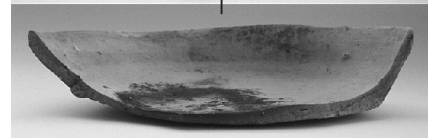
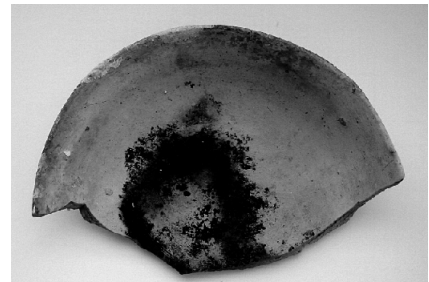
写真6 潜水目視調査区回収遺物の原位置状況



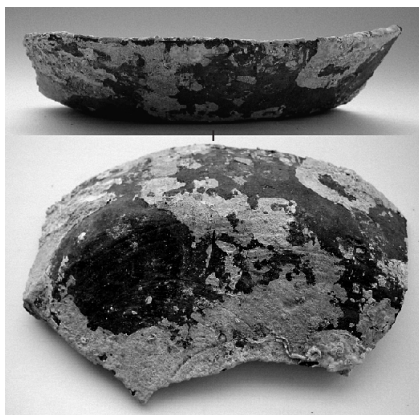
1



2



3



4



5



6



7

写真7 トレンチ調査区出土遺物(1)(縮尺不同)



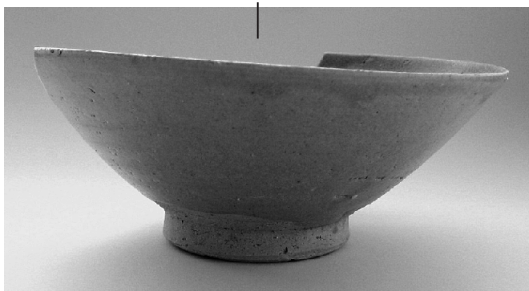
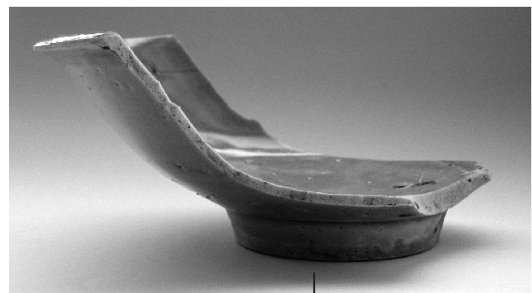
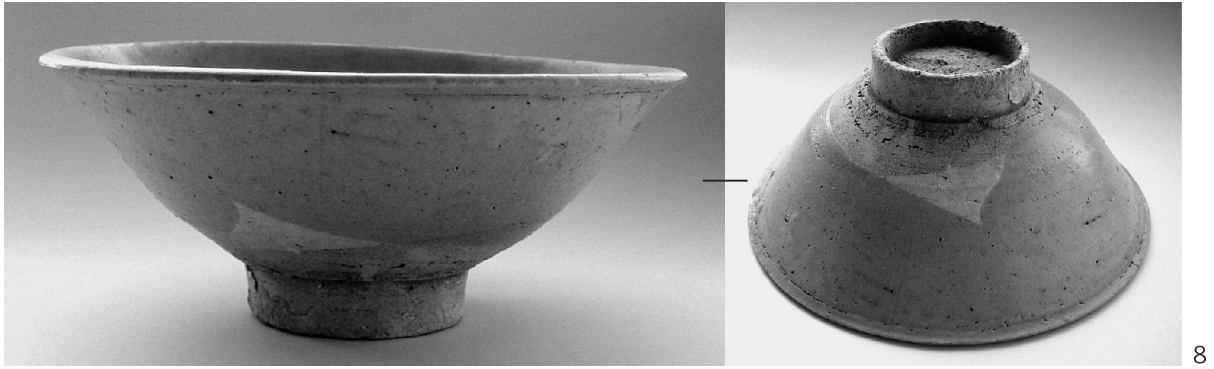


写真8 トレンチ調査区出土遺物（2）（縮尺不同）

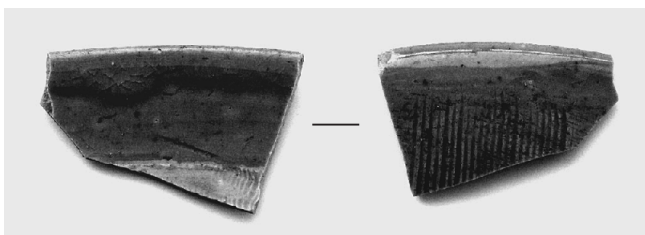




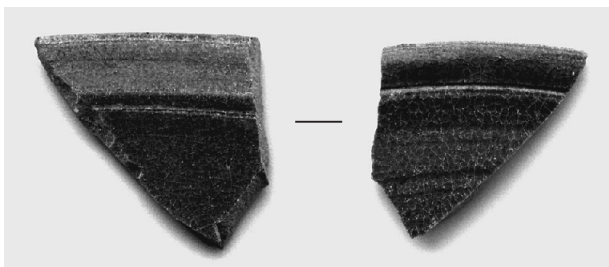
13



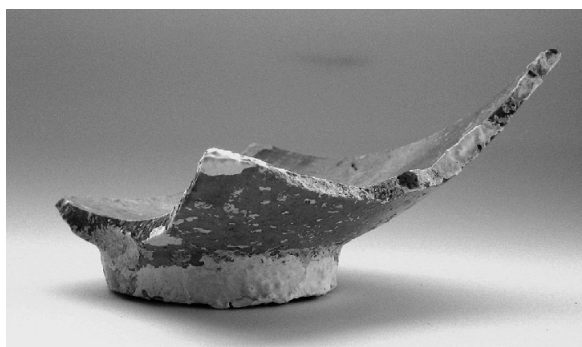
16



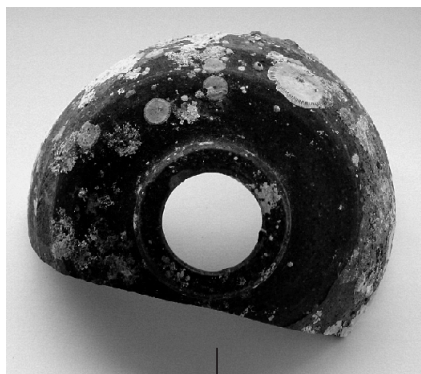
14



15



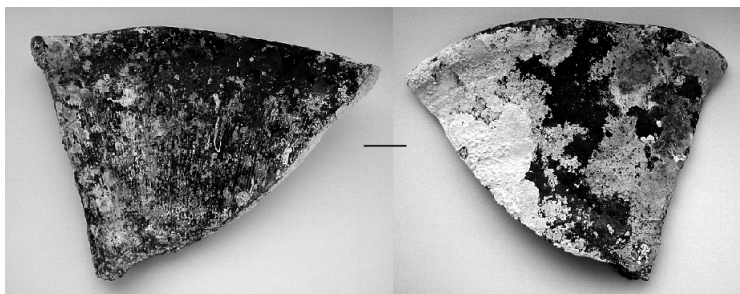
17



19



18



20

写真9 発掘調査区・潜水目視調査区出土遺物（縮尺不同）

# 2010年度小値賀島前方湾海底遺跡調査

加藤 隆也・小川 光彦・田中 克子



図1 前方湾発掘調査地点位置図  
(海上保安庁刊行W223に加筆)

## 調査の概要

特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所は、昨年度（2009）に引き続き日本財団助成事業「海の文化遺産総合プロジェクト」として五島列島の北側に位置する小値賀島（長崎県北松浦郡小値賀町）の前方湾を中心に水中遺跡の調査を実施した。（図1）

今年度の調査計画は、継続的に行われ成果を上げている水中発掘調査に加え、新たにイタリア人技術者を中心にサイド・スキャン・ソナーによる小値賀島周辺に及ぶ海底探査の2本立てとした。調査期間は、準備日と撤収日を前後に含む平成22年8月20日(金)から同年8月30日(月)まで計11日間とした。調査人員は、考古学研究者や大学院生らを中心とする日本人スタッフ以外に、イタリアのナポリ大学関係者とシシリー州海洋考古局から昨年より継続参加者を含む13名、新たにフランスから1名、大韓民国のWOORI研究院から3名の職員とプロダイバー1名の参加があり、国際色豊かなプロジェクトとなった。

湾内の状況は、昨年より一部の養殖用生簀が撤去されており、前年の調査成果を踏襲できる形で水中発掘の計画に努めた。協議の結果、漁業協

同組合をはじめ関係各位のご理解とご協力を得ることができ、昨年同様に生簀付近での調査が可能となった。水中発掘調査は、湾内の最深部側の状況把握を目的として前年の2009年に設定された2箇所の特レンチ（発掘溝）調査地点を南延して調査地を設定することとした。また、かつて生簀直下に位置していたため状況が把握されていなかった南-北方向の瀬においても、予備調査として簡易的な目視調査を行う計画とした。

調査特レンチの設定には、前年調査の基点（基10-1）となっている鉄製錨を共用した。新たな特レンチの設定は、2009年調査の第1特レンチから第2特レンチをつないだ磁方位南（180°）方向ラインを延長し、基点より50m地点を第3特レンチ北西隅角とし、更に15m南延した地点（基点より65m）を第4特レンチの北西隅角とした。各特レンチの平面規模は南北長5m、幅2mを基本とした。

海底の水深は17～18mであり、潜水調査は作業安全基準を遵守し、一班の水中調査作業を基本30分間とし、作業終了後水面下5mにて5分間の安全停止を行うこととした。特レンチ掘削作業は3班編成とし、午前1回、午後1回の作業を基本とした。イタリア班は午前と午後で潜水調査班とソナー探査班が交代し1日1回のみの潜水作業のため、掘削作業時間を45分間とした。（図2）

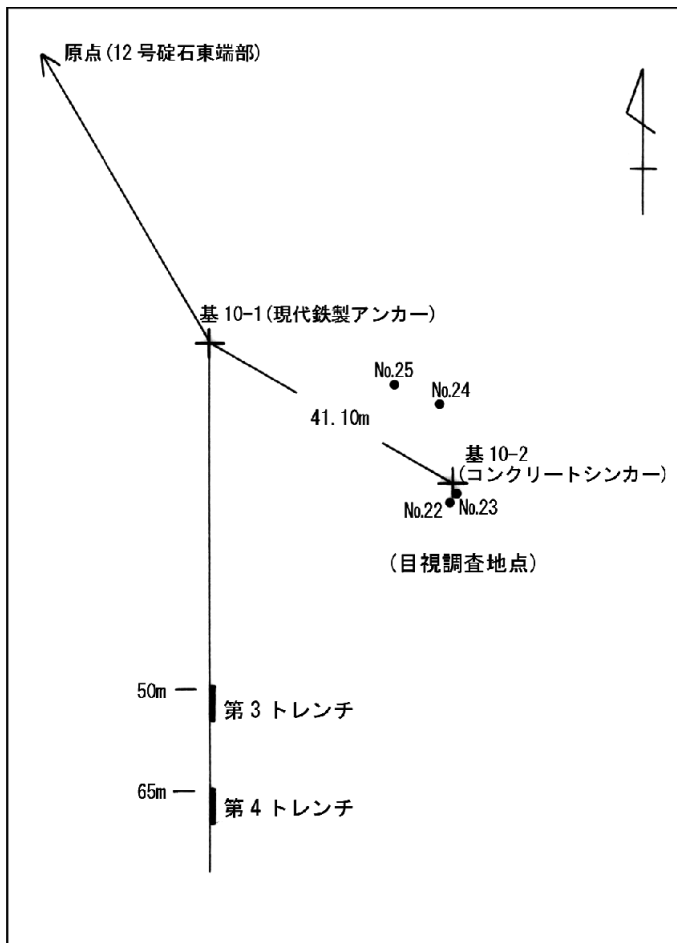


図2 トレンチ・目視調査地点位置図



写真1 海底固定モニターカメラ

水中発掘調査の主な作業は、ドレッジと呼ばれる掃除機のような吸引力を持ったパイプで、海底の土砂の変化に細心の注意を払いつつ、大胆かつ繊細に吸い揚げていくのである。今回調査で使ったドレッジの吸い込み口には、作業が必要に応じて手元で吸引力を調整できるようハンドル操作によるバタフライ弁が付設され（現場ではドラゴンヘッドと呼称）改良が行われている。作業者は当初、ドレッジ先端部に構造物が付加されることに少々抵抗があったが、吸い込み口の先端重量が増すことにより吸入口が安定し、結果的に作業効率の向上につながった。

また、新たな試みとしてイタリアチームが持ち込んだ海底固定カメラのデモンストレーションを行った。船上のパーソナルコンピュータから海底の掘削トレンチ際に設置したカメラレンズの方向・角度を遠隔操作して、作業状況や海底環境をモニタリングするものである。結果的には、一定以上の透明度が得られない湾内での使用は限定されたものになりそうである。ただし、常に危険が伴う水中作業の安全管理上では有用かと思われる。（写真1）

海底に設定した発掘トレンチ内の基本層序は、上層約15～20cmは現代遺物を含む灰色シルト層であり、下層はよく締まった灰色砂質層に貝殻が混じる層であった。下層は掘削深度を増すごとに含まれる貝殻の大きさと量が増し、拳大の礫が混じるようになる。その変化は漸次的であり、一部を除き層位的に把握されるものではなかった。（写真2）

両トレンチとも60cm程度の掘削を行ったが、更に下位の状況は調査時間の関係上確認していない。



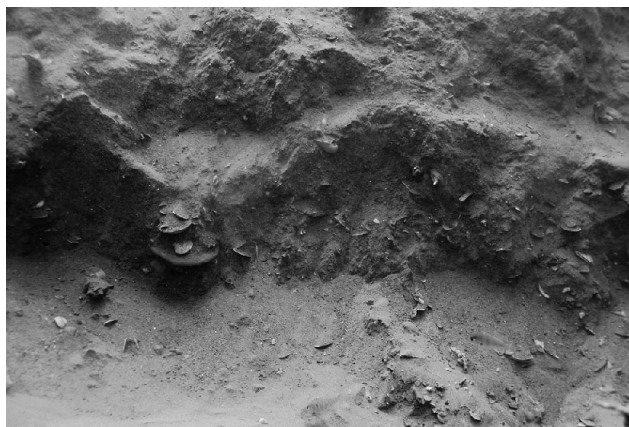


写真2 第3トレンチ西側土層状況（左：上層 右：下層）



写真3 第3トレンチの白磁碗（No.4）検出状況



写真4 イタリアチーム第3トレンチ発掘状況

第3トレンチの南端にて遺存良好な白磁碗が出土し、状況把握のためトレンチの南側を一部拡張して掘削調査を継続した。（写真3・4）

第4トレンチでは白磁・染付のほか獣骨や土師器などが出土した。また、今回の調査地の西側で行われた南-北方向の瀬の簡易的目視調査では、新たに4点の中国・国産陶磁器を確認した。（写真5・6）

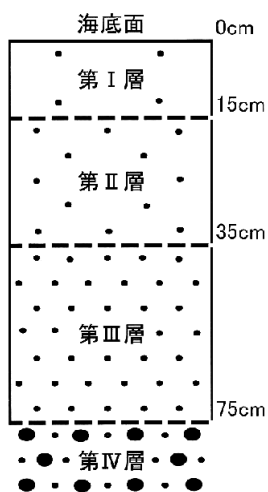
今回初の試みとなるサイドスキャン・ソナーによる探査の調査範囲は前方湾のみならず、その周辺全域を対象とし、過去聞き取り調査等にて情報のあった地域を中心に時間の許す限り調査を行った。（写真7）

ソナーにより異常反応が確認されたポイントには随時潜水による目視調査を行い、その確認にあたった。

調査成果として、ソナー探査では、異常反応地点は確認されるものの目視調査による新しい知見を得ることは出来なかった。（写真8・9）

発掘トレンチからは、昨年同様中国宋代陶磁器と国産の土師器が出土しており、湾内の最深部側に向けても遺物の散布は途切れることがなく、浅深を問わず湾内北側全域に遺物の集中堆積が存在する可能性がうかがわれる結果となった。





基本層序

### 基本層序

T3 トレンチの53～54.5m付近の西壁断面における海底堆積層の観察である。

第I層：灰色細砂、層厚15cm、フジツボ・貝殻小破片を少量含む。

第II層：明灰色砂質シルト、層厚25cm、粘性あり、貝殻小破片を含む。

第III層：明灰色砂質シルト、層厚35cm、粘性あり、貝殻少破片を多く含む。

第IV層：明灰色砂質シルト、拳大の礫、死貝・大型の貝殻破片を多く含む。

遺物の出土層位は、肥前系染付碗（No.12）が第I層～第II層にかけての上層よりの出土であったが、その他の中世前半期に比定される土器・陶磁器の出土は、概ね第III層中～第III層下部にかけてであった。しかし、2箇所のトレンチのうち第IV層の大型貝殻破片を多く含む層の上面まで掘削を行ったのは、この基本層序の観察を行ったT3の53～54.5m付近のみであり、時間的な制約により各トレンチ内の無遺物層の確認までは行っていない。したがって、それぞれの遺物検出レベルが中世前半頃の遺物検出面であるのか、あるいは遺物検出面レベルの下部に遺物包含層としての厚みを持つものであるかは今後の課題である。



写真5 第4トレンチの白磁碗(No.18)出土状況

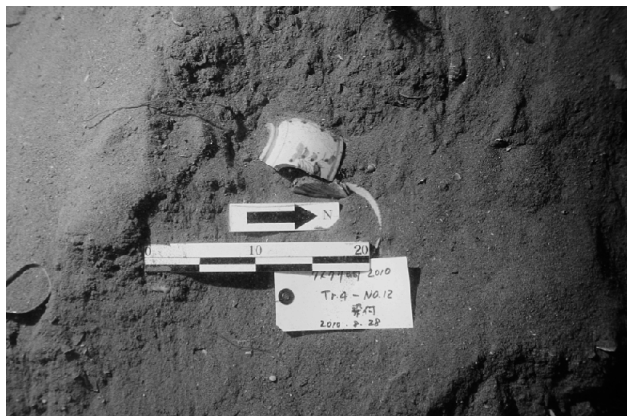


写真6 第4トレンチの肥前染付け碗(No.12)出土状況

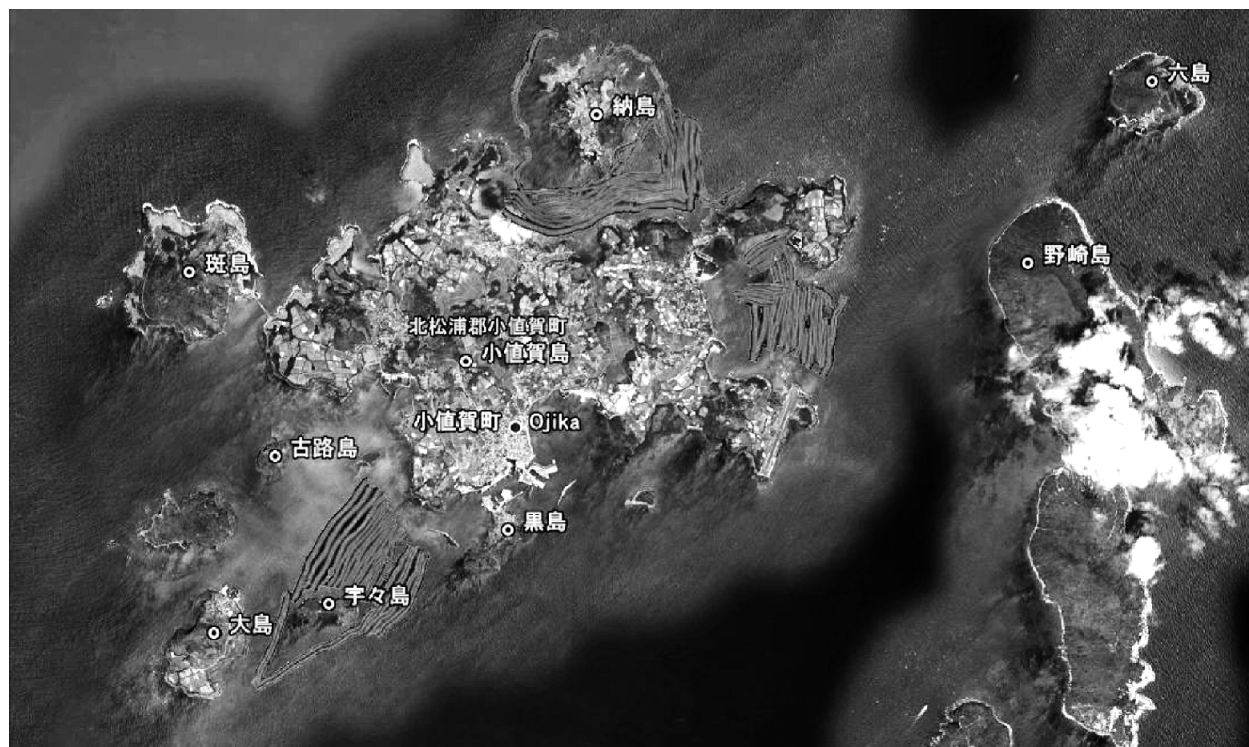


写真7 サイドスキャン・ソナー探査海域と曳航体の測線



写真8 ソナー曳航体の海中状況



写真9 異常反応地点の確認潜水

### 発掘調査出土遺物

(写真10～14、16、図3:表3)

土師器、陶磁器（中国産、国産）、自然遺物（獣骨、木片）（表1）が出土した。出土位置については（図3,表1・3）に示した通りである。遺物はいずれもローリングによる摩耗を受けておらず、また貝などの付着も認められない。恐らく、海底に沈んだ後、それほどの時間を置かずに海底の砂泥に埋まり、ほとんど移動していないと思われる。

#### 1. 土師器（図4-10,13,17: 写真16-10,13,17）

3点出土し、全て糸切り底で、小皿と坏がある。10と13は小皿で、それぞれ口径8.8cm－器高0.8cm、口径9.0cm－器高1.2cmを測る。17は坏で、口径15.0cm－器高2.6cm、底部には板状痕が認められる。



写真10 第4トレンチの土師皿（No.10）出土状況



写真11 第4トレンチの土師坏（No.17）出土状況



## 2. 陶磁器（図4-4,5,12,18,19,21）

中国産と国産がある。中国産は5点でいずれも白磁、国産は染付（図4-12;写真16-12）1点である。

### 《中国産白磁》

4・18・19は高台が細く高く、口縁上面を水平に仕上げる碗で、いずれも同じタイプである。

4は体部から口縁の1/4程を欠きほぼ完存する。淡灰白色の磁胎で、わずかに黄味を帯びた淡灰白色の不透明釉が施される。内面口縁下と内底に細い沈圈線が巡る。口径17.4cm－器高6.7cm－高台径5.8cmを測る。18と19は内底と内側面に櫛描文が施される。胎土・釉調もほぼ同じで、淡灰白色の磁胎、釉は淡灰白色半透明で細かな氷裂が入る。出土地点も近いことから同一個体の可能性が高い。18は口径17.0cm－器高7.0cm－高台径6.6cmである。

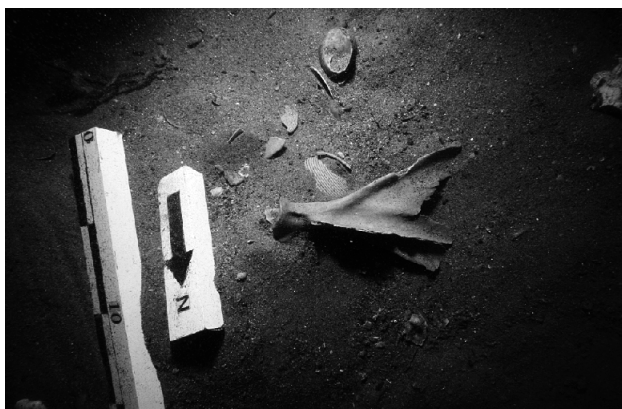


写真12 鹿肩胛骨 (No. 3) 出土状況



写真13 鹿中足骨 (No. 16) 出土状況



写真14 第3トレンチの白磁碗 (No. 4) 出土状況



写真15 第4トレンチ白磁碗 (No. 19) 出土状況

21は小形の浅形碗である。第3トレンチ2層掘り下げ時にドレッジにより泥と共に吸い込んだと思

21は小形の浅形碗である。第3トレンチ2層掘り下げ時にドレッジにより泥と共に吸い込んだと思われる、排出口から採取された3片が接合した。胎土は褐色～灰色で完全に磁化しておらず、釉も焼成不足のためか、白濁した淡灰色を呈す。外反口縁で内面口縁下に沈線が巡る。口径10.2cm—器高3.3cm—高台径3.4cmを測る。

5は底部片である。胎土は淡灰色、内底に黄味がかった透明釉が残る。高台は径5.0cmで低く、恐らく小形の碗であろう。

以上は全て、福建省産で、閩江流域一帯の南宋初頭～前半（12C前半～後半代）の製品である。

4・18・19はこれまでの前方湾内調査で最も多く確認された白磁碗と同じ種類の製品だが、21のような小形品は初めての出土である。

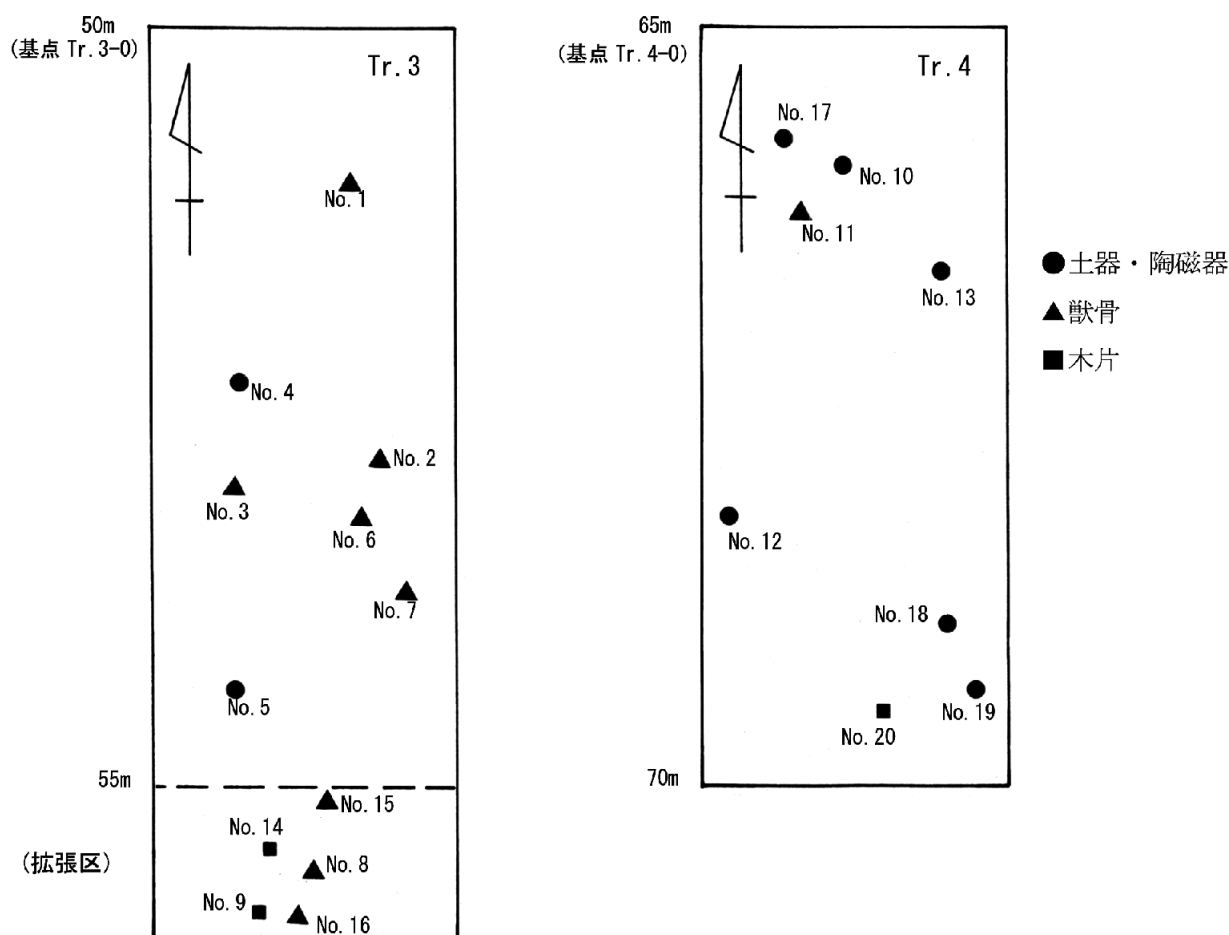


図3 遺物出土位置図 (1/50)



# 《国産》

12は肥前系の染付丸碗である。器壁は比較的厚く、青味を帯びた透明釉が全面に施される。口径10.0cm－器高6.2cm－高台径4.6cmを測る。網目と花卉を組み合わせた文様と草花文がそれぞれ対になって外面4か所に描かれていたと思われる。1640～1660年代頃の製品である。

以上の他、3点の木片が出土した。他の土器・陶磁器と近似したレベルで出土したため同様に遺物として取り上げたが、特に顕著な加工痕は認められなかった。

## 目視調査確認遺物（図2、表3）

発掘調査と並行して行った目視調査では5点の陶磁器を確認したが、遺物は回収していない。確認位置については図2、表3に示した通りである。

No.22は南宋前期（12世紀中～後半）の竜泉窯青磁碗、No.23は中国産白磁で、同じく南宋前期の内底輪状釉剥ぎの碗と思われる。

No.24は南宋初頭～前半（12世紀前半～後半）の福建産白磁碗で、第3トレンチ出土の碗（図4-4）と同じ種類のものである。No.25では2点を確認した。一つは肥前系の染付丸碗、もう一つは恐らく中国産と思われる陶器壺の破片である。

表1 2010年度調査：動物の遺存体一覧

| 遺物番号   | 大分類 | 小分類     | 部位名       | 左右 | 部分1       | 部分2   | 成長度   | 切痕          | 備考                                                |
|--------|-----|---------|-----------|----|-----------|-------|-------|-------------|---------------------------------------------------|
| No. 1  | 哺乳類 | イノシシ・シカ | 橈骨もしくは大腿骨 |    |           |       | 未骨化   | あり          |                                                   |
| No. 2  | 哺乳類 | シカ      | 中手骨       | 左右 | 完形        |       | 化骨化済み | 細かな解体痕有り    |                                                   |
| No. 3  | 哺乳類 | シカ      | 肩胛骨       | 右  | 近位部細片化    |       | 化骨化済み | 内側前縁に解体痕    |                                                   |
| No. 6  | 魚類  | タイ類     | 前頭骨       |    | 緑位端欠損     |       |       | なし          | 幅が4.77cmと非常に大型である                                 |
| No. 7  | 魚類  | タイ類     | 前頭骨       |    | 左側を欠損     |       |       | なし          |                                                   |
| No. 8  | 哺乳類 | イノシシ    | 下顎        | 左  | 下顎枝欠損     |       | 幼獣    | 遺存不良のため不明   | ほとんど乳歯が残る。M1が萌出中                                  |
| No. 15 | 哺乳類 | シカ      | 上腕骨       | 左右 | 遠位部       |       | 化骨化済み | 表面遺存悪く不明    |                                                   |
| No. 16 | 哺乳類 | シカ      | 中足骨       | 左？ | 中央軸から内側のみ | 近位部欠損 | 化骨化済み | 後面遠位部に解体痕有り | 骨角器素材 鋸で浅く切れ目を入れて（浅すぎて役に立っていない）ナタで切断 少し中央線からずれている |

※動物遺存体の同定と表1の作成は尾山 洋氏（福岡市埋蔵文化財課）の協力を得た。

表2 2010年度調査:調査基点一覧

| 地 点    | 基 点   | 基準線磁方位 | 基点からの距離<br>(m) | 基準線からの距離<br>(m) | 備 考           |
|--------|-------|--------|----------------|-----------------|---------------|
| 原点     | —     | —      | —              | —               | 12号礎石東端部      |
| 基10-1  | 原点    | 135°   | 130            | 0.0             | 現代鉄製アンカー      |
| 基10-2  | 基10-1 | 120°   | 41.1           | 0.0             | コンクリートシンカー北西隅 |
| Tr.3-0 | 基10-1 | 180°   | 50.0           | 0.0             | Tr.3北西隅       |
| Tr.4-0 | 基10-1 | 180°   | 65.0           | 0.0             | Tr.4北西隅       |

表3 2010年度調査:遺物検出地点一覧

| 遺物<br>番号 | 遺 物 種 類    | 調 査 地 点     | 基 点    | 基準線磁<br>方位 | 基点から<br>の距離<br>(m) | 基準線か<br>らの距離<br>(m) | 基点Tr.3-0<br>からの比高<br>差(m)※ | 標高(m)  |
|----------|------------|-------------|--------|------------|--------------------|---------------------|----------------------------|--------|
| NO.1     | 骨          | Tr.3        | Tr.3-0 | 180°       | 1.02               | E1.32               | -0.63                      | -15.53 |
| NO.2     | 骨          | Tr.3        | Tr.3-0 | 180°       | 2.85               | E1.50               | -0.75                      | -15.65 |
| NO.3     | 骨          | Tr.3        | Tr.3-0 | 180°       | 3.00               | E0.52               | -0.67                      | -15.57 |
| NO.4     | 中国産白磁      | Tr.3-2層     | Tr.3-0 | 180°       | 2.30               | E0.56               | -0.60                      | -15.50 |
| NO.5     | 中国産白磁      | Tr.3        | Tr.3-0 | 180°       | 4.35               | E0.52               | -0.52                      | -15.42 |
| NO.6     | 骨          | Tr.3        | Tr.3-0 | 180°       | 3.20               | E1.35               | -0.67                      | -15.57 |
| NO.7     | 骨          | Tr.3        | Tr.3-0 | 180°       | 3.70               | E1.68               | -0.70                      | -15.60 |
| NO.8     | 骨          | Tr.3拡張区     | Tr.3-0 | 180°       | 5.55               | E1.05               | -0.59                      | -15.49 |
| NO.9     | 木片         | Tr.3拡張区     | Tr.3-0 | 180°       | 5.80               | E0.70               | -0.56                      | -15.46 |
| NO.10    | 土師器        | Tr.4        | Tr.4-0 | 180°       | 0.90               | E0.95               | -0.60                      | -15.50 |
| NO.11    | 骨(調査中行方不明) | Tr.4        | Tr.4-0 | 180°       | 1.21               | E0.65               | -0.74                      | -15.64 |
| NO.12    | 国産染付       | Tr.4        | Tr.4-0 | 180°       | 3.24               | E0.18               | -0.49                      | -15.39 |
| NO.13    | 土師器        | Tr.4        | Tr.4-0 | 180°       | 1.85               | E1.54               | -0.80                      | -15.70 |
| NO.14    | 木片         | Tr.3拡張区     | Tr.3-0 | 180°       | 5.41               | E0.78               | -0.71                      | -15.61 |
| NO.15    | 骨          | Tr.3拡張区     | Tr.3-0 | 180°       | 5.05               | E1.15               | -0.65                      | -15.55 |
| NO.16    | 骨          | Tr.3拡張区     | Tr.3-0 | 180°       | 5.85               | E0.94               | -0.55                      | -15.45 |
| NO.17    | 土師器        | Tr.4        | Tr.4-0 | 180°       | 0.71               | E0.54               | -0.77                      | -15.67 |
| NO.18    | 中国産白磁      | Tr.4        | Tr.4-0 | 180°       | 3.95               | E1.60               | -1.04                      | -15.94 |
| NO.19    | 中国産白磁      | Tr.4        | Tr.4-0 | 180°       | 4.40               | E1.80               | -0.84                      | -15.74 |
| NO.20    | 木片         | Tr.4        | Tr.4-0 | 180°       | 4.51               | E1.18               | -1.26                      | -16.16 |
| NO.21    | 中国産白磁      | Tr.3(排出口採取) |        | —          | —                  | —                   | —                          | —      |
| NO.22    | 中国産白磁      | 目視確認のみ      | 基10-2  | 185°       | 2.60               | 0.0                 | —                          | —      |
| NO.23    | 中国産白磁      | 目視確認のみ      | 基10-2  | 165°       | 1.85               | 0.0                 | —                          | —      |
| NO.24    | 中国産白磁      | 目視確認のみ      | 基10-2  | 350°       | 11.46              | 0.0                 | —                          | —      |
| NO.25    | 国産染付・磁器    | 目視確認のみ      | 基10-2  | 330°       | 16.32              | 0.0                 | —                          | —      |

※基点Tr.3-0地点の標高は、前方漁港(近浦地区)岸壁に設置した標尺により測定した潮位と、10cm単位で表示される水深計の数値より算出した。

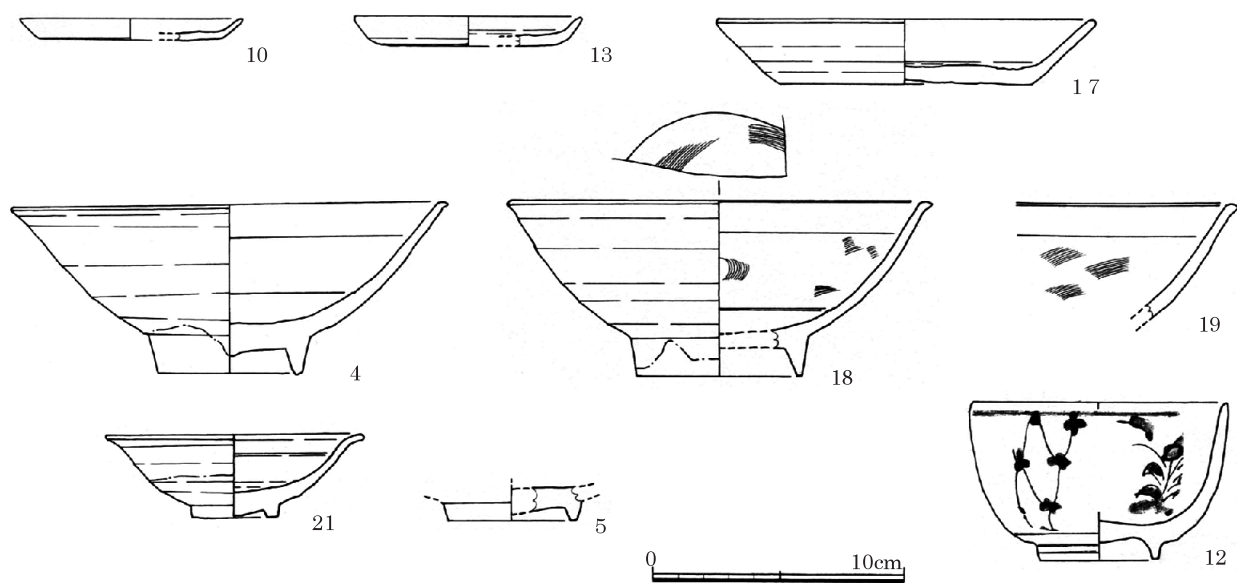


図4 出土遺物実測図 (1/3)



写真16 出土遺物 (縮尺不同)



# 2011年度小値賀島前方湾海底遺跡調査

田中 克子・林田 憲三

## 調査の経緯

アジア水中考古学研究所は、日本財団による助成事業「海の文化遺産総合プロジェクト」を五島列島小値賀島的前方湾海底遺跡及び山見沖海底遺跡で発掘調査や潜水目視調査をそれぞれの遺跡で実施した。(図1) 前方湾海底遺跡は既に包蔵地として指定され、その範囲は前方湾を挟むように南は殿崎、北は唐見崎と呼ばれる二つの半島があり、その先端部を湾入口に沿って直線で結んで西側の湾内と外海とを分けている。

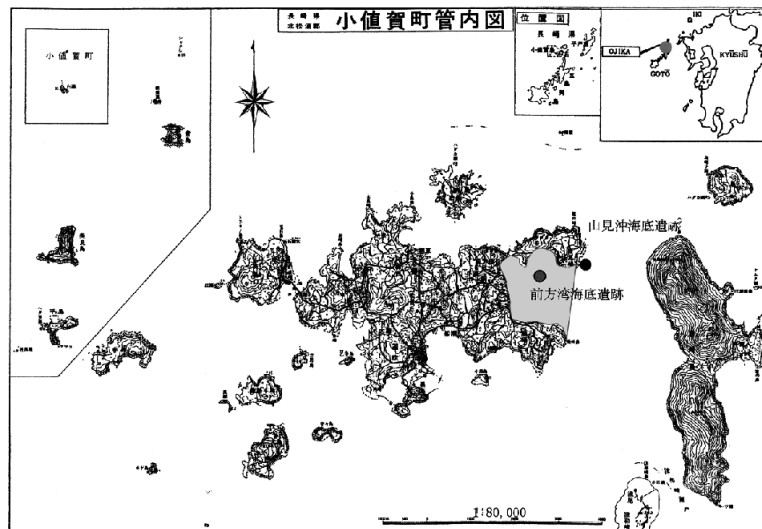


図1 発掘調査地点位置図

前方湾海底遺跡の発掘地点はクスクリ崎沖の砂地の海底に等高線に直交するように設置されている。この地点は西側より3列目の生簀直下の海底である。2009年調査で使用した現代鉄錨を基点10-1にして南方向(180°)ベースラインを設定した。この基点に沿って2009年と2010年にトレンチを設定して発掘を行った。2010年度の報告で図示した第4トレンチの地点より更に南側のより水深のある3列目(西側より)の生簀下に今回トレンチを設置した。ここは2010年度に生簀が撤去されている。

第5トレンチは図2に示すように、基点10-1から南へ80mの距離をとり、その基点を第5トレンチの北西隅とした。ここから基準線に添って長さ5m、東へ幅2mをとった。更にを東側に1mトレンチを拡張した。出土遺物の位置の計測は基点から南(S)を測り、その地点から東(E)へトライアングルの計測法を用いていた。遺物の標高は海底にピンポールを立て、任意のレベルを押し、その印しの位置に水管の付いた紐の端を添え、そこから遺物まで紐を水管を利用して水平に延ばし、紐の先端が遺物の真上に来るようにする。遺物にはスタッフを立て水平

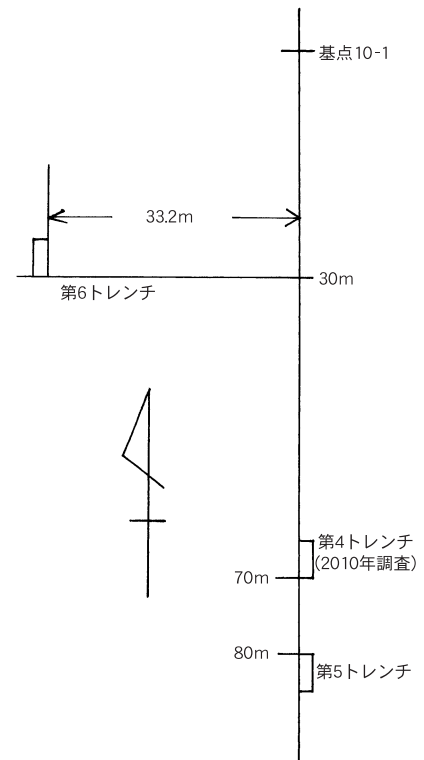


図2 トレンチの位置図(1/1,000)

に延びた紐の端が指す数値を読むことで、遺物の仮の標高を測る。水深計で測った仮の標高には、そのときの時刻を記録しておき、陸上で計測した潮位と時刻を記録し、仮の標高を修正することで遺物の絶対標高をだしている。第5トレンチの層序は、1層がシルト層で約15cmの厚さ、2層は砂質土層で小型の貝殻が少し混じる層で厚さ約15cm、3層は2層より締まった砂質土層で大型の貝殻が混じる約20cmの厚さの層である。第4層は大型の貝殻が多く混じる締まった砂質土層で、掘削は困難となる。短い調査期間のためでもあり、この面を検出して掘削を止めることとした。2層中から土師器坏や小皿の破片や褐釉陶器片、白磁碗が出土している。ドレッジの排出口で確認された糸切り底の土師器小皿2点は2層から3層を掘削中に出土している。3層からは褐釉陶器片が出土している。

拡張区で出土した白磁碗は表面から約30cm下がった2層中で検出した。この拡張区は深さ約1m（4層下、礫が混じる）まで掘削したが遺物は検出されなかった。発掘中に近くの生簀で飼われた魚に被害が出ているとの養殖業者から連絡があり、原因は不明であるが、調査を1日中止することとした。その後発掘地点を大きく西側に移した。

第6トレンチは基準線に沿って基点10-1方向へ50m戻り、そこから直角に西（270°）へ33.2mを測り、その南西隅の位置をこのトレンチの基点（N33° 12′ 369″、E129° 05′ 365″）とし、北へ5m、西へ2mのトレンチを設定した。出土遺物の位置は、基点から計測をした。表層から約40cm下（2層中）で土師器坏などを検出した。第6トレンチ東側に幅70cm拡張区を設けた。この前方湾の発掘調査には韓国の財団法人Woori研究院から4名の参加者があった。

山見沖海底遺跡調査はイタリアから5名の研究者や技師が参加して潜水調査を行い英語による報告をしている。前回の調査範囲を拡大させて目視調査を行い、遺物の分布状況を詳細に調査した。その結果、遺物の集積密度などから船本体が沈んでいる位置や積荷が最も密集して散乱している地点を明らかにした。今回の調査では円錐形の鉛のインゴット1点が回収されている。その位置は遺物が密集している地点より少し西寄りの沈船本体に近い地点である。

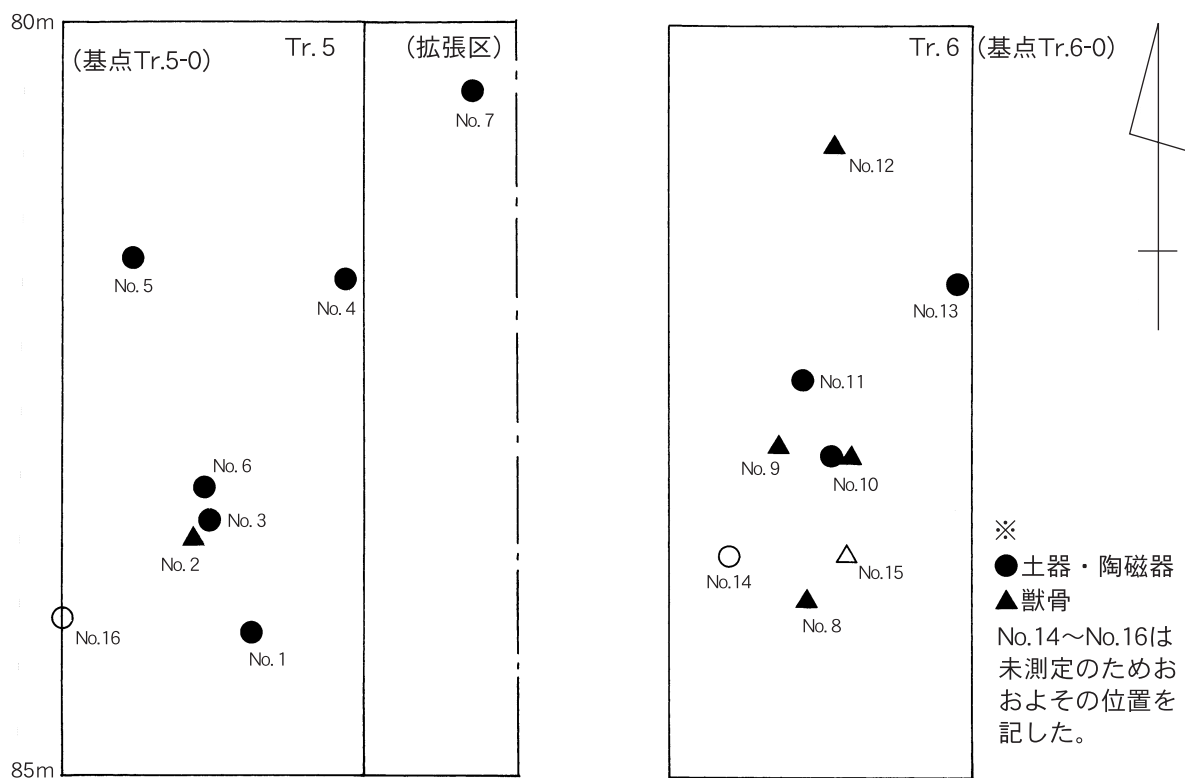


図3 遺物出土位置図（1/50）

## 発掘調査出土遺物（図4・表1・写真1～3）

土師器、中国産陶磁器、獣骨が出土した。獣骨以外は器表面の磨滅はほとんどなく、貝等の付着も極めて少ない。出土地点・位置等については表1に示した通りである。

### 1. 土師器

No.19・20は小皿である。No.19は糸切底で、外底全面に幅狭の板条痕が残る。口径9.0、器高1.8cm。No.20も糸切底で、器高0.9cm。この2点はTr.5排出口採取品であるが、1～2層掘り下げ中の遺物と考えられる。No.10は坏である。糸切底で、外面に板状痕が残る。口径15.4、器高2.5cm。No.11・14と接合した。以上図示した以外に、ヘラ切底の坏片1点（Tr.5-No.3）、糸切底底部片1点（Tr.6-No.18）が出土した。

### 2. 中国産陶磁器

#### 白磁

3点出土した。若干の器高の相違はあるが、いずれも同じタイプで、高台が細く高く、口縁上端面を水平に仕上げる碗である。No.4は器高がやや低い。内面口縁下と内底に沈圈線が巡り、内底と内側面に櫛描文を施す。口径17.2、器高6.5、高台径6.2cm。No.7もNo.4と同様器高がやや低い。内底に沈圈線を巡らすのみで他の施文はない。口径17.6、器高6.2、高台径6.0cm。No.16はTr.5の1～2層掘削中に壁面から出土、落下したもので、正確な位置については不明である。トレンチの南西隅で出土。他の2点に比べ器高が高い。内底と内面口縁下に沈圈線を巡らす。口径17.7、器高7.0、高台径6.2cm。外底に墨書がある。恐らく「綱」の崩しと思われる。以上は、福建省閩清義窯等閩江流域一帯の製品で、年代については博多遺跡群での出土状況から12世紀前半～後半と考えられる。

#### 青磁

竜泉窯青磁劃花文碗が1点（No.13）出土した。内底と内側面に片切り彫による蓮華文を施す。口径15.8、器高6.8、高台径6.0cm。外底に墨書があり「大」と思われる。12世紀中～後半の製品である。

#### 陶器

3点出土した。No.1とNo.6は長胴壺で胎土等の特徴から同一個体であろう。胎土は淡赤褐色で夾雑物はほぼなく緻密、硬質である。外面にロクロ成形の痕が顕著に残る。内面全体には施釉された痕跡が認められるが、外面はほぼ露胎となる。このタイプの壺は通常全面施釉されることから、恐らく剥落したものであろう。No.6は体部下半から底部の破片で、底径5.3cm、胴部最大径は9.4cm。No.1は破片残部上位がやや内側に屈折し、肩部から体部あたりの破片と思われる。肩部には釉が残る。

江蘇省宜興窯の製品で、肩部に縦耳が付く褐釉長胴壺の可能性が高い。この製品は生産期間が12世紀～15世紀と長く、出土品が体部下半のみであることから詳細時期については不明確である。しかし、これまで前方湾内で採集・出土した中国陶磁器の年代観から、概ね12世紀代と推測する。

No.5は無釉陶器瓶である。胎土は灰色で細かな黒斑・白色粒を少量含むが、全体に緻密で硬質である。内外面にロクロ成形の痕が顕著に残る。胴部最大径は10.0cm。福建省磁竈窯の小口瓶であろう。口縁部を欠き詳細時期については不明であるが、概ね12世紀～13世紀の製品と考える。

以上の他、トレンチ設定時に、2010年調査Tr.4付近で、近世の蛇の目凹形高台白磁鉢の底部片1点を採集した。

出土遺物に関しては、これまで前方湾内で回収・出土した遺物とほぼ同じ種類・年代のものである



(田中2011)。特筆事項として2点の墨書陶磁器が出土したことが挙げられる。2009年に出土したもの(田中・林田2010)も含め計4点となる。墨書陶磁器は宋商人との貿易に関わる資料として重要である(田中2011)が、特に、今回「綱」銘墨書白磁碗(No.16)が出土したことは、前方湾海底出土中国陶磁器の由来を考える上で、その意義は大きい。

# 【参考文献】

田中克子・林田憲三2010「2009年度・小値賀島前方湾海底遺跡調査概要」『水中考古学研究』

第3号、アジア水中考古学研究所

田中克子2011「長崎県五島列島小値賀島前方湾海底遺跡発見の中国陶磁から見た日宋貿易に関する一考察」『貿易陶磁研究』NO.31、日本貿易陶磁研究会

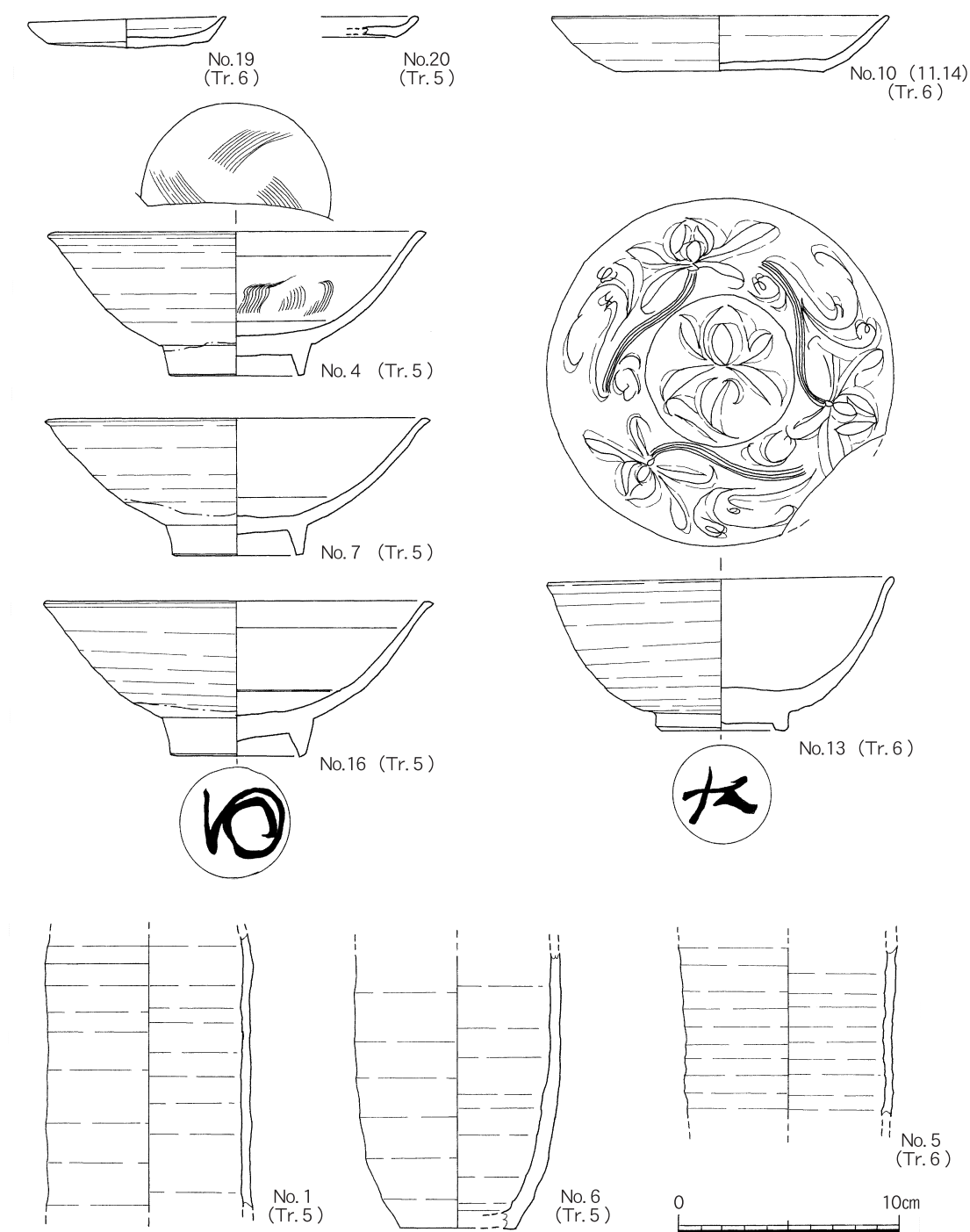


図4 出土遺物実測図(1/3)

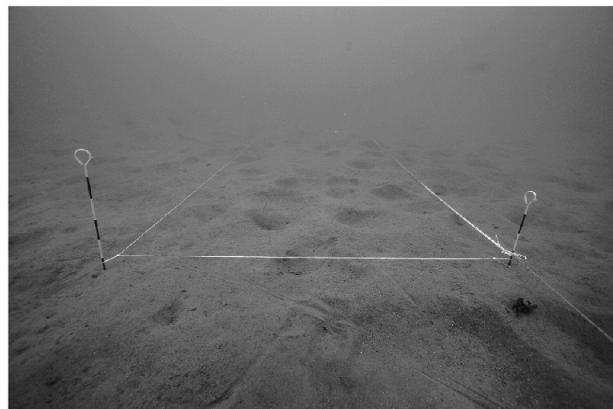
表 1 2011年度調査:遺物検出地点一覧

| 遺物<br>番号 | 遺物種類       | 調査地点              | 基点     | 基準線<br>磁方位 | 基点から<br>の距離(m) | 基点から<br>の距離(m) | 海底基準高<br>水深(m) | 潮位<br>(m) | 海底基準高<br>(m) | 基準高から<br>の比高差(m) | 標高(m)<br>※ |
|----------|------------|-------------------|--------|------------|----------------|----------------|----------------|-----------|--------------|------------------|------------|
| No.1     | 褐釉陶器       | Tr.5              | Tr.5-0 | 180°       | S4.05          | E1.27          | -17.3          | 1.679     | -15.621      | -0.65            | -16.271    |
| No.2     | 獣骨         | Tr.5              | Tr.5-0 | 180°       | S3.4           | E0.85          | -17.3          | 1.679     | -15.621      | -0.71            | -16.331    |
| No.3     | 土師器坏       | Tr.5              | Tr.5-0 | 180°       | S3.33          | E0.99          | -17.3          | 1.679     | -15.621      | -0.69            | -16.311    |
| No.4     | 白磁碗        | Tr.5              | Tr.5-0 | 180°       | S1.7           | E1.85          | -17.3          | 1.679     | -15.621      | -0.79            | -16.411    |
| No.5     | 陶器         | Tr.5              | Tr.5-0 | 180°       | S1.6           | E0.48          | -17.3          | 1.679     | -15.621      | -0.63            | -16.251    |
| No.6     | 褐釉陶器       | Tr.5              | Tr.5-0 | 180°       | S3.12          | E0.95          | -17.3          | 1.679     | -15.621      | -1.21            | -16.831    |
| No.7     | 白磁碗        | Tr.5東側<br>拡張部     | Tr.5-0 | 180°       | S0.45          | E2.7           | -17.3          | 1.679     | -15.621      | -0.39            | -16.011    |
| No.8     | 獣骨         | Tr.6              | Tr.6-0 | 0°         | N1.2           | W1.1           | -14.15         | 0.4621    | -13.6879     | -0.83            | -14.5179   |
| No.9     | 獣骨         | Tr.6              | Tr.6-0 | 0°         | N2.2           | W1.13          | -14.15         | 0.4621    | -13.6879     | -0.78            | -14.4679   |
| No.10    | 獣骨         | Tr.6              | Tr.6-0 | 0°         | N2.15          | W0.9           | -14.15         | 0.4621    | -13.6879     | -0.78            | -14.4679   |
| No.10    | 土師器坏       | Tr.6              | Tr.6-0 | 0°         | N2.15          | W0.9           | -14.15         | 0.4621    | -13.6879     | -0.78            | -14.4679   |
| No.11    | 土師器坏       | Tr.6              | Tr.6-0 | 0°         | N2.63          | W1.1           | -14.15         | 0.4621    | -13.6879     | -0.71            | -14.3979   |
| No.12    | 獣骨         | Tr.6              | Tr.6-0 | 0°         | N4.2           | W0.9           | -14.15         | 0.4621    | -13.6879     | -0.78            | -14.4679   |
| No.13    | 青磁碗        | Tr.6              | Tr.6-0 | 0°         | N3.28          | W0.1           | -14.15         | 0.4621    | -13.6879     | -0.64            | -14.3279   |
| No.14    | 土師器坏       | Tr.6              | —      |            | —              | —              |                |           |              | —                |            |
| No.15    | 獣骨         | Tr.6              | —      |            | —              | —              |                |           |              | —                |            |
| No.16    | 白磁碗        | Tr.5<br>1-2層      | —      |            | —              | —              |                |           |              | —                |            |
| No.17    | 獣骨         | Tr.5<br>1-2層      | —      |            | —              | —              |                |           |              | —                |            |
| No.19    | 土師器<br>小皿  | Tr.5(排出<br>口採取)   | —      |            | —              | —              |                |           |              | —                |            |
| No.20    | 土師器<br>小皿  | Tr.5(排出<br>口採取)   | —      |            | —              | —              |                |           |              | —                |            |
| No.18    | 土師器坏       | Tr.6一括            | —      |            | —              | —              |                |           |              | —                |            |
| 採集       | 伊万里<br>白磁鉢 | 2010・Tr.4<br>付近採集 | —      |            | —              | —              |                |           |              | —                |            |

※基点の標高は、前方漁港(近浦地区)岸壁に設置した標尺により測定した潮位と、10cm単位で表示される水深計の数値より算出した。



1. 基点10-1より180° 南に延びるベースライン



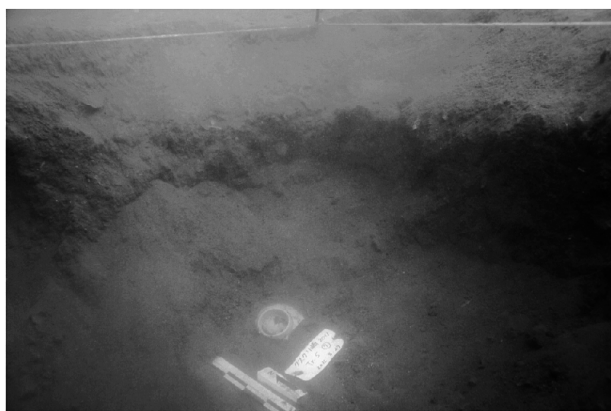
2. トレンチ現況



3. トレンチ発掘風景



4. トレンチ西側土層(I層~IV層上)堆積状況



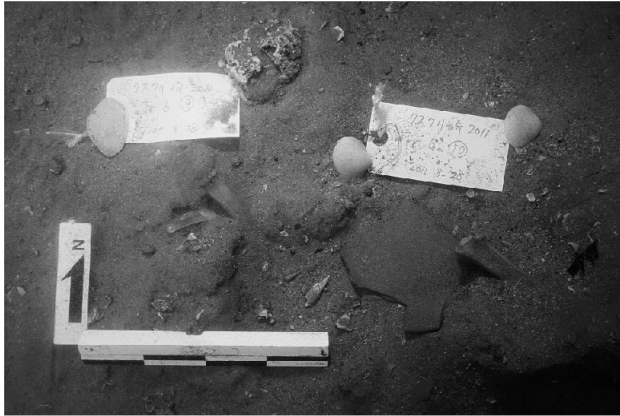
4. トレンチ拡張部 白磁碗(No. 7)のII層出土状況



5. 白磁碗(No. 7)出土状況

写真1 2011年前方湾海底遺跡 発掘調査一第5トレンチ





1. 獣骨左：(No.9) 右：(No.10) の出土状況



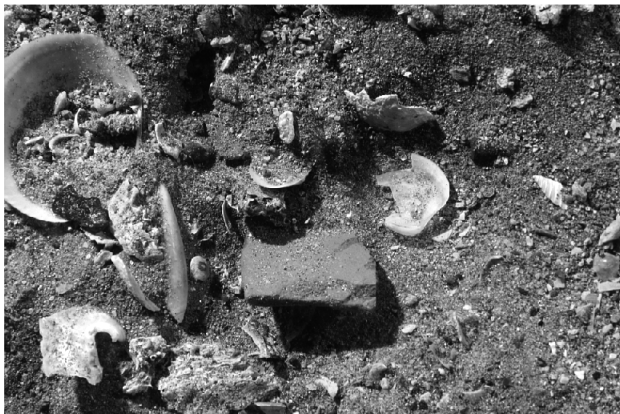
2. 土師器坏 (No.11) 出土状況



3. 獣骨 (No.12) 出土状況



4. 墨書青磁碗 (No.13) 出土状況



5. 土師器坏 (No.14) 出土状況



6. 獣骨 (No.15) 出土状況

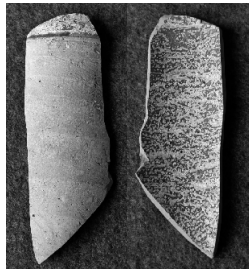




No. 4



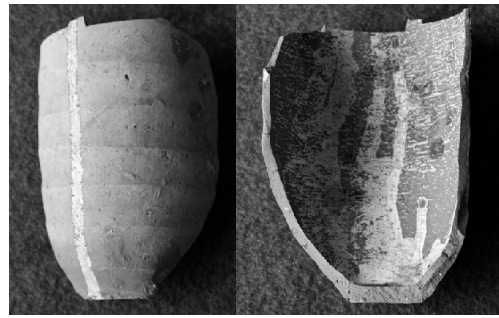
No. 7



No. 1



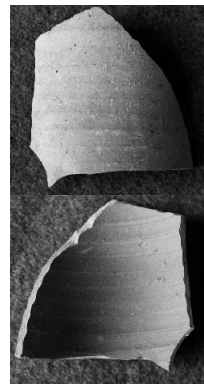
No.16



No. 6



No.13

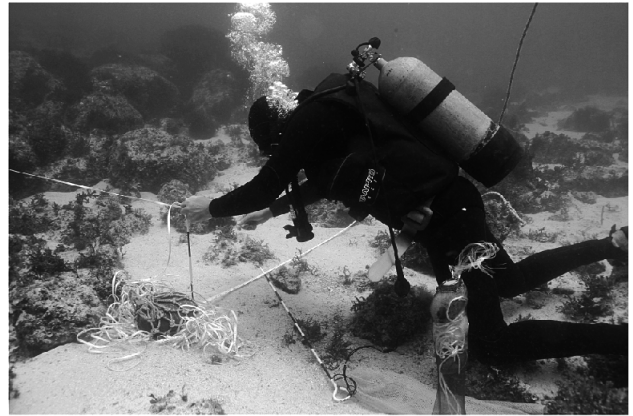


No. 5

写真3 出土遺物（縮尺不同）



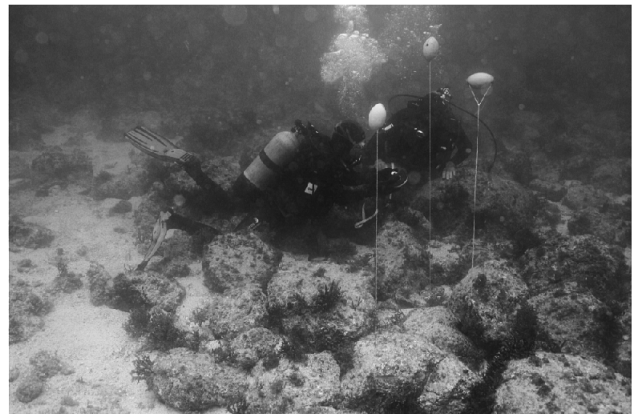
1. 山見沖海底遺跡全景（北から）、奥は前方湾



2. 潜水調査測線の設置



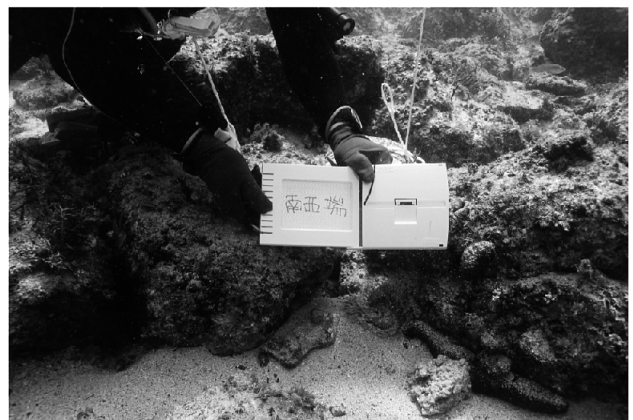
3. 測線に添って目視調査



4. 遺物に標識のブイ取り付け作業



5. 遺物の位置計測



6. 遺跡の南西端を示す遺物の確認





1. 染付け皿の破片



2. 染付け皿の破片（1と同じ）



3. 岩に挟まって確認された「クロツ」



4. タイ陶器壺の底部片



5. タイ四耳壺の口縁部



6. タイ陶器の小壺片

写真5 2011年山見沖海底遺跡 潜水目視調査（2）



**2011 Season of Archaeological Investigation at Yamami Underwater Site, Ojika**  
**the third archaeological investigation campaign of the Italian archaeological expedition in**  
**Japan in 2011**

Dr. Daniele Petrella  
University of Studies of Naples "L'Orientale",  
Sole Administrator of Archeologiattiva s.c.a r.l.

The third archaeological investigation campaign of the Italian Archaeological Expedition in Japan took place in 2011, August, from the 20th to the 29th, set up in Ojika (Nagasaki prefecture), within the project named "Kyushu, starting from Ojika", in collaboration with A.R.I.U.A. (Asian Research Institute for Underwater Archaeology) and Nippon Foundation.

As far as for Italy, the scientific expedition is sponsored and patronized by the Ministry of Foreign Affairs of Italy and by Chamber of Commerce of Naples, conceived and directed by Archeologiattiva s.c.a r.l. in collaboration with the Superintendence of the Sea of Sicily and University of Studies of Bologna "Alma Mater Studiorum".

On this year the Italian team was composed by Dr. Daniele Petrella (Ph. D. at University of Studies of Naples "L'Orientale" as well as Sole Administrator of Archeologiattiva s.c.a r.l. And director of the mission, Mr. Samuele Carannante (Technical Director of underwater works Marine Sud s.a.s. company), Doc. Daniele Orefice (Collaborator of Marine Sub s.a.s. company), Mr. Francesco Saggiomo (Technical Director of underwater investigation company Idrosfera s.n.c.) and Doc. Paolo Pecci (Archeologiattiva s.c.a r.l. Underwater Archaeology Task Force member).

Within the project for Ojika Island tourism development, promoted and firmly supported by both Ojika Administration and Dr. Hayashida Kenzo (A.R.I.U.A. President), the investigations made by the Italian team got focused on Yamami site, which is located at 100 meters away from the far east coast of the Island. In the channel which separates Ojika from Nozaki Island for 1,5 km long, the team longs for creating an underwater museum provided with both routes completely dedicated to scuba diver tourists and water-resistant cameras to make virtual tours possible too. This project is very similar to the ones of Cala Gadir in Pantelleria (TP) in Sicily and of Parco Sottomerso of Baia (NA).

The seabed of this channel gradually goes down to a depth of -31 meters. It means that at 250 meters away from the coast, the seabed is just -20 meters in depth and, in the site; it's just -10 meters in depth.

The main problem is that in the spot where the site is set, the current is about one knot and half, especially when the period of typhoon gets closer, very important for South Japan once again.

From a technical point of view, the strong current together with the lack of depth of the seabed made the investigation works very difficult.

Moreover, the seabed is rich of several massif volcanic rocks, till about -10/-15 meters in depth, which means till 100/150 meters away from the coast, before becoming a huge, not close grained,

medium grain dimensions, full of quartz and shells sand seabed, as long as for the surface seabed stratum.

On one side, these characteristics of the seabed let us realize how difficult it was to sail for wooden ships in the channel. Moreover, the seabed characteristics give us fundamental data to the reconstruction of events of the past. By the way, the characteristics themselves, could make the wooden relict to disappear because, once it had sunk on the rocks without being covered by sand, it could have decomposed, but, fortunately, this is not the only possible theory.

In the early 2000s, the A.R.I.U.A. (at that time KOSUWA - Kyushu and Okinawa Society for Under Water Archaeology) made a survey in a limited area, where was characterized by the finding of a Thai pottery rich deposit.

Such a large amount of transport pottery of the same typology and provenience, left no doubts about the importance of this archaeological site.

Anyway, for several years, the survey has been stopped till now. The target of the present survey, actually, is the identification of the bounds of the deposit area of the Thai pottery, to check the real typology and to get a sufficient quantity of data to justify a future sonar survey, to identify the relict finally.

Starting from the small known area, the team decided to intensify survey operations into the areas around. Three contiguous areas have been choose, each one is 50 m (S-W/N-E) x 60 m (N-E/S-W), in total 9000 m<sup>2</sup> toward North (C' - D - E - E' on the map); a 60 m (N-E/S-W) x 80 m (S-W/N-E) area, around the already known area, in total 4800 m<sup>2</sup> ; other areas which are near the N-W coast. The survey area great total is 13800 m<sup>2</sup>. (Fig. 1)

Toward North there were no big amount of finds, but there were some pottery fragments, all belonging to the already known pottery typology. Towards S-E, pottery evidences left are rare, gradually decreasing till to disappear.

This made the team suppose the area where the ship sank is very close to the rock-face coast. Important finds, in fact, have been found in the S-W area, in particular transport pottery together with fine pottery for personal use, all Thai provenience pottery.

The coastal current made the relict and the finds move and crash against a rock-face wall coming to the surface.

The present survey in this area identified an area which is quite different from the seabed around: a little sand area, in the middle of a larger rock area, hiding a large amount of Thai transport amphoras under a thin sand layer.

This identification, requires further in-depth examinations by air lift, but leaves no doubt about the fact that if the relict sank on the rocks, it would have lied down right in that area.

Anyway, Side Scan Sonar survey in the channel and an air lift excavation in the whole area are necessary.

Among the finds, coming from the S-E area of the site, the most important find is a conical plumb lead ingot bar. This ingot bar was mainly produced in Thailand, and earthen molds with conical shaped holes have been found at the Song Toh mines. (Fig. 2)

According to Japanese archaeologists, it's a unique discovery, a little object they have always been looking for. It is dated around the XVI-XVII century.

Such an organized area leaves no doubt about the fact that we are in front of a relict cargo, probably coming from Thailand.

The large amount of transport handled amphoras (with the typical four little ear-handles), characterized by a very wide body, 20 cm rounded edge. They identify the relict to be a coming from South East Asia merchant ship going to Kyushu with three probable destinations: Hirado, the island which, during the Bakufu Tokugawa was opened to contacts with other countries; Hakata bay, the most important town in the Kyushu, which also had a big port; and Okinawa which received merchant ships and their charges.

The proposed dating for the finds coincides with the period in question. By the comparison with the Thai amphoras, found during Osaka castle excavations, a new hypothesis has been formulated.

The stratigraphy of the site of the castle brought back several Thai amphoras. (Fig. 3) The layer they were laid under, had been dated to 1625, making the finds in question date to a foregoing period.

The reconstruction of the events which brought to the sinking of the ship is based on the surveyed areas and the amount of the finds. It's not clear yet whether the sinking of the ship was due to a typhoon intervention or to other causes. The response can be found just by a deepening of the surveys and by the analysis of the found evidences.

Anyway, according to the team, the most reliable theory is the intervention of the strong currents which till nowadays blow in the channel.

Moreover, the study of this relict would bring new light on both cultural and commercial relationships between Japan and other countries in a period in which is known that Japan adopted a strong closing door politic towards other countries.





| ID | Latitude        | Longitude       | Very low density of finds incidence | Very high density of finds incidence |
|----|-----------------|-----------------|-------------------------------------|--------------------------------------|
| A  | 33° 12,62042' N | 129° 5,93245' E |                                     |                                      |
| B  | 33° 12,59631' N | 129° 5,98216' E |                                     |                                      |
| C  | 33° 12,51192' N | 129° 5,92343' E |                                     |                                      |
| C' | 33° 12,48246' N | 129° 5,96749' E |                                     |                                      |
| D  | 33° 12,46449' N | 129° 5,99064' E |                                     |                                      |
| E  | 33° 12,35708' N | 129° 5,91996' E |                                     |                                      |
| E' | 33° 12,38513' N | 129° 5,81272' E |                                     |                                      |
| F  | 33° 12,42734' N | 129° 5,81763' E |                                     |                                      |
| S  | 33° 12,42677' N | 129° 5,91501' E |                                     |                                      |

Fig. 1 Yamami Underwater Site - Investigation area



Fig. 2 Lead ingot



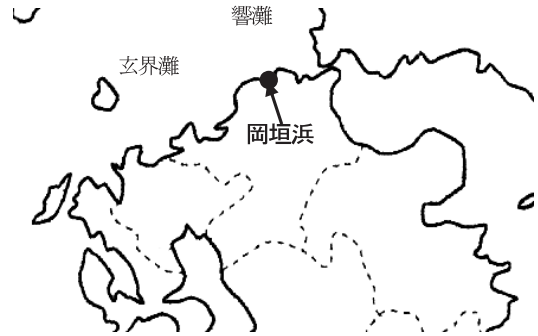
Fig. 3 Thai amphora found in situ

# 福岡県遠賀郡岡垣浜採集の貿易陶磁器

田中 克子

## 1 はじめに

北部九州から山口県西部にかけて広がる海域を、西から玄界灘、響灘と言う。この響灘に面し、福岡県遠賀郡岡垣町から芦屋町にかけて、砂丘・三里松原海岸が広がる。地元漂着物研究者である添田征止氏は30年以上にわたりこの海岸一帯での採集活動を行っている。特に、三里松原海岸の中間に位置する岡垣町岡垣浜（新松原海岸）で採集された陶磁器は数万点以上に及ぶ（野上2005、2006、有田町歴史民俗資料館他2009）。そのほとんどは肥前陶磁器であるが、海外からもたらされた貿易陶磁器も海岸採集品としては決して少なくなく、当時の流通を考える上で貴重な資料と言える。その一部は2009年有田町歴史民俗資料館が開催した企画展「海揚げりの有田焼―筑前岡垣浜を中心に―」において紹介された（有田町歴史民俗資料館他2009）が、今回添田氏のご厚意により、採集された貿易陶磁器の全てを整理する機会に恵まれ、ここに紹介する。



岡垣浜の位置

## 2 採集貿易陶磁器

採集された貿易陶磁器は総量にして小パンコンテナ（深さ約10cm）に4箱程である。中国と朝鮮半島陶磁器があり、ほとんどは中国産である。以下、年代を追って紹介する。時間的な制約により実測をすることができず、そのほとんど全てが博多遺跡群出土品に類例を求めることができたため、参考資料として博多遺跡群出土品の実測図を掲載した（縮尺約1/6）。

### 中国陶磁器

#### I. 北宋後半～南宋前期

##### ① 11世紀後半～12世紀前半代

##### 白磁（写真1）

採集品の中で最も量が多い（小コンテナ2箱分）。碗が主体で、皿が少量見られる。摩耗が著しく判別が困難なものも多いが、福建産と広東産があり、ほぼ福建産が占める。



写真1

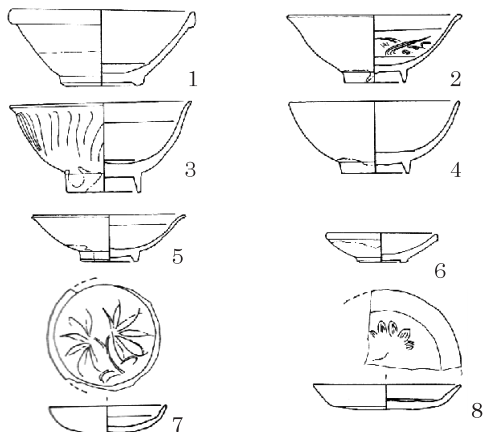


図1

《福建産》（図1）高台が低く肉厚で所謂玉縁口縁の碗（1、写真2）と、高台が細く高い碗（写真3）がほぼ同量あり、後者は口縁上端面を水平に仕上げるもの（2、写真4）・外反口縁・直口縁（3・4、写真5）がある。この他浅形小碗（5・6、写真6）と平底皿（7・8、写真7）がそれぞれ約20点ある。いずれも閩清窯を中心とした閩江流域一帯の製品である。



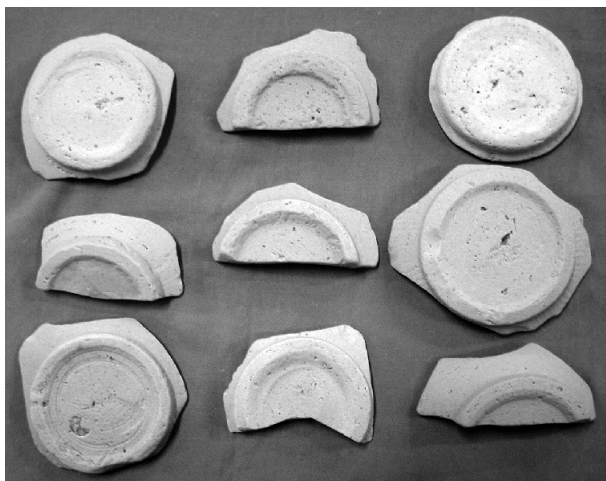


写真 2

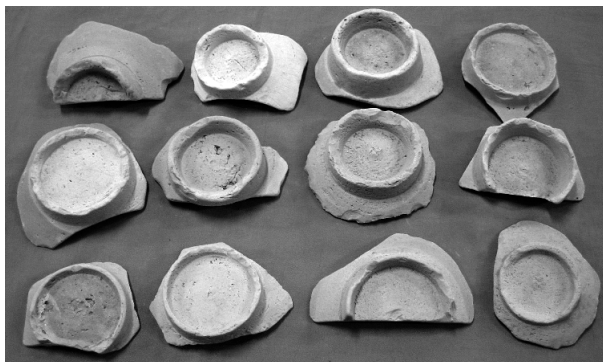


写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



《広東産》（図2）15点のみ確認できた（写真8）。小さな玉縁口縁の碗（1）の他、端反り口縁・高台が高く内面に細い線彫りによる曲線文を施した浅形碗（3）・内側に白堆線のある碗（2）がそれぞれ1点ずつある。広東省北部の潮州窯一帯の製品である。

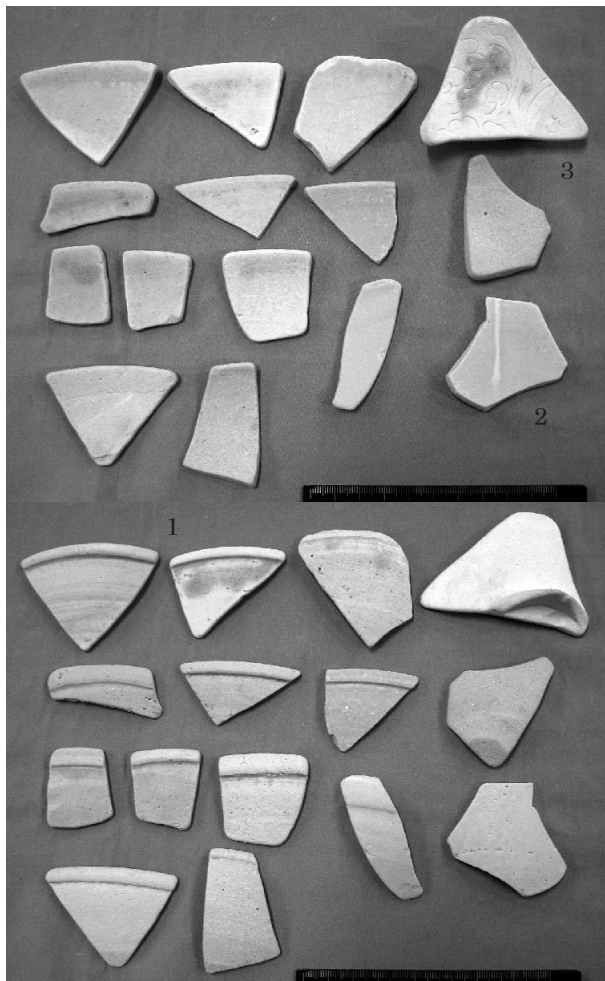


写真8



写真9



写真10

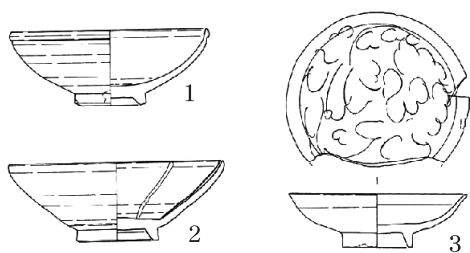


図2

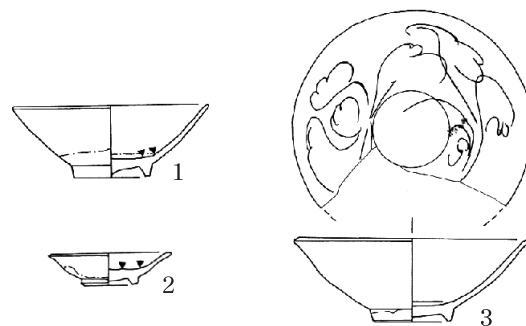


図3

## ② 12世紀中～後半代

白磁（図3、写真9・10）

全て福建産で、主体は閩北一帯の製品である内底を輪状釉剥ぎする製品で、碗（1）と浅形の小碗（2）がある。この他に門清義窯の内側に劃花文を施す大振りの碗（3、写真10）が5点認められた。

## 青磁

小コンテナに概ね1箱で、前述した南宋初頭の白磁に次ぐ量である。同安窯系と竜泉窯系がほぼ同量ある。

《同安窯系》（図4、写真11～18）碗と平底皿がある。碗が主体であるが、皿も一定量認められる。碗の主体となるものは外側面に櫛描による縦線を刻むもの（写真12）で、ヘラ彫りを施すものと無文のもの（写真13）が数点ずつある。皿は内底に櫛描文を施す（写真14）が、無文で露胎のものが1点ある。



写真11



写真12



写真13

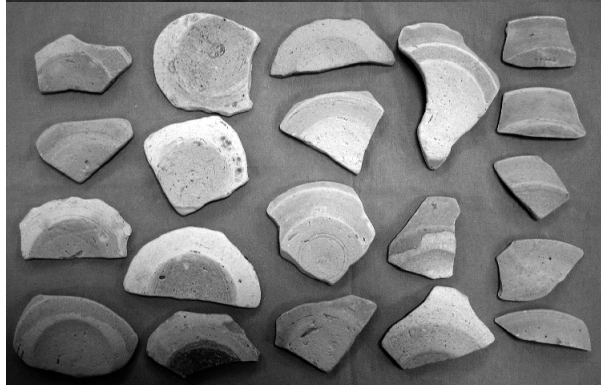
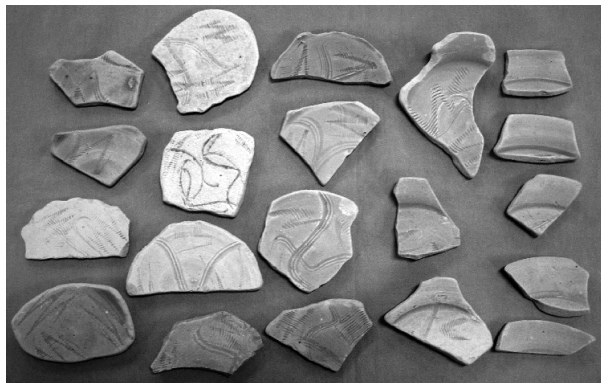


写真14



図4



《竜泉窯系》（図5、写真15・16）

碗と平底皿があり、皿は極めて少ない。碗は内側面が無文と劃花文を施すもの（写真16）があり、外側面に葉脈入りの蓮弁文のあるもの（写真16-1）、内底に印花文「金玉満堂」のあるもの（写真16-2）も認められる。



写真15

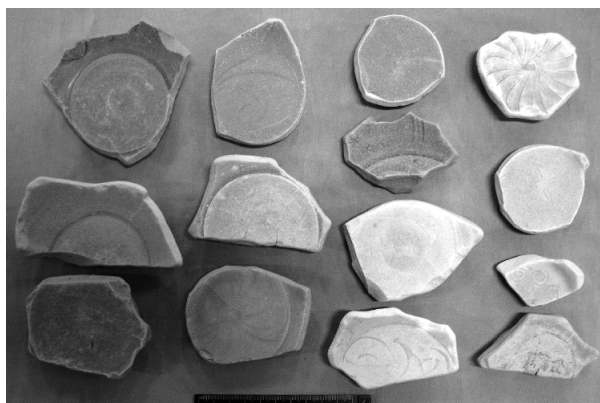


写真16

③ 13C前半

青磁（図6、写真17）

竜泉窯系蓮弁文碗で、南宋前半の製品とほぼ同量がある。蓮弁文は鎬のあるもの（写真17-1）と、ヘラ彫りによる鎬のないもの（写真17-2）がある。



写真17





写真17

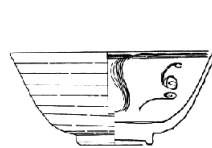


図5



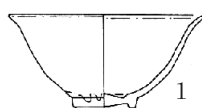
図6



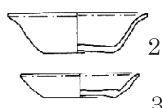
## Ⅱ. 南宋後期～元初頭（13C後半～14C前半）

白磁（図7、写真18）

全て福建産で、口縁部の釉を搔取る所謂"口剥げ"の碗と平底皿がある。皿が圧倒的に多く、この傾向は博多遺跡群の出土状況と同じである。碗（1）は口縁部片のみで、平底皿は外底まで施釉するものと半釉があり、外反口縁で器高の若干高いもの（2）と、器高の低い直口縁のタイプ（3）がある。



1



2

3

図7

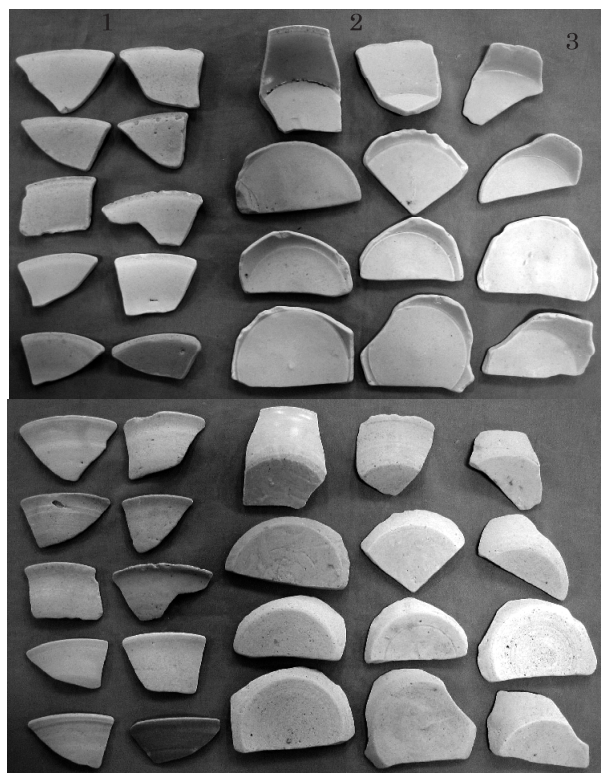


写真18

### 青磁（図8、写真19）

竜泉窯系製品が20数点認められた。量は少ないが碗・皿・坏など器種は比較的豊富である。碗は高台径が小さく高台内まで施釉されている。無文のものと外側面に幅の狭い蓮弁文を入れるもの（1）がある。他に、口折坏（内・外側面にヘラ彫りによる連弁文）（2）、内湾口縁皿（3）、鏢状口縁皿（4）、輪花口縁皿（5）などがある。小片や摩耗が著しく判別が難しく、写真は明代初頭まで下るものも含んでいる可能性がある。

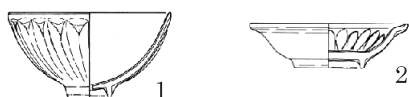


図8

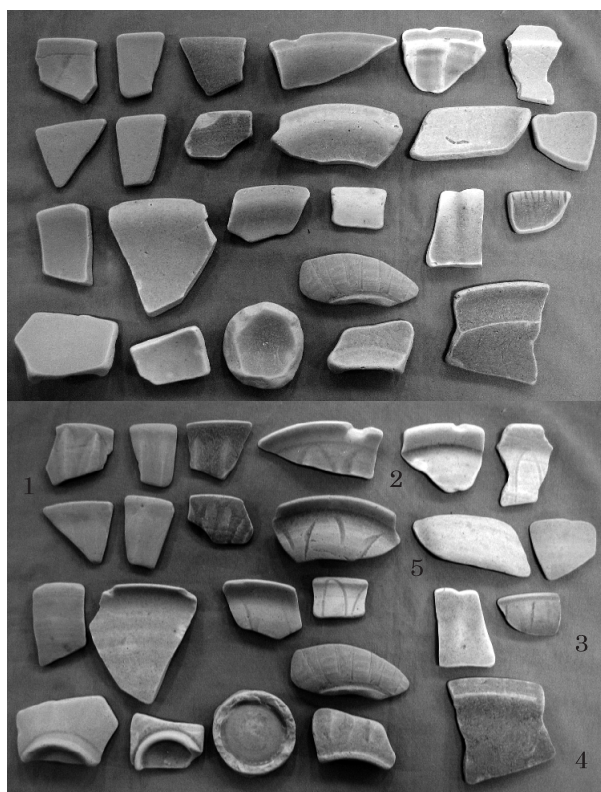


写真19

### Ⅲ. 元～明初頭（14C代）

#### 青磁（図9、写真20）

小片のため不明確ではあるが、概ね元代～明初に属すると思われる竜泉窯系製品が12点ある。碗の他、蕉段皿（3）と思われる破片が1点ある。碗は断面四角形の高台で高台内は露胎となり、内底を円形に釉剥ぎするものと印花文を施すものがある（2）。口縁部片は外側面に線彫りによる縦線を刻み、内側面には陽印刻文などが認められる（1）。

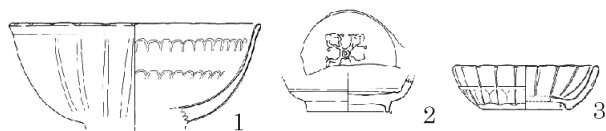


図9

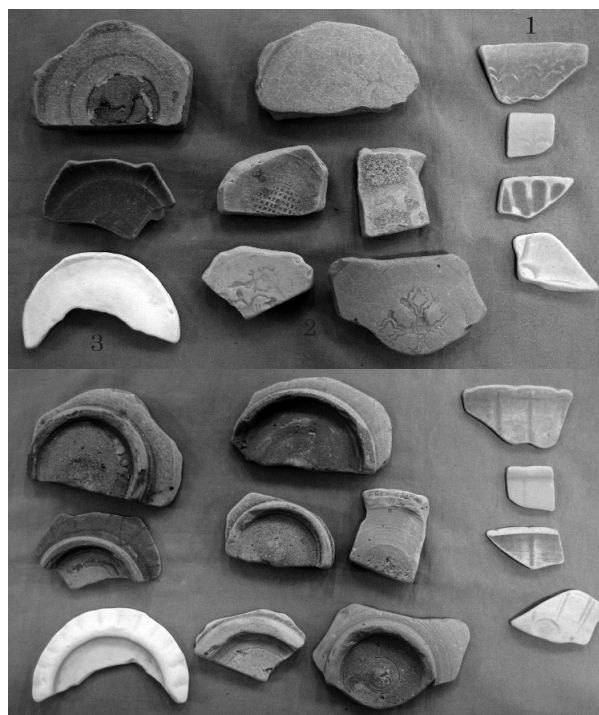


写真20

詳細時期不明

以上の他、詳細時期は不明であるが、恐らく宋～元代と思われる白磁、或いは青白磁の皿・蓋・壺類などがごく少量認められる(写真21)。

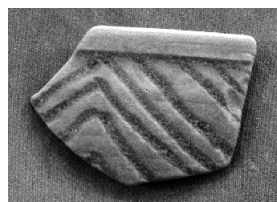
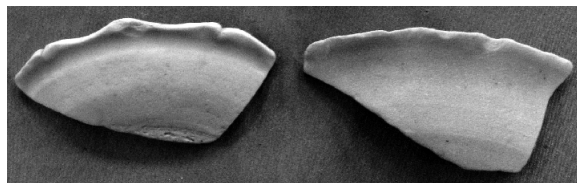
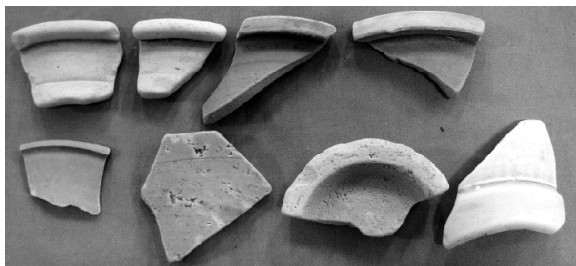


写真21

#### IV. 明代（14世紀後半～16世紀）

白磁

福建産と景德鎮の製品がある。

《福建産》(図10、写真22) 邵武窯と思われる小皿が2点ある。1点は内底を輪状釉剥ぎし(1)、もう1点は腰折れの底部片で角杯の可能性もある(2)。概ね14世紀後半～15世紀前半代の製品である。

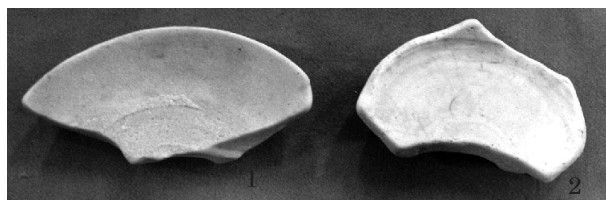


写真22

《景德鎮窯》(図11、写真23) 端反り口縁皿が6点で、腰部に丸味のあるもの(1)と、内傾する高台から直接体部へと立ち上がるタイプ(2)がある。15世紀後半～16世紀にかけて国内に広く流通した製品である。



写真23

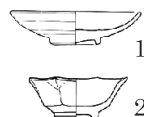


図10

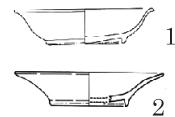


図11



#### 青磁（写真24～31）

南宋代のものに比べると少ないが、14世紀後半～16世紀代の竜泉窯系製品が一定量含まれる（写真24）。碗が主体となるが、他に皿、盤、香炉などもあり種類は多い。



写真24

#### 碗（図12）

a.玉縁状端反り口縁（無文）（1、写真25）  
概ね14世紀後半～15世紀前半に見られる。

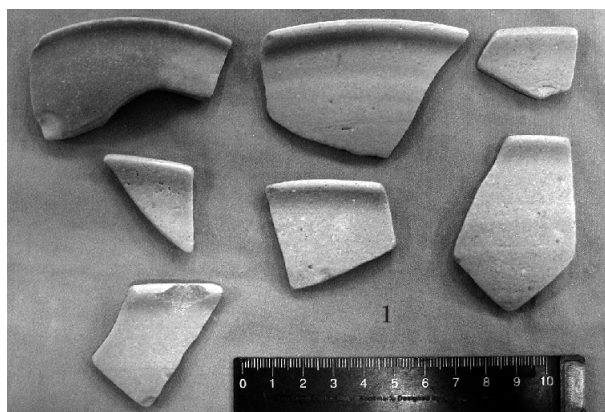


写真25

#### b.直口縁

口縁に雷文帯を有するもの（写真26）と外側面に細蓮弁文（写真27）を施す2種類がある。前者は15世紀前半を中心に15世紀後半にかけて見られる。かなりくずれた雷文（3）が主体であるが、はっきりとした雷文を内外に巡らせるやや古相に位置付けられるタイプ（2）もある。後者は15世紀中頃以降16世紀にかけて見られるものである。片切彫による連弁文（4）と、16C前半以降に多い線描きによる連弁文のタイプ（5）が認められ、内底に劃花文を入れたものもある。

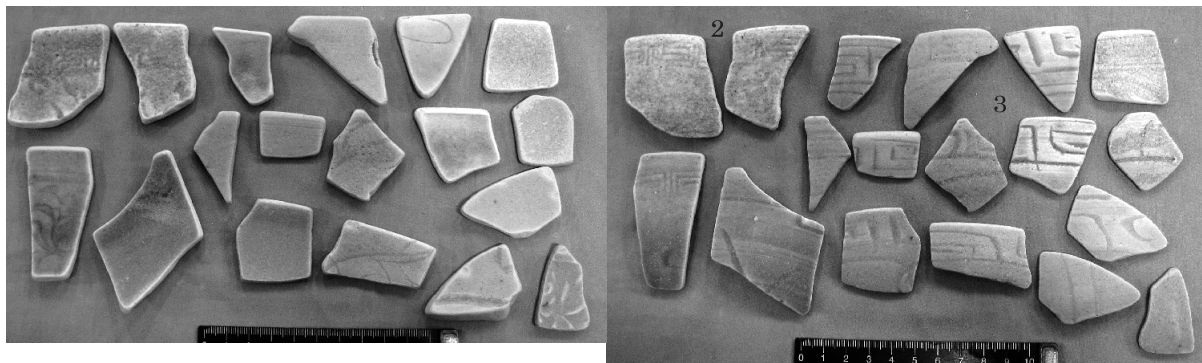


写真26

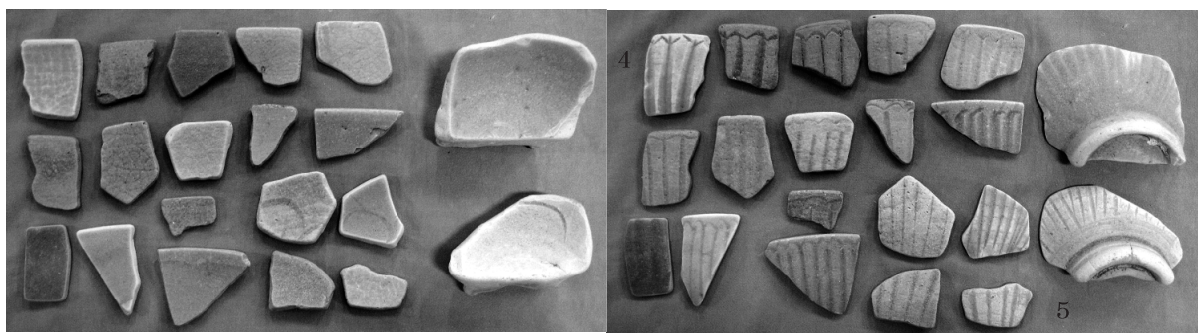


写真27

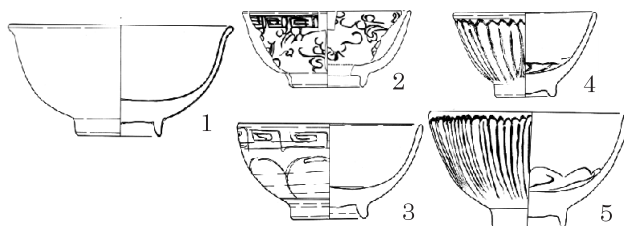


図12

c.高台 (写真28)

高台内が露胎のもの（1）、高台途中まで施釉するもの（2）、外底を輪状に釉剥ぎするもの（3）がある。

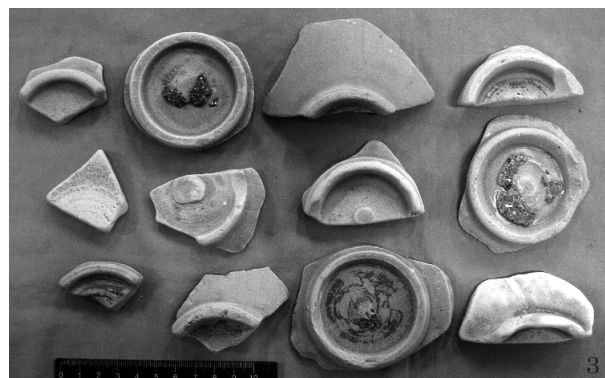


写真28

皿 (図13、写真29)

全て腰折れの皿である。稜花口縁と平縁のものがあり、前者は口縁に沿って波状文を入れるもの（1）がほとんどで、内側面に鱗状の施文があるもの（2）が1点ある。口縁部破片のみで詳細時期は不明確ではあるが、概ね15世紀代に見られる。

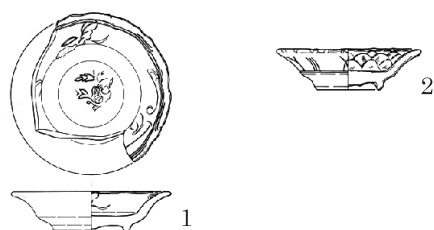


図13



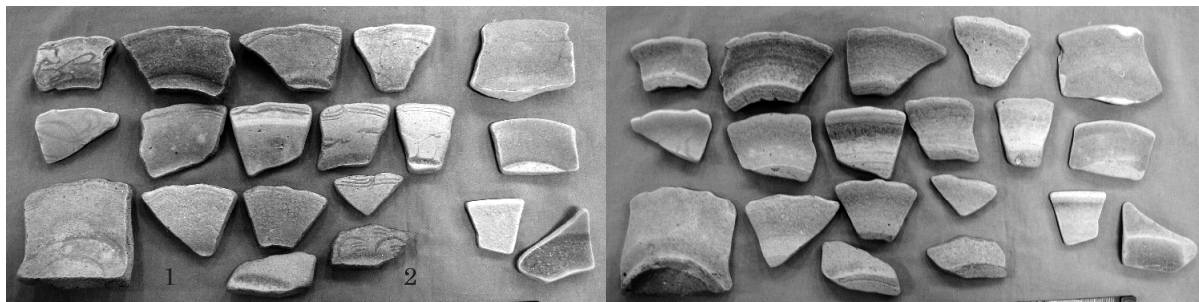


写真29

盤類 (写真30)

鍔縁口縁の盤や大形の皿状片が8点ある。小片のため詳細時期は不明確であるが、鍔縁を上方に摘み上げる14C後半～15C前半位まで遡る可能性のあるもの（1）も含まれる。また、内側面に劃花文（2）・蓮弁文（3）・陽印刻文（4）を施すものがある。

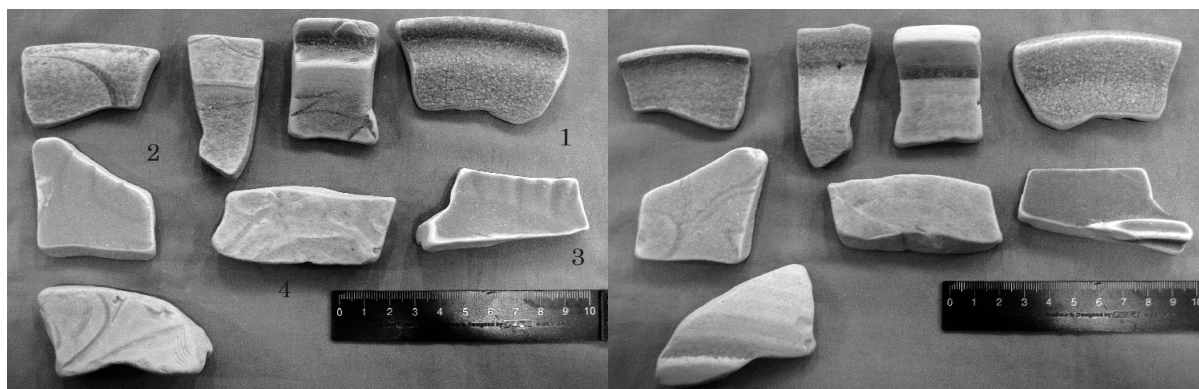


写真30

香炉 (写真31)

3点あり、全て寄口である。詳細時期は不明。

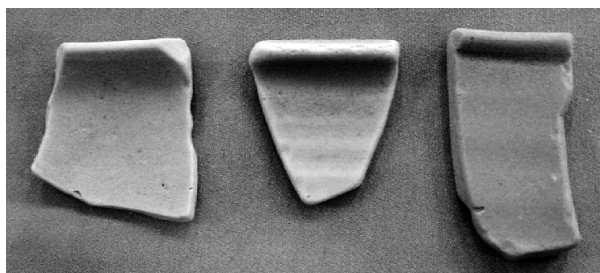


写真31

青花 (写真32)

2点あり、1点は景德鎮窯の蓮子碗である（2）。他1点は腰折れの破片（1）であるが、小片のため全形は不明。文様形態は漳州窯の製品と類似するが、磨滅が著しく釉もほとんど剥落しているためかなり不明確である。

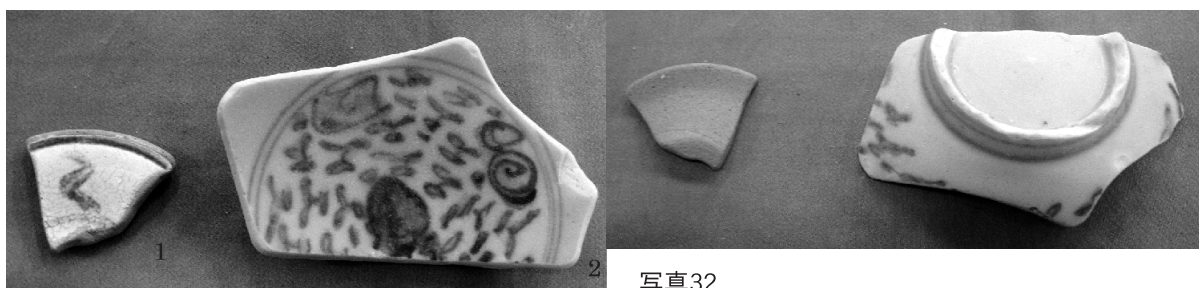


写真32



## 朝鮮半島陶磁

明らかに朝鮮半島の製品と確認できたのは10点である。高麗王朝のものと朝鮮王朝のものがある。

### 高麗王朝（写真33）

青磁象嵌筒形蓋と思われる底部片が1点のみ確認される。裾部に白黒象嵌による連弁文が施される。釉層は厚く、残っていないが珪石目の可能性が高い。13世紀後半～14世紀前半位の製品と思われる。写真33の右は韓国海剛陶磁美術館所蔵品（海剛陶磁美術館1990）で、同種と思われるものを参考までに掲載した。



写真33

### 朝鮮王朝（図14、写真34）

粉青沙器の他、白磁が1点ある（1）。前者は印花象嵌の碗、或いは皿である。いずれも釉が剥落しており白土の象嵌のみが残り、詳細時期は不明確であるが、概ね15世紀あたりものと思われる。後者は硬質白磁の碗で、高台内はアーチ状を呈する。16世紀位か。

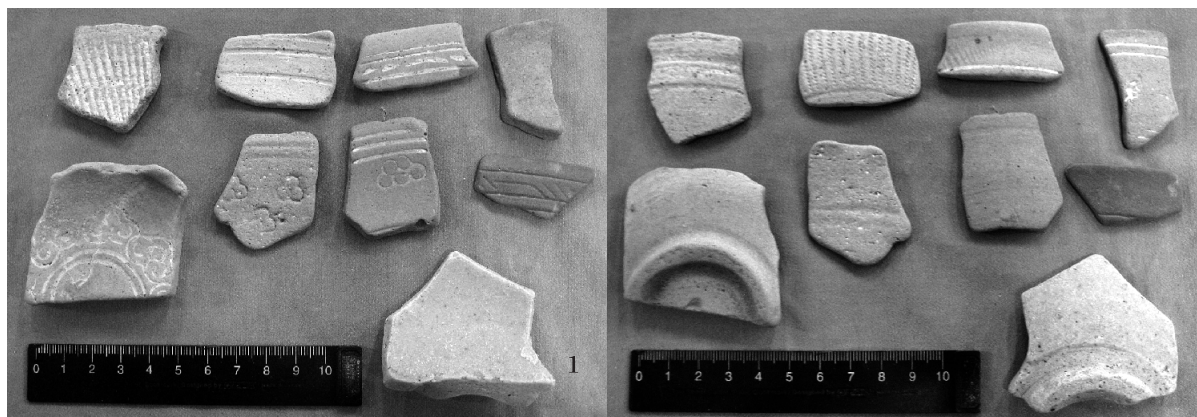


写真34

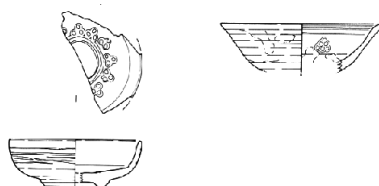


図14

以上の他、陶器類も少量見られる。摩耗が著しく具体的な産地・年代等については不明である。国産品と思われるものもあるが、全てを写真掲載した（写真35）。

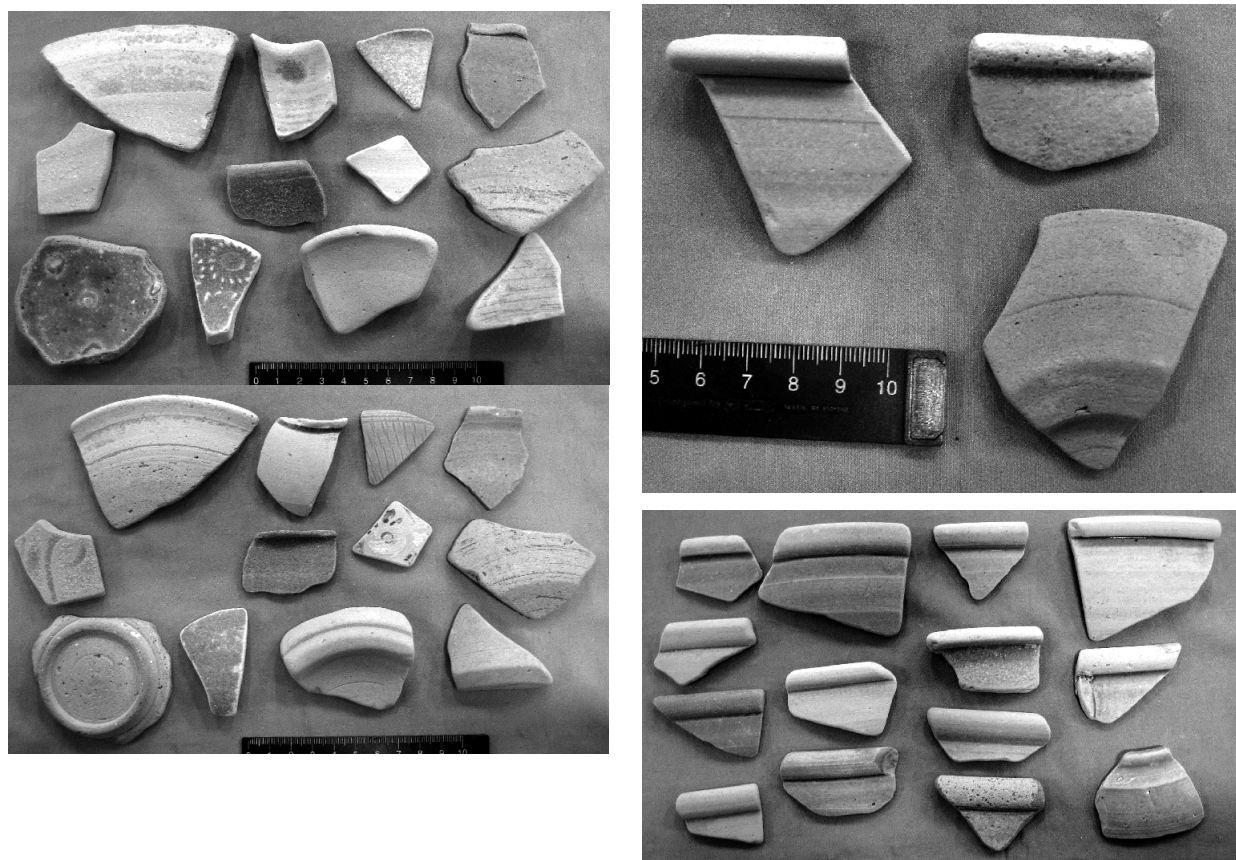


写真35

### 3 おわりに

採集された貿易陶磁器は、肥前陶磁器に比べると細片や摩耗の著しいものが多いが、中には残存率の大きな破片やローリングの少ないものも見られ、それらの由来については不明確な点も多い。野上と添田は三里松原海岸で採集された膨大な量の肥前陶磁器漂着のメカニズムについて多方面からの考察を加えている（野上・添田2006）。同時に採集された貿易陶磁器についても、地理的環境からすると、周辺集落からの流れ込みによるものとは考え難く、時代こそ違え、肥前陶磁器と同様恐らく岡垣浜沖で沈没した船の積み荷が漂着したと考えていいだろう。博多は中世全般を通しての貿易拠点であり、博多に荷揚げされた貿易品は、玄界灘から響灘を通過し、瀬戸内海方面、或いは日本海側といった国内各地へと運ばれる。この海域は、その重要な通過点であるが、同時に航海上の難所としても知られており、採集貿易陶磁器の大半が、博多が最も繁栄した日宋貿易時期の製品で占められていることからそのことが窺える。さらに言えば、時代が新しいにもかかわらず元から明代までの製品が極端に少ないのは、中世後半期における貿易システムの変化と、それに伴い新しい貿易拠点、或いは交易ルートが出現し、必ずしも九州北部沿海を通過する必要性がなくなったことと関連するのかもしれない。

**(参考文献)**

有田町歴史民俗資料館・アジア水中考古学研究所 2009

『海揚げりの有田焼ー筑前岡垣浜を中心にー』、

平成21年度 海の文化遺産総合調査プロジェクト、有田町歴史民俗資料館企画展

野上建紀 2005

「響灘に沈んだ陶磁器ー中近世の沈没船・積荷の存在の可能性について」

『水中考古学研究』 創刊号 アジア水中考古学研究所

野上建紀・添田征止 2006

「陶磁器漂着のメカニズムー三里松原海岸ー」 『水中考古学研究』 第2号

アジア水中考古学研究所

海剛陶磁美術館 1990

『海剛美術館図録 第一冊』 韓国ソウル



# 海底・海岸発見の肥前陶磁 — 海揚げりの陶磁器の特質について —

野上 建紀

## はじめに

肥前陶磁の生産の歴史は、16世紀末に始まる。大陸からの技術導入によりまず施釉陶器の生産が始まった。すなわち、唐津焼の誕生である。そして、豊臣秀吉の文禄・慶長の役によって、多くの朝鮮人陶工が連れ帰られ、さらに肥前の窯業は発展した。やがて磁器原料が発見され、有田を中心とした地域で磁器の生産が開始された。17世紀初めのことである。以後、近世を通して、有田は磁器生産の中心であり続けた。

生産の中心は有田であったが、その積み出し港の名前に由来して、肥前磁器は「伊万里」とよばれた。消費地への輸送が積み出し港からの海運によるものであったことを如実に語っている。陶磁器のように重くてかさばるものを遠くへ大量に運ぶためには、その運搬手段として船が選ばれたのである。

しかし、伊万里などの港から肥前陶磁を積み出した船は必ずしも目的の港に到達しなかった。不幸にも波間に消えた船もあったし、時化の中、積荷を投げ捨てた船もあった。あるいは港に辿り着いたとしても運搬中に積荷が壊れてしまうこともあり、港の海底に捨てられることもあったのである。

本稿では、海底または海岸で発見されている肥前陶磁（図1）、すなわち、海揚げりの肥前陶磁を集成して、その性格や特質を論じたいと思う。

## 1 肥前陶磁の流通小史

まず肥前陶磁の流通の歴史を少し振り返ってみる。唐津焼が早い段階から海路によって遠隔地に運ばれていることは、消費地におけるその出土状況により明らかである。特に瀬戸内海と日本海側では早くから多くの唐津焼が運ばれていた。瀬戸・美濃の商圈と棲み分けていたと考えられる。そして、有田焼など肥前磁器もその唐津焼の流通ルートにのる形で運ばれていった。

やがて17世紀中頃には国内の磁器市場を独占することになる。当時の磁器輸出大国であった中国が王朝交替に伴う混乱により磁器輸出を激減させたためであった。さらに17世紀後半には中国が海禁政策を行ったことにより、肥前陶磁は海外市場に出回らなくなった中国磁器に代わって東南アジアをはじめ、南アジア、西アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカへと運ばれていった。肥前陶磁を積んだ船は世界を回ることになった。

17世紀末に中国が海禁を解いた後は、国内市場の比重が大きくなるが、海外輸出によって拡大した生産能力は、日本国内の新たな購買層を開拓していくことになる。そして、発達した国内海運によって、それは支えられ、全国津々浦々に運ばれた。

藩による専売制が敷かれた時期もあったが、肥前陶磁の流通には伊万里商人をはじめとした多くの商人が介在していた。特に江戸中期以降は、多くの旅商人が活躍した。全国の市場を相手に

した筑前商人、江戸通いを行った紀州商人、彼らは伊万里に来航しては、陶磁器を買い積み、全国へと売りさばっていた。

そして、明治時代を迎えても船による輸送は続いていた。海路による輸送の転機が訪れるのは、鉄道が敷設されたことによる。生産地の有田から直接、消費地に運ぶことが可能になり、伊万里港も積出し港としての役割を終えることとなった。その結果、海路による肥前陶磁の流通もまた終焉を迎えることとなったのである。

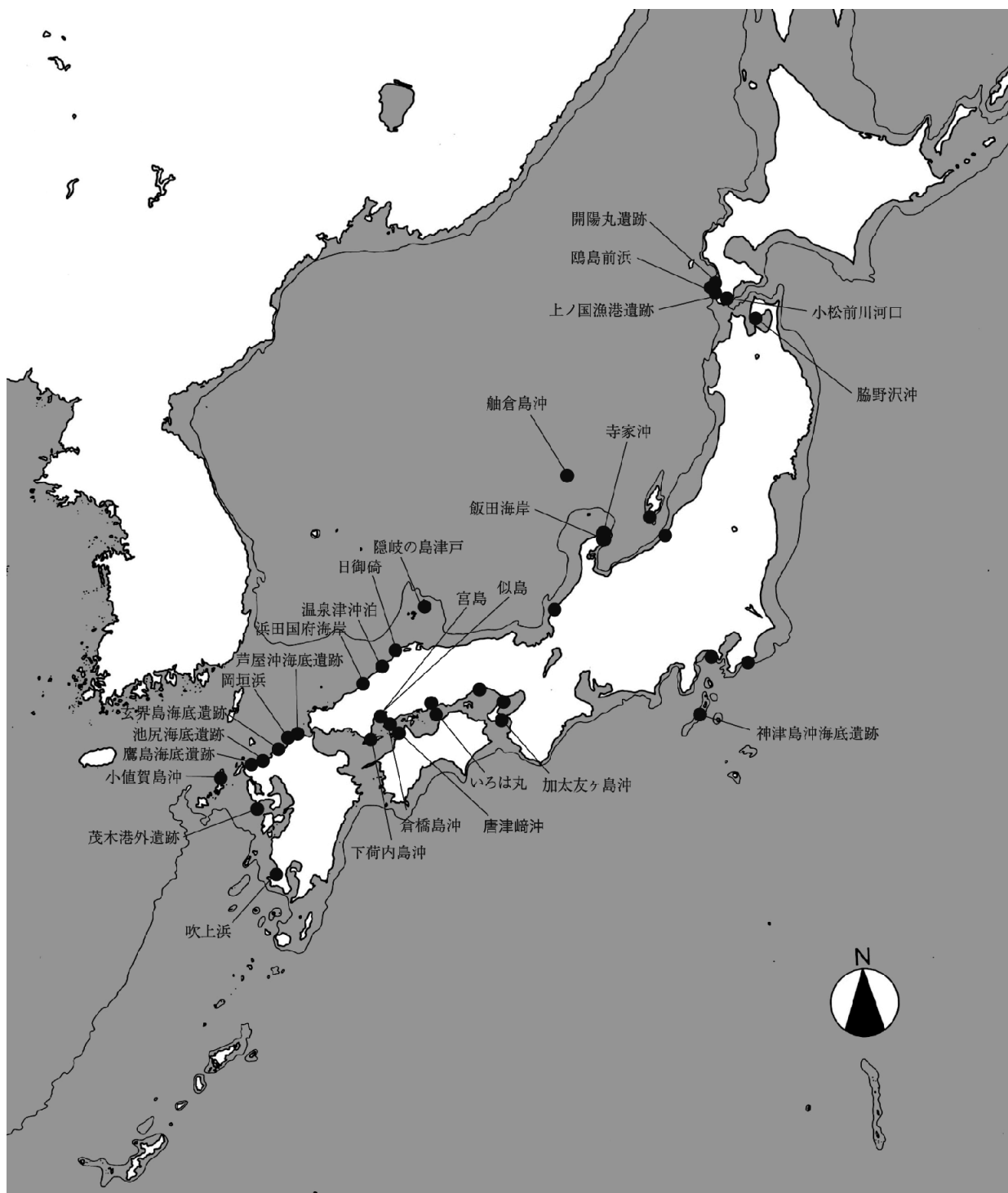


図1 海底・海岸発見の肥前陶磁分布図

|    |              |    |                                    |    |                      |    |         |
|----|--------------|----|------------------------------------|----|----------------------|----|---------|
| 1  | 北海道開陽丸遺跡     | 年代 | 幕末～明治                              | 位置 | 北海道檜山郡江差町字中歌町沖合250m  | 水深 | 4～12m   |
|    |              | 備考 | 1868年沈没。1974～1984年調査。              |    |                      |    |         |
| 2  | 北海道鷗島前浜      | 年代 | 江戸～明治                              | 位置 | 北海道檜山郡江差町字鷗島付近海底     | 水深 | 3～8m    |
|    |              | 備考 | 昭和52年予備調査。                         |    |                      |    |         |
| 3  | 北海道上ノ国漁港遺跡   | 年代 | 江戸～近代                              | 位置 | 北海道檜山郡上ノ国町字勝山496番地先  | 水深 | 1.5～7m  |
|    |              | 備考 | 港で流通過程、消費過程で廃棄されたものと推定される。1985年調査。 |    |                      |    |         |
| 4  | 北海道松前町小松前川河口 | 年代 | 江戸～近代                              | 位置 | 北海道松前郡松前町小松前川河口      | 水深 | －       |
|    |              | 備考 | 陸上の遺跡等から流出したものと推定される。              |    |                      |    |         |
| 5  | 青森県陸奥湾脇野沢沖   | 年代 | 幕末～明治                              | 位置 | 青森県むつ市脇野沢松ヶ崎沖250m    | 水深 | 約11m    |
|    |              | 備考 | 越後産の松前徳利(焼酎徳利)が主体。波佐見の笹徳利が1点見られる。  |    |                      |    |         |
| 6  | 舩倉島沖         | 年代 | 1680～1700年代                        | 位置 | 石川県輪島市舩倉島沖(北西約120km) | 水深 | 800m    |
|    |              | 備考 | カニ籠漁の竹籠によって引き揚げられた。                |    |                      |    |         |
| 7  | 石川県珠洲市寺家沖    | 年代 | 江戸～近代                              | 位置 | 石川県珠洲市寺家沖            | 水深 | 5～10数m  |
|    |              | 備考 | サザエ漁の網によって、四爪錨や陶磁器が引揚げられている。       |    |                      |    |         |
| 8  | 石川県珠洲市飯田海岸   | 年代 | 江戸～近代                              | 位置 | 石川県珠洲市飯田海岸           | 水深 | －       |
|    |              | 備考 | 陸上の遺跡等から流出したものと推定される。              |    |                      |    |         |
| 9  | 島根県石見銀山温泉津沖泊 | 年代 | 18～19世紀                            | 位置 | 島根県大田市温泉津沖泊          | 水深 | 0～6m    |
|    |              | 備考 | 2009年潜水調査。                         |    |                      |    |         |
| 10 | 島根県浜田市国府海岸   | 年代 | 主に18～19世紀                          | 位置 | 島根県浜田市国府海岸           | 水深 | －       |
|    |              | 備考 | 久保公子氏採集。                           |    |                      |    |         |
| 11 | 島根県隠岐の島町津戸   | 年代 | 18～19世紀                            | 位置 | 島根県隠岐の島町津戸           | 水深 | －       |
|    |              | 備考 | 小島あずさ氏採集。久保公子氏所有。                  |    |                      |    |         |
| 12 | 島根県出雲市日御碕    | 年代 | 18世紀                               | 位置 | 島根県出雲市日御碕            | 水深 | 20m     |
|    |              | 備考 | 岡本哲夫氏採集。ダイビング中に偶然発見された。            |    |                      |    |         |
| 13 | 東京都神津島沖海底遺跡  | 年代 | 1820～1860年代                        | 位置 | 東京都神津島沖              | 水深 | 25～29m  |
|    |              | 備考 | 大坂から江戸へ向かった廻船が沈没したものと推定される。        |    |                      |    |         |
| 14 | 和歌山県加太友ヶ島沖   | 年代 | 1700～1780年代                        | 位置 | 和歌山県和歌山市加太友ヶ島沖       | 水深 | 30m     |
|    |              | 備考 | 引き揚げられた陶磁器91点(内、肥前磁器9点)が淡嶋神社に奉納。   |    |                      |    |         |
| 15 | 広島県宇治島沖いろは丸  | 年代 | 1820～1860年代                        | 位置 | 広島県福山市走島町宇治島沖        | 水深 | 27m     |
|    |              | 備考 | 坂本龍馬率いる海援隊の用船。                     |    |                      |    |         |
| 16 | 広島県倉橋島沖      | 年代 | 江戸時代                               | 位置 | 広島県呉市倉橋島沖            | 水深 | 70～150m |
|    |              | 備考 | 島の周辺の複数の海域で陶磁器などが引き揚げられている。        |    |                      |    |         |
| 17 | 広島県宮島        | 年代 | 江戸～近代                              | 位置 | 広島県廿日市市宮島町           | 水深 | －       |
|    |              | 備考 | 干潟で久保公子氏採集。                        |    |                      |    |         |
| 18 | 広島県似島        | 年代 | 江戸～近代                              | 位置 | 広島市南区似島              | 水深 | －       |
|    |              | 備考 | 久保公子氏採集。                           |    |                      |    |         |
| 19 | 愛媛県波方町唐津崎沖   | 年代 | 17～19世紀                            | 位置 | 愛媛県今治市波方町唐津崎沖        | 水深 | ？       |
|    |              | 備考 | 17～19世紀にわたる陶磁器が引揚げられている。           |    |                      |    |         |
| 20 | 山口県下荷内島沖     | 年代 | 1740～1780年代                        | 位置 | 山口県周防大島市下荷内島沖        | 水深 | ？       |
|    |              | 備考 | 1929年に3000点以上の陶磁器が引き揚げられている。       |    |                      |    |         |
| 21 | 福岡県芦屋沖海底遺跡   | 年代 | 1820～1860年代                        | 位置 | 福岡県遠賀郡芦屋町・岡垣町沖       | 水深 | 20～23m  |
|    |              | 備考 | 2005年潜水調査。                         |    |                      |    |         |
| 22 | 福岡県岡垣浜       | 年代 | 江戸～近代                              | 位置 | 福岡県遠賀郡岡垣町新松原海岸       | 水深 | －       |
|    |              | 備考 | 1978年より添田征止氏採集。                    |    |                      |    |         |
| 23 | 福岡県玄界島海底遺跡   | 年代 | 1600～1630年代                        | 位置 | 福岡市玄界島南西海域           | 水深 | 3～8m    |
|    |              | 備考 | 1984、1994年調査。                      |    |                      |    |         |
| 24 | 佐賀県玄海町池尻海底遺跡 | 年代 | 1820～1860年代                        | 位置 | 佐賀県東松浦郡玄海町大字池尻地先     | 水深 | 4～6m    |
|    |              | 備考 | 36点の染付蓋付端反碗。1989年、2007年に調査。        |    |                      |    |         |
| 25 | 長崎県鷹島海底遺跡    | 年代 | 17～19世紀                            | 位置 | 長崎県松浦市鷹島南岸沖          | 水深 | 数～10数m  |
|    |              | 備考 | 元寇ゆかりの海底遺跡。1980年代より継続して調査が行われている。  |    |                      |    |         |
| 26 | 長崎県小値賀島沖     | 年代 | 18～19世紀                            | 位置 | 長崎県北松浦郡小値賀町周辺        | 水深 | 5～10数m  |
|    |              | 備考 | 中世の交易港や沈船遺跡が所在。2001年より調査。          |    |                      |    |         |
| 27 | 長崎県茂木港外遺跡    | 年代 | 1650～1740年代                        | 位置 | 長崎県長崎市茂木港沖           | 水深 | 15～20m  |
|    |              | 備考 | 1998年、2004年に調査。                    |    |                      |    |         |
| 28 | 鹿児島県吹上浜      | 年代 | 1650～1660年代                        | 位置 | 鹿児島県南さつま市吹上浜         | 水深 | －       |
|    |              | 備考 | 東南アジア向けのジャンク船(唐船)の積荷か。             |    |                      |    |         |

表1 海底・海岸発見の肥前陶磁一覧表



## 2 海底・海岸発見の肥前陶磁

日本海、太平洋、瀬戸内海、九州近海の海域の順に、海底・海岸発見の肥前陶磁を紹介していきたい。これらは必ずしも流通途上に沈んだものばかりではない。船上での使用品が沈んだものもあるし、陸上での生活廃棄物が海に流れ出たと思われるものもある。また、江戸後期の陶磁器の中には肥前産と断定できないものも含まれる。

### 開陽丸遺跡（写真1）

北海道檜山郡江差町字中歌町沖合に位置する。開陽丸は、1866年にオランダで建造された徳川幕府の艦隊の旗艦であり、当時、最強ともうたわれた最新鋭の軍艦であった。戊辰戦争の際、榎本武揚は開陽丸以下、艦隊を率いて品川沖を脱走して北海道へと向かったが、1868年11月に江差沖で座礁し、沈没した。1974年に開始された開陽丸の調査は、日本で初めて行われた本格的な水中発掘調査であった。肥前陶磁を含む陶磁器類が出土しているが、開陽丸の沈没年代よりも明らかに新しい遺物も含まれている。

### 江差町鷗島前浜（写真2）

北海道檜山郡江差町字鷗島付近に位置する。鷗島は、江差港の西側沖に横たわり、天然の防波堤となっており、島の東側では多くの北前船が繫留されて盛んな交易による繁栄を見せていた。その賑わいの中、数隻の北前船が沈んだと伝えられている。江差港の防波堤が完成する以前の地元漁師の話では、露出している船体も確認できたという。昭和52年の予備調査では水深3～8mの海底の堆積物から134点の陶磁器片が出土しており、肥前陶磁が数多く含まれている。

### 上ノ国漁港遺跡（写真3）

北海道檜山郡上ノ国町字勝山496番地先に位置する。16世紀末～近代に至る大量の肥前陶磁が出土している。初期の唐津焼もみられ、早い段階から唐津焼が北海道にまで運ばれていたことがわかる。陸上で使用したものが海に廃棄されたものや破損した商品を廃棄したものなど、いくつか性格の異なる陶磁器が海底に沈んでいる。

### 松前町小松前川河口（写真4）

北海道松前郡松前町小松前川河口に位置する。松前は北前船の交易で栄えた城下町である。町を見下ろす丘陵に福山城がそびえている。小松前川は城下を流れ、海に注ぐ川であり、その河口両側に広がる礫海岸で、佐藤雄生氏によって陶磁器が採集されている。多くは城下で使用され、廃棄された陶磁器片が海に流出したものと思われる。

### 陸奥湾脇野沢沖（写真5）

青森県むつ市脇野沢沖に位置する。脇野沢の松ヶ崎沖合約250mの海底で陶磁器が発見されている。この海域では「じかまき」とよばれるホタテ漁が盛んに行われており、網にかかって引き揚げられていた。現在、保管されている陶磁器は全て幕末から明治期にかけての瓶であり、「焼酎徳利」あるいは「松前徳利」ともよばれる越後産の徳利が多いが、波佐見で生産されたいわゆる笹徳利も1点含まれている。



写真1 開陽丸遺跡出土遺物（江差町教委蔵）



写真2 江差町鷗島前浜引揚遺物（江差町教委蔵）



写真3 上ノ国漁港遺跡出土遺物（上ノ国町教委蔵）



写真4 松前町小松前川河口採集遺物（佐藤雄生氏蔵）



写真5 陸奥湾脇野沢沖引揚遺物（むつ市教委蔵）



写真6 輪島市舩倉島沖引揚遺物（黒部市教委蔵）



写真7 珠洲市寺家沖引揚遺物（九千房信雄氏蔵）



写真8 珠洲市寺家沖引揚遺物（九千房信雄氏蔵）





写真9 珠洲市飯田海岸採集遺物（榎谷秀一氏蔵）



写真10 石見銀山温泉津沖泊引揚げ遺物（大田市教委蔵）

#### 輪島市舳倉島沖（写真6）

石川県輪島市舳倉島沖（公海）に位置する。正確な水深は明らかではないが、おそらく最も深い海底から引き揚げられている有田焼である。1995年5月、輪島市舳倉島と大和堆のほぼ中間にあたる海域の水深約800メートルの海底でカニ籠漁の籠にかかって4点の有田焼の染付皿が引き揚げられた。文様はそれぞれ異なるが、大きさはほぼ同じで、生産年代もほぼ同じである。同じ積荷であったと考えられる。日本海を東上中に航路をはずれて沈んだものと推定される。

#### 珠洲市寺家沖（写真7・8）

石川県珠洲市寺家沖では鉄製の四爪錨や陶磁器がサザエ漁の引揚げ網などで引揚げられている。地元の九千房信雄氏は寺家沖の「ナカグリ」や「コスケグリ」とよばれる海域から引揚げられた四爪錨2本と江戸末期の染付碗を所有する。また、寺家沖には姫島（礁）とよばれる岩礁があり、海の難所として知られており、姫島付近を含めた寺家沖の海域の潜水調査を2009年より金沢大学とアジア水中考古学研究所が共同で行っており、染付碗などが発見されている。

#### 珠洲市飯田海岸（写真9）

石川県珠洲市飯田海岸に位置する。珠洲市在住の榎谷秀一氏によって、珠洲市飯田海岸で採集された資料である。若山川河口付近に位置しているため、陸上から海へ流出したものが波で打ち寄せられたものである可能性が考えられる。陶磁器は、江戸時代後期、明治・大正時代の製品が大半を占める。特に精製コバルトを使用した型紙摺り製品が目立つ。また、ビー玉やガラス玉なども大量に流れついている。

#### 石見銀山温泉津沖泊（写真10）

島根県大田市温泉津町沖泊港に位置する。2007年に世界遺産に登録された石見銀山遺跡は、日本を代表する鉱山遺跡である。全盛期には世界の銀産出量の約3分の1を占めたという。その銀の積出し港として使用された港の一つが沖泊である。2006年にこの港の海底から近世・近代にかけての陶磁器が引き揚げられている。また、2009年に潜水調査を行った際にも海底で陶磁器やキセルなどが発見されている。





写真 11 浜田市国府海岸採集遺物（久保公子氏蔵）

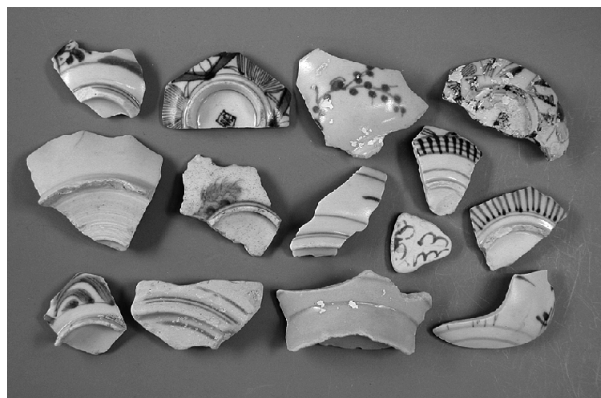


写真 12 隠岐の島町津戸採集遺物（久保公子氏蔵）



写真 13 出雲市日御碕引揚遺物（岡本哲夫氏蔵）



写真 14 神津島沖海底遺跡採集遺物（東京都教委蔵）



写真 15 和歌山市加太友ヶ島沖引揚遺物  
（加太淡島神社蔵）



写真 16 宇治島沖「いろは丸」出土遺物  
（鞆の浦歴史民俗資料館蔵）



写真 17 倉橋島沖引揚遺物（呉市教委蔵）



写真 18 波方町唐津崎沖引揚遺物（今治市教委蔵）

浜田市国府海岸（写真11）・隠岐の島町津戸（写真12）・出雲市日御碕（写真13）

島根県浜田市国府海岸・隠岐の島町津戸・出雲市日御碕に位置する。いずれも島根県で採集されている個人蔵の陶磁器である。

浜田市国府海岸採集遺物は、久保公子氏の採集活動によるものであり、隠岐の島町津戸の陶磁器は小島あずさ氏が海岸で採集したものである。一方、日御碕の陶磁器は岡本哲夫氏がダイビング中に海底で発見したものであり、内田律雄氏が資料化している。

神津島沖海底遺跡（写真14）

東京都神津島村観音地先に位置する。神津島の観音地先の沖合700m付近の水深25～29mの海底に位置している。1990年に硯・石灯籠の一部・錨、1992年に陶磁器・播鉢・硯・石臼・石灯籠など計109点が引き揚げられている。量的には硯と播鉢が大半を占める。播鉢は明石あるいは堺で焼かれたものである。肥前磁器も数点確認される。器の内面に使用痕と思われる細かな傷が多数見られるものもあり、商品だけではなく、使用品も含まれている。大坂から江戸へ向かう廻船が遭難したものと推定される。

和歌山市加太友ヶ島沖（写真15）

和歌山市加太友ヶ島沖に位置し、水深は30mに及ぶとされる。この海域から引き揚げられたとされる陶磁器91点が淡嶋神社に所蔵されている。内訳は中国青磁79点、中国青花2点、褐釉四耳壺1点など中国陶磁が主体を占めるが、肥前陶磁も9点見られる。肥前陶磁の内訳は染付青磁碗5点、陶胎染付碗2点、染付筒形碗、染付皿などである。いずれも18世紀代の製品であり、広瀬向窯などの有田外山の窯場、あるいは波佐見など有田以外の窯場の製品と思われる。大坂から江戸などへ運ぶ途中で沈んだものと推定される。

宇治島沖「いろは丸」（写真16）

広島県福山市走島町宇治島沖に位置する。幕末の志士、坂本龍馬が率いる海援隊の用船「いろは丸」と推定されている。1867年に長崎を出帆して、大坂に向かったが、備後沖で紀州藩の明光丸と衝突し、近くの鞆の浦へ曳航中に宇治島沖で沈んだ。1988年以降、数次にわたって水中考古学研究所による調査が行われており、船体やそれに伴う遺物が発見されている。その中には肥前磁器も含まれている。多くはいろは丸の沈没年代と矛盾するものではないが、明らかにいろは丸の沈没年代よりも新しい陶磁器が一部含まれている。

倉橋島沖（写真17）

広島県呉市倉橋島周辺海域に位置する。倉橋島沖の海域では、ナウマン象や鹿角の化石、古墳時代や平安時代の須恵器甕、中世の土師質土器や瓦質土器、近世の高取系陶器や唐津系陶器などが引き揚げられている。この中で津和地島北3号水域、大館場島北4号水域などで唐津系陶器が引き揚げられている。

波方町唐津崎（写真18）

愛媛県今治市波方町唐津崎に位置する。文政12年（1829）に宮崎（今治市波方町）の唐津崎沖で漁師が蛸で吊り上げたと伝えられる蛸釣り陶器の一部である。17世紀の染付皿、白磁碗、17世紀末～18世紀初めの染付皿、18世紀末～19世紀の染付蓋付碗（広東形碗）、湯呑み碗、蓋物、刀の鞘に陶器碗が付着したものなどがある。瀬戸内海を輸送中に沈没した積荷と推定されている。





写真 19 廿日市市宮島採集遺物（久保公子氏蔵）



写真 20 広島市似島採集遺物（久保公子氏蔵）

#### 宮島（写真19）・似島（写真20）

広島県廿日市市宮島町、広島市南区似島に位置する。厳島神社で知られる日本三景の一つ、安芸の宮島の干潟では、江戸時代の陶磁器が多数見つかり、地元の久保公子氏によって採集が続けられている。唐津や初期伊万里も見られるが、主体をなしているのは18世紀以降のくわんか碗、皿、刷毛目陶器碗などである。流通過程ではなく、消費過程で廃棄されたものと思われる。また、氏は似島でも採集活動を行っているが、性格的には宮島と同様であろう。

#### 下荷内島沖（写真21）

山口県周防大島町下荷内島沖に位置する。1929年に3000点以上の陶磁器が引き揚げられている。いずれも海底の砂泥中に埋没していたため、残存度が良好なものばかりであったという。現在、所在が明らかなものは西条市立郷土博物館に保管されている16点のみである。染付青磁皿や染付蛸唐草文皿、染付蓋物などがあり、いずれも18世紀の肥前磁器である。

#### 芦屋沖海底遺跡（写真22）

福岡県芦屋町・岡垣町沖に位置する。筑前商人の本拠地の一つ、芦屋の港から北西6.4キロメートル、水深20数メートルの海底から100点以上の肥前磁器が引き揚げられている。碗、皿、蓋物、鉢、火入れ、香炉、灰落としなど器種は豊富である。大皿はいずれも口径が40cm以上のもので、有田の南川原や黒牟田の窯場で焼かれたものである可能性が高い。小皿や中皿は志田産である。有田焼と志田焼が同じ船の積荷として運ばれていたことを示す資料である。



写真 21 下荷内島沖出土遺物（西条郷土博物館蔵）



写真 22 芦屋沖海底遺跡引揚遺物  
（芦屋町歴史民俗資料館蔵）





写真 23 岡垣浜採集遺物（添田征止氏蔵）



写真 24 玄界島海底遺跡採集遺物（福岡市教委蔵）

#### 岡垣浜（写真23）

福岡県遠賀郡岡垣町新松原海岸に位置する。響灘に面した岡垣浜（新松原海岸）は、かつて米軍や自衛隊の射爆撃場であった。返還が実現し、一般人が立ち入りできるようになったのは、1978年のことである。以後、陶磁器の漂着が知られるようになり、添田征止氏は30年以上にわたって、この海岸に漂着する陶磁器を採集し続けた。中世の中国磁器から近代の国産磁器まで数百年間にわたる陶磁器が見られるが、中心をなすのは江戸時代の肥前陶磁である。

#### 玄界島海底遺跡（写真24）

福岡市玄界島南西海岸沖に位置する。玄界島は福岡湾（博多湾）の入口に浮かぶ島である。この島の南西海岸の周辺海域で、1984年および1994年に潜水調査が行われ、唐津系陶器が多数発見されている。いわゆる溝縁皿と称する灰釉皿が多く、他に唐津系鉄絵砂目積み大皿、灰釉碗、鉄釉瓶などが発見されている。

#### 池尻海底遺跡（写真25）

佐賀県玄海町大字池尻地先に位置する。玄海町のトリカ崎の南側の入り江で、岩場の汀線から約85メートル沖合の水深4～6メートルの海底で、岩場にはり付くように散布している状態で発見されている。総数36点の遺物の全て肥前磁器であり、いずれも染付端反碗である。伊万里港から積み出されて、玄界灘を航行中に何らかの海難に遭遇したものと推定される。

#### 鷹島海底遺跡（写真26）

長崎県松浦市鷹島沖に位置する。13世紀末の元寇終焉の地として知られる鷹島は、有田焼などの積出し港がある伊万里湾の出入り口に位置する島でもある。この海域で発見される遺物の多くは元寇関連のものであるが、17～19世紀にかけての肥前陶磁も含まれている。ただし、積荷の一部であるのか、行き交う船で使用されていたものか、明らかではない。

#### 五島列島小値賀島沖（写真27）

長崎県小値賀島周辺海域に位置する。小値賀島は、東シナ海への玄関口に位置している。そのため、交易船が多数往来していた。小値賀島の周辺海域で数多く発見される中世の交易船の木碇の「碇石」がそのことを物語っている。前方湾海底遺跡では主に12～13世紀の中国陶磁、山見沖海底遺跡では主に16世紀末～17世紀初めのタイ陶磁が多数発見されているが、いずれの遺跡でも肥前陶磁が少量発見されている。

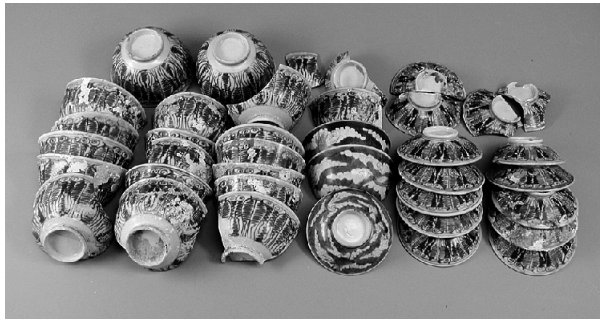


写真 25 池尻海底遺跡採集遺物（玄海町教委蔵）



写真 27 小値賀島沖採集遺物（小値賀町教委蔵）



写真 28 茂木港外遺跡出土遺物  
(NTT-WE マリン長崎事務所海底線史料館蔵)



写真 26 鷹島海底遺跡出土遺物（松浦市教委蔵）



写真 29 鹿児島県吹上浜採集遺物  
(佐賀県立九州陶磁文化館保管)

#### 茂木港外遺跡（写真28）

長崎市茂木港沖100～200mに所在する。かねてより「茶碗皿曾根」と称されており、ダイバーによって水深18mの海底から肥前陶磁が100点ほど引き揚げられている。磁器は染付瓶があるのみで、多くは銅緑釉碗・皿や刷毛目鉢などの唐津系陶器である。いずれも塩田川の支流域に位置する窯場の製品であり、塩田津などの商人が流域の窯場の陶磁器を集荷して、積み出したものと推定されている。

#### 鹿児島県吹上浜（写真29）

鹿児島県南さつま市吹上浜に位置する。吹上浜は薩摩半島の東シナ海に面した長い砂浜であり、1970年代末頃から陶磁器が大量に漂着するようになった。1650～1660年代の肥前陶磁であり、大半は東南アジア向けの製品である。有田などで焼かれた陶磁器が、長崎から積み出され、東シナ海を南下する途上で、何らかの海難に遭遇して沈んだものと推定される。







ている。やはり日常的に海に接している活動によって、発見されることが多い。これは東アジアにおいては日本に限ったことではなく、韓国や中国でも同様に最初の発見要因は漁撈活動であることが多い。漁撈活動以外では、レジャーダイビング、海底工事作業及びそれに伴う事前調査、海岸における採集活動の中で発見されている。

#### ① 漁撈活動

さまざまな漁によって、海底の陶磁器が発見されている。漁の種類を括弧内で記すと、次のようになる。脇野沢沖（ホタテ漁）、舩倉島沖（カニ漁）、珠洲沖（サザエ漁）、山見沖海底遺跡（アワビ漁）、唐津沖（蛸つり漁）、倉橋島沖（底曳き網漁、べたこぎ）、玄界島海底遺跡（アワビ・ウニ・サザエ漁）などである。

アワビ漁やサザエ漁などは、おおよその引揚げ地点を知ることができるが、底曳き網漁のように網を移動させながら行う漁の場合、最終的に網を引揚げて陶磁器を発見した時にはすでに陶磁器の原位置から大きく離れていることが多く、その位置を特定することは難しい。

#### ② レジャーダイビング

レジャーダイビングの際に偶然発見される例もある。日御碕、芦屋沖海底遺跡などである。日御碕は1点のみの発見であるが、芦屋沖海底遺跡では約100点の陶磁器が発見されている。概してレジャーダイビングが行われる海域は、透明度が高い。透明度の高さ自体は海底の陶磁器等の発見を助けるものであるが、透明度の高い海底は岩礁などであることが多く、船体など有機質の遺物が埋没して残る可能性は低い。

#### ③ 海底工事作業

海底工事作業そのもので発見された遺跡が茂木港外遺跡である。海底ケーブル撤去中に大量の陶磁器が発見されたものである。陸上の遺跡と同じく、遺跡の発見届が提出され、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録された。ただし、発見された遺物に関しては、発見者（拾得者）の所有となっている。国は土地所有者としての半分の権利を放棄した形となっている。

#### ④ 海底工事作業の事前調査

最初の発見自体は、海底に落ちている遺物を発見したことによるが、埋蔵文化財包蔵地として、工事に伴う緊急調査が行われた例が池尻海底遺跡、上ノ国漁港遺跡などである。これらは陸上の遺跡と同様の手続きに基づいている。

#### ⑤ 海岸における採集活動

ビーチコーミングなど海岸における採集活動によって集められた陶磁器が、岡垣浜、吹上浜、小松前川河口、飯田海岸、国府海岸、津戸などの資料である。中には岡垣浜の資料のように30年以上にわたって採集されたものもある。

#### ⑥ 伝承・記録

沈没記録や遭難記録、伝承からおおよその位置が推定されていたものが開陽丸、いろは丸、鷹島海底遺跡などである。また、海底に船体が見えたという証言によって調査された例が鳴島である。ただし、鷹島海底遺跡の遭難記録は、元寇の記録であり、肥前陶磁とは関わりない。

### （３）遺跡の形成過程

海底で発見される陶磁器は、運搬途上に沈んだものと、港で廃棄されたものがある。陸地から離れた海域で沈んだものの多くは、沈没船あるいは沈没積荷に伴うものである。北海道開陽丸遺跡、青森県脇野沢沖、石川県舳倉島沖、広島県いろは丸遺跡、和歌山県加太友ヶ島沖海底遺跡、山口県下荷内島沖、唐津崎沖、広島県倉橋島沖、東京都神津島沖海底遺跡、福岡県芦屋沖海底遺跡、福岡県玄界島海底遺跡、佐賀県池尻海底遺跡、長崎県鷹島海底遺跡、長崎県小値賀島沖、長崎県茂木港外遺跡などが該当する。

船体が確認されている開陽丸やいろは丸の陶磁器を除けば、沈没船そのもののなか、それとも遭難に際して積荷のみが海中投棄されたものか、区別することは難しい。沈んだ遺物の量から判断すれば下荷内島沖、神津島沖海底遺跡などは沈没船である可能性が高い。また、北海道鳴島前浜の海底では、かつて和船の帆柱を見ることができたとも伝えられ、船そのものが沈んでいた可能性が高い。すなわち、港は必ずしも安全な場所ではなく、船が沈むこともあったと言える。

一方、港の海底から発見される陶磁器の多くは陸上から廃棄されたものも多いと思われる。船からの荷揚げ時に破損が確認されて、そのまま廃棄されたものもあったし、港で使用された陶磁器が廃棄されることもあった。北海道上ノ国漁港遺跡、島根県沖泊などで発見される陶磁器は、港で廃棄されたものであろう。

海岸発見の陶磁器は、運搬途上に沈んだものと陸地からの廃棄あるいは流出したものに分けられる。福岡県岡垣浜、鹿児島県吹上浜などで採集されている陶磁器は、沈没船あるいは沈没積荷の一部と推定される。吹上浜の陶磁器は1650～1660年代頃と陶磁器の年代が限られており、一度の遭難と推定されるが、岡垣浜の場合は陶磁器の年代幅が広く、複数回にわたる遭難によるものと推定される。

海岸に廃棄されたものがそのまま残される場合もある。干潟などではローリングによる摩耗もなく、廃棄された時と近い状態のまま発見される。広島県宮島の干潟で発見される陶磁器などはそうした例であろう。あるいは陸地から河川等によって、海まで流され、それらが海岸に打ち上げられる場合もある。北海道松前町小松前川河口付近の海岸や石川県珠洲市飯田海岸などで採集されている陶磁器などは、そうした理由による可能性が高い。なお、飯田海岸では陶磁器だけでなく、ビー玉やガラス玉が大量に漂着している。

### （４）陶磁器の性格

海揚げりの陶磁器の性格について整理する。海揚げりの陶磁器は、まず流通過程にあるものと消費過程にあるものに分けられる。さらに前者は①商品、②容器（商品の一部）、後者は③船上の使用品、④陸上の使用品に分けられる。均一な性格をもつ遺跡もあれば、これらの異なる性格の陶磁器が混在する遺跡もある。

#### ①商品

積荷として船に積み込まれたものである。一般に同一種類のものが複数見られる場合が多い。例えば舳倉島沖、加太友ヶ島沖、下荷内島沖、芦屋沖海底遺跡、岡垣浜、玄界島海底遺跡、池尻海底遺跡、茂木港外遺跡、吹上浜などである。沈んでいる船が１艘のみであれば、陶磁器の年代幅も限られる場合が多い。

港に沈んでいる陶磁器にも商品が含まれていることがある。例えば、港内で沈んだ船の積み荷、

荷揚げの際に破損が判明した陶磁器や港に保管中に破損して廃棄されたものも性格的には商品である。

## ②容器

商品の一部ではあるが、陶磁器そのものが商品というよりは、むしろ内容物が商品である。脇野沢沖の資料は容器として運ばれたものであろう。肥前陶磁ではないが、山見沖海底遺跡のタイ産の大壺なども容器としてもたらされたものである。一方、鷹島海底遺跡においても褐釉四耳壺など容器が多数出土しているが、これらは元の軍船に積まれていたものであるもので、商品ではない。次に述べる船上の使用品に該当するものである。

## ③船上の使用品

船上の乗組員などが使用するために船に持ち込んだものである。船は小さいながらも乗組員にとっては生活空間であり、生活用品として陶磁器も船に持ち込まれた。船の乗組員の人数に見合う程度の量であることが一般的である。明確な使用痕跡があれば判断しやすい。

## ④陸上の使用品

港や付近の町で使用された陶磁器が海に廃棄されたもの、陸上の遺跡の陶磁器が海に流出したものなどである。前者は上ノ国漁港遺跡、沖泊などが該当する。上ノ国漁港遺跡の出土遺物の中には修復を行った焼継師が署名しているものも含まれており、明らかに使用品であったことがわかる。

後者は小松前川河口、飯田海岸などが該当する。性格的には陸上の遺跡の遺物と変わらない。陶磁器の年代幅が広く、種類も豊富である。港や付近の生活と歴史を物語る資料である。

## （５）反映されている地域

海揚げりの陶磁器は、その性格によって反映しているものが異なる。前にあげた陶磁器の性格ごとに反映されている地域について述べる。

商品の場合、船の目的地の地域の陶磁器需要を反映している。例えば長崎から積み出されて東南アジアに向かう途中に遭難して沈んだと推定されている吹上浜採集陶磁器は、吹上浜の周辺地域の陶磁器需要を反映したものではなく、明らかに東南アジアの需要を反映した種類であり、組成である。

商品の一部としての容器の場合も商品と同様に船の目的地の需要を反映しているが、陶磁器そのものが商品の場合と異なり、再利用されることも少なくないし、生産時の使用目的と異なることも想定される。

船上の使用品や陸上の使用品は、ともに消費過程の遺物であるが、必ずしも反映している地域は一致しない。陸上の使用品の場合、陸上から廃棄されたものや、川などから流出したものであるため、遺跡付近の地域あるいは上流域の陶磁器需要を反映している場合が多いのに対し、船上の使用品の場合、遺跡周辺ではなく、むしろ出帆地の陶磁器需要を反映している場合が多い。船に乗り込む場合、当地の生活を持ち込む場合が多いからである。そのため、沈没船の場合、積み荷の商品よりも船上の使用品の方が船籍を知る手がかりになる。



## （6）積出し港と航路

肥前陶磁の場合、生産地の位置が特定されており、積出し港の位置も知られているので、最終的な目的地は不明であるにしても、その位置関係から針路や方向はおおよそ推定できるものが多い。つまり、伊万里から積み出されたと推定されるものは、伊万里から遠ざかる方向へ船が進んでいたと考えられる。

製品の組み合わせから推定されるものもある。茂木港外遺跡などはその好例である。茂木港外遺跡では、いくつかの窯場の製品が出土しているが、いずれも塩田川の支流域に位置する窯場の製品である。そして、有田や波佐見などの製品は含まれていない。遺跡の位置とあわせて考えると、伊万里から積み出されたものではなく、塩田川流域の商人が流域の窯場の製品を集荷して、積み出した可能性が高い。その場合の最も合理的な説明ができる航路は、塩田港から積み出されて、有明海に出て、島原半島を回り込んで、茂木沖で遭難したというものである。同じく塩田川流域の製品が発見されている芦屋沖海底遺跡の場合は、有田焼とともに発見されていることから、伊万里港から積み出されたものである可能性が高い。

## おわりに

これまで陸上の生産地や消費地の遺跡で数多くの肥前陶磁が発掘され、研究が進んできたが、肥前陶磁の出土分布範囲は水中にまで広がっている。しかしながら、これまで考古資料として積極的に活用されることはあまりなかった。その性格はさまざまであるが、特に流通過程に廃棄された陶磁器は、その流通形態を知る上で重要な資料であり、陸上の遺跡では得られない情報を内包している。そして、それは商品を生産、流通、消費という一連の過程において考える上でも有用な資料となると考える。すなわち、生産地と消費地をつなぐ資料となりうるのである。

一方、流通過程に廃棄された陶磁器の全てが十分な資料的価値を有するとは限らない。調査実績が少ないことから、陸上の遺跡以上に資料批判が必要であるし、またその批判に耐えるだけの信頼度をもった調査を行わなければならない。その意味でも水中考古学にかかる期待とともにそれに携わる研究者の責務もまた大きい。

## 引用文献・関連文献

- 青森県史編さん考古部会編2003「49 脇野沢沖海上がり陶磁器」『青森県史資料編考古4 中世・近世』青森県史友の会
- 荒木伸介・石原渉ほか1987『上ノ国漁港遺跡-昭和58・60年度発掘調査報告書-』上ノ国町教育委員会・函館土木現業所
- 有光宏之・東中川忠美1996『池尻海底遺跡』玄海町教育委員会
- 石井 忠1992『海辺の民俗学』新潮選書
- 石岡ひとみ2008『掘り出されたえひめの江戸時代-くらし百花繚乱-』愛媛県歴史文化博物館
- 大橋康二1985「鹿児島県吹上浜採集の陶磁片」『三上次男博士喜寿記念論文集・陶磁編』平凡社
- 小川光彦2010「2009年度・島根県大田市石見銀山遺跡・温泉津沖泊における潜水調査」『水中考古学研究』第3号
- 小川光彦2010「2009年度・能登半島珠洲市における潜水調査」『水中考古学研究』第3号
- 九州・沖縄水中考古学協会・小値賀町教育委員会2002『山見沖海底遺跡』

- 小林達雄ほか1993『神津島村神津島沖海底遺跡』東京都埋蔵文化財調査報告書第20集  
東京都教育委員会
- 酒井中2010「2009年度・能登半島海岸踏査」『水中考古学研究』第3号
- 佐々木達夫ほか2010「日本海海域における水中文化遺産調査概報-平成21年度-」『金沢大学考古学紀要』、vol.31 金沢大学人文学類考古学研究室
- 塩屋勝利1988「玄界島の海底陶器」『福岡市歴史資料館研究報告第12集』福岡市歴史資料館
- 新谷武夫1991「倉橋の埋蔵文化財」『倉橋町史・資料編監』倉橋町
- 高野晋司1992『鷹島海底遺跡-長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書-』  
長崎県鷹島町教育委員会
- 中田敦之編2008『松浦市鷹島海底遺跡』松浦市文化財調査報告書第2集 長崎県松浦市教育委員会
- 野上建紀1998「海揚げりの肥前陶磁」『NEWSLETTER』第4巻第3号  
九州・沖縄水中考古学協会
- 1998「海揚げりの肥前陶磁-玄界灘沿岸を中心に-」『研究紀要』第7号  
有田町歴史民俗資料館
- 1998「茂木港外遺跡に関するノート」『研究紀要』第7号 有田町歴史民俗資料館
- 1999「肥前陶磁の流通形態-海揚げりの資料を中心に-」『貿易陶磁研究』No.19
- 2000「茂木港外遺跡確認調査-1998年8月-」『金沢大学考古学紀要』第25号
- 2004「茂木港外遺跡発掘調査略報」『NEWSLETTER』No.18
- 2005「響灘の陶磁器」『金大考古』No.49
- 2005「響灘に沈んだ陶磁器-中近世の沈没船・積荷の存在の可能性について-」  
『水中考古学研究』創刊号
- 2007「海に沈んだ有田焼」『皿山びとの歌』有田町歴史民俗資料館館報No.74
- 2007「沈没船の研究」『貿易陶磁研究』No.27
- 2008「漂着する陶磁器」『Ship & Ocean Newsletter』No.180
- 野上建紀・添田征止2006「陶磁器漂着のメカニズム-三里松原海岸-」『水中考古学研究』第2号
- 林田憲三1995「志賀島・玄界島の海底調査」『志賀島・玄界島-遺跡発掘事前総合調査報告書-』  
福岡市教育委員会
- 真鍋篤行1994「瀬戸内海における沈船遺跡について」『貝塚』48 物質文化研究会
- 宮武正登2007「池尻海底遺跡」潜水目視調査の概要『水中文化遺産と考古学』アジア水中考古学研究所
- 山本典幸・山内利秋1994「近世考古学における神津島沖海底遺跡の持つ意義-遺跡構造と硯・播鉢の分析から-」『國學院大學考古学資料館紀要』第10輯
- 読売新聞北陸支社編1997『日本海こんぶロード北前船』能登印刷出版部
- 和歌山市教育委員会1997『和歌山市加太友ヶ島沖出土の陶磁器』

# 長崎県五島列島小値賀における日宋交易に関する一考察

—前方湾海底遺跡調査の成果より—

田中 克子

## 1. 小値賀島の地理的・歴史的概観（図1）

小値賀島は長崎県北松浦郡小値賀町に所在し、九州西北部の沖合に南北に横たわる五島列島北部に位置する。大小17の島々から成る小値賀町の主島・小値賀島は、五島列島主要七島の中では最小面積の島であるが、火山成因により形成された島のため他島と比べ平坦地が多く、沿海海底部には浅い岩礁が広がる。こういった良好な住環境のためか、島内（陸上）には旧石器時代から近世まで連綿と続いて多くの遺跡が残されており、中世期においては五島列島で貿易陶磁器を出土する遺跡のうち半数以上が小値賀島域に集中する。

「おぢか」の名称は、古くは古事記、肥前国風土記、三代実録等に、「知訶嶋」「近島」「小近」「値嘉嶋」等と記載されている。また、中世期五島列島の記録を残す『青方文書』にも「小値賀嶋」「大値賀嶋」として登場する。小値賀島は五島列島の古称である「値嘉嶋」や「近嶋」の名を残す唯一の島である。

8世紀初め遣唐使船は五島列島を経由したルートを採用するようになり、これに呼応するかのようになり、7世紀末～8世紀末にかけて五島列島内には寺社が創建される。小値賀島の神島神社（伝704年）、浄善寺（794年）も、航海安全祈願や飲食料補給地として建てられたとされている。さらに、中国商人等の来航記録に関連した古文献にも9世紀中頃より「値嘉嶋」という地名が見られるようになり、五島列島が中国商人等の寄港地として利用されるようになったことがわかる。

東シナ海の東端に位置する五島列島や平戸近海は、この後中世から近世にかけて1000年近くもの間、日宋～日明貿易、さらには琉球・南蛮貿易等の航路の要衝として重要な位置にあった。小値賀島もその役割の一端を担ってきたことは確かであろう。

## 2. 小値賀島前方湾における海底調査概要（図2・3）

小値賀島周辺海底からは以前より海士や漁民により碇石が発見され、その一部が引き揚げられていた。1992年、島東部に開口する前方湾の北、通称「山見」沖海底において、大量の陶磁器が発見されその一部が確認のため引き揚げられた。これらがタイ産の陶器であることが判明し、2001年に海底調査を行った。これが小値賀島周辺海域における本格的調査の最初である。この調査によって東南アジアと日本を結ぶ貿易船が沈没する可能性が大きくなり、これを契機として、2004年以降前方湾内において断続的な海底調査を実施してきた。

前方湾は開口部から中央付近では20～27mと十分な水深もあり、北に唐見崎、南に殿崎半島、東側開口部に野崎島が横たわり風除けとなり天然の良港となっている。また、標高305mの急峻な地形の野崎島は、周辺海域からの目印となる。前方湾内でも、特に本城岳（標高111m）南西裾野から南東方向に舌状に伸びるクスクリ崎沖一帯は、本城岳によって北東、北西の風がさえぎられ、潮流も穏やかであり、最適な停泊場所と考えられる。しかし、反面湾内には暗礁も多く、座礁の危険性もある。

実際、クスクリ崎沖海底にも東方向に向かって暗礁が延びており、この一帯での碇石や陶磁器の発見が報告されていた。



以上の状況を踏まえ、クスクリ崎沖から東側一帯（水深2m前後～最大8～10m程）を、海底調査の主要対象域とし、合わせて湾奥部と南側の目視調査、湾中央部を東西に横切ってビデオカメラによる調査を実施した。調査方法の主体は遺物の分布範囲を確認するための潜水目視調査であるが、2006年には海底下の遺物包蔵状況を確認するために、ドレッジ（海底掘削機）を使用した初めての試掘調査を実施した。2004年～2008年までの調査の結果、クスクリ崎沖に延びる暗礁の先端一帯（生簀北側）に中国陶磁器を主体とした遺物の集中域があることが判明した。

クスクリ崎沖に設置されている養殖用生簀下は未調査のため空白域になっていた。2006年の掘削調査では狭い範囲にも関わらず中国スタイルの碇石と中国陶磁器も多く出土し、遺物分布範囲は生簀下一帯に広がる可能性が予想されていた。2009年、生簀の一部が撤去され、さらに地元養殖業者の理解を得ることができ、この下の海底調査が実現した。生簀下には砂層が厚く堆積しているため、生簀東側辺寄りに幅2m×長さ5～6mのトレンチを2ヶ所設定し、2006年に続いて2度目のドレッジによる掘削調査を実施した。調査地点の水深は約13～17mである。海底下の遺物包蔵状況を知るには掘削調査が有効ではあるが、海底での作業は思う程進まず、制約された時間内での調査範囲は極めて限られたものであった。しかし、完形品やそれに近い中国陶磁器、船上で使用されたと思われる土師器灯明皿・煤の付着した土鍋等がローリングを受けた形跡もなく、また貝の付着もない等極めて良好な状態で出土した。さらに全く同じ白磁碗が二つ重なった状態で出土するなど埋没時の状況を保っている可能性が高い。また、他の白磁2点には墨書があり、この近海では初めての出土例である。

### 3. 小値賀前方湾クスクリ崎沖海底調査出土貿易陶磁器の概要（図4、表1）

2004年以降の前方湾クスクリ崎沖における調査によって回収された、国産品以外の陶磁器は全て中国産であり、総数約100点である。時期的に分けると、以下のように概ね4区分できる。

#### ① 11世紀後半代～12世紀前半代

##### 白磁

- 1：広東（Guangdong）産平底皿。潮州（Chaozhou）窯系。
- 2：広東産碗。潮州窯系。
- 3：福建（Fujian）産輪花口縁平底皿。省南部の窯か。
- 4：福建産碗。玉縁口縁。特に猪（Min）江流域一帯。
- 5～8：福建産碗。高台が細く高い。口縁上面は水平。無文（5・6・8）と内面に櫛描文（7）。猪清義（Minqing Yi）窯など猪江流域一帯。
- 9：福建産碗。内底輪状に釉剥ぎ。（12世紀中～後半にかけて多く出土する内底を輪状釉剥ぎする白磁碗と比べ、高台がやや高く外に開き、外底の削り出しが丁寧である。博多出土例より、12世紀中頃より若干早い時期の製品か。）

##### 青磁

- 10：初期竜泉（Longquan）窯系青磁。12世紀前半～中頃か。福建産か

##### 陶器

- 11：福建産無釉捏ね鉢。洪塘（Hongtang）窯。
- 12：浙江（Zhejiang）産青灰釉四耳壺。（博多遺跡群では12世紀前半の出土例があるが12世紀後半代までの出土例も多く、12世紀を通じて生産されたものと思われる。胎土・釉調等より浙江省越（Yue）窯の系統を引くものと思われる。）

## ② 12世紀後半代～13世紀初頭

白磁

13・14：福建産碗。輪花口縁。内面に花文。猪清義窯。

青磁

15：同安（Tongan）窯系平底皿

16：同安窯系碗。外面葉脈入り蓮弁文、内面櫛描文。（竜泉窯の影響を受けて、福建省内で生産されたものか。）

17：同安窯系碗。櫛描文。

18・19：同安窯系碗。高台が高く、口縁外反。外面にヘラ彫り（18）と無文（19）。（12世紀後半でもやや遅れて出現するものと考える。）

20：竜泉（Longquan）窯系平底皿。

21～26：竜泉窯系碗。無文（21・22）、内面劃花文（23～26）。

陶器

27：江蘇（Jiangsu）宜興（Yixing）窯系褐釉平底皿。口縁部肥厚。（胎土・釉の特徴から江蘇省宜興窯あたりの製品と考える。）

28～31：江蘇宜興窯系褐釉長胴壺。細身（28）と丸味のある（29）タイプ。12世紀前半～14世紀前半。

32：江蘇宜興窯系？甕。「Y」字口縁。（12世紀前半～）12世紀後半。

33：福建磁 蝶（cizao）窯系四耳長胴壺。口縁肥厚。12世紀後半～13世紀前半。

34：浙江産平鉢。折り返し鐔状口縁、碁笥底。12世紀後半～13世紀前半。（胎土・釉調等より浙江省越窯一帯の製品と考える。）

## ③ 13世紀前半代

青磁

35～37：竜泉窯系碗。鎬連弁文。

陶器

38・39：福建産天目碗。小振り、高台の削り出しが浅い。12世紀後半以降、特に13世紀前半～中頃主体。猪江流域一帯。

40：江蘇宜興窯系無頸長胴壺。「く」の字状口縁、平底。13世紀前半。

41：江蘇宜興窯系褐釉水注か。（頸部と体部境が屈曲し、この部分に短い縦耳が付くことから水注と考える。13世紀前半頃か。）

42～45：浙江産青灰釉陶器四耳壺。「く」の字状口縁、幅広高台。13世紀前半頃の製品と思われる。（12の四耳壺と同じ浙江省越窯の系統を引くものか。）

46：福建省磁 嚙（q）系小口瓶。口縁から肩部にのみ褐釉 2世紀後半～13世紀中頃。

## ④ 13C後半代～14世紀前半

白磁

47：福建産碗。所謂「口禿」。（13C前半～）13C後半～14C前半。

陶器

48：江蘇宜興窯系褐釉壺か。体部屈曲。（体部片のため年代については不明であるが、新安沈船出土のような樽形無頸壺の可能性も考えられる。この場合であれば、13世紀後半～

14世紀前半あたりの江蘇省宜興窯あたりの可能性がある。)

49～51：福建省磁 嚙q 系の壺類。年代については不明

クスクリ崎沖海底出土中国陶磁器は概ね14世紀以前のものに限定される。その中でも、最も量的に多いのが12世紀後半代から13世紀初頭に属する製品で約半数を占める。特に竜泉窯系青磁碗（21～26のタイプ）が多い。これに次ぐのが11世紀後半～12世紀前半代の白磁である。荷揚げ港である博多遺跡群におけるこの時期の白磁の種類は多いが、ここでは口縁上面を水平に仕上げる碗（5～7）がほとんどである。さらに、貯蔵容器である陶器壺類の出土が多いことも特徴として挙げられる。

また中国陶磁の分布状況については、クスクリ崎沖の概ね南北140m、東西100m 程の範囲に集中するが、時期ごとの顕著なまとまりは見出せない（図3参照）。

#### 4. 小値賀における対宋交易の可能性

前方湾内出土の中国スタイルの碇石の出土状況から、この地が中国船の寄航・停泊地として利用されていたことは確かであろう。しかし、単に風待ちや飲食料補給を目的としたものか、或いは何らかの交易活動を目的としたものなのかは不明である。2004年以降の調査結果を踏まえて、この地で恒常的な交易活動が行われた可能性について考えてみたい。なお、山見沖海底沖出土の東南アジア陶磁器（16世紀末～17世紀初頭）については、時期的に見ても平戸を目指した南蛮貿易船の積荷であることは明白であり、今回は含めないことにする。

##### ① 2009年の調査成果（図5）

前述した遺物の出土状況に加え、特に Tr.2においては1.5m×2m 程の狭い範囲に遺物が集中することから、それらの共時性は高く、その埋没年代は土鍋（1）の年代より12世紀後半～13世紀前半と考える。この比較的年代のはっきりとした一括品として捉えられる出土遺物の中から、本調査出土品が宋船の積荷である可能性を示すものを挙げる。

##### ア. 墨書陶磁器

墨書陶磁器、特に「綱首」名や積荷量等交易に関連した内容を示すものについては、諸説ありまだ見解の統一を見ていないが、近年では中国大陆、台湾、朝鮮半島近海における出土例も増加しており、個々の「綱首」が取り扱う積荷の所属を示す資料として理解されるようになっている。消費地での出土量は、中世期の荷揚げ港であった博多遺跡群が圧倒的量を占める。墨書によって商品価値を失った墨書陶磁器は他地に出回らずに博多に残されたというのがその大きな理由である。

近年では博多以外の消費地での出土例も多少報告されるようになり、その意味については検討の余地も残されている。五島列島周辺では伊万里湾に面した長崎県松浦市楼厓田遺跡と大村湾に面した長崎県東彼杵郡白井川遺跡から「綱」墨書銘の中国産白磁がそれぞれ一点出土している。いずれも11世紀後半～12世紀後半代の福建産白磁である。大庭氏はこれら遺跡の貿易陶磁等の出土状況から、当時の大村湾や伊万里湾など肥前沿海部における交易について、しばしば宋船の往路をねらった小規模な交易が行われたが、それは積荷の一部をおろす程度に留まっていた。と想定する。これは、博多遺跡群のようにコンテナとして利用された中国産容器類の出土が極めて少ないというのが主な理由である。3は「十」と読み、4は不明であるが、本来であれば博多でふり落とされるはずのものである。博多へ向かう途中、寄航した宋船の積荷と捉えることも可能であろう。

##### イ. 二つの重なった白磁碗



墨書陶磁器の他、博多以外の地に出回らなかった遺物が出土している 5・6 の重なった状態で出土した白磁碗がそれである。博多遺跡群12世紀前半の一括廃棄土坑では450点を超える貿易陶磁器が出土した。これらを分析した大庭氏は、博多の外に広く流通したものとそうでないものがあり、博多に残されたものは国内市場に出回らなかった製品であり、即ち国内需要を顧慮しない輸入が行われていたと指摘する。この2点の輪状剥ぎのある白磁碗は、流通していないタイプの白磁碗に極めて類似するものである。この法量や器形がほぼ同じ二つの碗が重なって出土したことは、即ち博多荷揚げ後国内流通によって運ばれてきたものではなく、中国で船積みされた状態をそのまま残しているとも考えられる。

以上から、本調査出土の遺物は、中国大陸から博多へ向かう途中の宋船の積載物と捉えることは可能であろう。墨書陶磁器、または重なって出土した白磁の生産年代は推定した埋没年代を若干遡るが、生産地に残されたものが一緒に積み込まれたものと考ええる。同時に検出された煤の厚く付着した土鍋等国産土器については、船主が寺社・権門と密接な関係を持つ「博多綱首」であれば、乗組員等も日本人と中国人の混成部隊であったことも十分考えられ、船上で使用する日用品は国内産であっても不思議ではない。さらに、解体痕や被熱痕のある鹿の骨も検出されている。湾開口部にある野崎島は現在野生ニホンシカの生息地と知られており、想像をたくましくすると、これらを食しながら交易のためある一定期間この地に留まった状況も想定できる。

## ② 中国スタイル碇石の出土

碇石については、小値賀島周辺海域では過去に発見されていたものと合計すると26個体あり、その内前方湾内で発見されたものは23個体である。中国スタイルのものは18個体あり、約半数がクスクリ崎沖海底で発見され、中国陶磁器が集中する一帯とほぼ重なる。この碇石の量は、中世を通じての最大の国際貿易港であった博多湾内、或いは湾周辺部で発見された量にほぼ匹敵し、中国船の利用頻度の高さを物語るものである。

## ③ 湾内出土の中国陶磁器

まず、出土中国陶磁器の内、コンテナとして利用されたとされる壺類の出土量が多いことから、これらが博多へ向かう中国船の積荷であった可能性は高い。では、中国船の寄航・停泊の目的は何であったのか。13世紀半ば以降の貿易システムの変化によって、日本と中国を往来する貿易船は主に日本派遣船へと変わる。しかし、五島列島周辺海域は引き続き主要交易ルートとして使用されており、飲食料の補給、或いは風待ち等のため前方湾を利用した可能性は十分に考えられる。ところが、出土中国陶磁に元以降のものがほとんどなく、ほぼ宋代のものに限定されるという状況は、宋船の寄航頻度の高さを示すもので、その目的が単に水や食糧補給等のためだけでなく、この地での交易活動を目的としたものであると捉えられる。荷揚げに伴う荷崩れ、或いは船自体の沈没によって残されたものと考ええる。

## ④ 交易対価としての豊富な資源

飲食料補給のための小規模な取引以外に、宋商人の交易対象物がこの地に存在したか。

塚原氏は交易対価物として小値賀のアワビ（干しアワビ）を挙げる。さらに青方文書に記される清原・藤原氏と源（峯）氏の小値賀島領有を巡る争いについて、交易船との利権が絡んでいた可能性を指摘する。

このことと関連して、前方湾に面した地ノ神島神社に伝来する宋風獅子は興味深い。砂岩製の高さ15cm程度の小型狛犬で、中国製と考えられている。宋風獅子や薩摩塔は寧波近郊の石材である梅園石で作られたものも多く、その分布域も九州西北部や南部など日宋貿易と密接な関係のある一帯に集中しており、宋商人との深い関わりが注目されている。神島神社に伝来の獅子も宋商人により寄進されたものかもしれない。

## 5. 問題点と課題

前述したこの地で宋商人との直接交易活動が行われたかもしれないという可能性は、非常に希薄な根拠に基づくもので、残された問題点は多い。

(問題点)

- ア. 2009年調査による出土状況：重なって出土した白磁碗は2個体のみで、偶然の産物か。墨書については交易と関連するものかどうか不明。
- イ. 国産土器や和船に伴うと思われる碇石の出土：湾内出土の貿易陶磁器が一概に宋船の積荷であるとは言えず、国内流通の過程で残されたものという可能性もある。

(課題)

- ウ. 島内陸上遺跡出土貿易陶磁器の分析の必要性：宋商人との直接交易を示すような他の一般的な消費地遺跡との違いを顕著に見出せるのか。
- エ. 海底調査に関して
  - ・前方湾海底出土の碇石や中国陶磁器出土量は調査頻度に起因する可能性もあり、五島列島周辺海域での調査の必要性。
  - ・中国スタイルの碇石の他、中国船の寄航を裏付ける考古学的資料の発見（確実に中国船の積荷であるという状況や船体等）。
  - ・時間的制約の多い調査の中で有効な方法は？

小値賀島は中世交易研究において、陸海両側面からアプローチできる良好な環境を備えており、極めて重要な位置にあると言える。今後の調査継続とその成果に期待したい。

## 主要参考文献

- 小値賀町教育委員会 2002 「山見沖海底遺跡－小値賀町山見沖海底遺跡確認調査報告－」  
2007～2009 「小値賀島前方湾海底遺跡調査報告書」
- 太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡Ⅲ」
- 久山町教育委員会 2010 「首羅山遺跡発掘調査報告書」
- 福岡市教育委員会 1984 「博多 高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」  
1995 「博多48－博多遺跡群62次調査の概要」  
1996 「博多50－博多遺跡群79次調査の概要」
- 松浦市教育委員会 2008 「松浦市鷹島海底遺跡」
- 榎本 渉 2008 「日宋・日元貿易 『中世都市博多を掘る』 大庭康時他編 海鳥社
- 大庭康時 1994 「博多綱首殺人事件－中世前期博多をめぐる雑感」 『博多研究会誌』第3号 博多研究会  
2009 『中世日本最大の貿易都市 博多遺跡群』 新泉社
- 小川光彦 「海域アジアの碇石航路誌」 『モノから見た海域アジア史』 四日市康博編著 九州大学出版

- 佐伯弘次 2003 『モンゴル来襲の衝撃』 中央公論社
- 宮崎貴夫 1996 「長崎県の中世墨書資料」 『博多遺跡群出土墨書資料集成』 博多研究会
- 森 達也 2001 「褐釉長胴四耳壺の生産地と年代について」 『鷹島海底遺跡Ⅴ』 長崎県鷹島町教育委員会
- 森本朝子 2006 「中世前期遺跡出土の中国陶陶器についての覚書－産地探索を視座において－」 『陶磁器の社会史吉岡康暢先生古希記念論集』 桂書房





前方湾上空写真（西より）

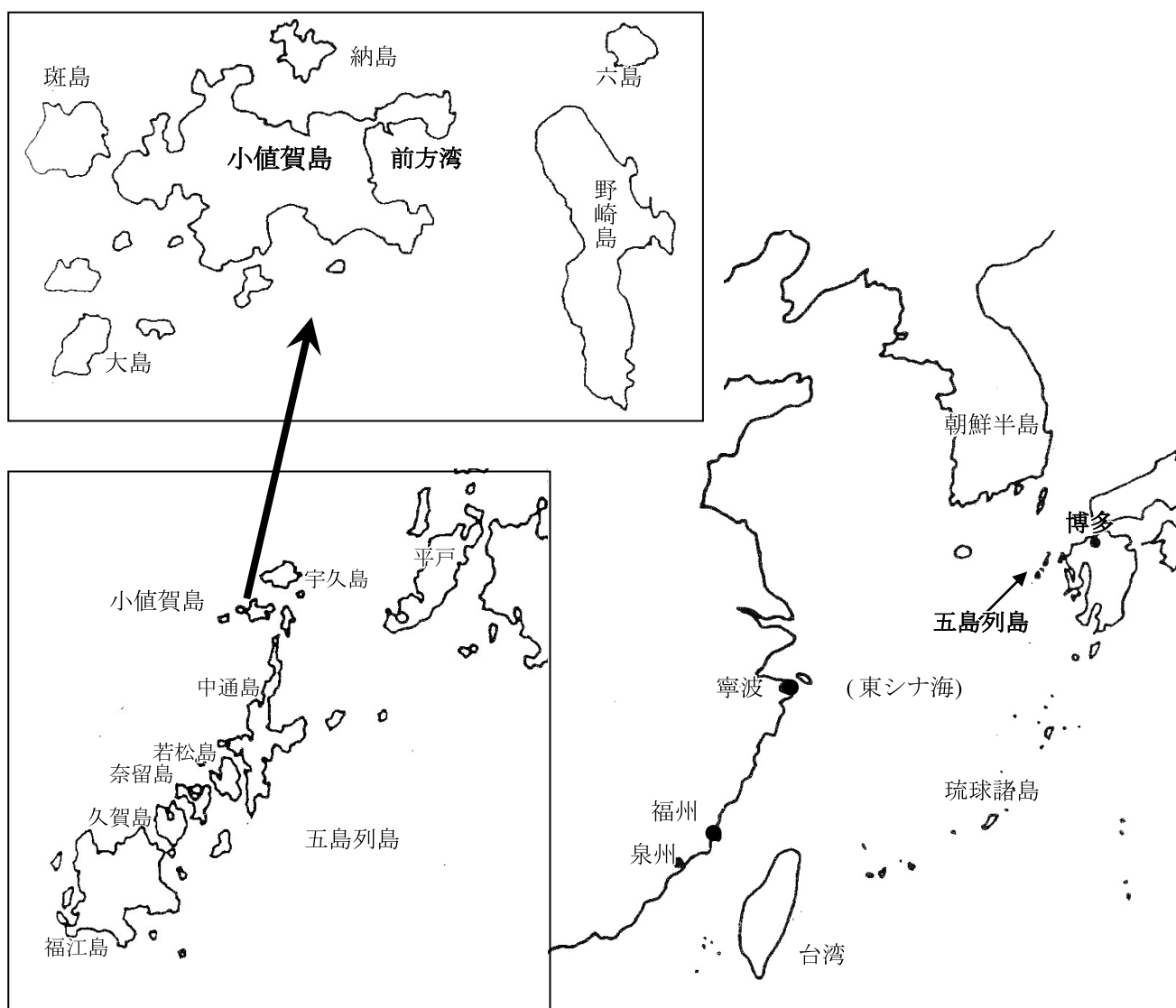


図1 小値賀島の位置



山見沖・前方湾海底遺跡  
調査区位置図

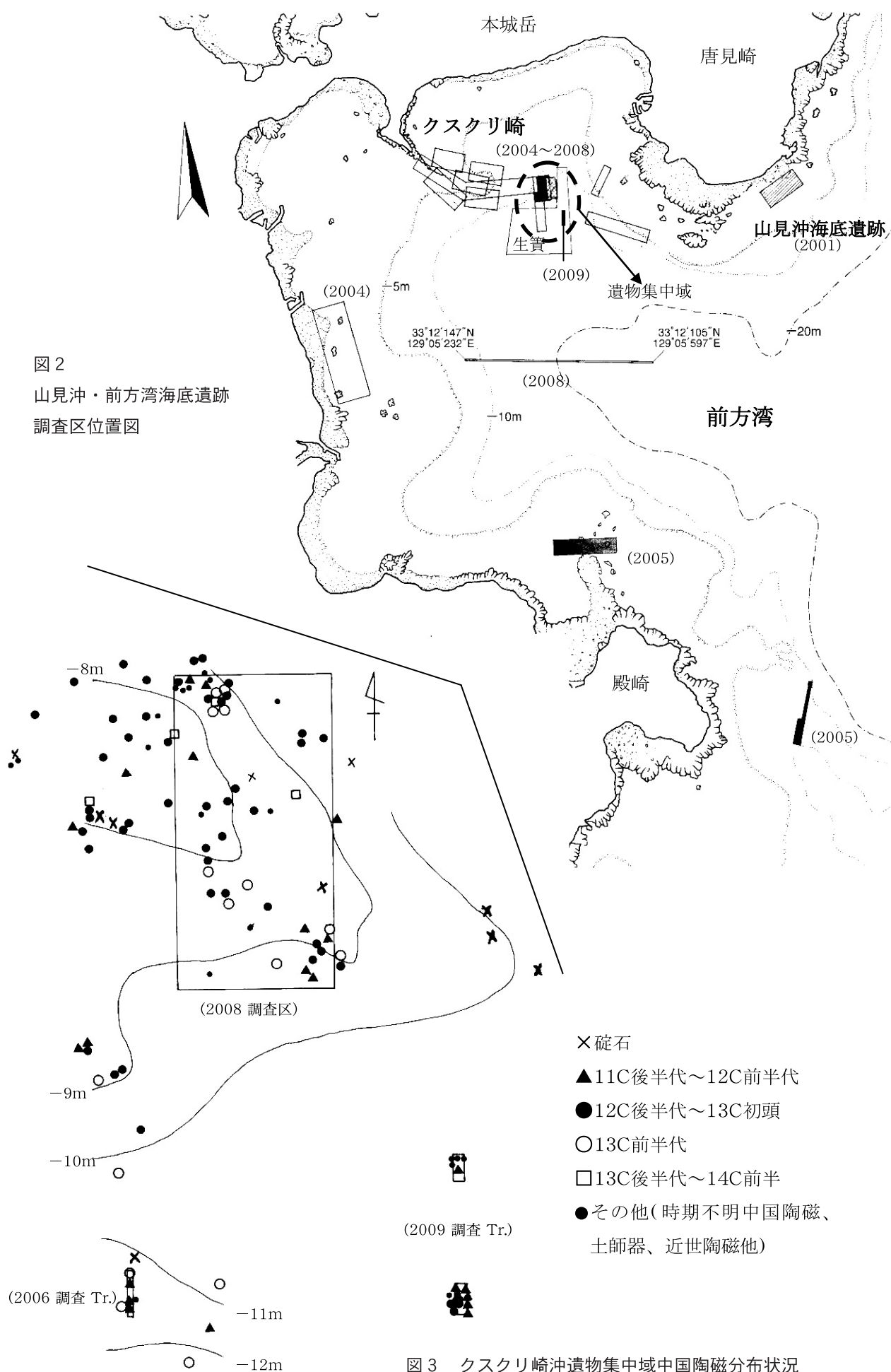
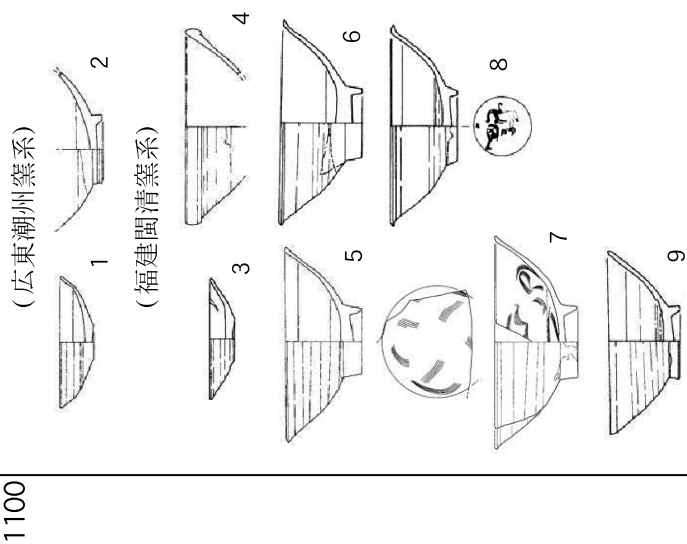
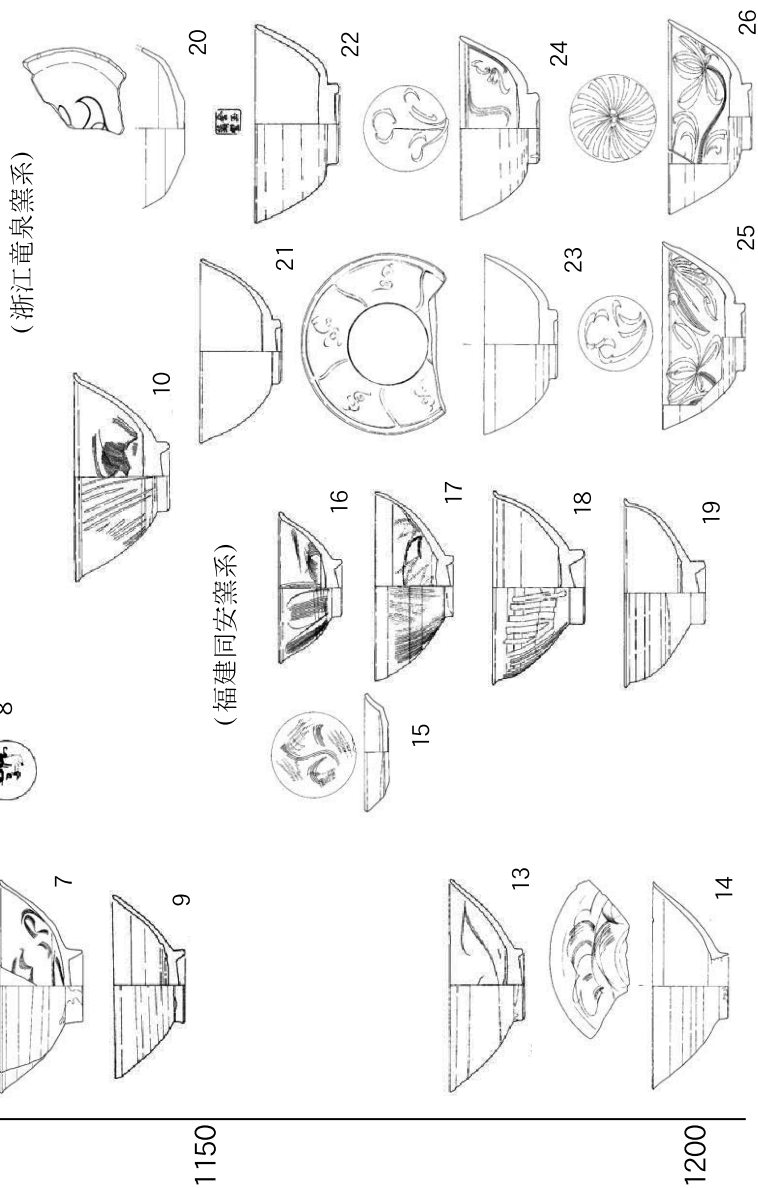


图4 前方湾クスクリ崎冲海底出土中国陶磁器

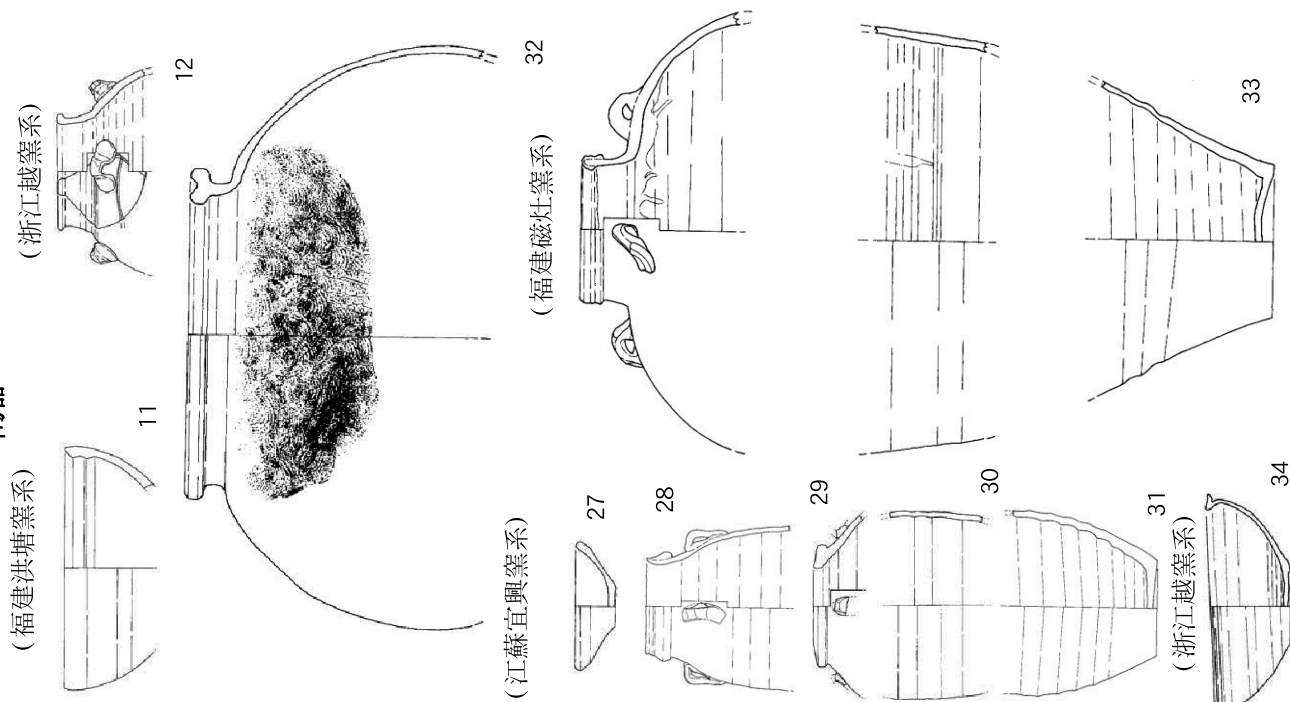
白磁



青磁



陶器



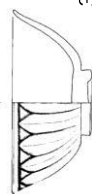


青磁

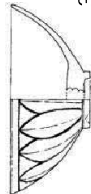
(浙江龍泉窯系)



35

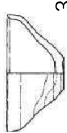


36

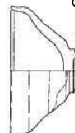


37

(福建窯系)

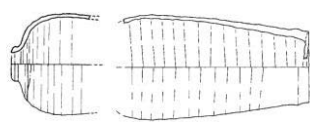


38

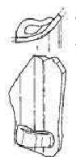


39

(福建磁灶窯系)



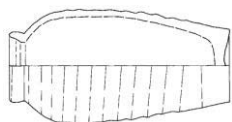
40



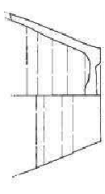
41

46

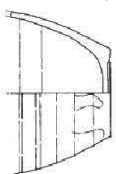
(江蘇宜興窯系)



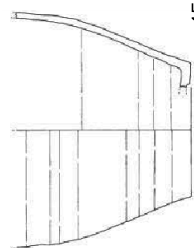
42



43



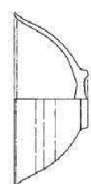
44



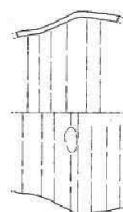
45

白磁

(福建閩北)

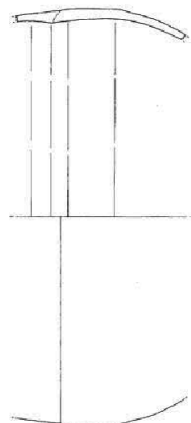


47



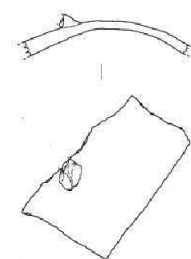
48

(福建磁灶窯系)



49

(年代不明)



50



51

1200

1250

表1 小値賀前方湾クスクリ崎沖海底出土・回収遺物集計表

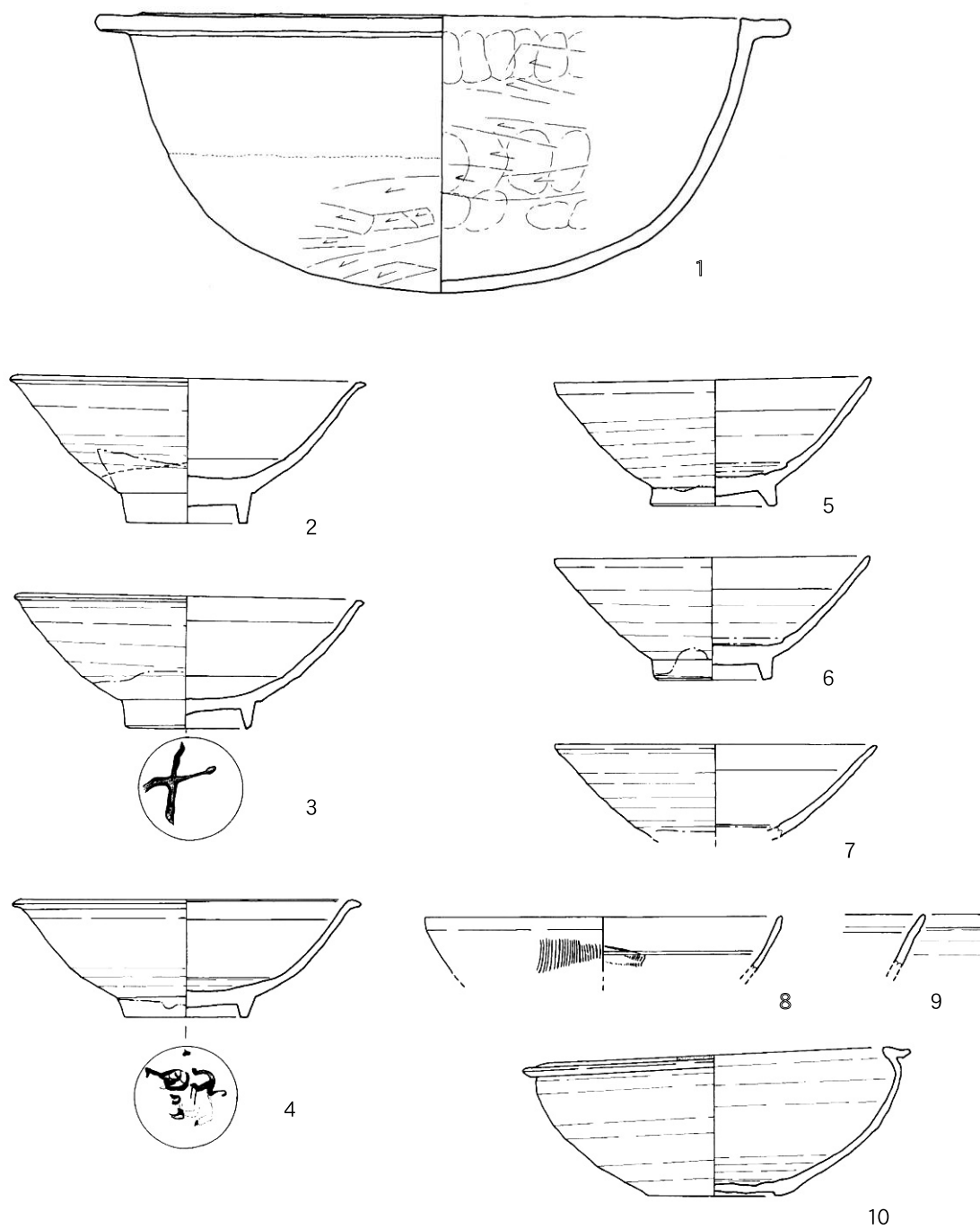
## 中国陶磁器

| 年代             | 遺物番号  | 種類                 | 点数             | 合計 |
|----------------|-------|--------------------|----------------|----|
| 11C 後半～12C 前半代 | 1     | 広東産白磁皿             | 1              | 28 |
|                | 2     | 広東産白磁碗             | 1              |    |
|                | 3     | 福建産白磁皿             | 1              |    |
|                | 4     | 福建産白磁碗             | 2              |    |
|                | 5～8   | 福建産白磁碗             | 12             |    |
|                | 9     | 福建産白磁碗(輪剥ぎ)        | 3              |    |
|                | 10    | 初期竜泉窯系青磁碗          | 1              |    |
|                | 11    | 福建産陶器捏鉢            | 2              |    |
|                | 12    | 浙江産陶器壺             | 2              |    |
|                | 13・14 | 福建産白磁碗(劃花文)        | 3              |    |
| 12C 後半代～13C 初頭 | 15    | 福建同安窯系青磁皿          | 2              | 44 |
|                | 16    | 福建同安窯系青磁碗          | 1              |    |
|                | 17    | 福建同安窯系青磁碗(櫛描文)     | 3              |    |
|                | 18・19 | 福建同安窯系青磁碗(へう彫り・無文) | 5              |    |
|                | 20    | 浙江省竜泉窯系青磁皿         | 1              |    |
|                | 21～26 | 浙江省竜泉窯系青磁碗(無文・劃花文) | 23             |    |
|                | 27    | 江蘇産陶器皿             | 1              |    |
|                | 28～31 | 江蘇産陶器壺             | 5              |    |
|                | 32    | 江蘇産? 陶器甕           | 1              |    |
|                | 33    | 福建産陶器壺             | 1<br>(3点同一個体?) |    |
| 13C 前半代        | 34    | 浙江産陶器鉢             | 1              | 16 |
|                | 35～37 | 浙江省竜泉窯系青磁碗(蓮弁文)    | 5              |    |
|                | 38・39 | 福建産天目碗             | 2              |    |
|                | 40    | 江蘇産陶器壺             | 2              |    |
|                | 41    | 江蘇産陶器水注?           | 1              |    |
|                | 42～45 | 浙江産陶器壺             | 4              |    |
| 13C 後半～14C 前半  | 46    | 福建産陶器壺             | 2              | 4  |
|                | 47    | 福建産白磁碗(口禿)         | 3              |    |
| 年代不明           | 48    | 江蘇産陶器壺             | 1              | 5  |
|                | 49～51 | 福建産陶器壺             | 5              |    |
| 合 計            |       |                    | 2              | 2  |
| 合 計            |       |                    |                | 99 |

## 国産品

| 種類     | 器種        | 点数 | 合計 |
|--------|-----------|----|----|
| 土師器    | 坏、皿、壺、土鍋  | 20 | 21 |
| 東播系須恵器 | 捏鉢        | 1  |    |
| 近世陶磁   | 染付丸碗蓋、土瓶蓋 | 2  | 2  |
| 合 計    |           |    | 23 |

(近現代は除く)



2は Tr.1、他は Tr.2 出土

1：国産土鍋

2～7：福建産白磁

8・9：同安窯系青磁

10：中国産陶器

図5 前方湾クスクリ崎沖海底2009年調査出土遺物 (1/3)





(左：福建産白磁碗、右：竜泉窯系青磁碗)

2004～2006年調査出土遺物



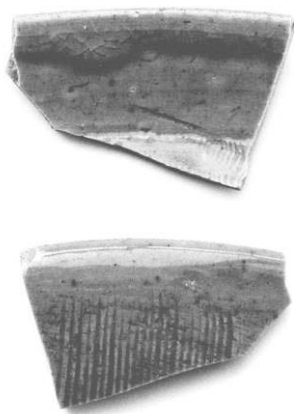
2007年調査出土遺物



福建産白磁碗



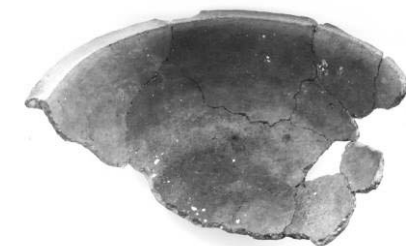
福建産白磁碗  
(墨書)



同安窯系青磁碗



陶器平鉢



国産土鍋

写真2 2009年調査出土遺物

---

---

水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進  
海の文化遺産総合調査報告書  
— 総論・九州編 —

発行日 2013年 3月15日

発 行 特定非営利活動法人  
アジア水中考古学研究所

福岡県福岡市博多区吉塚 6 丁目10番12-308

Tel & Fax 092-611-4404

E-mail:kosuwa@f4.dion.ne.jp

<http://www.ariua.org/>

印 刷 株式会社ステップス  
福岡市南区中尾 3-46-2

Tel.092-562-5855 Fax.092-562-5850

---

---



